

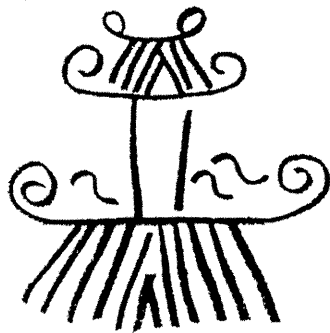


奈良県磯城郡田原本町

# 唐古・鍵遺跡 I

— 範囲確認調査 —

遺構・主要遺物編



2009年3月

田原本町教育委員会

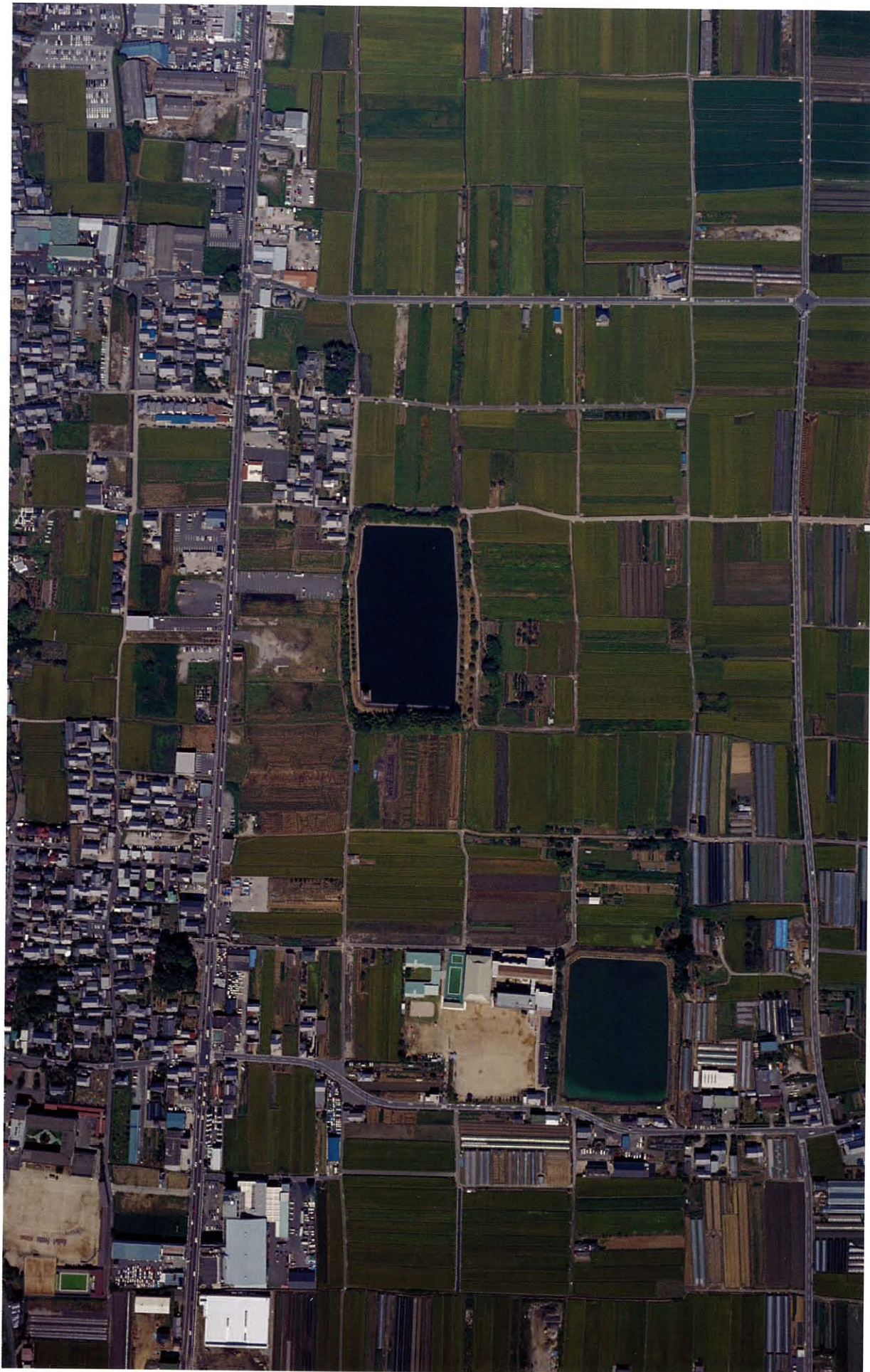


1. 遺跡遠景（北西から）



2. 遺跡現況（西南西から）

巻頭図版 2



遺跡全景 (写真上が北)



1. 遺跡全景（南東から）



2. 遺跡全景（北西から）

巻頭図版 4



西地区全景 (写真上が北)



1. 東環濠付近全景 (写真左が北)



2. 南地区全景 (写真上が北)

巻頭図版 6



1. 南側の環濠 第69次調査 SD-1109C (東から)



2. 北西側の環濠 第79次調査 SD-101D (南西から)





1. 南地区の区画溝 第61次調査 SD-101B・102B (西から)



2. 西地区の区画溝 第80次調査 SD-106 (北東から)



1. 西地区の大型建物跡 第93次調査 (写真左下が北)



2. 大型建物跡の柱根 第93次調査 Pit-1201W (西から)



1. 南地区の竪穴住居跡 第65次調査 SB-101 (北から)



2. 青銅器鑄造の炉跡 第65次調査 SX-104 (北から)



1. 南地区の井戸（中期） 第69次調査 SK-1130（東から）



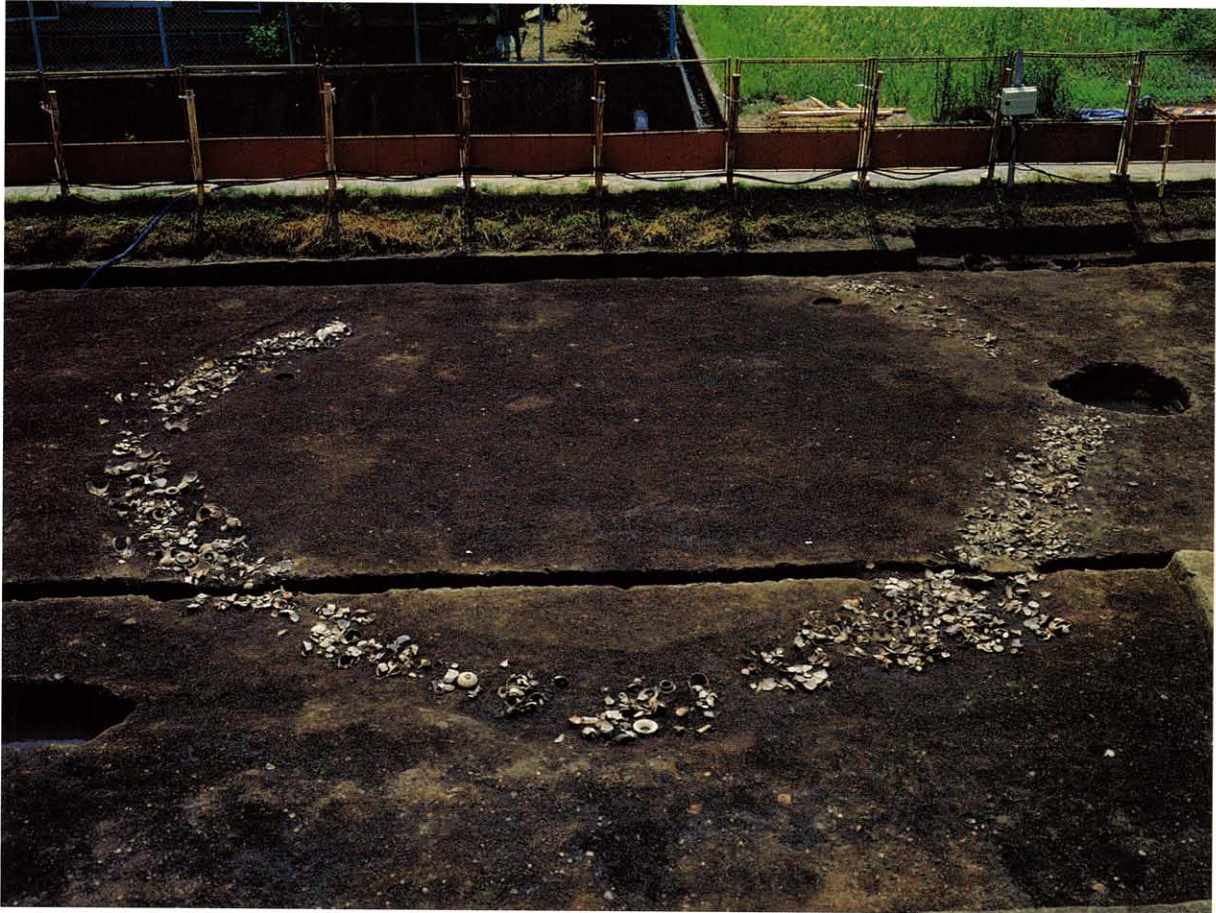
2. 西地区の井戸（中期） 第79次調査 SK-101（北から）



1. 南地区の井戸（後期） 第65次調査 SK-134（南東から）



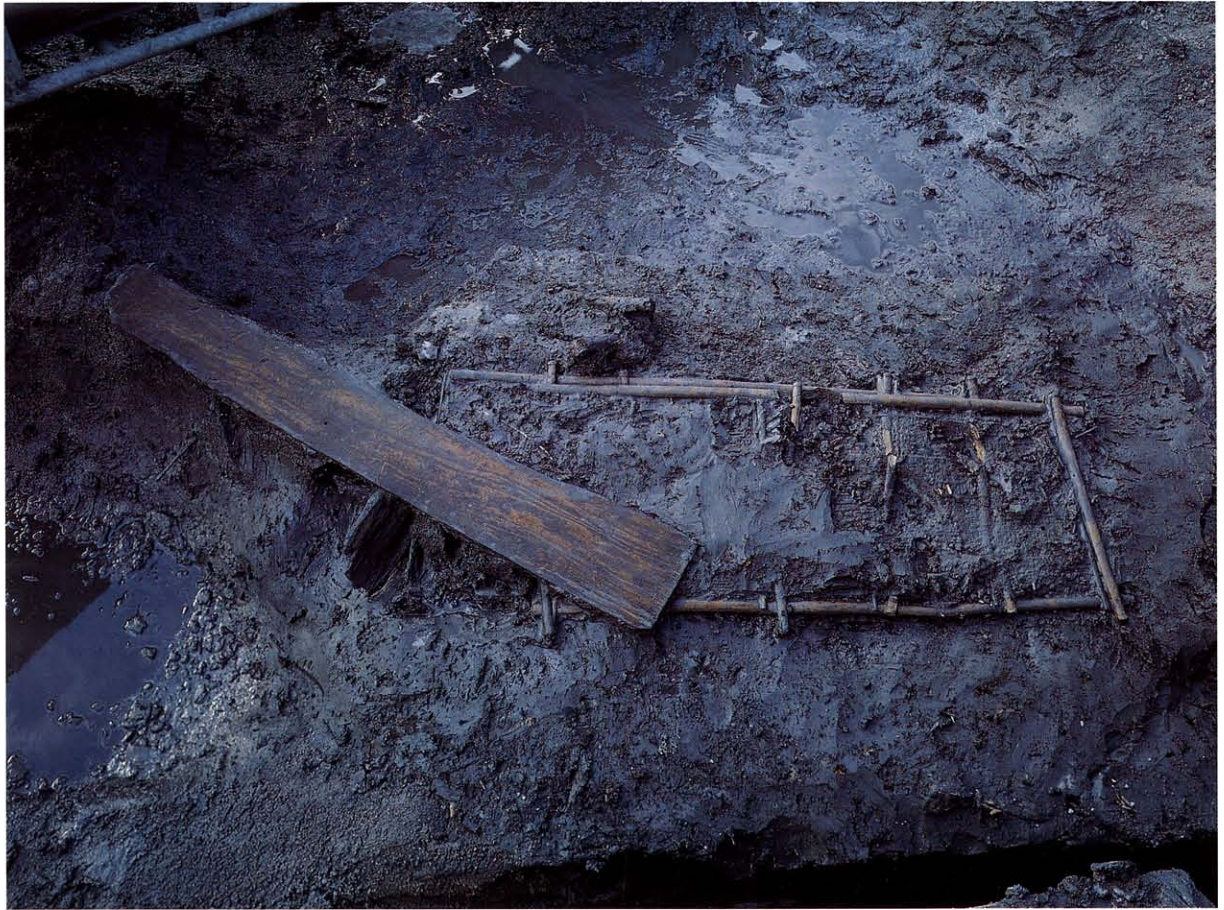
2. 西地区の井戸（後期） 第93次調査 SK-2111（西から）



1. 方形周溝墓（後期） 第65次調査 ST-101（北から）



2. 土器棺墓（後期） 第69次調査 SX-1101（北から）



1. 木製品出土状況 第61次調査 SD-151BN (東から)



2. サヌカイト剥片出土状況 第93次調査 SK-2206 (北から)



1. 水差形土器 (第61次調査)



2. 器台 (第75次調査)



3. 長頸壺 (第69次調査)





1. 絵画土器 (第61次調査)



2. 銅鐸形土製品 (第93次調査)



3. 人形土製品 (第61次調査)



1. 打製石器 (第61次調査ほか)



2. 磨製石器 (第61次調査ほか)



青銅器鑄造関連遺物（第3次調査ほか）



1. 玉類 (第61次調査ほか)



2. 卜骨 (第61次調査ほか)

## 序

平成8年度から16年度まで実施しました唐古・鍵遺跡の範囲確認調査の成果を、「唐古・鍵遺跡Ⅰ」としてまとめ、このたび発刊することになりました。

唐古・鍵遺跡の調査は、末永雅雄博士らによる第1次調査以来、奈良県立橿原考古学研究所による調査を経て、現在では田原本町による発掘調査が継続しております。長期にわたる発掘調査の成果から、唐古・鍵遺跡が近畿地方でも有数の弥生集落であることが判明しています。

今回の11件分の報告書では、唐古・鍵遺跡調査検討委員会の先生方のご指導のもと、弥生時代の環濠や大型建物跡、青銅器鑄造関連遺物等についてその一端を明らかにすることができました。

ここに調査地を提供していただいた方々、ならびに調査にご理解ご協力を賜りました地元大字の方々、発掘調査をご指導頂いた先生方に厚くお礼申し上げます。

平成21年3月

奈良県田原本町教育委員会

教育長 濱川 利郎

# 例 言

1. 本書は、奈良県磯城郡田原本町大字唐古及び鍵に所在する唐古・鍵遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本書は、平成8年度から16年度まで実施した唐古・鍵遺跡の範囲（内容）確認の発掘調査の概要を記すものであるが、遺跡の総体を把握する上で関係次数以外も一部掲載した。なお、国庫補助事業としては平成8年度から18年度まで採択され実施した。

今回の報告にあたっては、下記のとおり便宜上4地区に分け報告する。

第61次、第65次、第69次調査・・・・・・・・・・南地区

第75次、第78次調査・・・・・・・・・・東環濠

第79次、第80次、第84次、第89次、第93次調査・・・・・・・・西地区

第98次調査・・・・・・・・・・中央区

3. 発掘調査は田原本町教育委員会がおこなった。
4. 発掘調査により得た調査資料や出土品は膨大な量であり、本書ではすべてについて報告することは困難であった。特に遺物については、唐古・鍵遺跡の特徴を表わすものを選択したため、限られたものとなっている。なお、青銅器鑄造関連遺物については、第3次調査を担当された寺澤 薫氏（奈良県立橿原考古学研究所）と協議のもと、それら成果も含める形で今回報告した。
5. 本書は、遺構と土器・木製品・石器の遺物をまとめた「遺構・主要遺物編」、これに対応した「写真図版編」、絵画土器や土製品、青銅器鑄造関連遺物などの特殊遺物と分析・考察の「特殊遺物・考察編」の3編からなる。
6. 現地の遺構写真及び遺物出土状況写真は各担当調査員が撮影し、遺物写真は佐藤 右文・亀村 俊二両氏による撮影である。
7. 現地調査及び本報告書作成にあたっては、下記の方々の参加・協力があつた。

〈調査作業員〉

朝吹 一隆、上田 修作、植中 次郎、植本 義延、宇治郷 宝、岡本 進、神田 茂信、木下 博、木村 卯三郎、蔵野 誠、坂本 久蔵、田中 作次、谷 昭男、田守 晃、中谷 義弘、中村 高幸、中森 康殷、西田 武男、長谷 正巳、服部 悦治、福岡 弘三、前田 佐喜造、牧野 和夫、梶井 亀吉、増田 正一、南 治、森川 俊司、森田 登、森本 英伸、吉川 順博、吉村 弘、山澤 節子、山本 由美子

〈調査補助員・遺物整理員〉石川 ゆずは・奥谷 知日朗除く

伊藤 圭、伊藤 正英、乾 哲也、江坂 始保、小栗 典子、木藤 洋介、小林 孝幸、齊藤 有美、佐々木 健太郎、下村 嘉輝、滝下 達、辻口 菜穂子、福井 啓樹、宮脇 亮太、村上 奈々美、望月 達矢、八木 健一郎、米田 いずみ（以上 奈良大学学生）、熊田 朝美、小林 善也、鈴木 正史、中村 泰治、原 知子、東山 喜一、平川 敬康、廣原 香織、深川 義之、吉田 真紀（以上 天理大学学生）、柴田 妃三光、田中 英子（以上 京都橘大学学生）、澤田 功朗（甲南大学学生）、林 充彦（山口大学学生）、平岩 里張（奈良女子大学学生）、茂木 麻予（立命館大学学生）、吉田 朋史（別府大学学生）、吉村 麻衣（関西大学学生）、若江 幾哉（明治大学学生）、寺前 直人（日本学術振興会特別研究員）

足立 高子、浦東 美津枝、江浦 至希子、大橋 倫子、岡橋 智津江、川田 陽子、岸本 満弥、  
草野 薫、黒木 円香、齊藤 美奈子、榊原 初美、桜井 友美、清水 元美、末廣 真理子、  
篁 和子、鶴田 多真代、中谷 利枝、服部 文子、早川 伊津子、藤本 智子、堀川 加代子、  
松井 聖子、三宅 富予子 (敬称略、五十音順、所属名は参加時のもの)

8. 調査及び報告書作成にあたっては、第I章第3節に記す調査体制の下おこない、下記の機関・諸氏のご指導・ご協力を賜った。記して感謝いたします。

独立行政法人 国立文化財機構奈良文化財研究所、奈良県立橿原考古学研究所、同志社大学  
秋山 浩三、安部 みき子、粟田 薫、安藤 広道、今津 節生、池田 保信、泉 拓良、金原 正明、  
姜 秉権、桑原 久男、肥塚 隆保、小泉 武寛、後藤 直、清水 真一 (奈良文化財研究所)、  
菅谷 文則、辰巳 和弘、都出 比呂志、坪井 清足、外山 秀一、西村 渉、西山 和弘、箱崎 和久、  
福永 光司、深澤 芳樹、松藤 和人、松村 恵司、水之江 和同、光谷 拓実、村田 裕一、森岡 秀人、  
山中 一郎、吉田 広、和田 晴吾 (敬称略、五十音順)

9. 本報告調査については、すでに概報などによってその成果の一部を公表しているが、本書との相違箇所がある場合、すべて本書に準ずるものとする。

10. 本書の執筆は、田原本町教育委員会の藤田 三郎、豆谷 和之、石川 ゆずは、奥谷 知日朗がおこない、分担については目次に示した。なお、石器に関しては、下記学生がそれぞれ分担し、実測・執筆した。

打製石器：上峯 篤史 (同志社大学院生)、磨製石器：宮城 一木 (同志社大学院生)

石製品：戸根 比呂子 (京都大学院生)、礫石器：渡邊 貴代 (京都女子大学学生)

(敬称略、所属名は参加時のもの)

「特殊遺物・考察編」においては、以下の方々から玉稿を賜った。記して感謝いたします。

奥田 尚 (奈良県立橿原考古学研究所共同研究員)、奥山 誠義 (奈良県立橿原考古学研究所)、

難波 洋三 (奈良文化財研究所)、西野 摩耶 (慶應義塾大学大学院)、宮本 長二郎 (別府大学客員教授)、村上 隆 (京都国立博物館)、藁科 哲男 (南遺物材料研究所) (敬称略、五十音順)

11. 本書の編集は、藤田・豆谷の監修のもと、櫻井 拓馬・石川・西岡 成晃が担当し、奥谷の協力を得た。

12. 本調査に関わる図面・写真などの資料は、田原本町教育委員会において保管している。

# 凡 例（遺構・主要遺物編）

## 遺構

1. 本報告における調査区及び遺構の座標値は、日本測地系（旧測地系）に基づいている。唐古・鍵遺跡の調査では1981年の第11次調査から2004年の第98次調査までを日本測地系の座標値による測量、2004年の第99次調査以降は世界測地系（新測地系）と日本測地系を併用している。本報告では従来の調査分との整合性を図るため、日本測地系による座標値とした。
2. 本書に使用した方位は座標北、標高数値は海拔標高を示す。
3. 第6図、第2表に用いた唐古・鍵遺跡の地区設定は、『昭和55年度 唐古・鍵遺跡 第10・11次発掘調査概報』に従っている。ただし、緯線上の座標軸にあわせたアルファベット表記のうち  $X = -158,500\text{m} \sim X = -158,600\text{m}$  の Y、 $X = -158,600\text{m} \sim X = -158,700\text{m}$  の Z は、今回の報告で追加したものである。
4. 遺構は種類によって下記のアルファベットを頭に付した。  
土坑：S K    溝：S D    建物：S B    柱穴：Pit    周溝墓・古墳：S T  
性格不明遺構・墓：S X    河跡：S R
5. 本報告における遺構法量の単位は、「m」で表わし、小数点以下2位まで表記した（「約」については小数点以下1位）。遺構図面の基本的な縮尺は下記のとおりである。  
土坑：1/40    溝：1/50    柱穴：1/20（大型建物跡柱穴については1/40）
6. 挿図における遺構配置のうち土坑・小溝・柱穴・土器棺墓の平面図は、方位方向を統一していない。
7. 遺構一覧表の項目は、遺構番号・規模・時期・主要遺物・備考を基本とし、その他に標高や土色などの項目を、各種遺構ごとに採用した。また、計測の単位は「m」とし、残存値は（ ）、復原値は※で表した。

## 遺物

1. 本報告における遺物法量の単位は「cm」で示し、遺物実測図の基本的な縮尺は下記のとおりである。  
土器：1/4    木製品：1/4  
石器：2/3（打製石器・磨製石器・石製品（砥石除く））・1/2（石製品（砥石）・礫石器）
2. 遺物番号は、地区ごとに、南地区：1001番、東環濠：2001番、西地区：3001番、中央区：4001番からとし、遺物種によって土器：P、木製品：W、石器：Sのアルファベットを頭に付した。  
なお、写真図版編において写真のみ掲載した遺物については、遺物種ごとのアルファベットの後ろにP（Photo）を挿入した。
3. 遺物の観察表の項目は、遺物番号・製品名・調査回数・遺構名・層位/土色・備考・時期（共伴時期）を基本とし、その他は遺物内容に適した項目を採用した。本観察表では項目として掲載しなかったが、各遺物には製品コードを振っているため、遺物台帳番号などの遺物情報は当教育委員会で管理している。  
遺物観察表の法量は、単位をcm・gとし、残存値は（ ）、復原値は※で表した。
4. 遺物の実測図については、各遺物の情報により色調を下記のように示した。  
黒色系：炭化                      茶色系：樹皮残存  
赤色系：ベンガラ・朱付着        青色系：黒漆
5. 本書に掲載された遺物写真は、佐藤右文・亀村俊二両氏による撮影である。



全体

1. 本書に使用する時期・土器の調整手法や文様などの用語は、大和弥生文化の会編『大和の弥生遺跡基礎資料Ⅱ 奈良県の弥生土器集成』2003年を採用した。本文中では、「大和第○-□様式」とし、観察表では「○-□」と省略して表記した。

なお、本書において報告する遺物の中で、その所属時期を明記しうる情報が少ない石器・木製品については、それらの遺構・層位の所属土器様式を参考として示している。中世遺構や中近世土器包含層などまったく時期決定ができない場合は、「-」で示した。ここに示した土器様式は、唐古・鍵遺跡が複合遺跡であり遺構の切り合い関係も多数あることから、その呈示した土器様式がそのままそれら遺物の所属時期を決定するものでないことを断っておく。

2. 本文中の遺物番号は、挿図・図版・出土遺物観察表の番号と一致している。

時期	前期		中期						後期						古墳時代 初頭					
			初頭		前葉		中葉 前半		中葉 後半		後葉		初頭				前葉		後葉	
大和 編年	I		II			III				IV		V		VI				庄内	布留 0	
	1	2	1	2	3	1	2	3	4	1	2	1	2	1	2	3	4			
	a	b	a	b	a					b	a	b	a	b	a	b	a			b
既往の 編年	第一様式		第二様式			第三様式				第四様式		第五様式				Ⅱ式				
	古	中	新	古			新				N		D		I				E	

# 本文目次

## 第Ⅰ章 調査に至る経緯

### 第1節 位置と環境

1. 地理的環境（奥谷・豆谷）…………… 1
2. 田原本町内の遺跡分布（豆谷）…………… 3
3. 奈良盆地の弥生時代遺跡（豆谷）…………… 12

### 第2節 調査研究のあゆみ（豆谷）

1. 遺跡の発見…………… 27
2. 唐古池の調査…………… 31
3. 橿原考古学研究所の調査…………… 38
4. 田原本町教育委員会の調査…………… 41

### 第3節 調査に至る経緯

1. 内容確認調査の経緯（藤田）…………… 53
2. 調査体制（石川・藤田）…………… 55

## 第Ⅱ章 南地区の調査

### 第1節 既往の調査と成果（豆谷）…………… 59

### 第2節 第61次調査報告（豆谷）…………… 77

### 第3節 第65次調査報告（豆谷）…………… 149

### 第4節 第69次調査報告（豆谷）…………… 241

### 第5節 南地区の出土遺物

1. 土器（豆谷）…………… 303
2. 木製品（石川）…………… 341
3. 石器（上峯・宮城・戸根・渡邊）…………… 371

### 第6節 まとめ（豆谷）…………… 443

## 第Ⅲ章 東環濠の調査

### 第1節 既往の調査と成果（豆谷）…………… 453

### 第2節 第75次調査報告（豆谷）…………… 465

### 第3節 第78次調査報告（豆谷）…………… 483

### 第4節 東環濠の出土遺物

1. 土器（豆谷）…………… 509
2. 木製品（石川）…………… 513
3. 石器（上峯・宮城）…………… 515

### 第5節 まとめ（豆谷）…………… 519

## 第Ⅳ章 西地区の調査

### 第1節 既往の調査と成果（豆谷）…………… 523

### 第2節 第79次調査報告（豆谷）…………… 555

### 第3節 第80次調査報告（豆谷）…………… 615

### 第4節 第84次調査報告（豆谷）…………… 629

### 第5節 第89次調査報告（豆谷）…………… 653

第6節	第93次調査報告（豆谷）	679
第7節	西地区の出土遺物	
1.	土器（豆谷）	747
2.	木製品（石川）	769
3.	石器（上峯・宮城・戸根・渡邊）	787
第8節	まとめ（豆谷）	841
第V章 中央区の調査		
第1節	既往の調査と成果（豆谷）	851
第2節	第98次調査報告（豆谷）	861
第3節	中央区の出土遺物	
1.	土器（豆谷）	895
2.	木製品（石川）	897
3.	石器（上峯・宮城・戸根・渡邊）	903
第4節	まとめ（豆谷）	929

# 巻頭図版目次

## 巻頭図版1

1. 遺跡遠景（北西から）
2. 遺跡現況（西南西から）

## 巻頭図版2 遺跡全景

## 巻頭図版3

1. 遺跡全景（南東から）
2. 遺跡全景（北西から）

## 巻頭図版4 西地区全景

## 巻頭図版5

1. 東環濠全景
2. 南地区全景

## 巻頭図版6

1. 南側の環濠 第69次調査 S D - 1109 C
2. 北西側の環濠 第79次調査 S D - 101 D

## 巻頭図版7

1. 南地区の区画溝 第61次調査 S D - 101 B ・ 102 B
2. 西地区の区画溝 第80次調査 S D - 106

## 巻頭図版8

1. 西地区の大型建物跡 第93次調査
2. 大型建物跡の柱根 第93次調査 Pit - 1201 W

## 巻頭図版9

1. 南地区の竪穴住居跡 第65次調査 S B - 101
2. 青銅器鑄造の炉跡 第65次調査 S X - 104

## 巻頭図版10

1. 南地区の井戸（中期） 第69次調査 S K - 1130
2. 西地区の井戸（中期） 第79次調査 S K - 101

## 巻頭図版11

1. 南地区の井戸（後期） 第65次調査 S K - 134
2. 西地区の井戸（後期） 第93次調査 S K - 2111

## 巻頭図版12

1. 方形周溝墓（後期） 第65次調査 S T - 101
2. 土器棺墓（後期） 第69次調査 S X - 1101

## 巻頭図版13

1. 木製品出土状況 第61次調査 S D - 151 B N
2. サスカイト剥片出土状況 第93次調査 S K - 2206

## 巻頭図版14

1. 水差形土器（第61次調査）
2. 器台（第75次調査）
3. 長頸壺（第69次調査）

## 巻頭図版15

1. 絵画土器（第61次調査）
2. 銅鐸形土製品（第93次調査）
3. 人形土製品（第61次調査）

## 巻頭図版16

1. 打製石器（第61次調査ほか）
2. 磨製石器（第61次調査ほか）

## 巻頭図版17 青銅器鑄造関連遺物（第3次調査ほか）

## 巻頭図版18

1. 玉類（第61次調査ほか）
2. ト骨（第61次調査ほか）

# 挿図目次

第1図	唐古・鍵遺跡の位置……………	1	中期後葉遺構配置図……………	69	
第2図	唐古・鍵遺跡周辺の遺跡分布図……………	7	第13図	南環濠帯及び居住域 弥生時代後期遺構配置図……………	71
第3図	唐古・鍵遺跡周辺の弥生遺跡……………	13	第14図	区画溝域及びその他① 遺構配置図……………	73
第4図	奈良県内の主な弥生遺跡分布図……………	19	第15図	区画溝域及びその他調査区の位置……………	74
第5図	唐古・鍵遺跡の範囲（1971年）……………	38	第16図	区画溝域及びその他② 遺構配置図……………	75
第6図	唐古・鍵遺跡の調査区位置図……………	49	第17図	第61次調査区の位置……………	77
第7図	南地区の位置……………	61	第18図	第61次調査区配置図と基本土層図……………	79
第8図	南東環濠帯調査区の位置……………	63	第19図	調査区遺構配置図（1）……………	83
第9図	南東環濠帯 弥生時代中期遺構配置図……………	65	第20図	調査区遺構配置図（2）……………	84
第10図	南東環濠帯 弥生時代中期後葉～後期初頭遺構配置図……………	67	第21図	弥生時代中期初頭～中期前葉の遺構（1）……………	85
第11図	南環濠帯及び居住域調査区の位置……………	68	第22図	弥生時代中期初頭～中期前葉の遺構（2）……………	86
第12図	南環濠帯及び居住域 弥生時代中期中葉～		第23図	弥生時代中期初頭～中期前葉の遺構（3）……………	87

第24図	弥生時代中期初頭～中期前葉の遺構 (4) ……	88	第71図	弥生時代中期中葉の遺構 (2) ……	169
第25図	弥生時代中期初頭～中期前葉の遺構 (5) ……	89	第72図	弥生時代中期中葉の遺構 (3) ……	171
第26図	弥生時代中期初頭～中期前葉の遺構 (6) ……	91	第73図	弥生時代中期中葉の遺構 (4) ……	172
第27図	弥生時代中期中葉の遺構 (1) ……	93	第74図	弥生時代中期中葉の遺構 (5) ……	175・176
第28図	弥生時代中期中葉の遺構 (2) ……	95	第75図	弥生時代中期中葉の遺構 (6) ……	178
第29図	弥生時代中期中葉の遺構 (3) ……	97	第76図	弥生時代中期中葉の遺構 (7) ……	179
第30図	弥生時代中期中葉の遺構 (4) ……	98	第77図	弥生時代中期中葉の遺構 (8) ……	181
第31図	弥生時代中期中葉の遺構 (5) ……	99	第78図	弥生時代中期後葉の遺構 (1) ……	185
第32図	弥生時代中期中葉の遺構 (6) ……	101	第79図	弥生時代中期後葉の遺構 (2) ……	187
第33図	弥生時代中期中葉の遺構 (7) ……	102	第80図	弥生時代中期後葉の遺構 (3) ……	189
第34図	弥生時代中期中葉の遺構 (8) ……	103	第81図	弥生時代中期後葉の遺構 (4) ……	191
第35図	弥生時代中期中葉の遺構 (9) ……	105	第82図	弥生時代中期後葉の遺構 (5) ……	192
第36図	弥生時代中期中葉の遺構 (10) ……	107	第83図	弥生時代中期後葉の遺構 (6) ……	193
第37図	弥生時代中期中葉の遺構 (11) ……	108	第84図	弥生時代中期後葉の遺構 (7) ……	194
第38図	調査区北半の柱穴 ……	109	第85図	弥生時代中期後葉の遺構 (8) ……	195
第39図	弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構 (1) ……	113	第86図	弥生時代中期後葉の遺構 (9) ……	197
第40図	弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構 (2) ……	115	第87図	弥生時代中期後葉の遺構 (10) ……	198
第41図	弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構 (3) ……	117	第88図	弥生時代中期後葉の遺構 (11) ……	200
第42図	弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構 (4) ……	118	第89図	弥生時代中期後葉の遺構 (12) ……	201
第43図	弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構 (5) ……	119	第90図	弥生時代中期末～後期初頭の遺構 (1) ……	202
第44図	弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構 (6) ……	120	第91図	弥生時代中期末～後期初頭の遺構 (2) ……	203
第45図	S D - 101 B・102 B 出土状況図 ……	121	第92図	S K - 105 出土状況図 ……	204
第46図	弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構 (7) ……	123	第93図	弥生時代中期末～後期初頭の遺構 (3) ……	205
第47図	弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構 (8) ……	124	第94図	S K - 115 出土状況図 ……	206
第48図	弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構 (9) ……	127	第95図	弥生時代中期末～後期初頭の遺構 (4) ……	207
第49図	調査区南半の柱穴 (1) ……	128	第96図	S K - 134 出土状況図 ……	208
第50図	調査区南半の柱穴 (2) ……	131	第97図	弥生時代中期末～後期初頭の遺構 (5) ……	209
第51図	弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構 (10) ……	132	第98図	弥生時代中期末～後期初頭の遺構 (6) ……	210
第52図	弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構 (11) ……	133	第99図	弥生時代中期末～後期初頭の遺構 (7) ……	211
第53図	弥生時代後期後葉の遺構 (1) ……	135	第100図	弥生時代中期末～後期初頭の遺構 (8) ……	212
第54図	弥生時代後期後葉の遺構 (2) ……	137	第101図	S D - 123 出土状況図 ……	213・214
第55図	弥生時代後期後葉の遺構 (3) ……	138	第102図	弥生時代中期末～後期初頭の遺構 (9) ……	215
第56図	弥生時代後期後葉の遺構 (4) ……	139	第103図	弥生時代中期末～後期初頭の遺構 (10) ……	216
第57図	弥生時代後期後葉の遺構 (5) ……	140	第104図	青銅器鑄造関連遺物の出土地点 ……	217
第58図	弥生時代後期後葉の遺構 (6) ……	142	第105図	弥生時代中期末～後期初頭の遺構 (11) ……	218
第59図	弥生時代後期後葉の遺構 (7) ……	143	第106図	弥生時代中期末～後期初頭の遺構 (12) ……	219
第60図	弥生時代後期後葉の遺構 (8) ……	144	第107図	弥生時代後期後葉の遺構 (1) ……	221
第61図	弥生時代後期後葉の遺構 (9) ……	145	第108図	弥生時代後期後葉の遺構 (2) ……	222
第62図	第65次調査区の位置 ……	149	第109図	弥生時代後期後葉の遺構 (3) ……	223
第63図	第65次調査区配置図と基本土層図 ……	151	第110図	弥生時代後期後葉の遺構 (4) ……	225
第64図	弥生時代中期初頭～中期前葉遺構配置図 ……	157	第111図	弥生時代後期後葉の遺構 (5) ……	226
第65図	弥生時代中期中葉～後期初頭遺構配置図 ……	158	第112図	弥生時代後期後葉の遺構 (6) ……	227
第66図	弥生時代後期前葉～古墳時代初頭 遺構配置図 ……	159	第113図	古墳時代初頭の遺構 ……	228
第67図	弥生時代中期初頭～中期前葉の遺構 (1) ……	161	第114図	第IV層上面の柱穴 ……	235・236
第68図	弥生時代中期初頭～中期前葉の遺構 (2) ……	163	第115図	第69次調査区の位置 ……	241
第69図	弥生時代中期初頭～中期前葉の遺構 (3) ……	165	第116図	第69次調査区配置図と基本土層図 ……	243
第70図	弥生時代中期中葉の遺構 (1) ……	167	第117図	調査区遺構配置図 (1) ……	248
			第118図	調査区遺構配置図 (2) ……	249

第119図	弥生時代中期前葉の遺構 (1) ……………	250	第167図	南地区出土土器 (12) ……………	327
第120図	弥生時代中期前葉の遺構 (2) ……………	251	第168図	南地区出土土器 (13) ……………	329
第121図	弥生時代中期前葉の遺構 (3) ……………	253	第169図	南地区出土土器 (14) ……………	331
第122図	弥生時代中期中葉の遺構 (1) ……………	254	第170図	南地区出土土器 (15) ……………	333
第123図	弥生時代中期中葉の遺構 (2) ……………	255	第171図	南地区出土土器 (16) ……………	335
第124図	弥生時代中期中葉の遺構 (3) ……………	256	第172図	南地区出土土器 (17) ……………	337
第125図	弥生時代中期中葉の遺構 (4) ……………	257	第173図	南地区出土土器 (18) ……………	339
第126図	弥生時代中期中葉の遺構 (5) ……………	258	第174図	南地区木製品出土地点図……………	341
第127図	弥生時代中期中葉の遺構 (6) ……………	259	第175図	南地区出土木製品 (1) ……………	343
第128図	弥生時代中期中葉の遺構 (7) ……………	260	第176図	南地区出土木製品 (2) ……………	345
第129図	弥生時代中期中葉の遺構 (8) ……………	262	第177図	南地区出土木製品 (3) ……………	347
第130図	弥生時代中期中葉の遺構 (9) ……………	263	第178図	南地区出土木製品 (4) ……………	348
第131図	第Ⅷ層上面の柱穴……………	265	第179図	南地区出土木製品 (5) ……………	349
第132図	弥生時代中期後葉の遺構 (1) ……………	267	第180図	南地区出土木製品 (6) ……………	351
第133図	弥生時代中期後葉の遺構 (2) ……………	269	第181図	南地区出土木製品 (7) ……………	352
第134図	弥生時代中期後葉の遺構 (3) ……………	271・272	第182図	南地区出土木製品 (8) ……………	354
第135図	S D-1109C 第6層出土状況図……………	273	第183図	南地区出土木製品 (9) ……………	356
第136図	弥生時代中期後葉の遺構 (4) ……………	275	第184図	南地区出土木製品 (10) ……………	357
第137図	弥生時代中期後葉の遺構 (5) ……………	277	第185図	南地区出土木製品 (11) ……………	360
第138図	弥生時代中期後葉の遺構 (6) ……………	279	第186図	南地区出土木製品 (12) ……………	362
第139図	弥生時代後期初頭の遺構 (1) ……………	281	第187図	南地区出土木製品 (13) ……………	363
第140図	弥生時代後期初頭の遺構 (2) ……………	282	第188図	南地区出土木製品 (14) ……………	364
第141図	弥生時代後期前葉の遺構 (1) ……………	283	第189図	W1052の詳細説明……………	365
第142図	弥生時代後期前葉の遺構 (2) ……………	284	第190図	南地区出土木製品 (15) ……………	366
第143図	弥生時代後期後葉の遺構 (1) ……………	285	第191図	南地区出土木製品 (16) ……………	368
第144図	弥生時代後期後葉の遺構 (2) ……………	286	第192図	南地区出土木製品 (17) ……………	370
第145図	弥生時代後期後葉の遺構 (3) ……………	288	第193図	打製石器の部位名称……………	373
第146図	弥生時代後期後葉の遺構 (4) ……………	289	第194図	南地区出土打製石器 (1) ……………	376
第147図	弥生時代後期後葉の遺構 (5) ……………	290	第195図	南地区出土打製石器 (2) ……………	377
第148図	弥生時代後期後葉の遺構 (6) ……………	291・292	第196図	南地区出土打製石器 (3) ……………	379
第149図	弥生時代後期後葉の遺構 (7) ……………	293	第197図	南地区出土打製石器 (4) ……………	381
第150図	弥生時代後期後葉の遺構 (8) ……………	294	第198図	南地区出土打製石器 (5) ……………	383
第151図	弥生時代後期後葉の遺構 (9) ……………	295	第199図	南地区出土打製石器 (6) ……………	385
第152図	古墳時代初頭の遺構 (1) ……………	297	第200図	南地区出土打製石器 (7) ……………	386
第153図	古墳時代初頭の遺構 (2) ……………	298	第201図	南地区出土打製石器 (8) ……………	387
第154図	古墳時代初頭の遺構 (3) ……………	299・300	第202図	石庖丁の部位名称……………	388
第155図	南地区の主要遺構……………	303	第203図	石庖丁の石材組成 (点数比) ……………	389
第156図	南地区出土土器 (1) ……………	305	第204図	柱状片刃石斧の部位名称……………	389
第157図	南地区出土土器 (2) ……………	307	第205図	大型蛤刃石斧の部位名称……………	389
第158図	南地区出土土器 (3) ……………	309	第206図	南地区出土磨製石器 (1) ……………	391
第159図	南地区出土土器 (4) ……………	311	第207図	南地区出土磨製石器 (2) ……………	392
第160図	南地区出土土器 (5) ……………	313	第208図	南地区出土磨製石器 (3) ……………	393
第161図	南地区出土土器 (6) ……………	315	第209図	南地区出土磨製石器 (4) ……………	394
第162図	南地区出土土器 (7) ……………	317	第210図	南地区出土磨製石器 (5) ……………	395
第163図	南地区出土土器 (8) ……………	319	第211図	南地区出土磨製石器 (6) ……………	397
第164図	南地区出土土器 (9) ……………	321	第212図	南地区出土磨製石器 (7) ……………	398
第165図	南地区出土土器 (10) ……………	323	第213図	南地区出土磨製石器 (8) ……………	399
第166図	南地区出土土器 (11) ……………	325	第214図	南地区出土磨製石器 (9) ……………	400

第215図	南地区出土磨製石器 (10) ……………	402	第258図	弥生時代中期前葉の遺構……………	471
第216図	南地区出土磨製石器 (11) ……………	403	第259図	弥生時代中期中葉の遺構……………	473
第217図	南地区出土磨製石器 (12) ……………	406	第260図	弥生時代中期後葉の遺構……………	474
第218図	南地区出土磨製石器 (13) ……………	407	第261図	弥生時代後期の遺構……………	475
第219図	定形砥石の使用による形態変化の模式図……………	408	第262図	S D - 101 B 出土状況図 (1) ……………	476
第220図	砥石の部位名称……………	409	第263図	S D - 101 B 出土状況図 (2) ……………	477
第221図	南地区出土石製品 (1) ……………	411	第264図	弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の 遺構……………	479・480
第222図	南地区出土石製品 (2) ……………	412	第265図	第78次調査区の位置……………	483
第223図	南地区出土石製品 (3) ……………	414	第266図	第78次調査区配置図と基本土層図……………	485
第224図	南地区出土石製品 (4) ……………	415	第267図	調査区遺構配置図……………	487
第225図	南地区出土石製品 (5) ……………	416	第268図	弥生時代中期の遺構 (1) ……………	489
第226図	南地区出土石製品 (6) ……………	418	第269図	弥生時代中期の遺構 (2) ……………	491
第227図	南地区出土石製品 (7) ……………	419	第270図	弥生時代後期初頭の遺構 (1) ……………	493
第228図	南地区出土石製品 (8) ……………	420	第271図	弥生時代後期初頭の遺構 (2) ……………	494
第229図	南地区出土石製品 (9) ……………	422	第272図	弥生時代後期初頭の遺構 (3) ……………	495
第230図	南地区出土石製品 (10) ……………	423	第273図	弥生時代後期初頭の遺構 (4) ……………	497・498
第231図	南地区出土石製品 (11) ……………	424	第274図	弥生時代後期初頭の遺構 (5) ……………	501・502
第232図	南地区出土石製品 (12) ……………	425	第275図	弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の遺構……………	503
第233図	敲石の部位名称概念図……………	426	第276図	古墳時代後期の遺構……………	505・506
第234図	礫石器の部位名称……………	426	第277図	東環濠の主要遺構……………	509
第235図	南地区出土礫石器 (1) ……………	430	第278図	東環濠出土土器……………	511
第236図	南地区出土礫石器 (2) ……………	431	第279図	東環濠出土木製品……………	514
第237図	南地区出土礫石器 (3) ……………	432	第280図	東環濠出土打製石器 (1) ……………	516
第238図	南地区出土礫石器 (4) ……………	434	第281図	東環濠出土打製石器 (2) ……………	517
第239図	南地区出土礫石器 (5) ……………	435	第282図	東環濠出土磨製石器……………	518
第240図	南地区出土礫石器 (6) ……………	436	第283図	東環濠 範囲 (内容) 確認調査の 遺構分布図……………	521
第241図	南地区出土礫石器 (7) ……………	437	第284図	西地区の位置……………	525
第242図	南地区出土礫石器 (8) ……………	439	第285図	居住域調査区の位置……………	527
第243図	南地区出土礫石器 (9) ……………	440	第286図	居住域① 弥生時代前期遺構配置図……………	531
第244図	南地区 範囲 (内容) 確認調査の 弥生時代前期～中期前葉遺構分布図……………	445	第287図	居住域① 弥生時代中・後期遺構配置図……………	533
第245図	南地区 範囲 (内容) 確認調査の 弥生時代中期中葉遺構分布図……………	447	第288図	第38次調査区 遺構配置図……………	535
第246図	南地区 範囲 (内容) 確認調査の 弥生時代中期後葉～後期初頭遺構分布図……………	449	第289図	第74次調査区 大型建物跡平面図……………	536
第247図	南地区 範囲 (内容) 確認調査の弥生時代 後期前葉～古墳時代初頭遺構分布図……………	451	第290図	居住域② 弥生時代中期遺構配置図……………	537
第248図	東環濠の位置……………	455	第291図	区画溝域調査区の位置……………	538
第249図	環濠帯調査区の位置……………	456	第292図	区画溝域 弥生時代前期～中期中葉 遺構配置図……………	539
第250図	環濠帯① 弥生時代中期遺構配置図……………	457	第293図	区画溝域 弥生時代中期後葉～後期 遺構配置図……………	541
第251図	環濠帯① 弥生時代後期初頭遺構配置図……………	459	第294図	西環濠帯調査区の位置……………	544
第252図	第91次調査 第1調査区遺構配置図……………	461	第295図	第41次調査区 遺構配置図……………	545
第253図	第56次調査区の位置……………	462	第296図	西環濠帯 弥生時代中期～後期遺構配置図……………	547
第254図	環濠帯② 弥生時代中期後葉～後期初頭 遺構配置図……………	463	第297図	北西環濠帯調査区の位置……………	548
第255図	第75次調査区の位置……………	465	第298図	北西環濠帯 弥生時代前期～中期 遺構配置図……………	549
第256図	第75次調査区配置図と基本土層図……………	467	第299図	北西環濠帯 弥生時代中期後葉～後期 遺構配置図……………	551
第257図	調査区遺構配置図……………	469			

第300図	その他調査区の位置	553	第348図	弥生時代～庄内期遺構配置図	633
第301図	第95・97・99次調査区の位置	554	第349図	弥生時代中期中葉の遺構（1）	635
第302図	第79次調査区の位置	555	第350図	弥生時代中期中葉の遺構（2）	637
第303図	第79次調査区配置図と基本土層図	557	第351図	弥生時代中期中葉の遺構（3）	639
第304図	調査区遺構配置図	561・562	第352図	弥生時代中期後葉の遺構（1）	640
第305図	弥生時代中期前葉の遺構（1）	563	第353図	弥生時代中期後葉の遺構（2）	641
第306図	弥生時代中期前葉の遺構（2）	565・566	第354図	弥生時代中期後葉の遺構（3）	642
第307図	弥生時代中期中葉の遺構（1）	569	第355図	弥生時代後期初頭の遺構	643
第308図	弥生時代中期中葉の遺構（2）	571	第356図	古墳時代初頭の遺構	644
第309図	弥生時代中期中葉の遺構（3）	572	第357図	第Ⅵ層上面の柱穴	645
第310図	弥生時代中期中葉の遺構（4）	573・574	第358図	古墳時代後期～中世遺構配置図	647
第311図	弥生時代中期中葉の遺構（5）	575	第359図	古墳時代後期の遺構（1）	648
第312図	弥生時代中期中葉の遺構（6）	577	第360図	古墳時代後期の遺構（2）	649
第313図	弥生時代中期中葉の遺構（7）	578	第361図	中世の遺構	650
第314図	弥生時代中期中葉の遺構（8）	579	第362図	第89次調査区の位置	653
第315図	弥生時代中期中葉の遺構（9）	581	第363図	第89次調査区配置図と基本土層図	655
第316図	弥生時代中期中葉の遺構（10）	583	第364図	調査区遺構配置図	657
第317図	弥生時代中期中葉の遺構（11）	584	第365図	弥生時代中期中葉の遺構（1）	659
第318図	弥生時代中期中葉の遺構（12）	585	第366図	弥生時代中期中葉の遺構（2）	660
第319図	弥生時代中期中葉の遺構（13）	586	第367図	弥生時代中期中葉の遺構（3）	661
第320図	弥生時代中期中葉の遺構（14）	587	第368図	弥生時代中期中葉の遺構（4）	662
第321図	弥生時代中期中葉の遺構（15）	588	第369図	弥生時代中期中葉の遺構（5）	663
第322図	弥生時代中期中葉の遺構（16）	589	第370図	弥生時代中期後葉の遺構（1）	664
第323図	弥生時代中期中葉の遺構（17）	590	第371図	弥生時代中期後葉の遺構（2）	665
第324図	弥生時代中期中葉の遺構（18）	591	第372図	弥生時代中期後葉の遺構（3）	666
第325図	弥生時代中期後葉の遺構（1）	593	第373図	弥生時代中期後葉の遺構（4）	667
第326図	弥生時代中期後葉の遺構（2）	594	第374図	弥生時代中期後葉の遺構（5）	668
第327図	弥生時代中期後葉の遺構（3）	595	第375図	弥生時代中期後葉の遺構（6）	669
第328図	弥生時代中期後葉の遺構（4）	596	第376図	弥生時代後期初頭の遺構（1）	670
第329図	弥生時代中期後葉の遺構（5）	597	第377図	弥生時代後期初頭の遺構（2）	671
第330図	弥生時代後期初頭の遺構（1）	599	第378図	弥生時代後期初頭の遺構（3）	672
第331図	弥生時代後期初頭の遺構（2）	601	第379図	弥生時代後期初頭の遺構（4）	673
第332図	弥生時代後期前葉～後期後葉の遺構（1）	602	第380図	弥生時代後期後葉の遺構	674
第333図	弥生時代後期前葉～後期後葉の遺構（2）	603	第381図	古墳時代初頭の遺構	675
第334図	古墳時代初頭の遺構	604	第382図	第Ⅵ層上面の柱穴	676
第335図	第Ⅴ層上面の柱穴（1）	605	第383図	第93次調査区の位置	679
第336図	第Ⅴ層上面の柱穴（2）	611・612	第384図	第93次調査区配置図と基本土層図	681
第337図	第80次調査区の位置	615	第385図	弥生時代前期～中期中葉遺構配置図	684
第338図	第80次調査区配置図と基本土層図	617	第386図	弥生時代中期後葉～古墳時代初頭 遺構配置図	685
第339図	弥生時代中期中葉の遺構（1）	619	第387図	弥生時代前期の遺構	686
第340図	弥生時代中期中葉の遺構（2）	620	第388図	弥生時代中期初頭～中期前葉の遺構（1）	688
第341図	弥生時代中期後葉の遺構（1）	621	第389図	弥生時代中期初頭～中期前葉の遺構（2）	689
第342図	弥生時代中期後葉の遺構（2）	623	第390図	弥生時代中期中葉の遺構（1）	691
第343図	弥生時代後期の遺構（1）	624	第391図	弥生時代中期中葉の遺構（2）	693
第344図	弥生時代後期の遺構（2）	625	第392図	弥生時代中期中葉の遺構（3）	695
第345図	弥生時代後期の遺構（3）	626	第393図	大型建物跡（S B - 1201）遺構配置図	698
第346図	第84次調査区の位置	629	第394図	大型建物跡（S B - 1201）模式図	699
第347図	第84次調査区配置図と基本土層図	631			



第395図	大型建物跡 (S B - 1201) 柱穴断面図… 701・702	第443図	西地区出土木製品 (3) …… 773
第396図	大型建物跡 東側柱列 (1) …… 703	第444図	穂摘具 (W3009) の持ち方推定… 773
第397図	大型建物跡 東側柱列 (2) …… 705	第445図	西地区出土木製品 (4) …… 775
第398図	大型建物跡 東側柱列 (3) …… 706	第446図	西地区出土木製品 (5) …… 776
第399図	大型建物跡 東側柱列 (4) …… 707	第447図	西地区出土木製品 (6) …… 777
第400図	大型建物跡 東側柱列 (5) …… 709	第448図	西地区出土木製品 (7) …… 778
第401図	大型建物跡 東側柱列 (6) …… 710	第449図	西地区出土木製品 (8) …… 779
第402図	大型建物跡 東側柱列 (7) …… 711	第450図	西地区出土木製品 (9) …… 781
第403図	大型建物跡 中央柱列 (1) …… 712	第451図	西地区出土木製品 (10) …… 782
第404図	大型建物跡 中央柱列 (2) …… 713	第452図	西地区出土木製品 (11) …… 783
第405図	大型建物跡 中央柱列 (3) …… 714	第453図	西地区出土木製品 (12) …… 785
第406図	大型建物跡 中央柱列 (4) …… 715	第454図	西地区出土木製品 (13) …… 786
第407図	大型建物跡 中央柱列 (5) …… 716	第455図	西地区出土打製石器 (1) …… 789
第408図	大型建物跡 中央柱列 (6) …… 717	第456図	西地区出土打製石器 (2) …… 790
第409図	大型建物跡 西側柱列 (1) …… 718	第457図	西地区出土打製石器 (3) …… 792
第410図	大型建物跡 西側柱列 (2) …… 719	第458図	西地区出土打製石器 (4) …… 793
第411図	大型建物跡 西側柱列 (3) …… 721	第459図	西地区出土打製石器 (5) …… 797
第412図	大型建物跡 西側柱列 (4) …… 722	第460図	西地区出土打製石器 (6) …… 798
第413図	大型建物跡 西側柱列 (5) …… 723	第461図	西地区出土打製石器 (7) …… 799
第414図	大型建物跡 西側柱列 (6) …… 724	第462図	西地区出土打製石器 (8) …… 802
第415図	大型建物跡 西側柱列 (7) …… 725	第463図	西地区出土打製石器 (9) …… 804
第416図	大型建物跡 西側柱列 (8) …… 726	第464図	西地区出土打製石器 (10) …… 806
第417図	第Ⅶ層上面の柱穴 (1) …… 727	第465図	西地区出土打製石器 (11) …… 807
第418図	第Ⅶ層上面の柱穴 (2) …… 728	第466図	西地区出土磨製石器 (1) …… 809
第419図	弥生時代中期後葉の遺構 (1) …… 729	第467図	西地区出土磨製石器 (2) …… 811
第420図	弥生時代中期後葉の遺構 (2) …… 730	第468図	西地区出土磨製石器 (3) …… 812
第421図	弥生時代中期後葉の遺構 (3) …… 731	第469図	西地区出土磨製石器 (4) …… 813
第422図	弥生時代後期初頭の遺構… 733	第470図	西地区出土磨製石器 (5) …… 814
第423図	弥生時代中期後葉・後期初頭の遺構… 735	第471図	西地区出土磨製石器 (6) …… 815
第424図	弥生時代後期後葉の遺構… 737	第472図	西地区出土磨製石器 (7) …… 817
第425図	弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の遺構… 739	第463図	西地区出土磨製石器 (8) …… 818
第426図	古墳時代初頭の遺構 (1) …… 740	第474図	西地区出土磨製石器 (9) …… 819
第427図	古墳時代初頭の遺構 (2) …… 741	第475図	西地区出土磨製石器 (10) …… 821
第428図	第Ⅵ層上面の柱穴… 743	第476図	西地区出土石製品 (1) …… 823
第429図	西地区の主要遺構… 747	第477図	西地区出土石製品 (2) …… 824
第430図	西地区出土土器 (1) …… 749	第478図	西地区出土石製品 (3) …… 827
第431図	西地区出土土器 (2) …… 751	第479図	西地区出土石製品 (4) …… 828
第432図	西地区出土土器 (3) …… 753	第480図	西地区出土石製品 (5) …… 829
第433図	西地区出土土器 (4) …… 755	第481図	西地区出土石製品 (6) …… 831
第434図	西地区出土土器 (5) …… 757	第482図	西地区出土礫石器 (1) …… 833
第435図	西地区出土土器 (6) …… 759	第483図	西地区出土礫石器 (2) …… 834
第436図	西地区出土土器 (7) …… 761	第484図	西地区出土礫石器 (3) …… 835
第437図	西地区出土土器 (8) …… 763	第485図	西地区出土礫石器 (4) …… 836
第438図	西地区出土土器 (9) …… 765	第486図	西地区出土礫石器 (5) …… 837
第439図	西地区出土土器 (10) …… 767	第487図	西地区出土礫石器 (6) …… 838
第440図	西地区木製品出土地点図… 769	第488図	西地区出土礫石器 (7) …… 840
第441図	西地区出土木製品 (1) …… 771	第489図	西地区 範囲 (内容) 確認調査の 弥生時代前期～中期前葉遺構分布図… 843
第442図	西地区出土木製品 (2) …… 772		

第490図	西地区 範囲 (内容) 確認調査の 弥生時代中期中葉遺構分布図……………	845	第517図	弥生時代中期後葉の遺構 (3) ……………	884
第491図	西地区 範囲 (内容) 確認調査の 弥生時代中期後葉～後期初頭遺構分布図……	847	第518図	弥生時代中期後葉の遺構 (4) ……………	886
第492図	西地区 範囲 (内容) 確認調査の弥生時代 後期前葉～古墳時代初頭遺構分布図……………	849	第519図	弥生時代中期後葉の遺構 (5) ……………	887
第493図	中央区の位置……………	853	第520図	弥生時代後期の遺構……………	888
第494図	第50・53次調査区の位置……………	854	第521図	古墳時代初頭の遺構……………	889
第495図	第50次調査区遺構配置図と基本土層図……………	855	第522図	第Ⅶ層上面の柱穴 (1) ……………	890
第496図	第53次調査区遺構配置図と基本土層図……………	857	第523図	第Ⅶ層上面の柱穴 (2) ……………	891
第497図	第72・76次調査区の位置……………	858	第524図	中央区の主要遺構……………	895
第498図	第72・76次調査区遺構配置図……………	859	第525図	中央区出土木製品 (1) ……………	898
第499図	第98次調査区の位置……………	861	第526図	中央区出土木製品 (2) ……………	899
第500図	第98次調査区配置図と基本土層図……………	863	第527図	中央区出土木製品 (3) ……………	900
第501図	調査区遺構配置図……………	867	第528図	中央区出土木製品 (4) ……………	902
第502図	弥生時代前期～中期初頭の遺構……………	869	第529図	中央区出土打製石器 (1) ……………	905
第503図	弥生時代中期前葉の遺構 (1) ……………	870	第530図	中央区出土打製石器 (2) ……………	907
第504図	弥生時代中期前葉の遺構 (2) ……………	871	第531図	中央区出土打製石器 (3) ……………	909
第505図	弥生時代中期中葉の遺構 (1) ……………	872	第532図	中央区出土打製石器 (4) ……………	911
第506図	弥生時代中期中葉の遺構 (2) ……………	873	第533図	中央区出土打製石器 (5) ……………	912
第507図	弥生時代中期中葉の遺構 (3) ……………	874	第534図	中央区出土打製石器 (6) ……………	914
第508図	弥生時代中期中葉の遺構 (4) ……………	875	第535図	中央区出土打製石器 (7) ……………	915
第509図	弥生時代中期中葉の遺構 (5) ……………	876	第536図	中央区出土磨製石器 (1) ……………	917
第510図	弥生時代中期中葉の遺構 (6) ……………	877	第537図	中央区出土磨製石器 (2) ……………	918
第511図	弥生時代中期中葉の遺構 (7) ……………	878	第538図	中央区出土磨製石器 (3) ……………	920
第512図	弥生時代中期中葉の遺構 (8) ……………	879	第539図	中央区出土磨製石器 (4) ……………	921
第513図	弥生時代中期中葉の遺構 (9) ……………	880	第540図	中央区出土石製品 (1) ……………	923
第514図	弥生時代中期中葉の遺構 (10) ……………	881	第541図	中央区出土石製品 (2) ……………	925
第515図	弥生時代中期後葉の遺構 (1) ……………	882	第542図	中央区出土石製品 (3) ……………	926
第516図	弥生時代中期後葉の遺構 (2) ……………	883	第543図	中央区出土礫石器 (1) ……………	927
			第544図	中央区出土礫石器 (2) ……………	928
			第545図	中央区 範囲 (内容) 確認調査の 遺構分布図……………	931

## 表 目 次

第1表	周辺遺跡一覧表……………	4	第12表	調査区北半柱穴一覧表……………	110
第2表	調査一覧表……………	44	第13表	S B - 102周辺柱穴一覧表……………	125
第3表	唐古・鍵遺跡調査検討委員会 開催経過一覧表……………	54	第14表	調査区南半柱穴一覧表……………	129
第4表	南地区の調査一覧表……………	60	第15表	土坑一覧表……………	153
第5表	土坑一覧表……………	81	第16表	溝一覧表……………	155
第6表	溝一覧表……………	82	第17表	竪穴住居跡一覧表……………	156
第7表	竪穴住居跡一覧表……………	82	第18表	方形周溝墓一覧表……………	156
第8表	掘立柱建物跡一覧表……………	82	第19表	性格不明遺構一覧表……………	156
第9表	性格不明遺構一覧表……………	82	第20表	特殊遺構一覧表……………	156
第10表	落ち込み一覧表……………	82	第21表	弥生時代中期前葉以前柱穴一覧表……………	165
第11表	S B - 101柱穴一覧表……………	108	第22表	S B - 101内柱穴一覧表 (柱根・礎板ほか) ……	180
			第23表	S B - 101内柱穴一覧表……………	182

第24表	第Ⅳ層上面柱穴一覧表	229	第57表	溝一覧表	632
第25表	土坑一覧表	245	第58表	古墳一覧表	632
第26表	溝一覧表	246	第59表	中世大溝一覧表	632
第27表	性格不明遺構一覧表	246	第60表	主要柱穴一覧表	638
第28表	河跡一覧表	246	第61表	第Ⅵ層上面柱穴一覧表	645
第29表	第Ⅷ層上面柱穴一覧表	264	第62表	土坑一覧表	656
第30表	南地区出土木製品の器種組成	341	第63表	溝一覧表	656
第31表	南地区の石器	371	第64表	性格不明遺構一覧表	656
第32表	敲石の使用痕の分類	427	第65表	Pit-1250一覧表	663
第33表	南地区 範囲(内容)確認調査の 遺構・遺物変遷表(1)	444	第66表	第Ⅵ層上面柱穴一覧表	676
第34表	南地区 範囲(内容)確認調査の 遺構・遺物変遷表(2)	446	第67表	土坑一覧表	682
第35表	南地区 範囲(内容)確認調査の 遺構・遺物変遷表(3)	448	第68表	溝一覧表	683
第36表	南地区 範囲(内容)確認調査の 遺構・遺物変遷表(4)	450	第69表	性格不明遺構一覧表	683
第37表	東環濠の調査一覧表	454	第70表	大型建物跡(SB-1201)一覧表	697
第38表	溝一覧表	468	第71表	大型建物跡(SB-1201)柱穴一覧表	697
第39表	性格不明遺構一覧表	468	第72表	第Ⅶ層上面柱穴一覧表	727
第40表	河跡一覧表	468	第73表	第Ⅵ層上面柱穴一覧表	742
第41表	土坑一覧表	488	第74表	西地区出土木製品の器種組成	769
第42表	溝一覧表	488	第75表	西地区の石器	787
第43表	河跡一覧表	488	第76表	西地区 範囲(内容)確認調査の 遺構・遺物変遷表(1)	842
第44表	古墳時代溝一覧表	488	第77表	西地区 範囲(内容)確認調査の 遺構・遺物変遷表(2)	844
第45表	中・近世土坑一覧表	488	第78表	西地区 範囲(内容)確認調査の 遺構・遺物変遷表(3)	846
第46表	東環濠の石器	515	第79表	西地区 範囲(内容)確認調査の 遺構・遺物変遷表(4)	848
第47表	東環濠 範囲(内容)確認調査の 遺構・遺物変遷表	520	第80表	中央区の調査一覧表	852
第48表	西地区の調査一覧表	524	第81表	土坑一覧表	865
第49表	土坑一覧表	559	第82表	溝一覧表	866
第50表	溝一覧表	560	第83表	堅穴住居跡一覧表	866
第51表	性格不明遺構一覧表	560	第84表	性格不明遺構一覧表	866
第52表	第Ⅴ層上面柱穴一覧表	606	第85表	SB-101柱穴一覧表	887
第53表	土坑一覧表	618	第86表	第Ⅷ層上面柱穴一覧表	892
第54表	溝一覧表	618	第87表	中央区出土木製品の器種組成	897
第55表	柱穴一覧表	618	第88表	中央区の石器	903
第56表	土坑一覧表	632	第89表	中央区 範囲(内容)確認調査の 遺構・遺物変遷表	930

## 写真目次

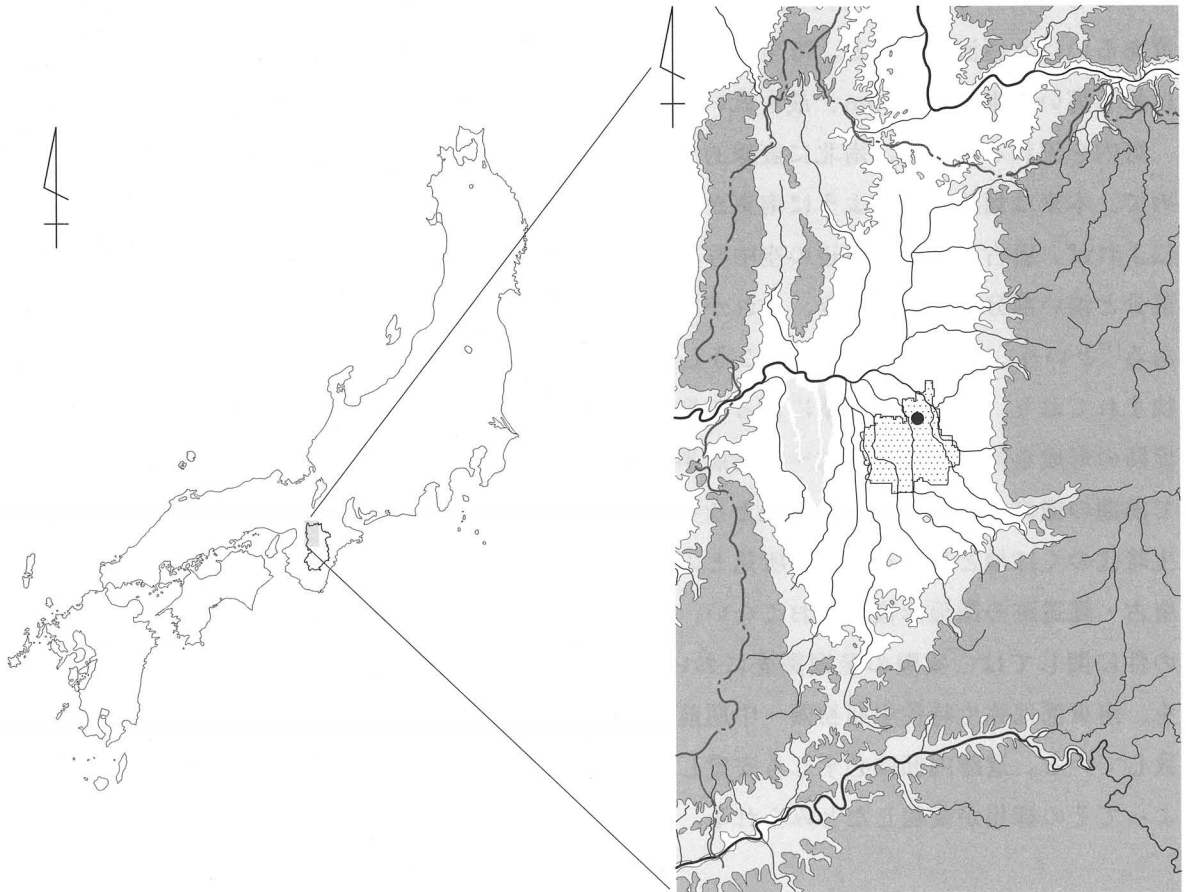
写真1	唐古池の採土工事	31	写真4	環濠出土農具未成品(第3次調査)	341
写真2	トロッコと末永雅雄氏	33	写真5	ケヤキ原木出土状況(第13次調査)	769
写真3	A号地点の調査風景	35	写真6	木製柄内石器(SP3102)装着状況	794

# 第I章 調査に至る経緯

## 第1節 位置と環境

### 1. 地理的環境

弥生時代を代表する環濠集落の唐古・鍵遺跡は、奈良盆地のほぼ中央部にある田原本町に位置する。奈良県は近畿地方の中央部から南部にあたり、周囲を山で囲まれた内陸県である。県のほぼ中央部には、紀ノ川に沿って西日本を南北に分断する中央構造線が走り、県の地形はこの中央構造線の以南と以北で異なる。以南は紀伊山地に代表される山岳地帯であるが、以北には大和高原や奈良盆地などの丘陵地や平坦地が多い。その以北の奈良盆地に、唐古・鍵遺跡をはじめとする弥生時代集落の多くが集中する。



第1図 唐古・鍵遺跡の位置

県以北でも北西部に位置する奈良盆地は、東西の断層線によって区切られた標高40~100mの地溝盆地である。東に笠置山地、西に生駒・金剛山地、北に奈良山丘陵、南に竜門山地と、周囲を山々で囲まれている。盆地は南北にやや間延びした菱形を呈し、その規模は東西約15km、南北約30kmで、面積は約450km<sup>2</sup>を測る。また、盆地北西部には生駒山地に沿って西の京丘陵と矢田丘陵が、金剛山地に沿って馬見丘陵が連なる。盆地南部では、大和三山と呼ばれる畝傍山、耳成山、香具山が浮島の如く分布する。このうち、畝傍山と耳成山は火山であり、その噴出物である流紋岩は、弥生時代前期の石庖丁の石材となっている。同じく、金剛山地北端の二上山も火山であり、その噴出物のうち安山岩は旧石器時代~弥生時代の打製石器に用いられている。

盆地四周の山々から流れ出た河川は、盆地西部の亀ノ瀬溪谷の手前で合流して大和川となり、西流して大阪湾へと流れ込む。これを俯瞰的に表現するならば、大阪湾から延びる一本の幹が奈良盆地において枝を上げた、樹形図の如き様相といえる。奈良盆地は、この幹となる大和川を境として、大きく北部と南部に分かれる。枝となる河川は、北部では北から南へ、南部では南から北へ流れている。奈良盆地はおおむね平坦な沖積地ではあるが、これらの河川によって、丘陵の裾には扇状地が発達し、低地部では自然堤防状や中州状の微高地がいくつも形成されている。田原本町が奈良盆地のほぼ中央部に位置することは冒頭で述べたが、水系からは南部として区分される。町内には、初瀬川（大和川）、寺川、飛鳥川、曾我川の主要河川が北流あるいは北西流している。町全域は、これらの河川によって形成された沖積地であり、標高は最も高い南東部で約60m、最も低い北西部で約45mを測り、15mの比高差がある。

町内を流れる河川は、南北に直線的で条里に沿っている。これは、後世の付け替えによるもので、本来は傾斜が示すように南東から北西に向かって流れていたと考えられる。外山秀一氏によれば、唐古・鍵遺跡周辺の空中写真からは、南東から北西方向に連続する色調のやや濃い部分と淡い部分とが確認でき、これが埋没した旧河道と自然堤防状や中州状の微高地の痕跡である<sup>(1)</sup>という。唐古・鍵遺跡は、こうした南東から北西に向かって流れる旧寺川と旧初瀬川に挟まれており、その溢流堆積によって形成された微高地上に立地する。高橋学氏は、この自然堤防の形成を弥生時代前期末~中期前半と考えており、その形成による「地形の逆転」によって前期の微高地が相対的にくぼ地となったことを想定している<sup>(2)</sup>。これまで遺跡の中央部を弥生時代のくぼ地としてきた調査所見との間で、今後整合作業が必要となろう。また、高橋氏は唐古・鍵遺跡の微地形復原をおこない、遺跡内の北西部と南東部に谷地形を想定している。この件に関しては、実際の発掘調査において北西部は弥生時代中期後葉に形成された北方砂層を、南東部は弥生時代中期初頭~中期前葉に掘削された大溝群を検出しており、その所見と一致している。遺跡内部は必ずしも安定した平坦地ではなく、微高地とくぼ地が分布し、時期によってその様相が変貌したとみられる。

## 2. 田原本町内の遺跡分布

### (1) 縄文時代

田原本町において旧石器時代の遺構・遺物は、検出されていない。しかし、縄文時代草創期の有茎尖頭器については、宮古北遺跡(38)の発掘(保津・宮古遺跡第11次調査)資料<sup>(3)</sup>、多遺跡(73)の表面採集資料<sup>(4)</sup>がある。さらに、多遺跡から矢部遺跡にかけての微高地は、土器を伴わず石器のみ出土する層があり<sup>(5)</sup>、縄文時代草創期を前後する人的活動があった可能性も想定でき、注意を要する。

町内における確実な定住は、縄文時代後期からと考えられる。保津・宮古遺跡(39)、秦庄遺跡(71)では、後期縄文土器が出土している。このうち、保津・宮古遺跡第14次調査<sup>(6)</sup>では土坑に伴い、秦庄遺跡第1次調査<sup>(7)</sup>の単体で出土した粗製深鉢は土器棺の可能性も想定される。急速に遺跡数が増加するのは、縄文時代晩期後半の凸帯文土器段階である。清水風遺跡<sup>(8)</sup>(8)、唐古・鍵遺跡<sup>(9)</sup>(1)、宮古北遺跡<sup>(10)</sup>(38)、阪手東遺跡<sup>(11)</sup>(51)、矢部南遺跡<sup>(12)</sup>(69)など、遺構に伴わず土器片のみが出土している。いずれも、凸帯文土器としては最も新しく、長原式の特徴をもつ。

### (2) 弥生時代

町内の弥生遺跡には、唐古・鍵遺跡(1)の他にも「大和の弥生拠点集落」として著名な保津・宮古遺跡(39)、多遺跡(73)がある。いずれも、弥生時代前期に成立し古墳時代まで継続する集落であるが、保津・宮古遺跡については遺構が散漫な上に、時期によって集住地点が異なっている<sup>(13)</sup>。さらに、保津・宮古遺跡は環濠をもたない可能性が高く、唐古・鍵遺跡や多遺跡と同列に位置づけることはできない。

多遺跡は、遺跡範囲の北西部においておこなった第10次調査<sup>(14)</sup>で弥生時代前期末の並行する大溝2条を、北東部においておこなった第19次調査<sup>(15)</sup>で弥生時代中期中葉～後期の並行する大溝2条を検出している。これら的大溝から、環濠のめぐる遺跡範囲を東西幅350mとする復原案がある<sup>(16)</sup>。一方で、弥生時代中期の居住域に関しては、検出した遺構分布から復原遺跡範囲よりもかなり狭いとみざるを得ない。なお、第10次調査では、銅剣の鋒を埋納した弥生時代中期後葉の土坑が検出されている。多遺跡から北西約200mに位置する矢部南遺跡(69)では、第2次調査<sup>(17)</sup>で弥生時代中期中葉の方形周溝墓が2基検出されており、その墓域と考えられる。

唐古・鍵遺跡の周辺には、衛星集落と呼ばれる短期的で小規模な集落が点在する。清水風遺跡(8)、八尾九原遺跡(34)、羽子田遺跡(44)、小阪里中遺跡(29)であり、弥生時代中期後葉の遺構・遺物を検出している。また、清水風遺跡第1次調査<sup>(18)</sup>では弥生時代中期前葉、羽子田遺跡第20次調査<sup>(19)</sup>では弥生時代中期中葉、法貴寺北遺跡(24)第1次調査<sup>(20)</sup>では古墳時代初頭の方形周溝墓を検出している。これらは、唐古・鍵遺跡から1km内外の位置にあり、その墓域であった可能性が考えられる。しかし、16基の方形周溝墓を検出した阪手東遺跡<sup>(21)</sup>(51)は、同様に唐古・鍵遺跡から南に約1km離れているためその墓域と考えられていたが、近年の

第I章 調査に至る経緯

第1表 周辺遺跡一覧表

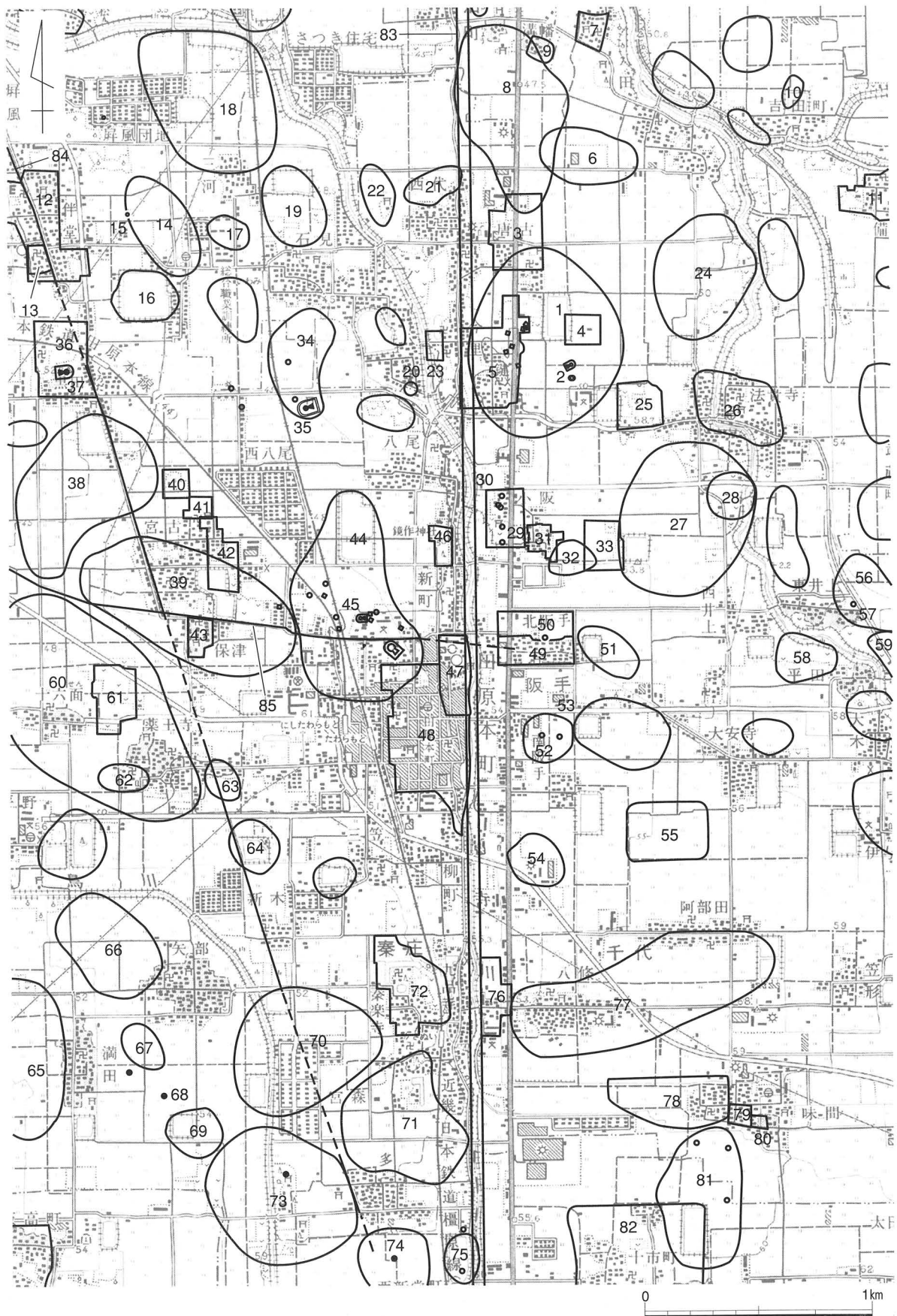
番号	田原本町番号	県遺跡地図	遺跡名	所在地	種類	時代	遺跡概要	遺物
1	7	11-A-066	唐古・鍵遺跡	田原本町唐古字ソ子田ほか、 鍵字上塚ほか	集落跡 集落跡 集落跡	縄文・晩 弥生 古墳・前 古墳・後	環濠、土坑、建物、 井戸 土坑、井戸、溝 土坑、井戸	縄文 弥生、石器、木器、青銅器 土師、木製品 土師、須恵、子持勾玉、 製塩土器
2	8	11-A-066	唐古・鍵古墳群	田原本町鍵字神子田ほか	古墳群	古墳	1～10号墳	土師、須恵、埴輪、木製品
3	9	11-A-100	唐古氏居館跡推 定地	田原本町唐古寺ノ前ほか	中世居館跡 寺院跡	中世	大溝、井戸	土師、瓦質土器、瓦器、 陶磁器、 木製品(卒塔婆)
4	10	11-A-101	唐古東氏居館跡 推定地	田原本町唐古字田中ほか	居館跡	中世	井戸、土壙墓	土師、瓦器、黒色土器、磁器、 木製品(柀、柀、下駄)、 金属器(鉄鏃、銅鈴)
5	11	11-A-089	唐古南氏居館跡 推定地	田原本町唐古字城ノ前ほか	居館跡	中世	井戸、大溝	土師、瓦器、陶磁器
6	4	11-A-062	八田遺跡	田原本町八田字アヤメほか	遺物散布地	古墳・後 中世	河跡	土師、須恵、瓦質土器、 滑石勾玉
7	5	11-A-063	常宝寺遺跡	田原本町八田字寺ノ北ほか	寺院跡	中世、近世	寺院、礎石	土師
8	6	11-A-080	清水風遺跡	天理市庵治町清水風、 田原本町唐古字巻ノ坪ほか	集落跡、墓地	弥生 古墳・前 古代 中世	掘立柱建物、 方形周溝墓、河跡 土坑、井戸 河跡 水田	弥生、絵画土器、銅鐸形 土製品、前漢鏡 土師、須恵 瓦、土馬、須恵
9	-	11-A-082	溝幡多環濠	天理市庵治町溝幡字城	環濠集落			
10	-	11-A-055	吉田遺跡	天理市吉田町字ヒジリ	遺物散布地	弥生・後～ 古墳・後		弥生、土師、須恵
11	-	11-B-420	備前環濠	天理市備前町	環濠集落			
12	-	11-A-086	伴堂環濠	磯城郡三宅町伴堂	環濠集落			
13	-	11-A-092	伴堂城跡	磯城郡三宅町伴堂	城跡	室町		
14	-	11-A-029	伴堂東遺跡	磯城郡三宅町伴堂	集落跡	弥生～ 平安	井戸、溝	土師、須恵、磁器、瓦器、 土釜、埴輪、製塩土器
15	-	11-A-028	六ツ塚古墳	磯城郡三宅町伴堂	古墳	古墳	円墳・径17m	
16	-	11-A-035	伴堂遺跡	磯城郡三宅町伴堂字いお 田ほか	遺物散布地	古墳・後～ 奈良		土師、須恵
17	-	11-A-088	九尻田遺跡	磯城郡三宅町石見字九尻田	遺物散布地	弥生～古墳	土坑、溝	土師、須恵、灰釉陶器、 瓦器、施釉陶器、屋瓦
18	-	11-A-030	三河遺跡	磯城郡三宅町三河	集落跡、古墳	弥生～古墳 平安	方形周溝墓・古墳 井戸・土坑・溝	弥生、土師、須恵、埴輪、 瓦器、瓦質土器、石帯
19	-	11-A-031	三河東遺跡	磯城郡三宅町石見、三河	墓地 遺物散布地	弥生 奈良～平安		弥生 土師
20	-	11-A-040	石見遺跡	磯城郡三宅町石見字王子	古墳	古墳・後		埴輪、木製品ほか
21	12	11-A-064	西代遺跡	田原本町西代字十坪ほか	遺物散布地	室町		土師、須恵、瓦器
22	13	11-A-065	西代西遺跡	田原本町西代字内垣ほか	遺物散布地			土師、須恵
23	14	11-A-102	今里の浜遺跡	田原本町今里字中道ほか、 三宅町石見字北玉子ほか	港跡	近世	港	
24	15	11-A-079	法貴寺北遺跡	田原本町法貴寺字工ノ口田ほか	墓地、集落跡	弥生～古墳 中世	方形周溝墓2、壺棺3 掘立柱建物	弥生、土師、鉄鏃 瓦器
25	17	11-A-090	丹波山遺跡	田原本町法貴寺字丹波山ほか	中世居館跡	中世		土師、瓦器、瓦
26	18	11-A-081	法貴寺遺跡	田原本町法貴寺字蓮池田ほか	寺院、屋敷跡 環濠集落	弥生～近世	大溝、井戸、掘立柱 建物、土坑	弥生、土師、瓦器、瓦質 土器、黒色土器、木製品
27	19	11-A-068	法貴寺齋宮前遺跡	田原本町法貴寺字齋宮前ほか	遺物散布地	古墳・中 平安～江戸	大溝、掘立柱建物、井戸	土師、須恵、瓦器、柀、 奈良三彩
28	19	11-C-107	舞ノ庄遺跡	田原本町法貴寺字海ノ上ほか	集落跡	中世、近世	大溝、井戸	土師、瓦器、瓦、陶磁器

番号	田原本町番号	県遺跡地図	遺跡名	所在地	種類	時代	遺跡概要	遺物
29	22	11-C-099	小阪里中遺跡	田原本町小阪字里中ほか	墓地?集落跡? 屋敷跡 寺院跡	弥生 中世~近世	土坑 大溝	弥生 瓦器、土師、陶磁器
30	23	11-C	小阪里中古墳群	田原本町小阪字里中ほか	古墳	古墳	1~5号墳	須恵、埴輪、木製品
31		11-C	小阪安田前遺跡	田原本町小阪字安田前ほか	集落跡	中世	溝、土坑	土師、須恵、瓦器、埴輪、 木製品
32		11-C	小阪細長遺跡	田原本町小阪字細長ほか	遺物散布地、 古墳、その他墓	弥生、古墳 中世、近世	素掘溝、溝、井戸、土坑	弥生、土師、須恵、埴輪、 瓦器、陶磁器
33	24	11-C-108	小阪榎木遺跡	田原本町小阪字榎木	中世居館跡	中世	大溝、井戸	土師、瓦器
34	26	11-A-038	八尾九原遺跡	田原本町八尾字上九原ほか	集落跡	弥生・中	土坑、井戸	弥生、絵画土器
35	27	11-A	笹鉾山古墳群	田原本町八尾字山本ほか	古墳群	古墳	1~5号墳	土師、須恵、埴輪、木製品
36	28	11-A-083	黒田遺跡 (法楽寺跡)	田原本町黒田字寺垣内ほか	集落跡 寺院跡	弥生・中・後 古墳・前 奈良~室町 近世	井戸 井戸、大溝 土坑、暗渠施設	弥生、石器 土師 土師、瓦器、瓦質土器 陶磁器、瓦
37	29	11-A-071	黒田大塚古墳	田原本町黒田字東敷348番地	古墳	古墳・後	前方後円墳(長約86m・ 後円部径40m・前方部 幅45m、3,163㎡)、周濠	埴輪(円筒・蓋) 木製品(蓋・鳥) 滑石円板、管玉
38	32	11-A-072	宮古北遺跡	田原本町黒田字地蔵垣内ほか、 宮古字倉田ほか	集落跡、農耕地 集落跡 集落跡	弥生・前~後 古墳・前 古代 中世	土坑、溝、河跡、井堰 環濠、井戸 倉庫 井戸	弥生、石器 土師、木庖丁 土師、須恵 土師、瓦器、瓦質土器
39	34	11-C-033	保津・宮古遺跡	田原本町保津字伊多敷ほか、 宮古字寺垣内ほか	集落跡? 集落跡 集落跡	縄文・後 弥生~ 古墳・前 古代 鎌倉	土坑、河跡 土坑、井戸、溝 土坑、井戸、溝	縄文 弥生、石器、盾 翡翠製勾玉、管玉 墨書土器、土馬 土師、須恵
40	110	11-A-115	宮古前遺跡	田原本町宮古字宮古前	中世屋敷跡	鎌倉~室町	土坑、溝、柱穴	土師、瓦器、瓦質土器、 木製品
41		11-C	宮古石橋遺跡	田原本町宮古字石橋ほか	集落跡	弥生、古墳 平安、中世	土坑、溝	弥生、土師、須恵、瓦器
42	36	11-C-110	常楽寺推定地	田原本町宮古字寺垣内ほか	集落跡 集落跡 寺院跡	弥生 古墳 中世~近世	土坑 土坑 土坑、溝、井戸	弥生 土師 土師、瓦器、陶磁器、瓦
43	38	11-C-094	保津環濠遺跡	田原本町保津字村内垣内	環濠集落	中世~現代	環濠、上水施設	瓦器、陶磁器
44	39	11-C-035	羽子田遺跡	田原本町八尾字池内ほか、 田原本町字東羽子田ほか	集落跡 集落跡 農耕地	縄文・後? 弥生・中・後 古墳・前・後 古代、中世 江戸	井戸 井戸 河跡	縄文 弥生 土師 須恵、瓦 瓦質土器、陶磁器
45	40	11-C	羽子田古墳群	田原本町字東羽子田ほか	古墳群	古墳	1~28号墳	
46	41	11-C-117	鏡作神社遺跡	田原本町八尾字宮西ほか	神社、神宮寺	奈良		須恵
47	42	11-C-095	平野氏陣屋跡	田原本町字数ノ内ほか	寺院、居館 陣屋、町屋	弥生 中世 近世	土坑、溝 建物、溝 橋、堀	弥生 土師、瓦器、瓦 陶磁器、瓦、土人形
48	43	11-C-105	寺内町遺跡	田原本町字茶町ほか	寺院、神社、 町屋	中世、近世	環濠	土師、瓦質土器、陶磁器、瓦
49	44	11-C-084	阪手北環濠遺跡	田原本町阪手字宮内ほか	環濠集落	中世、近世		瓦器
50		11-C	阪手北遺跡	田原本町阪手字ヘンビタ 184-1ほか	集落跡	奈良、平安	土坑、溝、柱穴、 落ち込み	土師、須恵、黒色土器、瓦器、 木製品
51	46	11-C-057	阪手東遺跡	田原本町阪手字大倉ほか	墓地 遺物散布地	弥生 鎌倉	方形周溝墓 大溝	弥生 土師、須恵、瓦質土器、瓦器、瓦
52	47	11-C-119	阪手仁王前遺跡	田原本町阪手字仁王前ほか	中世寺院跡	中世	大溝	瓦器、瓦、土師
53	49	11-C-120	阪手カハウト遺跡	田原本町阪手字カハウト843番地	墳墓、信仰地	中世~近世	木棺墓、土壙墓、 マウンド	土師、陶磁器、瓦製社、銭貨、 鉛製彈
54	51	11-C-074	阪手遺跡	田原本町阪手字羽織ほか	農耕地、 遺物散布地	弥生・後 中世	井堰、溝	弥生、石庖丁、木製品 土師、瓦器



第I章 調査に至る経緯

番号	田原本町番号	県遺跡地図	遺跡名	所在地	種類	時代	遺跡概要	遺物
55	52	11-C-121	柿ノ森遺跡	田原本町大安寺柳ノ森ほか、 田原本町大木字カキノモリ	中世居館跡	中世		
56	54	11-D-001	東井上遺跡	田原本町東井上字サイキほか	遺物散布地 中世寺院跡	弥生・前 平安～室町	大溝	弥生 瓦器、土師、銭貨
57	55	11-D-002	大日塚遺跡	田原本町東井上字大日545番地	中世墳墓	室町、江戸	東西6m・南北5m 土墳墓	宝篋印塔、瓦、土師、瓦器、 銭貨
58	56	11-D-005	平田遺跡	田原本町平田字野行ほか	遺物散布地	弥生、古墳		弥生、土師、須恵
59	57	11-D-003	平田クウリデン遺跡	田原本町平田字クウリデンほか	集落跡	室町	掘立柱建物、溝	土師、須恵、瓦器、銭貨
60	73	11-C-032	十六面・薬王寺遺跡	田原本町十六面字山ノ内ほか、 薬王寺字坊垣内ほか	墓地 集落跡 水田	縄文・後 弥生 古墳・前 古墳 古代 鎌倉	河跡 溝、土坑、河跡 円形・方形周溝墓 土坑、井戸 水田、溝、河道、井戸	縄文 弥生、銅鏃 土師 土師、須恵、木製品 土師、須恵 瓦器、瓦質土器
61	74	11-C-123	保津氏居館推定地	田原本町十六面字宮ノ池ほか	居館跡	中世～近世	大溝、井戸	土師、瓦器、木製品、 瓦質土器、陶磁器
62	75	11-C-124	薬王寺推定地	田原本町薬王寺字坊垣内ほか	寺院跡	中世～近世		
63	76	11-C-041	薬王寺東遺跡	田原本町薬王寺字卒部波堂ほか	遺物散布地	古墳・後～ 平安		土師、須恵、瓦質土器
64	77	11-C-042	薬王寺南遺跡	田原本町薬王寺字高内ほか	遺物散布地	弥生～平安	溝、足跡	弥生、土師、須恵、瓦器、 瓦質土器
65	82	11-C-044	佐味遺跡	田原本町満田字法楽寺ほか、 佐味字初田ほか	遺物散布地	弥生～中世		弥生、石器(石剣、石斧、 砥石)、土師、須恵、瓦器、 円筒埴輪、管玉
66	83	11-C-069	矢部遺跡	田原本町矢部字コシヅカほか	墓地群、集落跡	弥生～近世	方形周溝墓群、大溝	弥生、土師、須恵、陶磁器、 木製品
67		11-C	矢部中曾司遺跡	田原本町矢部字矢柄、西印田、 狐塚、中曾司ほか	遺物散布地	古墳、平安 中世		土師、須恵、瓦器
68	85	11-C-071	団栗山古墳	田原本町矢部字藤ノ森370-1 ～374番地	古墳	古墳・後	円墳(前方後円墳?) (径約33m)	須恵、土師、環頭太刀、鉄鏃、 馬具、蛇行状鉄器
69	86	11-C-046	矢部南遺跡	田原本町矢部字里脇ほか	墓地 遺物散布地	弥生 鎌倉		弥生 土師、須恵、瓦器、埴輪
70	87	11-C-047	宮森遺跡	田原本町矢部字大井田ほか、 宮森字下若宮ほか	遺物散布地	古墳・後～ 鎌倉	土坑、溝、柱穴	土師、須恵、瓦器、屋瓦
71	88	11-C-125	秦庄遺跡	田原本町宮森字亀田ほか	集落跡	縄文・後 古墳・中～後 中世	掘立柱建物、溝 井戸	縄文 土師、須恵 瓦器
72	89	11-C-104	秦楽寺遺跡 (秦楽寺城跡)	田原本町秦之庄字北垣内ほか	寺院、居館跡	弥生～近世		
73	90	11-C-049	多遺跡	田原本町多字タジマほか	集落跡、水田跡	弥生～中世	環濠、井戸、水田	弥生、土師、須恵、瓦器
74	93	11-C-068	多新堂遺跡	田原本町多字大上院ほか	遺物散布地 中世寺院跡	弥生 奈良～中世	土坑 河跡、大溝	弥生、須恵、土師、瓦器、 瓦質土器
75	99	11-C-052	多東新池遺跡	田原本町多字四ノ坪ほか	遺物散布地	弥生～平安		弥生、土師、須恵、瓦器
76	100	11-C-126	日光寺推定地	田原本町千代字日光寺ほか	寺院跡	古墳、中世	大溝、井戸、 掘立柱建物	土師、須恵、瓦器、瓦質 土器、木製品
77	101	11-C-062	千代遺跡 (勝楽寺跡)	田原本町八条字千代ほか	寺院、遺物散 布地	古墳・後～ 室町		
78	108	11-C-052	味間西遺跡	田原本町大字味間字堂垣内ほか	集落跡	中世	土坑、溝	土師、瓦器、青磁
79	102	11-C-037	補巖寺遺跡	田原本町味間字和田ノ坪	寺院跡	中世～現代		
80	103	11-C-063	木村邸	田原本町味間字クノイタ	環濠屋敷	近世～現代		
81	104	11-C-066	十市池遺跡	田原本町味間字北林ほか、 榎原市十市町	遺物散布地	弥生～平安		弥生、土師、須恵、瓦器
82	-	11-C-096	十市城跡 (十市平城)	榎原市十市町城554	城跡	室町	濠	
83	201	-	下ッ道	田原本町西代ほか	古道	奈良		
84	202	-	筋違道	田原本町黒田ほか	古道	古代～奈良	道路側溝	土師、須恵
85	203	-	保津・阪手道	田原本町宮古、保津、新町ほか	古道	古代	道路側溝	土師、須恵、斎串、土馬



第2図 唐古・鍵遺跡周辺の遺跡分布図 (S=1/25,000)

発掘調査で弥生時代中期初頭～後期の集落である法貴寺斎宮前遺跡<sup>(22)</sup> (27) の東接することが明らかとなり、この遺跡との関係を想定すべきであろう。

この他、唐古・鍵遺跡から南東約2 kmに位置する東井上遺跡 (56) では、第1次調査<sup>(23)</sup>で弥生時代後期の居住域を検出している。遺跡発見の発端<sup>(24)</sup>となった前期弥生土器も含めて考えるならば、居住域が移動する小規模な継続集落の可能性も想定できる。

弥生時代の生産域に関して、田原本町周辺は中世の耕作による削平が著しく、確認は困難である。そうした状況にあって、唐古・鍵遺跡から南約2 kmの位置にある阪手遺跡 (54) では、第1次調査<sup>(25)</sup>で水路と堰が検出されており、弥生時代後期の水田域となる可能性が高い。

### (3) 古墳時代

町内において墳丘が確認できる古墳は、黒田大塚古墳 (37)、笹鉾山古墳 (35)、団栗山古墳 (68) の3基に過ぎない。しかし、本来はより多くの古墳が築かれており、いずれも後世の削平を受けて埋没している。これらは点として築かれているのではなく、大きくは唐古・鍵古墳群 (2)、小阪・里中古墳群 (29)、羽子田古墳群 (44)、笹鉾山古墳群、黒田大塚古墳を含む三宅古墳群、団栗山古墳群といった6つほどのグループに分けることができる。

**前期古墳** 羽子田遺跡第3<sup>(26)</sup>・10<sup>(27)</sup>次調査で、長方形の透かしをもつ縦ハケ調整のみの円筒・朝顔形埴輪が出土している。唐古・鍵遺跡でも、第1次調査の折に採集された舟を描いた埴輪片<sup>(28)</sup>は、前期古墳である天理市東殿塚古墳から出土した舟を描いた円筒埴輪との類似が指摘されている<sup>(29)</sup>。また、第78次調査<sup>(30)</sup>では、外面に赤色顔料を塗布し内面にケズリをもつ埴輪片が出土した。羽子田遺跡や唐古・鍵遺跡は、古墳時代前期の居住域であるが、これに接して前期古墳が築かれている可能性がある。この他、小阪安田前遺跡<sup>(31)</sup> (31) では、やや磨滅しているが三角透かしをもつ埴輪片が出土している。また、多新池の周辺では、昭和6 (1931) 年の飛鳥川堤防改修に伴う土取りで、三角透かしをもつ朝顔形埴輪が出土<sup>(32)</sup>した。

**中期古墳** 保津・宮古遺跡 (39) 第14次調査<sup>(33)</sup>で検出された保津岩田古墳は、その直線的な周溝から方墳と考えられ、円筒・朝顔形埴輪とともに家形・盾形埴輪が出土している。羽子田遺跡第31次調査<sup>(34)</sup>では、有黒斑で横ハケの施された円筒・朝顔形埴輪が出土している。なお、保津・宮古遺跡第26次調査<sup>(35)</sup>で検出した埴輪円筒棺は注目される。この埴輪円筒棺を納めていたと想定される墓壙からは、碧玉製管玉8点、ガラス玉6点、琥珀製棗玉1点が出土した。

**後期古墳** 前述した墳丘を残す黒田大塚古墳<sup>(36)</sup>、笹鉾山1号墳<sup>(37)</sup>、団栗山古墳<sup>(38)</sup>は、いずれも後期古墳である。黒田大塚古墳は、墳丘一段目が削平されるが、復原墳長80mで盾型の周濠をもつ。周濠内からは、円筒や蓋形埴輪とともに鳥形や笠形の木製品も出土している。笹鉾山1号墳は、復原墳長55mの前方後円墳で2重の周濠をもつ。その北西に位置する円墳の2号墳からは、馬と曳く人の形象埴輪が2セット出土している。この他、唐古・鍵1号墳<sup>(39)</sup>は、前方後円墳で唐古・鍵古墳群の盟主と考えられている。南側のくびれ部と想定される箇所より、形象埴輪や木製品が出土した。また、明治時代に牛形埴輪が出土して著名な羽子田1号墳<sup>(40)</sup>も、後期古墳である。再発掘となった第11次調査<sup>(41)</sup>では、金環や盾持ち人埴輪の頭部が出土した。

**集落** 現在田原本町で古墳時代の居住域として知られているのは、羽子田遺跡（44）、十六面・薬王寺遺跡（60）、秦庄遺跡（71）～秦楽寺遺跡（72）、多遺跡（73）、日光寺推定地（76）、唐古・鍵遺跡（1）、保津・宮古遺跡（39）、法貴寺北遺跡（24）、金剛寺遺跡である。

このうち、羽子田遺跡では、遺跡範囲の中央部でおこなった第5<sup>(42)</sup>・6<sup>(43)</sup>・31<sup>(44)</sup>・32<sup>(45)</sup>・33<sup>(46)</sup>次調査で古墳時代初頭～前期の遺構を検出している。また、遺跡範囲の南西端部でおこなった第30次調査<sup>(47)</sup>では、弥生時代後期後葉～古墳時代初頭の竪穴住居跡1棟と古墳時代中期の土坑1基を検出している。

十六面・薬王寺遺跡第1次調査<sup>(48)</sup>では、古墳時代中期の土坑を25基検出し、土師器・須恵器などとともに製塩土器・木製品・鉄製品・玉類が出土した。また、これら土坑には、掘立柱建物跡が伴うと想定されている。

秦庄遺跡第1次調査<sup>(49)</sup>では、古墳時代中期～後期にかけての集落とその南辺部を画したと考えられる南東から北西方向の溝を検出している。また、近年の調査では、大字宮森から大字秦庄にかけて厚い古墳時代の遺物包含層が確認<sup>(50)</sup>されており、大規模な集落の拡がりが見込まれる。このうち、秦楽寺池でおこなった秦楽寺遺跡第3次調査<sup>(51)</sup>では、池により浸食されていたが西堤のわずかに残された部分から、古墳時代後期の玉作りに関連する遺物が出土した。

#### （4）古代

田原本町内には15の式内社がある。このうち村屋坐弥富都比売神社は、『日本書紀』に記載された「村屋神」に比定されており、壬申の乱においては中ッ道沿いの重要な戦略拠点であったと考えられている。また、下ッ道沿いの鏡作坐天照御魂神社も『三代実録』にその名が記載される。その他の史料においても、田原本町内の大字に類似した地名を散見することができる。しかし、平城京と藤原京の端境にあって、田原本町では永らくの間、古代の遺跡については佐味遺跡<sup>(52)</sup>（65）や多遺跡<sup>(53)</sup>（73）などがわずかに知られる程度であった。しかし、近年の発掘調査によって、徐々にその実態が明らかとなりつつある。町内の古代遺跡を考えていく上で、重要な手掛かりとなるのは上記にも触れた古道である。町内には、筋違道（84）、中ッ道、下ッ道（83）といった著名な古道が通っており、発掘調査ではこれらを横切る斜行道路の保津・阪手道（85）も明らかにしている。このうち、中ッ道、下ッ道については、現在の地割りから復原されてはいるが、発掘調査で側溝等を確認できていない。これに対し、筋違道は保津・宮古遺跡第14次調査<sup>(54)</sup>及び、その北側延長上の保津・宮古遺跡第19次調査<sup>(55)</sup>で、西側側溝を検出している。さらに、保津・宮古遺跡第14次調査の東側で平成12年度におこなった立会調査<sup>(56)</sup>では、東側側溝と考えられる落ち込みを検出しており、筋違道は22m前後の幅員があったと想定される。筋違道の東側側溝については、薬王寺東遺跡第2次調査<sup>(57)</sup>でも検出している。

保津・阪手道は、平成8年度におこなった保津・宮古遺跡第18次調査<sup>(58)</sup>で、新たに確認された筋違道と交差する東西道路である。この側溝からは人面墨書土器、円面硯、土馬等が出土している。その東延長上約800mに位置する羽子田遺跡第16次調査<sup>(59)</sup>では、並行する2条の大溝を検出しており、道路両側溝と考えられる。この調査成果から、幅員は当初14.5mを測るが、

最終的には9mほどに縮小することが判明している。

古代の遺跡は、こうした古道に隣接して検出されている。筋違道が遺跡範囲の中心を走る保津・宮古遺跡(39)、宮古北遺跡(38)では、道の西側でおこなった保津・宮古遺跡(宮古北遺跡)第3次調査<sup>(60)</sup>の第3トレンチにおいて、飛鳥時代の建物1棟、柵列4条、ピット19基を検出している。第3次調査区と筋違道の間でおこなった保津・宮古遺跡(宮古北遺跡)第4次調査<sup>(61)</sup>においても、飛鳥時代の掘立柱建物群が検出されている。飛鳥時代建物群の中心は、筋違道に西接した第4次調査区付近と考えられる。一方、第4次調査区より南約300mの筋違道西側跡でおこなった保津・宮古遺跡第10次調査<sup>(62)</sup>と西接する第22次調査区<sup>(63)</sup>で、奈良時代の掘立柱建物跡を検出している。ここに奈良時代の建物群の中心が想定される。この他、筋違道に隣接する遺跡として十六面・薬王寺遺跡(60)では、第1次調査<sup>(64)</sup>で河跡から墨書・人面墨書土器が10数個体出土している。

保津・阪手道がその範囲の中心を走る阪手北遺跡(50)では、第3次調査<sup>(65)</sup>の第2トレンチで奈良時代の落ち込み、第1トレンチで平安時代の落ち込みを検出しており、いずれも墨書土器が伴っている。このうち、第1トレンチからは、石銚帯の巡方が出土している。

中ッ道に西接する東井上遺跡(56)では、第1次調査<sup>(66)</sup>で検出した河跡から奈良時代の墨書土器とともに土馬が出土している。下ッ道に東接する清水風遺跡(8)では、第5次調査<sup>(67)</sup>で石銚帯の丸軛や、奈良時代の溝から土馬や製塩土器が出土した。古道に接する遺跡群は、官衙的性格を有していたと考えられる。

なお、遺構に伴うものではなく遺物の単独出土であるが、法貴寺齋宮前遺跡(27)第6次調査<sup>(68)</sup>の奈良三彩は特筆されよう。

#### (5) 中世

興福寺は鎌倉時代になると実質的な大和守護の立場にあり、荘園経営によって台頭著しい在地武士を「衆徒・国民」として配下に組み込んでいった。興福寺内部における大乘院・一条院の派閥が在地武士に反映され、抗争による離散集合を繰り返していた。田原本町内でも、大乘院方国民の十市氏を盟主とする長谷川党として、八田・法貴寺一党・法貴寺糸井衆・唐古東・小坂・戸嶋・大木・田原本・田原本南・八条・味間・竹田の名が、一乗院方国民の箸尾氏を盟主とする長川党として、金剛寺・富本・佐味・唐古・保津・保津新の名が文献に認められる。

発掘調査では、この時期の遺跡として環濠をめぐる居館跡が十六面・薬王寺遺跡(60)、金剛寺遺跡、唐古南氏居館跡推定地(5)、小阪榎木遺跡(33)、小阪里中遺跡(29)、法貴寺遺跡(26)等で検出され、それぞれ文献にある土豪との照合が試みられている。このうち、十六面・薬王寺遺跡の第1次調査<sup>(69)</sup>では、字ヲヤ垣内を中心とする内濠とその外側の屋敷を囲んだ外濠からなる環濠集落を検出している。この環濠集落は13世紀半ばに出現し、15世紀を境に廃絶したと考えられる。調査者は保津氏の居館跡と推定している。なお、第15次調査<sup>(70)</sup>では、ヲヤ垣内の西側外環濠から和鏡が出土した。

法貴寺遺跡は、河川改修に伴う第1次調査<sup>(71)</sup>で40m四方の屋敷を囲む環濠の全体が明らかと

なっている。なお、この東隣接地でおこなった第3次調査<sup>(72)</sup>では、東外環濠と内環濠の東肩を検出した。環濠は13世紀頃に掘削され、14世紀末に埋没したと考えられる。「法貴寺一党」の一居館と考えられている。

金剛寺遺跡は金剛寺氏の「金剛寺城」に比定され、第1次調査<sup>(73)</sup>では城内を区画したと考えられる大溝と出入口となる橋脚を検出した。大溝は、出土土器が15世紀後半から16世紀中頃の年代を示し、上層は意図的に埋められている。史料にある金剛寺城の破却に合致する可能性がある。

唐古南氏居館跡推定地<sup>(74)</sup>は、唐古・鍵遺跡の国道沿いの発掘調査で環濠が検出されている。その規模は200m四方に外濠がめぐり大規模なもので、さらにその内部は内濠によって細かく区画されていたことが発掘調査から想定される。この他、唐古・鍵遺跡の範囲と重なって、唐古東氏、唐古氏の居館跡が推定されている。唐古東氏居館跡推定地でおこなった唐古・鍵遺跡第26次調査<sup>(75)</sup>では、曲物組みの井戸を検出し、12世紀後半と考えられる枡が出土している。

中世寺院の推定地では、日光寺推定地（76）、阪手仁王前遺跡（53）、秦楽寺遺跡（72）、常楽寺推定地（42）等で発掘調査をおこなっている。いずれの調査でも、瓦等は多数出土しているが、伽藍配置等を確認するには至らない。信仰に関連する遺跡としては塚についても、阪手北遺跡第3次調査、阪手カハウト遺跡（52）、東井上大日塚遺跡（57）で調査をおこなっている。阪手カハウト遺跡<sup>(76)</sup>では、盛土を伴う中世の木棺墓と土壙墓を検出しているが、これが幕末には瓦製の祠を置き、塚として祀られていた。東井上大日塚遺跡<sup>(77)</sup>では、宝篋印塔を設置した室町時代後期の盛土直下から、土壙墓1基を検出している。阪手北遺跡第3次調査<sup>(78)</sup>第1トレンチは、塚本体ではなく周辺の調査であるが、完形の瓦器椀5個体が伴った溝を検出しており、塚の区画溝となる可能性がある。こうした塚は中世寺院に隣接するものが多く、その墓地であったものが後世に神聖視され、祀られるようになったものと考えられる。

## （6）近世

戦国時代の動乱を経て、平野氏は豊臣秀吉から田原本村を含む十市郡七か村（佐味村・竹田村・保津村・薬王寺村・神楽寺村・飯高村之内）五千石を拝領する。当初、平野長泰は加増転封を期待し自らは領地に赴かず、真宗寺院である教行寺に寺内町を形成させ、その支配を委ねていた。しかし、その子長勝は寛永6（1629）年に領地入りし、田原本村の奥垣内・奥城屋敷に陣屋及び家臣団の屋敷を形成する。また、教行寺は退去させ、跡地に円城寺（のちに浄照寺）を誘致している。

これが、史料から辿れる平野氏陣屋跡（47）及び田原本町寺内町遺跡（48）の沿革である。現在までに、平野氏陣屋跡は第13次、田原本町寺内町遺跡は第11次の調査を数えるが、市街化が著しく小規模な調査に止まっている。このうち、平野氏陣屋跡第9次調査<sup>(79)</sup>では、その下層において室町期の大溝や土器溜まりを検出しており、奥垣内・奥城屋敷にあったという田原本氏の居館に伴うものと考えられる。これら先行遺構を整地して、陣屋を形成していることが明らかになりつつある。

### 3. 奈良盆地の弥生時代遺跡

唐古・鍵遺跡の周辺には、中・小規模の弥生遺跡が点在する。これらは、本遺跡に対し、その墓域あるいは衛星集落として有機的な関連をもっていたと考えられている。そして、さらに視野を拡げるならば、本遺跡が位置する奈良盆地東南部のわずか東西8km、南北13kmほどの範囲には、本遺跡と同様に「拠点集落」と呼ばれる弥生遺跡が六つもひしめいている。「拠点集落」は、弥生時代のほぼ全般にわたって存続し、その累積した居住範囲は直径200~400mにも及ぶものである。そして、本遺跡と同様に、周辺には中・小規模の弥生遺跡が点在する。これが、大和と呼ばれる奈良盆地における弥生遺跡分布のひとつの特徴となっている。

#### (1) 唐古・鍵遺跡周辺

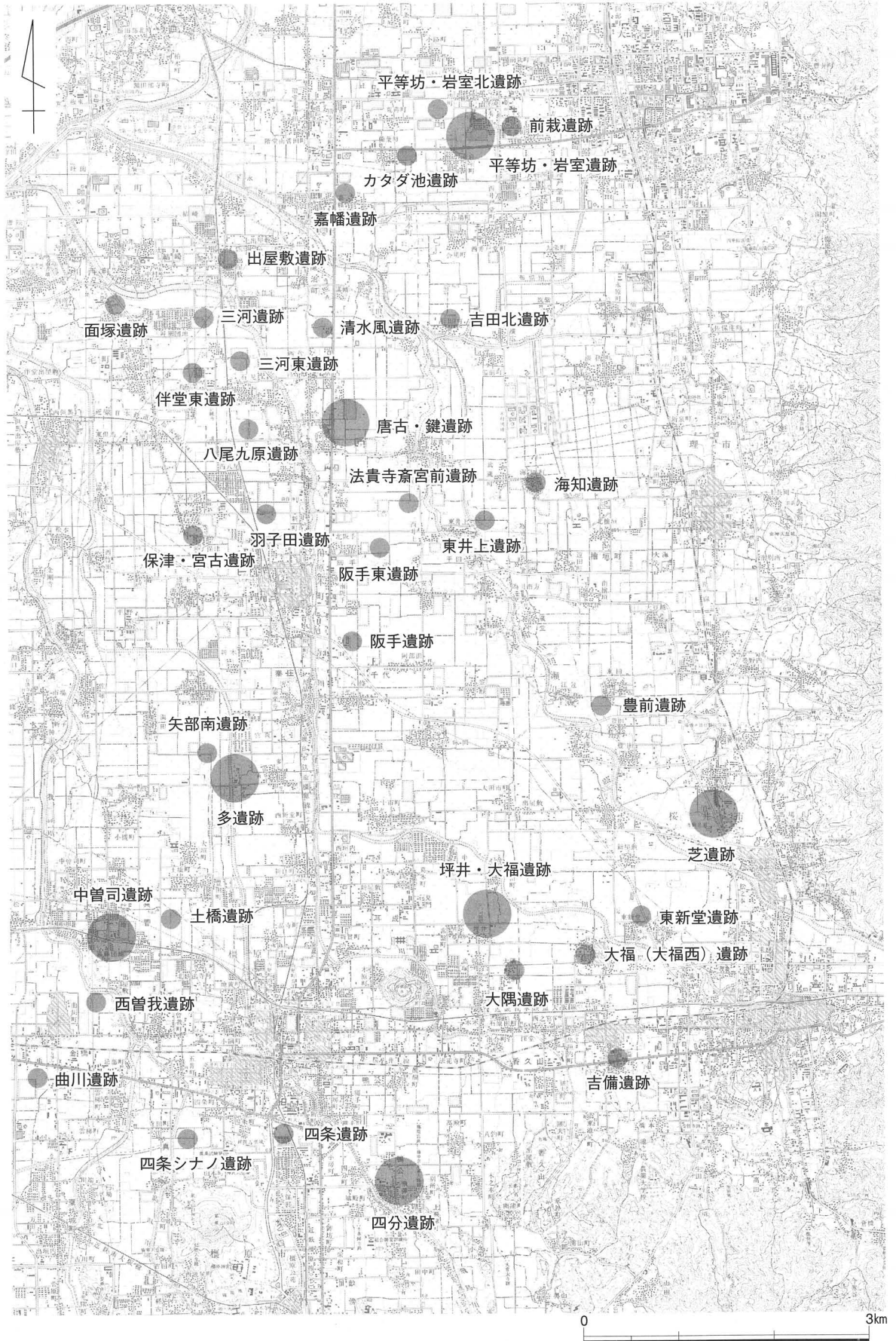
清水風遺跡は、唐古・鍵遺跡の北端から北へ約600mに位置する。現在までに5次の調査次数を数える。第1<sup>(80)</sup>・2<sup>(81)</sup>次調査で、弥生時代中期後葉の河跡を検出し、絵画土器を含む多量の大和第Ⅳ様式の土器が出土した。この河跡は、唐古・鍵遺跡の北東部を走る北方砂層と一連のものとして想定されている。第2次調査はその河跡の東岸で、弥生時代中期後葉の掘立柱建物2棟、土坑4基（うち井戸2基）を検出した。また、第1次調査において河跡の西岸で検出された掘立柱建物跡も、同時期の可能性が考えられる。その他、第1次調査では弥生時代中期前葉の方形周溝墓1基、布留期の土坑、第2次調査では弥生時代後期後葉の土坑、庄内期の方形周溝墓2（3）基、布留期の土坑等を検出している。特殊遺物として、第2次調査で前漢鏡片が出土している。

法貴寺北遺跡は、唐古・鍵遺跡の東端から北東へ約400mに位置する。第1次調査<sup>(82)</sup>で、古墳時代初頭の方形周溝墓2基、土器棺墓3基を検出している。周辺には、古墳時代集落の存在をうかがわせる土坑や溝、柱穴などの居住遺構も分布する。

阪手東遺跡は、唐古・鍵遺跡の南端から南へ約900mに位置する。第2次調査<sup>(83)</sup>では弥生時代中期中葉の方形周溝墓16基を検出し、これが唐古・鍵遺跡の墓域となる可能性も想定されていた。しかし、近年、阪手東遺跡の北東に隣接する法貴寺齋宮前遺跡<sup>(84)</sup>で、発掘調査がおこなわれ弥生時代中期初頭~中期後葉の居住域が検出された。このことから、阪手東遺跡は唐古・鍵遺跡よりもむしろ法貴寺齋宮前遺跡に伴う墓域と考えるべきであろう。

羽子田遺跡は、唐古・鍵遺跡の南西端から南へ約800mに位置する。第5次調査<sup>(85)</sup>で、弥生時代中期後葉の井戸等を検出した。また、遺跡範囲の北端となる第20次調査<sup>(86)</sup>で、弥生時代中期中葉の方形周溝墓を4基検出したが、これは隣接する八尾九原遺跡との関連が想定される。

八尾九原遺跡は、唐古・鍵遺跡の西端から南西へ約600mに位置する。第1次調査<sup>(87)</sup>で、大和第Ⅳ様式の土坑や溝を検出した。土坑は、木器貯蔵穴や井戸の機能をもつと考えられる。前期弥生土器も散見する。また、布留式土器を出土する溝もあるが、これは古墳の周溝と考えられる。遺跡の拡がりについては、第4次調査<sup>(88)</sup>の成果から第1次調査区よりも北側ではなく、笹鉾山1号墳の下層から石器等が検出されていることから南側への拡がりが見込まれる。



第3図 唐古・鍵遺跡遺跡周辺の弥生遺跡 (S = 1/60,000)



伴堂東遺跡は、唐古・鍵遺跡から西へ約2kmに位置する。弥生時代中期後葉～後期の土坑が検出<sup>(89)</sup>されている。この中には、木器貯蔵穴や井戸の機能をもつものが含まれる。また、弥生時代中期前葉の方形周溝墓も確認されている。

東井上遺跡は、唐古・鍵遺跡の南東端から南東へ約1.3kmに位置する。戦時中、河川の付け替えによって、前期弥生土器を含む遺物包含層が露出し、周知された<sup>(90)</sup>。第1次調査<sup>(91)</sup>で、中期弥生土器を含んだ河跡や、竪穴住居跡を含む弥生時代後期の遺構群を検出した。このことから、地点を変えながらも弥生時代全般に継続する小規模集落であったと考えられる。

## (2) 保津・宮古遺跡

保津・宮古遺跡は、唐古・鍵遺跡から南西へ約1.3kmの標高48m前後の沖積地上に立地する。本遺跡は、研究史において拠点集落の一つと数えられてきたが、これまでの調査成果からは遺構・遺物の集中度は低く環濠も検出されないことから、唐古・鍵遺跡周辺の小規模集落としての見直しがなされつつあった。しかし、第31次調査<sup>(92)</sup>で、弥生時代前期前葉の土器が出土したことにより、唐古・鍵遺跡の分村というよりは独自に成立・発展した集落と考えられる。

前期弥生土器は遺跡範囲の東側で表面採集されており、そこに弥生時代前期居住域の中心が想定される。弥生時代中期前葉の遺構は保津集落内でおこなった第23次調査<sup>(93)</sup>で、弥生時代中期後葉の遺構は常楽寺推定地第5次調査<sup>(94)</sup>で検出している。弥生時代中期の遺構分布は、散漫な状況といえよう。一方、弥生時代後期の遺構分布については、第10次調査<sup>(95)</sup>周辺の遺跡範囲西側に集中するようである。本遺跡は時期によって、居住域が動いていたと考えられる。

周辺遺跡としては、本遺跡に東接する羽子田遺跡の西端でおこなわれた第23次調査<sup>(96)</sup>で、弥生時代中期中葉の方形周溝墓と考えられる溝を検出しており、墓域となる可能性がある。また、本遺跡に南接した十六面・薬王寺遺跡の第1次調査<sup>(97)</sup>で、弥生時代中期末～後期初頭の土器を含んだ幅4.00m、深さ1.50mの大溝が検出されている。その性格については不明である。

## (3) 多遺跡

多遺跡は、標高52mの沖積地上に立地する。現在は飛鳥川が遺跡を南北に縦断しているが、弥生時代には集落の南側を流れていたと考えられる。昭和47(1972)年におこなわれた飛鳥川の改修工事で多量の遺物が出土して周知され、現在までに21次の調査回数を数える。

これまでの調査から環濠も含めた居住域の範囲は、東西幅が350mほどに復原されている<sup>(98)</sup>。ただし、この東西幅については、北西部と北東部のやや距離の離れた大溝群を一連の環濠と見なし推定したものであり、縮小する可能性がある。また、その南北幅については、多神社境内東側の水路でおこなった第4次調査<sup>(99)</sup>において、弥生時代中期中葉の東西大溝を境としてその南側は遺構分布が希薄であることが判明している。このことから、本遺跡の弥生時代中期については、直径200mほどの居住域を想定するのが妥当といえよう。

本遺跡から出土する前期弥生土器の多くが後葉のものであり、集落の成立はこの段階と考えられる。遺跡北西部でおこなった第10次<sup>(100)</sup>、第16・17次<sup>(101)</sup>では、弥生時代前期後葉～中期前葉の並行する2条の大溝が検出されており、環濠となる可能性が高い。北東部の第19次調査<sup>(102)</sup>

では、弥生時代前期後葉～中期前葉の並行する2条の溝が検出されているが規模は小さく、環濠と呼びうるのは弥生時代中期中葉前半の2条の大溝である。この大溝の上層には弥生時代後期後葉の遺物包含層が形成されており、この時期まで環濠が継続していた可能性がある。なお、本遺跡では布留式土器や須恵器も多数出土しており、古墳時代も集落が継続していたものと考えられる。特殊遺物として、第10次調査で埋納坑から銅剣の鋒が出土している。

周辺遺跡としては、多遺跡の西端から北西に約400m離れた矢部南遺跡の第2次調査<sup>(103)</sup>で、弥生時代中期中葉の方形周溝墓を2基検出している。多遺跡の墓域である可能性が高い。また、多遺跡の東端から東へ約200mでおこなわれた秦庄遺跡第5次調査<sup>(104)</sup>では、河跡と土坑から弥生時代後期後葉の土器が出土した。土器は磨耗しておらず、周辺に居住域が想定される。

#### (4) 中曾司遺跡

中曾司遺跡は、曾我川右岸の標高54～56mの沖積地上に立地する。その学史は古く、明治30(1897)年に高橋健自氏によって報告<sup>(105)</sup>されたことに始まる。本遺跡については、古くから宅地開発が進んでおり、その実態はほとんど不明であるが、奈良県立橿原考古学研究所による昭和40(1965)年の第1次調査から、現在までに14次の調査回数を数える。

本遺跡の範囲については、周囲の調査が不足しており不明な点が多い。第2次調査<sup>(106)</sup>では、ハンドオーガーによるボーリングがおこなわれ、遺物包含層の拡がり東西500m、南北600mの範囲で確認されている。遺構の分布については、宗我都比古神社を含んだ東西200m、南北300mの範囲に集中すると考えられている。このうち、遺跡範囲の北西部でおこなわれた第2次調査のC地区では、弥生時代中期と後期の溝が5条以上検出されており、環濠帯の可能性はある。

本遺跡は、弥生時代前期中葉の土器がまとまって出土しており、集落の成立はこの段階と考えられる。第5次調査<sup>(107)</sup>では、南北方向の布留期の溝が検出されている。これらのことから、本遺跡は弥生時代前期中葉に始まり、古墳時代初頭にまで継続したことがうかがえる。特殊遺物として、第4次調査<sup>(108)</sup>で建物群を描いた絵画土器が出土している。

周辺遺跡としては、土橋遺跡、曾我遺跡、西曾我遺跡等がある。土橋遺跡では、平成7年度の発掘調査<sup>(109)</sup>において落ち込みの東肩に沿って、弥生時代中期中葉の方形周溝墓を24基検出している。その落ち込みの西側では、奈良県立橿原考古学研究所が昭和55(1980)年に国道24号線バイパスの試掘調査<sup>(110)</sup>をおこなった際に字丑寅内所トレンチを設定しており、完形の広口壺と細頸壺の出土状況写真がある。方形周溝墓は、落ち込みから西側にも拡がっていた可能性がある。また、字インデントレンチにおいて、弥生時代前期前葉や中期中葉、後期後葉の土器が、溝等の遺構から出土している。曾我遺跡でも弥生時代の遺構及び遺物を検出しているが、完形品の単体出土であり、居住域というよりは墓域としての様相をもっている。西曾我遺跡は平成8年度に発掘調査<sup>(111)</sup>され、大和第Ⅲ-2様式の方形周溝墓とともに、大和第Ⅳ-1様式の土坑や溝を検出している。墓域から居住域へと変遷していることがうかがえる。

また、やや離れるが曲川遺跡からは、平成16年度の発掘調査<sup>(112)</sup>で弥生時代中期19基、庄内

期11基の方形周溝墓が検出された。周辺では、弥生時代のしがらみ遺構や、木棺墓が検出<sup>(113)</sup>されており、墓域とセットになる居住域が隣接していると考えられる。

#### (5) 坪井・大福遺跡

坪井・大福遺跡は、寺川と米川に挟まれた、標高62～65mの複合扇状地上に立地する。本遺跡は、桜井市と橿原市の2行政機関に跨っていることもあり、両機関の調査次数が並行したまま現在に至っている。大福地区での発掘調査は昭和48（1973）年の分譲住宅造成に伴う第1次調査<sup>(114)</sup>に始まり、現在までに28次の調査次数を数える。坪井地区では、県立耳成高等学校の第1次調査<sup>(115)</sup>に始まり、今日までに15次の調査次数を数える。発掘調査は、遺跡範囲の北西部となる橿原市域での調査が集中する。

これまでの調査により、本遺跡は周囲に大溝をめぐるせた環濠集落と考えられ、環濠も含めた居住域の範囲は東西約450m、南北約600mに及ぶ。特に北西部<sup>(116)</sup>においては、弥生時代中期中葉前半～後期初頭の5条に及ぶ大溝群が集中しており、環濠帯を形成していたと考えられる。同様な大溝の集中は、遺跡範囲の南東部<sup>(117)</sup>と南西部<sup>(118)</sup>でも認められる。

本遺跡の成立は奈良盆地内でも古く、弥生時代前期前葉の土器棺が出土する<sup>(119)</sup>ことから、集落の形成はこの時期に遡るのであろう。しかし、前期においては、環濠を有していなかったと考えられている。北西部の環濠帯では、弥生時代中期前葉の落ち込みが確認されているが、人工か自然かは意見の分かれるところである。確実な環濠の成立は、弥生時代中期中葉ということになる。なお、坪井地区第9<sup>(120)</sup>・10<sup>(121)</sup>次調査において、南東から北西に走る時期不明の河跡を確認しており、環濠内を河が分断していた可能性がある。

墓域については現在のところ、本遺跡東側の大福地区が考えられている。これまでに検出された方形周溝墓は弥生時代後期から庄内期を主体としていたが、最近の調査では弥生時代中期の方形周溝墓8基以上が検出されている。一方、北西部環濠帯よりも外側となる坪井地区第12-9次調査<sup>(122)</sup>において、コーナーをもつ溝から弥生時代中期中葉の完形細頸壺が出土しており、方形周溝墓の可能性はある。また、遺構を確認したわけではないが、大隅遺跡<sup>(123)</sup>では完形の広口壺・無頸壺が出土している。これらは生駒西麓産胎土の搬入品であることから、方形周溝墓の供献土器である可能性はかなり高い。このことから坪井・大福遺跡の周囲には、3ヶ所の墓域が想定される。

特殊遺物として、大福地区<sup>(124)</sup>からは、方形周溝墓の墳裾から埋納された銅鐸が出土している。また、大福地区では、近年の調査で弥生時代後期の青銅器鑄造関連遺物が出土している。

#### (6) 四分遺跡

四分遺跡は、飛鳥川右岸の南東から北西に緩やかに傾斜する標高72m前後の河岸台地上に立地する。本遺跡は、藤原京西方官衙と重複しており、その調査次数は奈良国立文化財研究所がおこなってきた西方官衙のものを用いている。

これまでの調査により、本遺跡は周囲に環濠をめぐるせた環濠集落と考えられ、環濠も含めた居住域の範囲は、東西250m以上、南北600m以上に及ぶ。遺跡範囲の北部では、環濠になる

と考えられる弥生時代中期の大溝を各所で検出しているが、南部については不明な点が多い。というのも、居住域が弥生時代中期と弥生時代後期ではその範囲を違えており、弥生時代後期にはより南部へと広がっているためである。一方、東部では弥生時代中期の居住域が、弥生時代後期には水田域に変化している。

本遺跡では、環濠外の北西から北にかけて、弥生時代中期前葉～中期中葉の方形周溝墓が検出されている<sup>(125)</sup>。また、埋没した北環濠上には、弥生時代中期後葉と考えられる土壙墓が掘り込まれている<sup>(126)</sup>。このうちの1基には、一つの墓壙に男女が埋葬されており、男性人骨には数ヶ所の切創があり、女性人骨には石鏃が伴っていた。

特殊遺物としては、第72次調査<sup>(127)</sup>で重圈文小型仿製鏡片が出土している。その他、第85次調査<sup>(128)</sup>で建物や鹿を描いた絵画土器が出土している。

### (7) 平等坊・岩室遺跡

平等坊・岩室遺跡は、布留川が形成した標高52～54mの扇状地先端に位置する。本遺跡は、唐古・鍵遺跡とともに古くから知られた「大和の弥生遺跡」の一つであり、大正6（1917）年の第1次調査<sup>(129)</sup>に始まり現在までに30次の調査回数を数える。

これまでの調査により、本遺跡は周囲に環濠をめぐるせた環濠集落と考えられ、環濠も含めた居住域の範囲は、東西270m、南北300+ $a$ mである。特に、遺跡範囲の北西部においては、弥生時代前期～後期の並行する12条の大溝を検出しており<sup>(130)</sup>、環濠帯が形成されていたと考えられる。また、東部でも2～3条の大溝を検出しており<sup>(131)</sup>、これらも環濠帯となるのであろう。

本遺跡においては、弥生時代前期前葉の土器が散見でき、集落の形成はこの段階に始まったと考えられる。居住域推定範囲内の北東部<sup>(132)</sup>と南部<sup>(133)</sup>において、弥生時代前期の大溝が検出されており、複数の微高地と各々を囲む環濠があったと考えられる。弥生時代中期になると、環濠はより外側へと拡大し、遺跡範囲全体を囲むようにめぐらされる。弥生時代後期に至って、中期とは異なる環濠が掘削されている。北西部では埋没した中期環濠を横切るように大溝が掘削された。また、北東部の環濠帯上には、方形区画が形成されたと考えられている<sup>(134)</sup>。

なお、居住域の中央でおこなった第29次調査<sup>(135)</sup>では、弥生時代前期の溝や弥生時代中期末・後期初頭の区画溝を検出する一方で、弥生時代中期前葉、弥生時代後期～古墳時代前葉の自然流路を検出している。また、第5次調査<sup>(136)</sup>で検出された河跡は、弥生時代中期において居住域内の南部を流れていたと考えられる。環濠内部を河が走っていたことは確実である。特殊遺物としては、絵画土器や銅釧片<sup>(137)</sup>が出土している。

周辺遺跡として、前栽遺跡、平等坊北遺跡がある。本遺跡から東方約500mに位置する前栽遺跡<sup>(138)</sup>では、弥生時代中期中葉前半の方形周溝墓5基を検出し、本遺跡の墓域となる可能性が想定されている。一方、本遺跡の第29次調査<sup>(139)</sup>において、環濠帯の北外側を流れる河跡の北岸では、弥生時代中期の完形土器の集中箇所を検出しており、方形周溝墓となる可能性が高い。平等坊・岩室遺跡第18次調査<sup>(140)</sup>では、北西環濠帯よりも西外側において北東から南西方

向に走行する河跡を挟んで弥生時代後期の2条の大溝を検出した。これらは、西側の微高地を囲んでいるものと考えられ、平等坊北遺跡と命名されている。

#### (8) 芝遺跡

芝遺跡は奈良盆地の南東部、三輪山麓に形成された標高66～72mの扇状地上に立地する。桜井市が昭和54年度におこなった第1次調査<sup>(141)</sup>に始まり、平成15年度までに32次の調査回数を数える。

これまでの調査だけでは、本遺跡における環濠の有無を判断するには不確定な要素を残すが、部分的には居住域を画するような大溝を検出している。このうち、奈良県がおこなった国道169号バイパス建設に伴う第15<sup>(142)</sup>・17・18<sup>(143)</sup>・21・22<sup>(144)</sup>次調査は、遺跡を南北に縦断したもので、その居住域の南北幅については約480mということではほぼ決定した。その南限は少々複雑で、弥生時代中期と後期では環濠帯の位置が異なっており、時期が降るにつれ居住域が南へと拡大した可能性がある。これに対し、遺跡の東西については、現状では不明という他はない。東限については、第3<sup>(145)</sup>・20<sup>(146)</sup>次調査で検出された弥生時代中期の方形周溝墓と、第27次調査<sup>(147)</sup>で検出された弥生時代中期前葉の南北大溝から、その周辺と想定される。西限については、まったく調査がおこなわれていないが、現水田面が纏向川の手前で一段と落ち込んでおり、纏向川を西限とみることができよう。これより想定される遺跡の東西幅は約300mである。

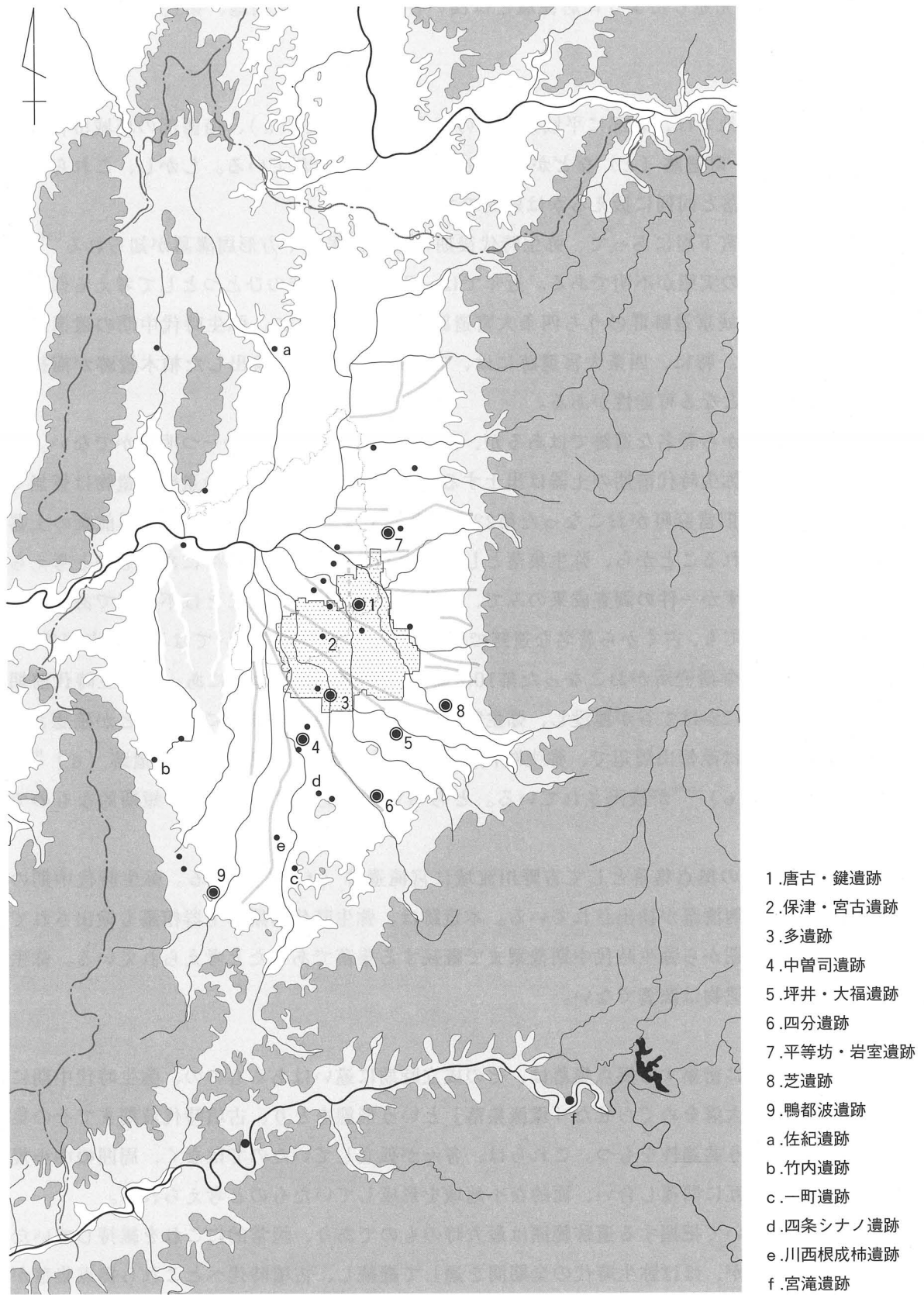
周辺墓地は、芝遺跡の範囲内となる第3・20次調査で方形周溝墓を検出している。その時期は、大和第Ⅲ-3様式である。

#### (9) 鴨都波遺跡

鴨都波遺跡は、葛城山麓に源流をもつ柳田川と、南方の金剛山麓に源流をもつ葛城川が形成した東に張り出す標高100m前後の段丘上に立地する。昭和28(1953)年の第1次調査に始まり、現在までに22次の調査回数を数える。

このうち、第11次調査<sup>(148)</sup>では弥生時代中期初頭～中期中葉の大溝3条を検出しており、集落南限を示すと考えられる。第21次調査<sup>(149)</sup>では、弥生時代後期の大溝を境として東側は著しく落ち込むことから、集落東限と考えられる。第15次調査<sup>(150)</sup>では、三角縁神獣鏡を出土した鴨都波1号墳とともに弥生時代中期前葉の方形周溝墓2基を検出している。この第15次調査区と南に接する第10次調査区との間には、東西方向で浅い谷が入ると考えられており、集落北限はここに設定される。集落西限については、第11次調査区の西側で遺構が散漫になることから、ここに想定される。これより推定される居住域は、東西250m、南北300mの範囲である。

段丘上に立地するため、最低標高95mを測る東側の第21次調査区から、最高標高100mを測る西側の第11次調査区まで、居住域における比高差は5mである。さらに、遺跡範囲の中央部でおこなわれた第8・12次調査<sup>(151)</sup>では、東西方向に横たわる谷地形を検出した。この谷地形では、弥生時代中期後葉に横木やワラなどを杭や矢板で固定して護岸された6本以上の水路を確認している。水路は東側の第4次調査区まで繋がると考えられ、集落中央部を走る谷地形を管理していたことがうかがえる。この谷を挟んで、居住域は南と中央の微高地に大きく分かれる。



第4図 奈良県内の主な弥生遺跡分布図 (S = 1/250,000)

墓域については、先述したように居住域とは浅い谷を挟んだ北微高地、第15次調査区付近に想定されよう。

(10) その他

この他、奈良盆地では、北部に平城京下層の奈良市佐紀遺跡（a）、南西部の葛城市竹内遺跡（b）、橿原市一町遺跡（c）などが拠点集落として数えられている。しかし、これらを盆地東南部の拠点集落と同列に扱えるかは疑問である。

佐紀遺跡は平城宮下層にあって、弥生時代後期の竪穴住居跡や方形周溝墓が知られる<sup>(152)</sup>が、弥生時代前・中期の実態が不明である。近年では、平城京遺跡群のひとつとして考える傾向にある。むしろ、平城京遺跡群のうち四条大宮遺跡<sup>(153)</sup>や杏遺跡<sup>(154)</sup>に、弥生時代中期の遺構・遺物は集中している。特に、四条大宮遺跡には、方形周溝墓27基を検出した柏木遺跡が南接しており、拠点集落となる可能性がある。

竹内遺跡は古くから著名な遺跡ではあるが、弥生時代集落の実態が今一つ明らかでない。遺跡範囲の北半は、弥生時代前期の土器は出土するが、弥生時代中・後期の遺構・遺物は皆無である。おそらく、旧當麻町がおこなった第22次調査<sup>(155)</sup>でまとまった弥生時代中期前葉の土器と石器集積が知られることから、弥生集落としての中心は遺跡範囲の南半にあるものと考えられる。しかし、わずか一件の調査成果のみで、具体的な遺跡像を描くことは不可能である。

一町遺跡についても、古くから著名な遺跡ではあるが、その実態については不明な点が多い。奈良県立橿原考古学研究所がおこなった第10次調査<sup>(156)</sup>では、扇状地形にあって弥生時代前期から弥生時代中期にかけて谷が埋没し、弥生時代後期に居住遺構が顕著になることが確認された。また、近年では畝傍山周辺で、弥生時代前期の環濠集落として四条シナノ遺跡（d）<sup>(157)</sup>、川西根成柿遺跡（e）<sup>(158)</sup>が検出されている。どちらも、弥生時代前期中葉の短期的なものである。

この他、山間部の拠点集落として吉野川流域に宮滝遺跡（f）<sup>(159)</sup>がある。弥生時代中期の竪穴住居跡と方形周溝墓が検出されている。本遺跡は、弥生時代前期の土器棺墓も検出されており、弥生時代前期から弥生時代中期後葉まで継続する集落であったと考えられている。弥生時代後期の遺構・遺物は顕著でない。

奈良盆地東南部に密集する拠点集落は、その成立時期に違いはあるものの、弥生時代中期には居住域の周囲に大溝をめぐる「環濠集落」という形態をとり、古墳時代前期までその集住が継続するという共通性をもつ。これらは、各々が孤立していたのではなく、周囲の中小規模集落も含めて相互に関連し合い、面的な小地域を形成していたものと考えられる。

我々が現在において把握する遺跡範囲は最大時のものであり、恒常的にこれを維持していたとは考えられないが、ほぼ弥生時代の全期間を通して継続し、古墳時代へとこれら拠点集落が残存することが「大和の地域性」といえよう。

## 註

- (1) 外山秀一『遺跡の環境復元』古今書院、2006年。
- (2) 高橋 学『平野の環境考古学』古今書院、2003年。
- (3) 奈良県立橿原考古学研究所「田原本町 保津・宮古遺跡 第9 - b次・第10次・第11次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1994年度』（第一分冊）、1995年。
- (4) 光石鳴巳「多遺跡出土の有茎尖頭器」『田原本町文化財調査年報』14、2006年。
- (5) a.中井一夫「田原本町矢部地区試掘調査概報—国道24号線バイパス建設予定地—」『奈良県遺跡調査概報 1977年度』1978年。  
 b.奈良県立橿原考古学研究所「奈良県磯城郡田原本町 矢部遺跡2次調査 発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1984年度』（第一分冊）、1985年。  
 c.田原本町教育委員会『矢部南遺跡発掘調査報告—第1・2次調査—』『田原本町文化財調査報告書』第2集、2000年。
- (6) 田原本町教育委員会「保津・宮古遺跡 第20次調査」『田原本町文化財調査年報』7、1998年。
- (7) 奈良県立橿原考古学研究所「田原本町 秦之庄遺跡 発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1991年度』（第一分冊）、1992年。
- (8) 田原本町教育委員会「清水風遺跡 第4次調査」『田原本町文化財調査年報』9、2000年。
- (9) 豆谷和之「唐古・鍵遺跡とその周辺」『みずほ』第27号、1998年。
- (10) 田原本町教育委員会「宮古北遺跡 第9次調査」『田原本町文化財調査年報』9、2000年。
- (11) 清水琢哉「阪手東遺跡 第2次調査検出の方形周溝墓」『みずほ』第38号、2003年。
- (12) 註(5) cに同じ。
- (13) a.田原本町教育委員会「(8) 保津・宮古遺跡 第31次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』13、2004年。  
 b.田原本町教育委員会「(8) 保津・宮古遺跡 第23次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』8、1998年。  
 c.奈良県立橿原考古学研究所「田原本町 保津・宮古遺跡 —国道24号線橿原バイパス建設に伴う平成5年度試掘調査報告—」『奈良県遺跡調査概報 1993年度』（第一分冊）、1994年。  
 d.註(3)に同じ。
- (14) 奈良県立橿原考古学研究所「田原本町 多遺跡第10次発掘調査概報—奈良県立心身障害者総合療育リハビリテーションセンター建設に伴う発掘調査の概要—」『奈良県遺跡調査概報 1986年度』（第二分冊）、1989年。
- (15) 奈良県立橿原考古学研究所「磯城郡田原本町 多遺跡 第19次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報1999年度』（第二分冊）、2000年。
- (16) 註(15)に同じ。
- (17) 註(5) cに同じ。
- (18) 奈良県立橿原考古学研究所「天理市庵治町 清水風遺跡 発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1986年度』（第一分冊）、1989年。
- (19) 奈良県立橿原考古学研究所「磯城郡田原本町 羽子田遺跡第20次 発掘調査概報—八尾池改修工事に伴う—」『奈良県遺跡調査概報 2000年度』（第二分冊）、2001年。
- (20) 奈良県立橿原考古学研究所「田原本町 法貴寺遺跡—県立第11高校建設予定地事前発掘調査概報—」『奈良県遺跡調査概報 1982年度』（第二分冊）、1983年。
- (21) 田原本町教育委員会「(4) 阪手東遺跡 第2次調査」『田原本町文化財調査年報』11、2002年。



- (22) 奈良県立橿原考古学研究所「法貴寺齋宮前遺跡第7次調査・小阪榎木遺跡第3次調査」『奈良県遺跡調査概報 2007年』（第一分冊）、2008年。
- (23) 奈良県立橿原考古学研究所「磯城郡田原本町 東井上遺跡第1次調査」『奈良県遺跡調査概報 2005年』（第一分冊）、2006年。
- (24) 島田 暁「磯城郡田原本町東井上弥生式遺跡」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第9集、1956年。
- (25) 奈良県立橿原考古学研究所「磯城郡田原本町 阪手遺跡 発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報 1982年度』（第一分冊）、1983年。
- (26) 田原本町教育委員会「(11) 羽子田遺跡第3次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』1、1990年。
- (27) 田原本町教育委員会「(12) 羽子田遺跡 第10次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』7、1998年。
- (28) 小林行雄・藤岡謙二郎・末永雅雄『大和唐古弥生式遺跡の研究』1943年。
- (29) 天理市教育委員会『西殿塚古墳 東殿塚古墳』『天理市埋蔵文化財調査報告』第7集、2000年。
- (30) 田原本町教育委員会「(6) 唐古・鍵遺跡 第78次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』9、1999年。
- (31) 田原本町教育委員会「小阪安田前遺跡 試掘調査」『田原本町文化財調査年報』16、2008年。
- (32) 島本 一「奈良県多村の円筒埴輪」『考古学』第2巻第4号、1931年。
- (33) 田原本町教育委員会「(13) 保津・宮古遺跡第14次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』5、1996年。
- (34) 田原本町教育委員会「2. 羽子田遺跡 第31次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』16、2008年。
- (35) 田原本町教育委員会「(10) 保津・宮古遺跡 第26次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』9、2000年。
- (36) a. 田原本町教育委員会『昭和58年度 唐古・鍵遺跡第16・18・19次発掘調査概報 黒田大塚古墳 第1次発掘調査概報』『田原本町埋蔵文化財調査概要』2、1984年。  
b. 田原本町教育委員会『昭和59年度 唐古・鍵遺跡第20次発掘調査概報 黒田大塚古墳 第2次発掘調査概報』『田原本町埋蔵文化財調査概要』3、1986年。  
c. 田原本町教育委員会『昭和61年度 唐古・鍵遺跡第27・28次発掘調査概報 黒田大塚古墳 第3次発掘調査概報』『田原本町埋蔵文化財調査概要』8、1987年。  
d. 田原本町教育委員会「(11) 黒田大塚古墳 第4次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』6、1999年。  
e. 田原本町教育委員会「(9) 黒田大塚古墳 第5次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』13、2004年。  
f. 田原本町教育委員会「(10) 黒田大塚古墳 第6次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』13、2004年。
- (37) a. 田原本町教育委員会『笹鉾山古墳群一第1～5次発掘調査概報一』『田原本町埋蔵文化財調査概要』19、2005年。  
b. 田原本町教育委員会「笹鉾山1号墳 第6次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』15、2006年。  
c. 奈良県立橿原考古学研究所「笹鉾山古墳群第7次調査」『奈良県遺跡調査概報 2006年』（第一分冊）、2007年。
- (38) a. 島本 一「大和磯城郡多村矢部の一古墳」『大和志』第三編第八号 1936年。  
b. 末永雅雄「磯城郡多村大字矢部団栗山古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物調査抄報』第2集、1941年。
- (39) a. 田原本町教育委員会「(5) 唐古・鍵遺跡 第72次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』8、1999年。  
b. 田原本町教育委員会「(4) 唐古・鍵遺跡 第76次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』9、2000年。
- (40) 高橋健自「異形なる埴輪」『考古学会雑誌』第12号、1897年。
- (41) 田原本町教育委員会「(13) 羽子田遺跡 第11次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』5、1996年。
- (42) 田原本町教育委員会「(15) 羽子田遺跡 第5次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』4、1994年。
- (43) 田原本町教育委員会「(3) 羽子田遺跡 第6次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』5、1996年。
- (44) 註(34)に同じ。
- (45) 田原本町教育委員会「羽子田遺跡 第32次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』17、2009年。

- (46) 田原本町教育委員会「羽子田遺跡 第33次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』17、2009年。
- (47) 田原本町教育委員会「1.羽子田遺跡 第30次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』16、2008年。
- (48) 奈良県立橿原考古学研究所「田原本町 十六面・薬王寺遺跡 発掘調査概報—国道24号線橿原バイパスに伴う本調査—」『奈良県遺跡調査概報 1981年度』（第二分冊）、1983年。
- (49) 註（7）に同じ。
- (50) a.田原本町教育委員会「9.秦庄遺跡 第6次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』16、2008年。  
b.田原本町教育委員会「10.秦庄遺跡 第7次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』16、2008年。
- (51) 田原本町教育委員会「秦楽寺遺跡 第3次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』17、2009年。
- (52) 藤田三郎「第三章 考古学からみた歴史時代」『田原本町史 本文編』1986年。
- (53) 奈良県立橿原考古学研究所「田原本町 多遺跡 第9次発掘調査報告」『奈良県遺跡調査概報 1984年度』（第二分冊）、1985年。
- (54) 註（33）に同じ。
- (55) 田原本町教育委員会「（8）保津・宮古遺跡第19次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』7、1998年。
- (56) 田原本町教育委員会「（6）保津・宮古遺跡の立会」『田原本町埋蔵文化財調査年報』10、2001年。
- (57) 田原本町教育委員会「（17）薬王寺東遺跡 第2次調査」『田原本町文化財調査年報』9、1999年。
- (58) 田原本町教育委員会「保津・宮古遺跡 第18次調査」『田原本町文化財調査年報』6、1997年。
- (59) 田原本町教育委員会「羽子田遺跡 第16次調査」『田原本町文化財調査年報』9、2000年。
- (60) 奈良県立橿原考古学研究所『保津・宮古遺跡 第3次発掘調査報告』『奈良県文化財調査報告書』第100集、2003年。
- (61) 関川尚功「保津・宮古遺跡」『大和を掘る』10 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、1990年。
- (62) 註（3）に同じ。
- (63) 田原本町教育委員会「保津・宮古遺跡 第22次調査」『田原本町文化財調査年報』8、1999年。
- (64) 註（48）に同じ。
- (65) 田原本町教育委員会「阪手北遺跡 第3次調査」『田原本町文化財調査年報』11、2002年。
- (66) 註（23）に同じ。
- (67) 田原本町教育委員会「3.清水風遺跡 第5次調査」『田原本町文化財調査年報』16、2008年。
- (68) 田原本町教育委員会「6.法貴寺齋宮前遺跡 第6次調査」『田原本町文化財調査年報』16、2008年。
- (69) 奈良県立橿原考古学研究所『十六面・薬王寺遺跡』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第五十四冊、1988年。
- (70) 田原本町教育委員会「（13）十六面・薬王寺遺跡 第15次調査」『田原本町文化財調査年報』8、1999年。
- (71) 奈良県立橿原考古学研究所「田原本町 法貴寺遺跡 発掘調査概報—大和川災害復旧事業予定地内の事前緊急調査—」『奈良県遺跡調査概報 1986年度』（第二分冊）、1989年。
- (72) 田原本町教育委員会「法貴寺遺跡 第3次調査」『田原本町文化財調査年報』11、2002年。
- (73) 田原本町教育委員会『金剛寺遺跡 発掘調査概報』『田原本町埋蔵文化財調査概報』10、1988年。
- (74) a.田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所『昭和54年度 唐古・鍵遺跡第6・7・8・9次発掘調査概報』1980年。  
b.註（36）aに同じ。  
c.註（36）bに同じ。  
d.田原本町教育委員会『昭和61年度 唐古・鍵遺跡第22・24・25次発掘調査概報』『田原本町埋蔵文化財調査概要』4、1986年。
- (75) 田原本町教育委員会『昭和61年度 唐古・鍵遺跡第26次発掘調査概報』『田原本町埋蔵文化財調査概要』

- 7、1987年。
- (76) 田原本町教育委員会「阪手カハウト遺跡」『田原本町文化財調査年報』2、1991年。
- (77) 田原本町教育委員会「東井上大日塚遺跡」『田原本町文化財調査年報』1、1990年。
- (78) 註(65)に同じ。
- (79) 田原本町教育委員会「(14) 平野氏陣屋跡 第9次調査」『田原本町文化財調査年報』6、1990年。
- (80) 註(18)に同じ。
- (81) 田原本町教育委員会「(5) 清水風遺跡 第2次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』6、1997年。
- (82) 註(20)に同じ。
- (83) 註(21)に同じ。
- (84) 註(22)に同じ。
- (85) 註(42)に同じ。
- (86) 註(19)に同じ。
- (87) 田原本町教育委員会「(6) 八尾九原遺跡 第1次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』6、1997年。
- (88) 奈良県立橿原考古学研究所「八尾九原遺跡第4次調査」『奈良県遺跡調査概報 2005年』(第一分冊)、2006年。
- (89) 奈良県立橿原考古学研究所『伴堂東遺跡』『奈良県立橿原考古学研究所調査報告』第八十冊、2002年。
- (90) 註(24)に同じ。
- (91) 註(23)に同じ。
- (92) 註(13) aに同じ。
- (93) 註(13) bに同じ。
- (94) 田原本町教育委員会「11. 常楽寺推定地 第5次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』15、2006年。
- (95) 註(13) cに同じ。
- (96) 田原本町教育委員会「(7) 羽子田遺跡 第23次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』11、2002年。
- (97) 註(69)に同じ。
- (98) 註(15)に同じ。
- (99) 奈良県立橿原考古学研究所「田原本町 多遺跡 発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1981年度』(第一分冊)、1983年。
- (100) 註(14)に同じ。
- (101) 奈良県立橿原考古学研究所『磯城郡田原本町 多遺跡 第16・17次発掘調査報告書』『奈良県文化財調査報告書』第一〇七集、2004年。
- (102) 註(15)に同じ。
- (103) 註(5) cに同じ。
- (104) 奈良県立橿原考古学研究所『秦庄遺跡第5次調査』『奈良県遺跡調査概報 2004年』(第一分冊)、2005年。
- (105) 高橋健自「大和国石器時代の遺跡」『考古学雑誌』第一卷第八号 考古学会、1897年。
- (106) 河上邦彦・石野博信「橿原市中曾司遺跡予察調査の概要」『青陵』第17号 奈良県立橿原考古学研究所、1971年。
- (107) 青木勘時「中曾司遺跡の検討」『みずほ』第11号、1994年。
- (108) 斉藤明彦「中曾司遺跡(橿原市中曾司町)」『大和を掘る—1986年度発掘調査速報展—』7 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、1987年。
- (109) 竹田正則「土橋遺跡之調査 藤原京右京六・七条四坊の調査」『平成8年度 奈良県内市町村 埋蔵文化財

- 発掘調査報告会資料』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会、1997年。
- (110) 奈良県立橿原考古学研究所『小槻遺跡』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第五十冊、1986年。
- (111) 露口真広「西曽我遺跡の調査」『かしはらの歴史をさぐる』6 平成9年度埋蔵文化財発掘調査速報展 橿原市千塚資料館、1998年。
- (112) (財)元興寺文化財研究所『曲川遺跡発掘調査報告書 2004年度調査』2006年。
- (113) 奈良県立橿原考古学研究所『曲川遺跡』『奈良県立橿原考古学研究所調査報告』第九十冊、2004年。
- (114) 奈良県立橿原考古学研究所『大福遺跡—桜井市大福所在遺跡の調査報告—』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第三十六冊、1978年。
- (115) 奈良県立橿原考古学研究所『坪井・大福遺跡』『奈良県立橿原考古学研究所調査報告』第七十五冊、2000年。
- (116) 註(115)に同じ。
- (117) 註(114)に同じ。
- (118) 奈良県橿原市教育委員会「大藤原京左京北四条三・四坊、坪井・大福遺跡の調査」『平成15年度 橿原市文化財調査年報』2005年。
- (119) 齊藤明彦・松本洋明「坪井遺跡から出土した弥生前期の土器棺」『みずほ』第15号、1995年。
- (120) 橿原市教育委員会「坪井遺跡(東リュウ地区)の調査」『橿原市埋蔵文化財調査』6、1989年。
- (121) 橿原市教育委員会「坪井遺跡藤原田地区の調査」『橿原市埋蔵文化財調査』8、1991年。
- (122) 橿原市千塚資料館「大藤原京跡、坪井遺跡の調査」『かしはらの歴史をさぐる』6、1999年。
- (123) 大和弥生文化の会「23.大隅遺跡」『奈良県の弥生土器集成』(本文編)、2003年。
- (124) 桜井市教育委員会『桜井市 大福遺跡 大福小学校地区 発掘調査概報』1987年。
- (125) 奈良国立文化財研究所『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ 藤原宮西方官衙地域の調査』『奈良国立文化財研究所学報』第31冊、1978年。
- (126) 奈良国立文化財研究所「西方官衙南地区の調査—第85次」『奈良国立文化財研究所年報 1998—Ⅱ』1998年。
- (127) 奈良国立文化財研究所飛鳥藤原宮跡発掘調査部「13. 第72次調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』24、1994年。
- (128) 註(126)に同じ。
- (129) 佐藤小吉「山辺郡二階堂村大字平等坊石器遺跡」『奈良県史跡勝地調査報告書』第6回 (財)大和文化財保存会、1919年。
- (130) 天理市教育委員会「2.平等坊・岩室遺跡(第8・11・12次)」『天理市埋蔵文化財調査概報 平成4・5年度(1992・1993年)』1996年。
- (131) 天理市教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所編『岩室池古墳 平等坊・岩室遺跡』『天理市埋蔵文化財調査報告』第2集、1985年。
- (132) 青木勘時「平等坊・岩室遺跡第8次調査の概略」『みずほ』第6号、1992年。
- (133) 北口聡人「第27次調査」『奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会—平成18年度—』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会、2007年。
- (134) 青木勘時「弥生集落から古墳集落へ—奈良盆地における集落の変容とその画期—」『みずほ』第16号、1995年。
- (135) 青木勘時「平等坊・岩室遺跡(第29次)発掘調査現地説明会資料」『奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会—平成18年度—』奈良県内市町村埋蔵文化財技術担当者連絡協議会、2007年。
- (136) 奈良県立橿原考古学研究所「天理市 平等坊・岩室遺跡 第5次調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1980年度』(第一分冊)、1982年。

- (137) 松本洋明・川村慎也「平等坊・岩室遺跡出土の銅釦」『みずほ』第19号、1996年。
- (138) 天理市教育委員会「4.前栽遺跡—前栽町」『天理市埋蔵文化財調査概報 平成6・7年度』1998年。
- (139) 註(135)に同じ。
- (140) 天理市教育委員会「2.平等坊・岩室遺跡(第18次調査)」『天理市埋蔵文化財調査概報 平成8・9年度』2003年。
- (141) 松本洋明「桜井市芝遺跡(寺ノ前地区)の検討会」『みずほ』第1号、1991年。
- (142) 奈良県立橿原考古学研究所「桜井市芝遺跡第15次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1994年度』(第二分冊)、1995年。
- (143) 奈良県立橿原考古学研究所「桜井市芝遺跡第17・18次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1995年度』(第二分冊)、1996年。
- (144) 奈良県立橿原考古学研究所「桜井市芝遺跡第21・22次発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1997年度』(第三分冊)、1998年。
- (145) 桜井市教育委員会『桜井市芝遺跡寺ノ前地区発掘調査概報(高田商店工事予定地)』1986年。
- (146) 桜井市教育委員会「芝遺跡第20次発掘調査報告」『桜井市平成7年度国庫補助による発掘調査報告書』桜井市立埋蔵文化財センター発掘調査報告書17集、1996年。
- (147) (財)桜井市文化財協会「第1節 芝遺跡第27次発掘調査報告」『桜井市内埋蔵文化財 1997年度発掘調査報告書1』1998年。
- (148) 御所市教育委員会『奈良県御所市鴨都波11次発掘調査報告』『御所市文化財調査報告書』第11集、1992年。
- (149) 註(144)に同じ。
- (150) 御所市教育委員会『鴨都波1号墳調査概報』学生社、2001年。
- (151) 御所市教育委員会『奈良県御所市鴨都波12次発掘概要』『御所市文化財調査報告書』第12集、1992年。
- (152) 奈良国立文化財研究所「佐紀遺跡」『昭和39年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概要』1965年。
- (153) 奈良県立橿原考古学研究所「奈良市平城京左京四条一坊十四坪発掘調査概報」『奈良県遺跡調査概報 1990年度』(第一分冊)、1991年。
- (154) 奈良市教育委員会「1.平城京左京八条二坊一坪の調査 第134次」『奈良市埋蔵文化財調査概要報告書 昭和62年度』1988年。
- (155) 葛城市歴史博物館『葛城市歴史博物館資料目録 第1集—竹内遺跡の弥生時代資料—』2007年。
- (156) 奈良県立橿原考古学研究所「一町遺跡(新沢一遺跡)第10次調査」『奈良県遺跡調査概報 2007年』(第二分冊)、2008年。
- (157) 奈良県立橿原考古学研究所『四条シナノ遺跡』『奈良県立橿原考古学研究所調査報告』第一〇〇冊、2007年。
- (158) 川部浩司「3.川西根成柿遺跡」『大和を掘る』26 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、2008年。
- (159) 奈良県立橿原考古学研究所『宮滝遺跡(遺構編)』『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第七十一冊1996年。

## 第2節 調査研究のあゆみ

### 1. 遺跡の発見

#### (1) 遺跡としての認識

唐古・鍵遺跡が学術誌に報告されるのは、明治34（1901）年に高橋健自氏が『考古界』に寄せた「大和考古雑録」<sup>(1)</sup>を初出とする。ただし、地元の飯田松治郎・恒夫親子は、明治の初年に遺跡地に住む今中某という医者が、石鏃に興味を示し一個一銭内外にて買っていたことを記録している<sup>(2)</sup>。また、上田三平氏は、明治20年頃に中島で南の旧池と北の新池に隔てられていた唐古池を一連にした際、完形土器などの遺物が出土したことを村民から聞き取りしている<sup>(3)</sup>。このように地元では、唐古池周辺は古くから知られた遺物散布地だった。

高橋氏は「大和考古雑録」において、石器時代遺跡の一つとして「磯城郡川東村大字鍵の遺跡」を報告した。遺跡に関しては、「この地には古への韓人の池なりと称せる、唐古池というものあり。遺跡はこの池およびその南にわたれり」と記している。興味深いのは大字唐古に所在する唐古池の説明をおこないながら、その表題を「大字鍵の遺跡」としたところにある。この点に関して、森浩一氏は高橋氏が八木から徒歩で、大字鍵を通過して唐古池に入ったためと推測する<sup>(4)</sup>。後に、唐古池の発掘で定着した「唐古遺跡」の名を、その範囲の拡がりから「唐古・鍵遺跡」と行政的に名を改めたが、報文第一号が「大字鍵の遺跡」というのは暗示的である。高橋氏は、6点の遺物を報告している。それらは、現在の知見からすれば石小刀、有溝石錘、石庖丁、舌状石製品、高坏脚部、台付鉢脚部である。このうち、高橋氏は土器について、石器時代遺跡の出土であるがその時代のものか古墳時代のものか、と疑問を呈している。その当時において、弥生式土器の名称は一般的でなく、有史以前を石器時代と古墳時代に大きく二括りしていた学問水準の反映といえよう。しかし、近畿地方には石器時代遺跡がないとも考えられていた当時であって、高橋氏による大和の石器時代遺跡に関する報告は重要であり、やがておこなわれた鳥居龍蔵氏による踏査がその唐古池を選んだことは偶然ではないだろう。

#### (2) 閑却されたる大和国

大正6（1917）年、大阪毎日新聞社主本山彦一氏は、近畿の石器時代遺跡を調査するため、東アジアにおける人類・民族・考古学調査で実績のあった東京帝国大学講師鳥居龍蔵氏を招聘する。本山氏は、この年の6月から始まった京都帝国大学による大阪府国府遺跡の発掘調査<sup>(5)</sup>の支援者でもあり、近畿の石器時代遺跡の解明について情熱を注いでいた。鳥居氏は、大和の踏査で唐古池の部分的な試掘をおこない、それはただちに同行した岩井武俊氏の手によって大阪毎日新聞紙上で速報され、世の注目を集めたようである。なお、報文中<sup>(6)</sup>には「唐古遺跡」の名称が用いられている。藤森栄一氏は、森本六爾伝『二粒の粉』<sup>(7)</sup>において、森本氏が考古学的な刺激を受けたきっかけは、この鳥居氏による近畿の石器時代遺跡の踏査「記事」にあっ

たのではないかと推測している。事実、この踏査は奈良県の石器時代研究を活発化させ、奈良県史跡勝地調査会は高橋氏による新沢一町遺跡、佐藤小吉氏による平等坊・岩室遺跡の調査を相次いでおこない、郷土史家達は同人の会を組織していった。

鳥居氏の踏査に触発されたものとしては、梅原末治氏の報文もその一つであろう。梅原氏は鳥居氏踏査の同年12月に唐古池を訪れ、翌年の『人類学雑誌』に「大和磯城郡唐古の石器時代遺跡に就いて」<sup>(8)</sup>を発表する。梅原氏は、遺跡の範囲を「自分の見た所では其の廣さ四五丁歩にも上るべく、池の南及び西方に接する畑地が遺物最も多いらしい。」とする。遺物については、石器、土器、其他の遺物（玉類、土製品）の順で報告している。石器は、打製と磨製に分類する。打製石器については、石材が二上山産であることを記述し、石鏃が多く石槍がこれに次ぐとする。磨製石器については、石斧と石庖丁を報告し、石斧には鑿形のものは見あたらないとする。土器は、弥生式の系統に属するもので齋瓮を混じらないとする。土器に関する記述は、器壁、色調、焼成、器形の順であるが、破片が多いため、さらに口縁部、胴部、底部、文様の諸属性に分類している。其他の遺物として、玉類の勾玉と管玉を、土製品は土玉を報告する。

梅原氏は唐古・鍵遺跡から出土する土器を弥生式と断じており、高橋報告から15年余、隔世の感がある。また、それだけに止まらず梅原氏は、唐古池の弥生土器に文様が多く、齋瓮や縄文式を交えないこと、また金属器を伴わないという点をもって、国府遺跡の弥生土器との間に「相異」があることを示唆している。前年に京都帝国大学によっておこなわれた国府遺跡の層位発掘は、土器の型式差が人種ではなく時間差であることを明らかにしており、梅原氏の弥生土器を伴出遺物から細分しようとする試みは、さらに一步踏み込んだものといえよう。

この5年後、梅原氏は、同人の大和史学会が大正12（1923）年3月10・11日に奈良県高田高等女学校で主催した大和上代文化遺物展覧会を訪れ、これに刺激を受け『人類学雑誌』に「再び大和唐古の遺跡に就いて」<sup>(9)</sup>を報告する。前回の論文から漏れ落ちた磨製石斧（大型蛤刃石斧、扁平片刃石斧、柱状片刃石斧、環状石斧）と金属器（銅鏃）を補足した。そして、銅鏃の出土から、唐古遺跡を石器時代に限定したことを訂正し、下限を金石併用期まで下げた。

### （3）そして森本六爾

梅原氏を大和上代文化遺物展覧会に招き、その考古遺物の陳列において中心的役割を担ったのは、都跡尋常小学校代用教員をしていた森本六爾氏である。森本氏は、現在の桜井市大泉出身で、唐古池に度々訪れては地元収集家の飯田親子と交流していた。展覧会における唐古資料の大半は、森本氏が飯田親子から借用したものであった。森本氏は、自らも唐古池で遺物を採集し、大正11年と12年の夏には池の周囲で小試掘もおこなっている。大正13（1924）年、上京した森本氏は、唐古池での成果を「大和に於ける史前の遺跡」<sup>(10)</sup>として『考古学雑誌』に発表する。その構成は三部からなる大作で、大半が「唐古の遺跡」の報告に費やされている。

森本氏による「唐古の遺跡」の報告は、森本個人による小試掘の成果と採集遺物の観察からなる。まず、「唐古の遺跡」の範囲について、森本氏は「韓人池をほぼ中心にして南北四五町、東西三四町」とした。前述のように森本氏は唐古池の小試掘をしており、堤南側の小溝部分2

ヶ所と堤西側の小溝部分1ヶ所、堤内側部分3ヶ所の計6ヶ所のデーターを記述する。このうち、堤南側の小溝部分2ヶ所は、大正6（1917）年に鳥居氏が試掘をおこなった隣接地での、挑戦的な試みである。その結果、小溝部分の試掘は浚渫が繰り返されることから、純粋な堆積層を確認する方法ではないと結論づけている。一方、森本氏自身も認めるように、堤内側部分3ヶ所での断面確認も不十分なものであり、個人の試掘には限界があった。おのずから、当時における遺跡の評価は、採集された遺物の量や珍品に重きを置かざるを得なかった。その意味では、初期の唐古・鍵遺跡研究で飯田親子が果たした役割は極めて大きいといえる。

遺物については、まず石器の説明に始まる。打製石器と磨製石器に2大別し、打製石器は石鏃・石錐・スクレイパー（小刀形・有把手形）・石槍に、磨製石器は石庖丁・太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・扁平片刃石斧・環状石斧・石棒・石錘・石剣・石鏃に分類する。そして、銅鏃、玉類の順で説明をおこなう。土器の説明は号を改め、色調、器壁、胎土、形式、高坏脚部、口縁部、底部、文様の順に記述する。長く詳細な遺物説明の後に森本氏は、「唐古の遺跡」を「石器時代末期に属せしむべき、金石併用時代」として位置づけた。森本氏の論文は、詳細を究めているが、報告スタイルは先の梅原報文の構成を踏襲したものである。

なお、森本氏はこの論文のわずか前に、「原始的絵画を有する弥生式土器について」<sup>(11)</sup>を『考古学雑誌』に発表している。これは、梅原氏が『考古学雑誌』に発表した「弥生式土器に鹿の図」<sup>(12)</sup>を承けたもので、同一絵画土器に対する批判的観察に基づく内容となっている。その絵画土器は、飯田松治郎氏から森本氏が譲り承けた「左向きの三匹の鹿が描かれた」もので、唐古・鍵遺跡で発見された第1号絵画土器であるとともに当時の日本には類例のないものであった。この森本氏の論文は、橋本裕行氏が指摘<sup>(13)</sup>するように、児童画の分析手法の視点や世界の原始絵画との比較検討に及んでおり、後に佐原真氏がおこなった絵画土器研究方法の先駆的要素をもつものであった。なお、「一部分はもはや農耕の生活に這入っていた」との一文を見るが、未だ経済の発展段階によって時代を区分する発想は森本氏には生まれていない。

#### （4）上田三平の試掘

おそらく、森本氏の論考に触発されたのであろう、奈良県史跡名勝天然記念物調査会上の上田三平氏は大正13（1924）年10月27日から30日にかけて、唐古池の西堤に接した南北用水路で、少数の人足による発掘調査を試みる。その成果は、4年後の昭和3（1928）年に「唐古遺跡の研究」<sup>(14)</sup>と題して『歴史と地理』で報告される。その報文にも記されるように上田氏の意図は、これまでの唐古報告が飯田資料を始めとする表採資料に基づいたものであったのに対し、まず発掘調査によって純粋な遺物包含層を確認することにあった。

上田氏は、唐古池の西側に沿った水路において、その北西隅から百八十尺（約55m）の南方にある水門の土管を起点として、南へ二十八尺（約8.5m）と六十尺（約18m）の2ヶ所で坪掘りを、南へ百尺（約30m）では長さ五十尺（約15m）に亘って掘り下げている。報文には、長さ約15m分の断面図が掲載されている。これによれば、溝底面から約二尺（60cm）は軟かき砂の多い土質、その下に固まった黒土層が厚さ約一尺二寸（36cm）位あって、その下



に青砂を示している。また、土管より百二十二尺～百三十四尺の地点で、長頸壺など弥生時代後期の土器6個体が集中していたことを記録している。

上田氏が起点とした西側水路の水門は現在も残っており、その調査地点を復原することは可能である。長さ15mに及ぶ試掘地点は、第79次調査区の東側に隣接した水路部分であろう。そして、報文に図示される青砂が、今日我々が認識する青灰色シルトであることは間違いない。また、興味深いのは、写真掲載の土器がいずれも弥生時代後期のものである。土管より百二十二尺～百三十四尺の地点における散漫な完形後期弥生土器の出土状況は、それが土坑ではなく、溝に伴ったことを予想させる（さらに、言及するならば第80次調査区画溝の延長とも考えられる）。上田氏の地点を記録した詳細な報文は、今日の唐古・鍵遺跡の検討にも有効である。上田氏の調査は、唐古池の大規模調査に第1次の座を譲っているが、奈良県史跡名勝天然記念物調査会の組織として人足を雇いおこなった科学的なものであり、再評価すべきである。

#### （5）大和唐古石器時代遺物図集

昭和4（1929）年、飯田親子は『大和唐古石器時代遺物図集』<sup>(15)</sup>を刊行する。その序言には、森本・吉田宇太郎・島本一氏らの勧めをうけ、森本氏校閲のもと刊行されたことが記されている（森本・吉田・島本氏は、大和国史会の同人である）。図集は、周辺図1点、風景写真2点、遺物出土状況1点、石器類7点、玉類1点、土器8点の計20点の図版とそれに対する解説からなる。このうち、注目すべきは、遺跡の範囲を「所謂唐古池を中心として東西440m、南北650mにも達する。」とする点であろう。地図上に範囲が示されたわけではなく位置関係は不明であるが、表面採集に基づく記述である以上、これが大字鍵の範囲を含み現在の遺跡地図に示された遺跡範囲とほぼ同じのものであろうことは想像に難くない。唐古・鍵遺跡として県遺跡地図に表記されるのは、昭和46（1971）年からである。これを遡ること40数年前に遺跡の範囲がほぼ把握されていたことは、表面採集が重要な調査方法であることを再認識させる。

#### （6）日本原始農業

同年、森本氏は「弥生式土器面絵画の新資料」<sup>(16)</sup>として、唐古池周辺において新たに飯田松次郎氏が採集した絵画土器を報告する。絵画土器の報告だけに止まらず、同年に『日本青銅器時代地名表』<sup>(17)</sup>を刊行していた森本氏は、絵画土器及び土器文様と銅鐸文様の類似性に着目し、弥生土器と青銅器が同一文化に属するものであることを論じた。森本氏は、縄文時代と古墳時代との間に「青銅器時代」として弥生文化を位置づけようとしていたのである。やがて、フランス留学から帰国した森本氏は、弥生文化を青銅器時代から水稻農耕の時代へと位置づけを方向修正することになる。昭和8（1933）年、森本氏が主催する東京考古学会は、『日本原始農業』<sup>(18)</sup>を刊行する。森本氏の指針に基づき、物証として集められた各地の遺物には、唐古の粉痕をもつ土器底部も示されている。森本氏は『日本原始農業』の編集を終え、「ああ、唐古池の水底の農村、たったこの二字がわかるために、遠くまで歩いてきた。」と藤森氏に語ったといわれる。しかし、『日本原始農業』が実証され世に広く知れ渡るためには、森本氏の死から約1年後の昭和11（1936）年に開始される唐古池の土取りを待たねばならなかった。

## 2. 唐古池の調査

### (1) 調査に至る経緯

昭和11（1936）年12月7日、磯城郡川東村唐古池での土取りが開始される。これは、皇紀2,600年事業の一環として、奈良市より畝傍町を経て宇智郡五條町へと至る国道15号線（現国道24号線）を敷設するため、道路予定地の周辺溜め池にその盛土を求めたことによる。この唐古池の採土工事に伴う発掘調査が、唐古・鍵遺跡の第1次として位置づけられる。今よりわずか70年前の出来事であるが、その調査開始の経緯については二つの説がある。

一つは、調査担当者である末永雅雄氏が『考古学の窓』<sup>(19)</sup>において「それでこの池の底の搬出作業にはいれば、資料は必ず出てくるに違いないとわれわれが期待していた。しかし、残念ながら事前調査をする費用は奈良県庁にも京都大学にもなかった。ようやく岸技師と相談して、奈良県から五百円あまり京都大学から百円を集めて、土木工事に平行して調査にかかった。ところが結果は意外に大きく到底それだけではどうにもならなかったが、工事の最高事務を統括される内務省大阪出張所長高西敬義氏と、現場の係員の好意で順調に進めることができた。（中略）私だけ十二月末から正月初めにかけて、土地の黒松旅館に泊まって毎日現場の調査を小規模に着手してみた」と回顧している。

一方、調査補助員とでもいふべき立場にあった藤森栄一氏は『二粒の粉』<sup>(20)</sup>において「現場監督の松本光治さん、日坂藤次さんは、あまりのことにおどろいて、県庁へ急報した。奈良県

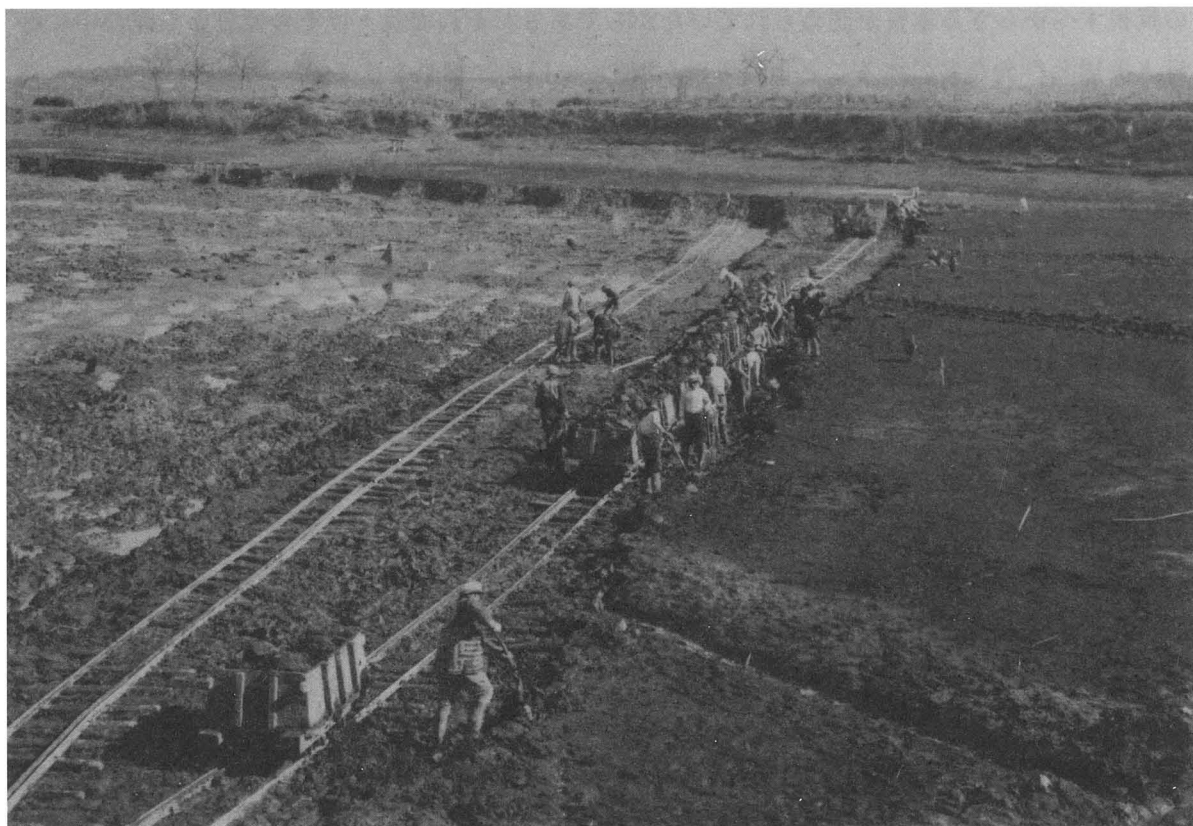


写真1 唐古池の採土工事

史跡調査会は、それっというわけで、調査委員の末永雅雄さんをさし向けた。(中略)末永さんに連絡のあったのが1月8日、調査に着手したのが1月10日。」と記述する。この藤森氏の文章については、後に末永氏が「土器が続々出だしたんで、「そら行け」ということで我々が行ったと誰かがどこかに書いてあったけど。そうではなしに。高西さんと相談したのは、半年もまえやったな。そやから、「ものが出てくるからそら行け」というようなことではないんや。」と否定<sup>(21)</sup>している。

これまで第1次の調査期間は、調査担当者であった末永氏の証言に基づき、昭和11年12月から昭和12(1937)年3月とされてきた。しかし、昭和11年12月末におこなわれたという調査が如何なる内容のものであったかは、記録がなく不明である。それどころか、正式報告書である『大和唐古弥生式遺跡の研究』<sup>(22)</sup>(以後報告書)は、昭和12年1月8日を調査の開始日とする。これは、当時の末永氏の記録においても同様で、「大和唐古弥生式遺跡発掘日誌」<sup>(23)</sup>(以後日誌)の記述は昭和12年1月8日の現地打ち合わせから始まり、1月9日が調査開始日となっている。また、末永氏が『考古学雑誌』に寄せた速報<sup>(24)</sup>でも、「(前略)昭和十一年十二月上旬より発掘作業を始めた所、多数の遺物が(中略)が出土したので、我々は一月上旬、之が調査に着手し今日に至ったが、(後略)」と記述する。このうち発掘作業というのは池の土取り作業のことであって、調査については「一月上旬」と明記されている。さらに、『史林』における末永氏の概報<sup>(25)</sup>に至っては、「従って唐古池から各種の土器石器が検出されたと云う報告の教室に至るや、先ず濱田先生の現地急行に依って調査方針を定められたことは、唐古遺跡の軽視すべからざる本質が認められていたからである。それで我々はその翌日から泥の中に毎日人夫達と行動を共にすることとなり、(中略)一掃的に調査をする第一手をそめたのは一月八日であったが、(後略)」と日誌における時間経過との一致をみせる。

これは当時に記録された他者の文章においても同様で、大和国史会同人である島本一氏は、「唐古石器時代遺跡と遺物について」<sup>(26)</sup>の注において「昭和十一年十二月十三日であって、我々は最初の訪問者であった」と自らが第一人者であったことを主張する。また、昭和12年1月10日(日)付け大阪朝日新聞には、「岸古社寺技師、佐藤女高師教授、京大末永雅雄氏、田村島本氏らが続々調査に赴いているが(後略)」とあるが、それが前年まで遡るものか明らかではない。むしろ、岸・佐藤・末永といった奈良県史跡名勝天然記念物調査会委員の名と共に、同人会である大和国史会の田村・島本の名が併記されており、奈良県としての組織的な調査が昭和11年にはおこなわれていなかったことを示す記事と読み取れることもできる。

ただし、唐古池の土取り及び国道敷設については内務省の事業であり、奈良県史跡名勝天然記念物調査会が事前に工事を把握していたことは考えうる。また、事業開始後の年末には多数の遺物が出土したことによって新聞記事となっており、これに奈良県史跡名勝天然記念物調査会が1月8日まで無反応であったとは考え難い。そして、調査費、宿泊、膨大な遺物の収納場所の準備を想定するならば、初動が1月8日で1月9日に現場開始は物理的に無理がある。『考古学の窓』で末永氏が回顧するように、年明けの調査着手に向かって年末には下準備が進めら

れている方が矛盾はない。その場合、報告書・日誌・概報における末永氏の記述は、恩師濱田氏に対して敬意を払った結果であり、濱田氏の現地急行及び調査方針の決定をもって開始日とした解釈も可能ではある。

しかし、年末・年始にどれほどの現地調査がおこなわれていたかは、やはり不明とせざるを得ない。日誌には、第67日目、3月15日（月）の項目に、「郡山警察署に赴く所、昨年十二月より本年一月初に至る間の土工中、出土品を私蔵せしものあるを検挙したる為なり。」<sup>(27)</sup>とある。このように、当時の記録に「一月初」まで出土遺物の管理が無防備となっていたことが示されており、末永氏のいう12月末から正月初めの小規模な発掘が、個人レベルのものであったと推測できる。また、昭和11年12月の調査については、調査後四半世紀を経た末永氏の回顧録上での記述のみであり、正式調査期間に含めるべきか検討を要するところである。

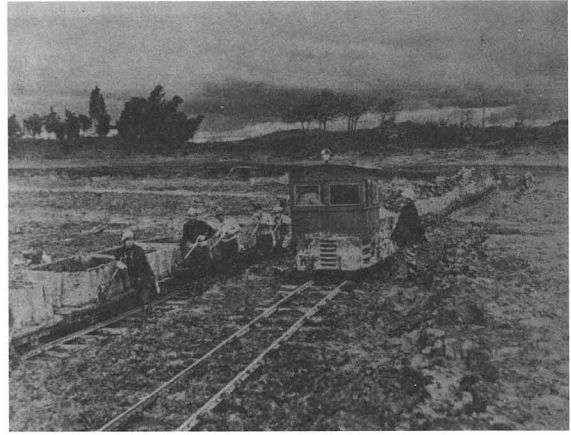


写真2 トロッコと末永雅雄氏

(2) 調査体制

唐古池の採土工事は、内務省大阪土木出張所高西敬義所長のもと内務技師諸井英一氏が担当し、現場主任は豊田氏（日誌及び大阪朝日新聞1月10日にその名を見るが報告書には記録されていない）が務めている。また現場作業員の監督は日阪藤次氏、松本光治氏である。工事には約50人（戸田氏は1日約20名が出勤と記録）の現場作業員が従事していたとされる。

工事は、唐古池の南西端の堤を切ってトロッコ線を引き入れ、西堤沿いから南堤沿いに向かって扇を広げるように土取りをおこなっている。その池底の面積は、4,500坪（14,850㎡）である。土取りについては写真や記録などから、池底から約五尺（1.5m）までを工事用採土とし、トロッコ約40台を2連に分け上下の2段で採取していったことがうかがえる。このような工事と同時進行の発掘調査とは、トロッコが土砂を池外に搬出している狭間に遺物集中箇所を掘り下げるといふもので、今日でいうところの工事立会のような状況だった。

発掘調査は、奈良県史跡名勝天然記念物調査会と京都帝国大学文学部考古学教室の共同でおこなわれている。これは、後に末永氏が記録する「奈良県から五百円あまり京都大学から百円を集めて」という調査費用の支出に基づくものであろう。その体制は、奈良県側では社寺兵事課（汀定雄課長・岸熊吉技師）、京都帝国大学側では文学部考古学研究室（濱田耕作教授・小林行雄助手（梅原末治助教授は肋膜炎のため指宿温泉で療養中））が調査主体となり、現地調査担当者は奈良県史跡名勝天然記念物調査会委員の末永氏が務めた。

調査日数は、日誌に80日間として記録されているが、これは現地における滞在記録であり、実働日数を示すものではない。現地調査としては、1月9日から「唐古池の発掘は略ぼ余す所なし。」と記録された3月23日までの74日間である（実質的には3月15日から資料整理が中心

となっていたようであるが)。この間、降雨による中止日が9日間ある。よって、実働日数は65日間となる(65日間には、天候により現地調査が半日という5日間を含めている)。

調査担当者の末永氏は、秩父宮御覧のため京都帝国大学考古学研究室への呼び戻しや石舞台古墳修景の打ち合わせ等以外、実働65日間のうちの56日間を現地に費やしている。また、京都帝国大学考古学研究室助手の職にあった小林氏は、土日及び臨時休日には足繁く現地に通っていた。調査補助員として小林氏に招聘された藤森栄一氏は、2月6日に来着し3月5日(送別の会食が日誌にあり、それ以後の名はない)まで現地に常駐し、末永氏不在の折には担当者を務めている。この他、末永氏に代わって担当を務めたものとして、水野清一、角田文衛、藤岡謙二郎の名が一日ずつ日誌に記録されている。現地調査に参加した京都帝国大学関係者として、報告書には羽館易、羽田(戸田)秀典、澄田正一の名を見るが、日誌には今井富士雄、小野勝年、岡崎卯一、亀井伸明、林宏、瀬津正志、丁士選の学生名も記録されている。特に、京都帝国大学の写真技師であった羽館氏は、遺構写真・木製品写真などを撮影しているが、A号竪穴の調査に専従するなど現地滞在が長い。奈良県史跡名勝天然記念物調査会からは、岸熊吉、佐藤小吉、小清水卓二、黒田昇義の名がある。また、地元から二人(一人は森本氏)の発掘作業員を雇っていたことが、日誌及び末永氏の回顧録からうかがえる。

出土遺物の保管先は、唐古国民学校である。土器・石器類は講堂(記念館)に、木製品類は学校前の池に仮収納された。このうち、貴重品や応急の保存処理を必要とする木製品については、授業のため帰京する学生に帯同させ随時京都帝国大学に運び込んでいる。遺物の整理については、報告書に「一先づ之を唐古国民学校に蔵置し、後之を京都大学に移して整理を行う」と記述されている。しかし、この点について七田忠志氏は、唐古国民学校で小林氏や唐古出土土器とともに写った昭和13(1938)年7月のスナップ写真を残している<sup>(28)</sup>。発掘調査から1年を過ぎて後も、現地の唐古国民学校に遺物が収蔵されており、整理のために小林氏らが訪れていたことを知ることができる(この件に関しては坪井清足氏からも、破片類等一部は京都帝国大学に運び入れたが主要遺物は唐古国民学校にあり、整理に通ったことをご教示いただいた)。整理の体制として、報告書には小林・藤岡・末永を中心として、荒谷芳雄、今井富士雄、岡田芳三郎、澄田正一、坪井清足、中村春壽の名が記載されている。なお、末永氏が集めたとする奈良県から五百円余り、京都大学から百円の資金が、現地調査費用のみか、報告書作成費用までを含んだものかは不明である。

### (3) 当時の反響

唐古池の底から、多量の弥生土器とともに木製農具が出土するという衝撃は大きかった。日誌には見学者として、鑄方貞亮、喜田貞吉、清野謙次、島村孝三郎、坪井良平、原田淑人、東伏見宮、樋口清之、三宅宗悦氏等の名が連なる。また、大阪毎日新聞や大阪朝日新聞は、奈良版において度々関連記事を掲載する。大阪朝日新聞では、「唐古池を探る」と題して、2月7日(日)から2月24日(水)まで11回の連載記事が載るほどであった。こうした記事は大衆の興味を刺激したらしく、人垣が取り巻くなかでの調査風景(A号地点か)の写真(写真3)が残

されている。見学者によって調査は支障をきたしたようで、日誌には2月12日から「その他参観者極めて多し」「日曜なればことの外うるさし」の記述が散見されるようになり、とうとう2月20日（土）には立入禁止の制札を立てたことが記されている。ちょうど、朝日新聞の連載記事の日付とも対応し、現在と変わらぬマスコミ扇動の「発掘フィーバー」が巻き起こっていたようである。



写真3 A号地点の調査風景

#### （4）報告書

『大和唐古弥生式遺跡の研究』は、発掘調査から6年後の昭和18（1943）年に刊行された。この報告書は、内容が同じでありながら序言を変え、ひとつは『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第十六冊として、ひとつは『奈良県史跡名勝天然記念物調査会報告』第十六冊として、二つの体裁がある。

報告書はB5判で、目次14ページ、本文252ページ、写真図版108ページ、挿図92点からなる。報告書の章立ては以下の通りである。

第一章	序説		(6ページ、挿図数1)
第二章	遺跡地の地理と地形		(9ページ、挿図数3)
第三章	遺跡の状態		(25ページ、挿図数14)
第四章	土器類	(遺物一)	(54ページ、挿図数37)
第五章	弥生式土器細論	(遺物二)	
	第一節	第一様式土器における彩文	(7ページ、挿図数3)
	第二節	第四様式土器における原始絵画	(13ページ、挿図数6)
	第三節	第五様式土器における記号的文様	(7ページ、挿図数1)
	第四節	各様式土器における櫛描文様について	(8ページ)
	第五節	弥生式土器総括	(14ページ、挿図数2)
第六章	木器類及び植物製品	(遺物三)	(39ページ、挿図数13)
第七章	石器類	(遺物四)	(25ページ、挿図数6)
第八章	土製品及び骨角牙製品	(遺物五)	(13ページ、挿図数4)
第九章	自然遺物類	(遺物六)	(11ページ、挿図数1)
第十章	後論		
	第一節	遺跡に関する考察	(8ページ、挿図数1)
	第二節	遺物に関する考察	(13ページ)

図版の108ページの構成は、遺構19ページ、土器20ページ、土器文様14ページ、絵画3ページ、木器23ページ、植物製品8ページ、石器11ページ、土製品2ページ、骨角器3ページ、

自然遺物5ページである。

なお、分析・鑑定について京都帝国大学報告書の序文には、木質を京都帝国大学農学部助教授尾中文彦氏、植物種子類を奈良女子高等師範学校教授小清水卓二氏と京都帝国大学理学部講師三木茂博士、動物の遺骨は東京帝国大学教授長谷部言人博士と早稲田大学理工学部直良信夫氏、石質について故京都大学名誉教授中村新太郎氏の名が列挙されている。奈良県報告の序文では、さらに京都帝国大学理学部石田新太郎博士、奈良女子高等師範学校帷子二郎氏・岩野久任氏の名が加えられている。低湿地遺跡の調査であるため多くの有機質遺物が残存したこと、調査主体が京都帝国大学であったことが、学際的研究を可能にしたといえよう。

報告書において小林氏は、自らが編んだ弥生式土器五様式区分に基づき、さらに発掘で得た遺構一括資料を「同一地点より出土する土器間の変化はこれを一様式と見るという前提」によって、唐古遺跡出土の弥生土器を五つに分けた。この土器様式を基準として、遺構・遺物についての編年体的記述がおこなわれている。木器は末永・小林、石器は藤岡・小林の連名となっているが、これは土器様式に基づかない記述を、小林氏が書き直したためと伝えられる。

木器は、当時これほどにまとまった木質遺物の出土はなく、報告書における分類・視点が後の木製品研究を規定していったと言っても過言ではないだろう。特に、尾中氏に依頼しての顕微鏡による樹種鑑定は、木製品の用途に応じた材の選択があったことを明らかにした。また、小林氏はその加工に木取りがあったことを着目している。この他、土器様式を基準とすることによって、平鉢における舟形突起のあるものからないものへの変遷が指摘されている。

石器は、石庖丁について石材と形態差が相関関係をもち、それが時期差であることを示した。ここでもまた土器様式を資料操作の基準として、背部が直線的で両刃のものは変質安山岩（現在名は流紋岩）製で第一様式土器と、背部が外湾で片刃のものは輝岩と変成岩（現在名は結晶片岩）製で第三・四様式土器と伴出したことを根拠とする。これら石材は、中村氏の鑑定によるもので、結晶片岩製石庖丁（報告書では磨製石斧も含めている）の産出地が、紀ノ川以南の三波川変成帯にあることも言及している。また、原産地との距離に関係なく弥生遺跡から磨製石斧が一定量出土することについて、交通・交易も視野に入れていたようであるが、「この種の岩石は近畿中区低地帯周辺部の洪積層中にこれを構成する礫として発見し得るものであるとは、中村新太郎教授の教へられたところである」と慎重な立場をとっている。

この他、「第二章 遺跡地の地理と地形」は藤岡氏の文責で、今日の報告書でいうところの位置と環境をまとめている。藤岡氏は、縄文遺跡、弥生遺跡、古墳及び同期遺跡の分布から、標高50m以下は湖沼地であったと推測し、唐古遺跡の立地を「恐らくは旧初瀬川がこの盆地中央部の湖沼帯に流入する付近に作りあげた、その三角洲上に立地したのであろう。」とした。この藤岡氏の説は、今日の発掘調査では標高50m以下の奈良盆地中央部からも縄文・弥生の遺跡が検出されており、覆っている。しかし、遺跡分布から当時の地形を復原する歴史地理学の方法として、学史的に興味深いものがある。

報告書が刊行された昭和18（1943）年の段階で、これほどの質・量をもった報告書は他になかった。その内容もさることながら、本文の細節代わりに立てられる小見出し、挿図における美しい遺物の配列、縮尺を無視し器幅を揃えることによって縦筋の通った土器図版など、レイアウトの隅々にまで配慮が行き届いている。『大和唐古弥生式遺跡の研究』は弥生研究のみならず、発掘調査報告書の教科書とされるようになった。

#### （5）鍵池の調査

なお、昭和12（1937）年には鍵池の調査も併せておこなわれている。報告書には「鍵池方面の遺跡遺物に関しては他日末永が『奈良県史跡名勝天然記念物調査会抄報』第三輯において発表の予定である」との注がある。ところが、こういった事情かこれが発表されることはなかった。日誌にはわずか3日、3月14日（日）「鍵池の発掘は漸次土器出土量を増加し、本日午後の如きはトロッコ線敷設の掘込工事中、相当多量の弥生式土器あり。本夕、敲目ある壺一個、略ぼ完形を以て検出さる。遺跡の状態は上部より祝部土器を出し、下部に弥生式土器の包含層あるものの如し。」、3月18日（木）「鍵池一部の地層断面図を作成。」、3月28日（日）「また鍵池の一部発掘を見、之等を撮影。若しこの池に再び遺物出土することあらば、本日のこの写真は第一頁を採るものならん。（中略）鍵池の状態未だ決しかぬれば、史学科生羽田君を留めて委ぬ。」の記述に止まる。戸田（羽田）氏を留めたという記述については、戸田氏本人による「池（鍵）の北西隅堤防の切通しの断面下方から、高さ約一メートル、厚さ約一センチの須恵質の大甕に入った赤色の馬型埴輪を発見した記憶がある」という回顧録<sup>(29)</sup>があり一致する。日記の記述に基づく限り、3月14日を前後とする鍵池へのトロッコ線引き込み時が遺物出土のピークだったようである。地元の聞き取りによれば、トロッコ線は鍵池の北西隅から引き込んだとされ、実際第83次調査においてもその基礎杭らしきものを検出している。おそらく、遺物が出土したのは、今日推定される唐古・鍵遺跡範囲の線上にある鍵池の堤北西隅付近までであり、範囲外となる池内からはほとんど遺物が出土しなかったと想定される。

鍵池出土の遺物として、奈良県立考古博物館刊行の『大和考古資料目録』第3集<sup>(30)</sup>には、写真番号227（大和第Ⅴ様式の壺）と228（大和第Ⅱ様式の壺）が「鍵遺跡 磯城郡田原本町鍵」というキャプションが付けられている。『弥生式土器集成』本編2<sup>(31)</sup>の畿内地方では、17・31・57・66・67・233・235・251・257・258・321の11点が「奈良県 鍵」として掲載される。これらは、大和第Ⅰ様式、第Ⅱ様式、第Ⅵ様式の土器である。

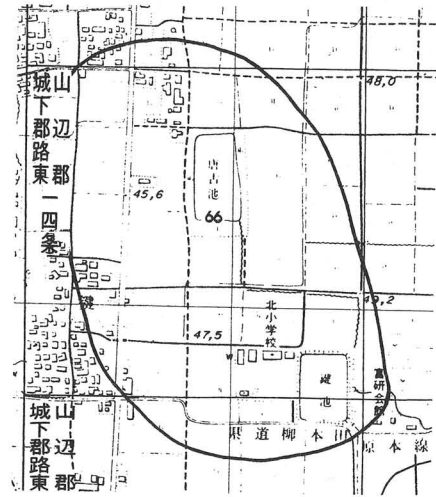
この鍵遺跡と唐古遺跡が同一の弥生集落として認識されるには、第3次調査までの40年という期間を必要としたのである。



### 3. 橿原考古学研究所の調査

#### (1) 第2次調査

唐古池の発掘調査によって、広く世に知られた「唐古遺跡」ではあったが、農村地帯にあって以後30年間は調査がおこなわれてこなかった。昭和42年度の第2次<sup>(32)</sup>は、唐古池から北西に位置する農地の宅地転用に伴い、国庫補助事業として奈良県教育委員会が事務局となり、奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査をおこなった。調査の担当総括は第1次調査を指揮した末永雅雄氏であり、現地においては関西大学文学部嘱託職員の菅谷文則氏と関西大学院修士課程2回生の榎本誠一氏が担当者（予備調査は藤井祐介氏が担当）となった。湧水による壁崩壊に悩まされながらも、溝4条を検出している。菅谷氏は、水中ポンプの発達していない状況での低地遺跡調査の困難さを回顧<sup>(33)</sup>している。



第5図 唐古・鍵遺跡の範囲 (1971年)

湧水による壁崩壊に悩まされながらも、溝4条を検出している。菅谷氏は、水中ポンプの発達していない状況での低地遺跡調査の困難さを回顧<sup>(33)</sup>している。

#### (2) 分布調査

奈良県教育委員会は、昭和46（1971）年から3年ほどの予定で詳細な『奈良県遺跡地図』作成のために、遺跡分布調査をおこなっている。この分布調査をもとに作成された『奈良県遺跡地図』第2分冊<sup>(34)</sup>では、唐古と鍵の範囲がひとつに囲まれ、既に「唐古・鍵遺跡」の名称が用いられている。この件については、森岡秀人氏の詳細な記録<sup>(35)</sup>があり、その過程を知ることができる。

また、石野博信氏は「大和の弥生時代」<sup>(36)</sup>において、「唐古遺跡は従来言われている鍵遺跡と一帯の遺跡と考えられ、むしろ唐古・鍵遺跡とよぶべきかもしれない」としている。この論文を収めた『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』第2冊の発行日は昭和48（1973）年10月であるが、脱稿年月日は昭和46年1月29日となっている。先述の分布調査は昭和46年3月であり、石野氏がそれよりも先に「唐古・鍵遺跡」と命名したのか、脱稿と印刷までの2年間に分布調査で得た知見を反映させ、校正したのかは不明である。

ともかく昭和40年代後半には、唐古遺跡と鍵遺跡をひとつの遺跡として捉えようとする動きがあり、その周知の範囲が第3次調査の発掘根拠になったと考えられる。

#### (3) 第3次調査

昭和52年度、田原本町は唐古池から南へ約200mの大字鍵において北幼稚園の移設を計画する。国庫補助事業による事前調査として田原本町教育委員会が事務局となり、発掘調査の実施に関しては町教育委員会から県文化財保存課を通じて調査員派遣依頼を受けた奈良県立橿原考古学研究所が担当した。これが第3次調査<sup>(37)</sup>である。調査担当者は、久野邦雄氏、寺澤薫氏である。調査は、当初8月1日より実施し9月末日が終了予定であったが、終了間際に至って銅

鐸鑄造に関する遺物の出土などにより、1ヶ月半の期間延期をおこない11月15日に終了した。

本調査は、著名な青銅器鑄造関連遺物だけでなく、土器・石器・木製品が多量に出土することによって、大字鍵の地まで「唐古遺跡」の拡がることを明らかにしたのである。この調査をもって、「唐古・鍵遺跡」が正式な遺跡名称となった。また、調査区の南半で並行する2条の大溝を境として、その南側に遺物包含層が拡がらないことを確認したことは、遺跡の南限を把握するとともに本遺跡が環濠集落であることを予想させた。

本調査を契機として、国庫補助事業による継続的な範囲確認調査が始まる。

#### (4) 範囲確認調査

第3次調査によって、その重要性が再認識された唐古・鍵遺跡では、史跡指定を目標とする範囲確認調査が継続しておこなわれることとなる。周知の遺跡範囲は市街化調整区域・農業促進地域ではあったが、国道24号線沿いにおいてやがて開発の波を被ることが予想された。また、その国道24号線付近については、周知の遺跡範囲としてさらにその西側も包括していたが、発掘調査はおこなわれておらず実態は不明であった。遺跡保存のためには、発掘調査による遺跡範囲の確定が急務といえた。

しかし、発掘調査の実施に関しては、当時の田原本町教育委員会に専門職員は配置されておらず、田原本町教育委員会が補助金事務をおこない奈良県立橿原考古学研究所に調査を依頼するという体制が第11次調査まで続いた。範囲確認調査の担当者は、寺澤薫氏である。

昭和53年度には、最初の範囲確認調査として唐古池の南東隣接地で第5次調査<sup>(38)</sup>がおこなわれる。当初は範囲確認調査という目的から、遺跡東縁部の畑地での調査を予定していたが、地主との交渉がつかなかったようである。第1次調査区である唐古池から拡がる濃密な遺構分布を確認し、居住域内であることが確認された。

昭和54年度には第7・8次と、2件の範囲確認調査がおこなわれる。第7次調査<sup>(39)</sup>は、遺跡東縁部を確認するために、北小学校から北約100mの鳥畑においておこなわれた。弥生時代後期の大溝とそれより東側で弥生時代中期のピット群、溝を検出した。調査を担当した寺澤氏は、弥生時代後期については大溝を東限とし、弥生時代中期居住域はそれよりも東側へ拡がることを想定している。また、弥生時代後期遺構のベースとなる砂礫層を検出したことにより、弥生時代中期末まで河が集落内を貫流していたことを想定した。

第8次<sup>(40)</sup>は、昭和54年度に集落西縁の限界及び実態把握を目的として国道24号線東隣接地の休耕田でおこなった範囲確認調査である。弥生時代前期から弥生時代後期に及ぶ遺構・遺物を検出し、本調査区周辺はまだ居住域内であることが明らかとなった。

第11次<sup>(41)</sup>は、第8次調査区と国道24号線を挟んだ西側の休耕田で、昭和55年度におこなった範囲確認調査である。第8次調査に引き続き、遺跡西限の範囲確認を目的としておこなっている。第8次調査区と同様に濃密な遺構分布を確認し、遺跡範囲が国道24号線の西側に拡がることは確実となった。

### (5) 緊急調査

先述したように遺跡範囲は市街化調整区域・農業促進地域であったものの、水路等の農業基盤整備に伴い発掘調査がおこなわれている。範囲確認調査と同様、田原本町教育委員会が事務をおこない、調査は奈良県立橿原考古学研究所に依頼している。調査担当者は第4・6・9次が寺澤薫氏、第12次は松本洋明氏である。

第4次<sup>(42)</sup>は、昭和53年度におこなった北小学校校舎増築に伴う発掘調査である。本調査区は、前年度におこなった第3次調査区の東側に隣接し、位置的には集落の南限となった大溝よりも外側になることが想定された。調査の結果、土壙墓とも考えられる土坑7基、溝状遺構2条のみで、顕著な遺構及び遺物包含層は検出されず、集落外であることが確実となった。

第6次<sup>(43)</sup>は、昭和54年度に国道24号線の西側でおこなわれた第1期水路改良工事に伴う発掘調査である。本調査区は、昭和42年度におこなった第2次調査の成果から、遺跡範囲外と想定されていた。調査の結果も、顕著な遺構・遺物はなく、「沼湿地あるいは初瀬川網支流の刻むデルタ地帯」という結論が下された。しかし、その後本調査区の南隣接地でおこなわれた第31・42次調査<sup>(44)</sup>によって、弥生時代中・後期の大溝5条が検出され、弥生集落の北西環濠帯部分にあたることが判明した。今日、第6次調査区については、中世環濠集落の東西環濠部分を調査したのではないかと考えられている。

第9次<sup>(45)</sup>は、昭和54年度に鍵池の北側でおこなわれた計画外の水路改良工事に伴う発掘調査であり、工事を停止し即時発掘調査対応となった。しかし、この調査によって、環濠と考えられる大溝群を検出し、遺跡の南東限を想定することが可能となった。

第12次<sup>(46)</sup>は、昭和56年度に唐古池に北接する東西農道でおこなわれた水路改良工事に伴う発掘調査である。本調査区では、弥生時代中期以前の河跡と、弥生時代後期の環濠と考えられる大溝を5条検出した。本調査区の北側でおこなわれた第2次調査の成果も含めて、遺跡の北西限が想定できるようになった。

### (6) 地形測量

昭和55年度の事業<sup>(47)</sup>として、唐古・鍵遺跡の地形測量図の作成及び現地基準測量点3点が設置されている。以後の継続的な調査あるいは史跡指定に向けて、必要不可欠な基礎整備であった。以後におこる国道沿いの開発による蚕食的な地形改変を考えれば、第3次調査から3年でおこなわれたこの処置は迅速なものであった。第11次調査以降は、開発に伴う緊急、範囲確認調査にかかわらず、いずれも基準測量点を用いておこなっており、広汎に点在する調査区をまとめる正確な遺構配置図の作成を可能にした。それを元に復原された遺跡変遷図は、唐古・鍵遺跡の消長を可視的に表現する上で大いに有効となった。

#### 4. 田原本町教育委員会の調査

##### (1) 第1期

昭和57（1982）年5月に田原本町教育委員会は、埋蔵文化財担当の専門職員を嘱託採用する。田原本町単独による発掘調査の始まりである。その最初の発掘調査である昭和57年度の第13次<sup>(48)</sup>は、集中豪雨による初瀬川堤防決壊でトレンチ埋没というアクシデントに見舞われながらも、鞘入り石剣や異形高坏を含む多量の遺物とともに遺跡北西部を囲む5条の環濠を検出した。駐車場造成に伴う緊急調査とはいえ、これまで不明であった遺跡範囲の西限を確定していく上で大きな手掛かりとなった。

しかし、国道24号線沿いでは昭和57年から昭和60（1985）年までのわずか4年で、先述の第13次に始まり、第14・15<sup>(49)</sup>・16・19<sup>(50)</sup>・20<sup>(51)</sup>・22<sup>(52)</sup>次と7件の開発に伴う緊急調査が続く。皮肉なことは、国道24号線沿いで民間開発が集中し発掘調査が活発化することによって、遺構密度の高さや多量の遺物あるいは大型井戸やト骨といった祭祀遺構・遺物が明らかとなり、その周辺を遺跡西地区として重視させることになった。

学史に名高い唐古池では、堤防老朽化のための擁壁工事が始まり、これに伴う発掘調査もおこなわれている。東堤でおこなった第23次調査<sup>(53)</sup>では、第1次調査時における池底の土取が堤際にまで及んでおらず、擁壁基礎となる部分には遺物包含層及び遺構の埋没していることが判明した。以後、擁壁工事に伴う第26<sup>(54)</sup>・37<sup>(55)</sup>・51<sup>(56)</sup>次調査が継続する。これらの調査により、第1次調査で明らかにされていた堅穴に加え、溝や柱穴などの居住遺構の分布が明らかとなり、唐古池及びその周辺は遺跡北地区として認識された。なお、第23次調査では、弥生時代前期の木棺墓を検出している。

範囲確認調査は昭和56年度の第11次<sup>(57)</sup>より中断されていたが、昭和60年度には唐古池の東側において第24・25次<sup>(58)</sup>として再開され、第24次では環濠と北方砂層を検出した。引き続いて昭和61年度には第24次調査区のさらに東側で第27次調査<sup>(59)</sup>をおこない、その北側でおこなわれた南北水路工事に伴う第28次調査<sup>(60)</sup>の成果とも併せて、遺跡北東部における環濠帯の状況を明らかにした。この昭和61年度までの段階において、遺跡の北西部と北東部で環濠を検出しており、遺跡北半については範囲をほぼ確定することができていた。

昭和61（1986）年10月には、唐古・鍵遺跡発掘50周年を記念したシンポジウム「唐古・鍵遺跡発掘の五十年」<sup>(61)</sup>が田原本町主催でおこなわれ、考古学の有識者による発言によって改めて唐古・鍵遺跡の重要性が認識されることとなった。

##### (2) 第2期

昭和62（1987）年4月には、前年のシンポジウムの反響もあり、唐古・鍵遺跡の史跡指定を推進するため田原本町教育委員会に文化財保存課が設立される。また、平成2年度には増加する発掘調査に対応すべく、埋蔵文化財担当の専門職員が一名増加された。

範囲確認調査は、昭和62・63年度に遺跡範囲の南側でおこなった第33次<sup>(62)</sup>によって、その調

査区の南端で環濠を検出し、遺跡の範囲を確認するという当初の目的は達成したため、一旦終了する。なお、この調査では、鑿に転用された細型銅矛片や木製戈などの特殊遺物、弥生時代前期から弥生時代後期までの濃密な遺構分布を確認したことによって、遺跡南地区の重要性が注目されることになった。

開発に伴う緊急調査は、公共・民間ともにいずれも小規模なものが多く、広大な遺跡範囲の点と線にとどまる。そのなかにあって、遺跡北西部でおこなわれた昭和62年度の第31次調査、平成2年度の第42次調査<sup>(63)</sup>は合わせた面積が1,090㎡と広く、北西環濠帯の状況を明らかにした。また、遺跡範囲の南東部にあたる北小学校では、平成2年度に体育館改築に伴う第40次調査<sup>(64)</sup>、平成3年度にプール改修に伴う第47次調査<sup>(65)</sup>がおこなわれた。両調査区合わせて約1,400㎡という広い面積によって、南東環濠帯の状況及び橋脚状の遺構を検出し集落出入り口の一つが判明した。なお、第47次調査では、2階建ての建物を描いた「楼閣」絵画土器が出土している。

平成2年度には、田原本町中央体育館内に「郷土資料展示室」を開設している。それまでは、田原本町中央公民館の一角において唐古・鍵遺跡出土遺物の一部が展示されていたにすぎなかった。展示室が開設されたことによって、唐古・鍵遺跡の全容を一般に公開することが可能となり、啓発・普及の拠点的役割を担うこととなった。

### (3) 第3期

平成4（1992）年5月に「楼閣」絵画土器の発見は、大々的に報道された。平成元（1989）年の佐賀県吉野ヶ里遺跡報道によって、大規模な弥生集落を単なる農村ではなく都市的なものとして捉えようとする考えが普及し始めており、高度な2階建て建築物を描いた絵画土器はそれに拍車をかけた。反響は大きく、田原本町中央公民館でおこなわれた一般公開には、多くの見学者が訪れた。これを承けて田原本町では、平成6年度に唐古池の西側において絵画土器から楼閣を復原する。高さ12mの復原楼閣は国道24号線沿いにあるよく目立ち、唐古・鍵遺跡のシンボルタワーとして史跡指定推進の象徴となった。

開発に伴う緊急調査は、バブル経済の崩壊により国道24号線沿いの民間開発は減少したものの公共事業が活発化し、通学路・水路整備に起因するものが増加した。平成4年度から平成7年度までに、建設課による通学路整備に伴う第50<sup>(66)</sup>・53<sup>(67)</sup>・54<sup>(68)</sup>・56<sup>(69)</sup>次、経済課による土地改良及び用排水路整備に伴う第57<sup>(70)</sup>・59<sup>(71)</sup>次の6件の発掘調査がおこなわれた。これら発掘調査は、いずれも道に沿った長大で幅の狭い線的なものであるが、第50・53次はそれまで実態が不明であった遺跡中央部にトレンチを入れる結果となった。その成果から、遺跡中央部における弥生時代前期のくぼ地が想定されるようになり、中央区が設定された。

平成8年度には、唐古・鍵遺跡発掘60周年を記念して田原本町と奈良県立橿原考古学研究所附属博物館の共催による春季特別展「弥生の風景」<sup>(72)</sup>が、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館で開催されている。そして、平成8（1996）年6月27日の産経新聞には、田原本町が唐古・鍵遺跡整備の基本構想をまとめたことが報道された。

## (4) 第4期

平成8年度からは、唐古・鍵遺跡の内部構造解明を目的とする範囲（内容）確認調査が10ヶ年計画で開始される。調査にあたって田原本町では、考古学の有識者による唐古・鍵遺跡調査検討委員会を編成し、指導・助言を仰ぐこととなった。また、平成8年7月には、埋蔵文化財担当の専門職員が一名増加されている。範囲（内容）確認調査は、平成8年度から平成16年度まで第61・65・69・75・78・79・80・84・89・93・98次の11件がおこなわれた。その成果等については、本文を参照されたい。

一方では、民間による開発もおこなわれているが、このうち第74次調査では弥生時代中期前葉の大型建物跡を検出した。この大型建物跡は、これまで検出されている弥生時代のものとしては最も時期が遡るものであり、総柱型という構造も類をみないものであった。報道では大きく取り扱われ、現地説明会には多くの人を訪れた。

田原本町による公共工事としては鍵地内におけるものが多く、下水道課による第81<sup>(73)</sup>・86<sup>(74)</sup>・88<sup>(75)</sup>・95<sup>(76)</sup>・97<sup>(77)</sup>・99<sup>(78)</sup>・101<sup>(79)</sup>次調査、建設課による第60<sup>(80)</sup>・77<sup>(81)</sup>・83<sup>(82)</sup>次調査、産業振興課による第72<sup>(83)</sup>・76<sup>(84)</sup>次調査、教育総務課による第91次調査<sup>(85)</sup>がおこなわれている。このうち、鍵集落内でおこなわれた下水道工事は立坑・人坑部分を坪掘りする極めて小規模なものであったが、これまで不明であった遺跡南西部に試掘坑をあける結果となった。第99次調査では、環濠になると考えられる大溝を確認しており、遺跡南西部の範囲を推定する手掛かりを得た。

平成11（1999）年1月27日、文部省告示第18号によって「唐古・鍵遺跡」は国史跡に指定される。さらに、大型建物跡を検出した国道24号線西側の第74次調査区周辺等も含め、平成14（2002）年12月19日文部科学省告示第209号、平成20（2008）年3月28日文部科学省告示第40号により2回の追加指定がおこなわれている。追加も含めた史跡の指定面積は、102,248.98㎡に及ぶ。これを承けて田原本町では、史跡地の保存管理ならびに遺跡整備を図るため、平成15（2003）年9月に「唐古・鍵遺跡基本設計」を策定した。なお、この国史跡指定を記念して田原本町では、平成11年9月に講演・シンポジウム『弥生研究の中心遺跡を考える—『唐古・鍵遺跡』学の創設へ—』<sup>(86)</sup>を開いた。このシンポジウムにおける有識者の発言に基づき田原本町は唐古・鍵遺跡共同研究会を立ち上げ、考古学だけでなく自然科学や民俗学を含めた唐古・鍵遺跡の学際的な研究が始まった。

平成16（2004）年11月、唐古・鍵考古学ミュージアムは、これまでの唐古・鍵遺跡の調査成果を一覧するための本格的な展示施設として、田原本青垣生涯学習センター内に開館する。ミュージアムはその名の通り、唐古・鍵遺跡の遺跡資料館であるとともに、「考古学」という学問を通して弥生時代の情報発信の基地としての役割を目的としている。

このように国史跡となった唐古・鍵遺跡を、保存し活用していくための下準備は着実に進められているのである。

第 I 章 調査に至る経緯

第 2 表 調査一覧表

次数	調査地	調査期間	調査面積	主要遺構	主要遺物	地区	調査機関
第1次	唐古126 (唐古池)	1937.1.8～ 3.23	12000㎡	百数基の土坑群	各種木製品、炭化米、凸帯文壺、彩文土器、絵画土器(舟・鹿)	北地区 (6B・6C・6D) (7B・7C・7D)	奈良県史跡名勝天然記念物調査会・京都帝国 大学文学部考古学教室
第2次	唐古82-2	1967.8.1～ 8.3、12.16～ 12.30 1968.1.4～ 2.5、3.14～ 3.31	105㎡	環濠2条		北地区 (5B)	奈良県立橿原考古学研 究所
第3次	鍵161他 (北幼稚園)	1977.8.1～ 11.15	1000㎡	環濠3条、井戸	青銅器鑄造関連遺物、 木製四脚容器、猪下顎 14体、ガラス製勾玉、 銅鐸形土製品、銅鏃	南地区 (6F・7F・7G)	田原本町教育委員会・ 奈良県立橿原考古学研 究所
第4次	鍵155他 (北小学校校舎)	1978.4.22～ 5.15	580㎡	小溝、小土坑		南集落外 (7G・8G)	田原本町教育委員会・ 奈良県立橿原考古学研 究所
第5次	唐古144	1978.5.16～ 6.20	110㎡	土坑、溝、柱穴 中世木組井戸	管玉、糞石、丹塗 壺、田舟、黒色土 器	北地区 (7D)	田原本町教育委員会・ 奈良県立橿原考古学研 究所
第6次	唐古65-1	1980.1.18～ 1.22	120㎡	中・近世大溝		北地区 (4B・5B)	田原本町教育委員会・ 奈良県立橿原考古学研 究所
第7次	鍵181-4	1980.1.23～ 2.14	100㎡	弥生後期溝2条	特殊タタキ壺	東環濠 (8E)	田原本町教育委員会・ 奈良県立橿原考古学研 究所
第8次	鍵308-1	1980.2.15～ 4.4	200㎡	井戸、土坑、小溝 中世大溝	彩文土器、弥生前期 の箕、弓	西地区 (5D・5E)	田原本町教育委員会・ 奈良県立橿原考古学研 究所
第9次	鍵196-2 (用水路)	1980.4.5～ 4.19	200㎡	弥生中期環濠2条		東環濠 (8E・8F)	田原本町教育委員会・ 奈良県立橿原考古学研 究所
第10-a次	鍵2-5 (駐在所)	1980.10.17～ 10.19	80㎡			南集落外 (9H)	田原本町教育委員会・ 奈良県立橿原考古学研 究所
第10-b次	鍵193-1	1980.12.25	30㎡			南集落外 (8F・8G)	田原本町教育委員会・ 奈良県立橿原考古学研 究所
第11次	鍵309-1、 310-1	1981.1.27～ 3.28	210㎡	弥生前期のドングリ ビット、柱穴、 井戸 中世大溝、井戸	鶏頭形土製品、打製 石剣、古式土師器	西地区 (4D)	田原本町教育委員会・ 奈良県立橿原考古学研 究所
第12次	唐古96 (用水路)	1981.11.9～ 11.18、 1981.12.24～ 12.25、 1982.1.18～ 2.5	340㎡	環濠5条		北地区 (5B・6B)	田原本町教育委員会・ 奈良県立橿原考古学研 究所
第13次	唐古60-1	1982.7.20～ 10.5	215㎡	環濠5条、井戸、 土器棺墓	鞘入石剣、ケヤキ原 木、銅鐸形土製品、 箕、楯、猪下顎7体	西地区 (4C)	田原本町教育委員会
第14次	鍵306	1982.11.16～ 12.25	50㎡	弥生後期井戸 中世建物	青銅鏡、送風管、管 玉、井戸供献土器、 弧帯文様土器、近江 産土器	西地区 (4E)	田原本町教育委員会
第15次	唐古98-1	1983.1.11～ 2.15	200㎡	環濠4条	広楸、尾張産土器	北地区 (5B)	田原本町教育委員会
第16次	鍵280-1、 282-2	1983.4.18～ 6.24	155㎡	前期環濠、弥生中 期大溝3条	耳成山産石庖丁、 広楸未成品	西地区 (5F)	田原本町教育委員会
第17次	唐古80-2	1983.9.9～ 9.17	200㎡	環濠4条、集水施 設2基	前期弥生大壺	北地区 (5A・5B)	田原本町教育委員会

次数	調査地	調査期間	調査面積	主要遺構	主要遺物	地区	調査機関
第18次	唐古126 (唐古池)	1983. 11. 28～ 12. 3	63㎡	北方砂層	短頸壺	北地区 (6B・6C)	田原本町教育委員会
第19次	唐古57-2、 59	1984. 2. 6～ 5. 2	315㎡	環濠2条、土坑、 井戸、木器貯蔵穴、 集水施設、土器棺 墓	銅鐸形土製品、猪形 土製品、翡翠製玉、 ガラス小玉、骨針、 広楕未成品、内傾口 縁土器、吉備産大壺	西地区 (4C・4D)	田原本町教育委員会
第20次	鍵302-1、 307-1	1984. 11. 28～ 1985. 4. 8	150㎡	弥生前期土坑群、 井戸、集水施設、 柱穴	卜骨、投弾、焼土と 被熱前期弥生土器、 炭化米、アカニシ	西地区 (5E)	田原本町教育委員会
第21次	唐古78-4、 79-22	1985. 5. 8～ 5. 13	65㎡	環濠2条	横楯	北地区 (4A・5A)	田原本町教育委員会
第22次	鍵308-1	1985. 9. 3～ 11. 28	250㎡	井戸、木器貯蔵穴 中世大溝	大型絵画土器、独鈷 石、内傾口縁土器、 穿孔猪下顎	西地区 (5D・5E)	田原本町教育委員会
第23次	唐古126 (唐古池)	1985. 12. 9～ 1986. 2. 25	200㎡	木棺墓2基、大木割 抜井戸、柱穴、溝	矛形木製品、卜骨、 巴形銅器、内傾口縁 土器、布ぎれ、縄、 石棒、銅鐸形土製品	北地区 (7B・7C)	田原本町教育委員会
第24次	唐古141	1986. 2. 13～ 3. 31	130㎡	環濠2条、北方砂 層、柱穴	刻み鹿角、槽、 大形石庖丁	北地区 (8C・8D)	田原本町教育委員会
第25次	唐古198-2	1986. 3. 6～ 3. 31	30㎡	環濠1条	打製石剣、弥生前期 壺蓋	北地区 (7B)	田原本町教育委員会
第26次	唐古126 (唐古池)	1986. 12. 15～ 1987. 2. 24	115㎡	弥生前期大溝、井 戸、中世井戸	杓子、打製石剣、 杵	北地区 (7C・7D)	田原本町教育委員会
第27次	唐古161-2	1987. 1. 23～ 3. 10	320㎡	環濠5条、古墳時 代後期河跡	布留式土器、須恵器	北地区 (8C・9C)	田原本町教育委員会
第28次	唐古黑白地内	1987. 2. 5～ 2. 10	275㎡	環濠7条		北地区 (8B・8C)	田原本町教育委員会
第29次	鍵36他	1987. 3. 4～ 4. 6	260㎡	環濠7条	着柄楯	西地区 (3C・3D・4C)	田原本町教育委員会
第30次	唐古90他	1987. 4. 6～ 4. 10	150㎡	環濠4条		北地区 (6A)	田原本町教育委員会
第31次	唐古65-1、 64-4	1987. 6. 15～ 7. 1	350㎡	環濠3条		北地区 (4B)	田原本町教育委員会
第32次	鍵142-4	1987. 9. 10～ 9. 15	31.5㎡	環濠1条		南地区 (6H)	田原本町教育委員会
第33次	鍵262-1	1987. 11. 5～ 1988. 1. 31 1988. 4. 1～ 5. 1	300㎡	環濠4条、井戸、 木器貯蔵穴、 土墳墓	細形銅矛片、銅鏃、 木製戈、勾玉、管玉、 着柄石小刀、卜骨	南地区 (6F・6G)	田原本町教育委員会
第34次	唐古142他	1988. 2. 15～ 2. 25	250㎡	環濠3条、北方砂 層	槽、河内産土器	北地区 (8C・8D)	田原本町教育委員会
第35次	唐古95他	1988. 3. 7～ 3. 8	150㎡	環濠3条		北地区 (6A・6B)	田原本町教育委員会
第36次	唐古526-1	1988. 8. 29～ 9. 3	50㎡	中世大溝	中世土器、下駄	北集落外 (4Z・5Z)	田原本町教育委員会
第37次	唐古126 (唐古池)	1989. 1. 9～ 4. 11	350㎡	環濠4条、大溝、 南方砂層、井戸、 木器貯蔵穴、柱穴	井戸供献土器、卜骨、 木製牙をさした猪下 顎、内傾口縁土器、 サヌカイト原石6 点、骨針、牙製装 身具、簪	北地区 (6B・6C・6D)	田原本町教育委員会



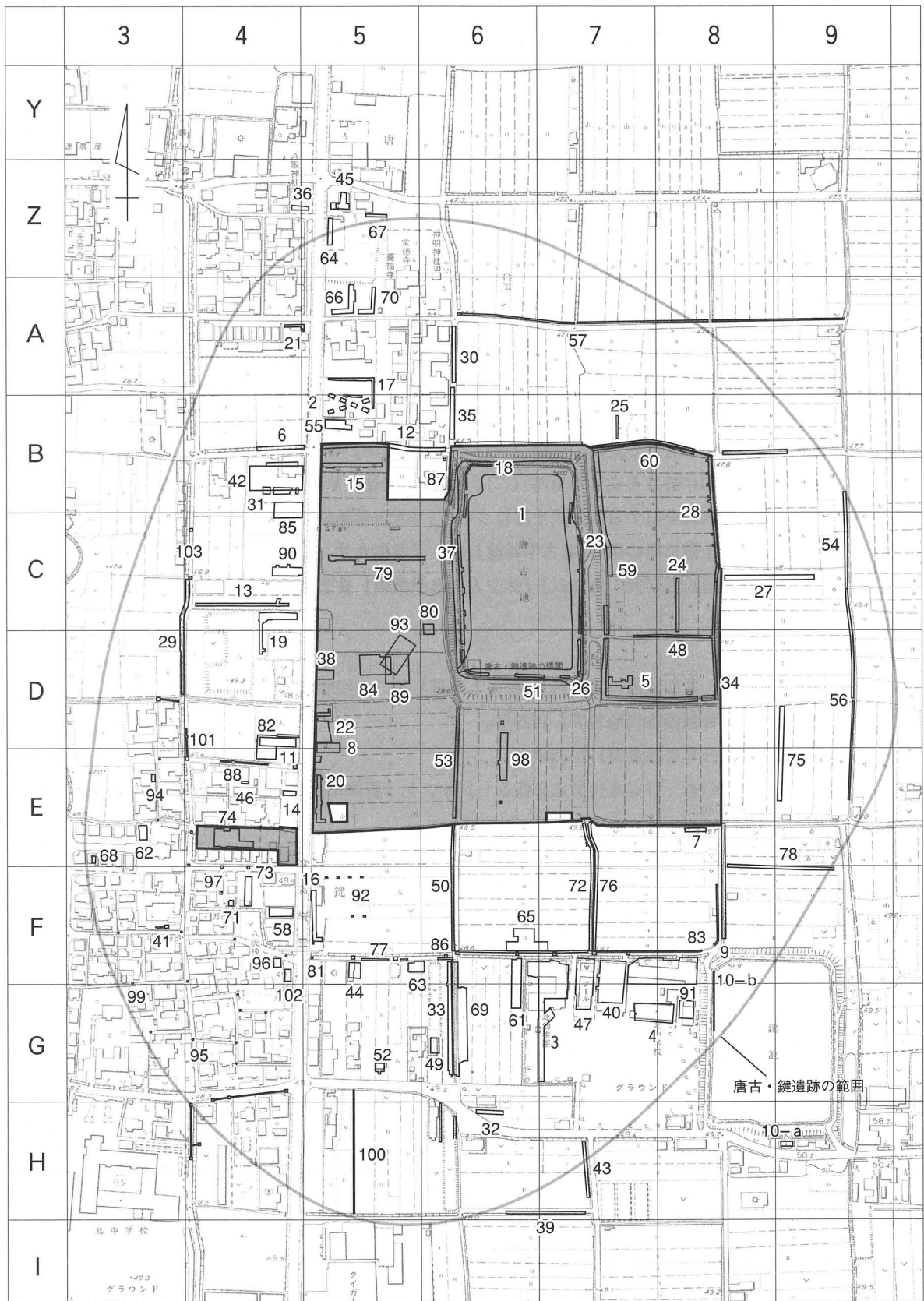
第I章 調査に至る経緯

次数	調査地	調査期間	調査面積	主要遺構	主要遺物	地区	調査機関
第38次	唐古51-1、54-1、55-1	1989. 10. 14～10. 31	72㎡	弥生前期土坑群、木器貯蔵穴、井戸 中世大溝2条	彩文土器、子持勾玉、各種木器未成品、内傾口縁土器、古式土師器	西地区(5D)	田原本町教育委員会
第39次	鍵40他	1989. 11. 7～11. 29	160㎡	弥生中期の河跡		南集落外(6H・7H)	田原本町教育委員会
第40次	鍵158-1他(北小学校体育館)	1990. 5. 11～8. 15	760㎡	環濠3条、井戸、木器貯蔵穴	青銅器鑄造関連遺物、鉄斧、勾玉形土製品、木錘12点、橋脚、着柄鋤、鋤、サメ歯	南地区(7F・7G)	田原本町教育委員会
第41次	鍵374	1990. 6. 4～6. 14	20㎡	弥生前期環濠1条	多量の丸太杭	西地区(3F)	田原本町教育委員会
第42次	唐古64-4、65-1	1990. 7. 11～9. 21	740㎡	環濠4条 中世井戸		北地区(4B・5B)	田原本町教育委員会
第43次	鍵36～40	1990. 10. 31～11. 15	150㎡	弥生中期の河跡		南集落外(7H)	田原本町教育委員会
第44次	鍵268-1	1991. 2. 12～4. 6	130㎡	大溝2条、井戸	近江・紀伊・河内産土器、凸帯文土器、銅鐸形土製品	南地区(5F)	田原本町教育委員会
第45次	唐古334、335-1	1991. 6. 5～6. 11	40㎡	弥生前期の河跡 中世大溝	前期弥生壺・杓子未成品	北集落外(5Z)	田原本町教育委員会
第46次	鍵315-1	1991. 9. 12～9. 21	10㎡	中世大溝1条	武器形木製品	西地区(4E)	田原本町教育委員会
第47次	鍵155(北小学校プール)	1991. 10. 2～12. 1	625㎡	環濠4条、橋脚	青銅器鑄造関連遺物、樓閣絵画土器	南地区(7F・7G)	田原本町教育委員会
第48次	唐古138・141・142隣接地	1991. 11. 18～1992. 1. 16	130㎡	環濠2条、土坑、柱穴	タタキ板、渦文タタキ壺、分銅形土製品、魚絵画土器、古式須恵器	北地区(7D・8D)	田原本町教育委員会
第49次	鍵263-3	1991. 12. 2～1992. 1. 21	91㎡	環濠1条、小溝、土坑	銅鏃、スッポン絵画土器	南地区(6G)	田原本町教育委員会
第50次	鍵251～261東	1992. 11. 10～12. 27	215㎡	大溝、河跡、井戸、柱穴、土器棺墓、集水施設	天竜川流域の土器、銅戈絵画土器	中央区(6E・6F)	田原本町教育委員会
第51次	唐古126(唐古池)	1993. 1. 11～2. 4	50㎡	大溝、小溝、井戸、柱穴、橋脚	ト骨、吉備の器台、榎、杓子未成品、人形土製品	北地区(6D・7D)	田原本町教育委員会
第52次	鍵266-4	1993. 2. 8～2. 26	60㎡	環濠1条、大溝	流紋岩原石、渦文タタキ壺、建物絵画土器	南地区(5G)	田原本町教育委員会
第53次	鍵242-2～249-1隣接地	1993. 11. 9～12. 28	235㎡	木器貯蔵穴、谷地形、大溝	多量の石鏃・石庖丁、鹿絵画土器、銅鏃、翡翠製勾玉、碧玉製大管玉	中央区(6D・6E)	田原本町教育委員会
第54次	唐古162～166	1993. 11. 15～11. 25	110㎡	河跡	刻み梯子、柱	東集落外(9B・9C)	田原本町教育委員会
第55次	唐古83-1	1994. 3. 7～3. 26	160㎡	環濠2条	刻み梯子未成品	北地区(5B)	田原本町教育委員会
第56次	法貴寺1085-2他	1994. 11. 17～12. 9 1995. 1. 18～1. 25	330㎡	河跡	完形土器群	東集落外(9D・9E)	田原本町教育委員会
第57次	唐古209他	1995. 3. 7～3. 13	550㎡	河跡、小溝		北集落外(6A・7A・8A・9A)	田原本町教育委員会
第58次	鍵281-1	1995. 8. 17～9. 28	138㎡	大溝2条、井戸 中世大溝、土坑	木製壺、骨針、中世土器、櫛、銭貨	西地区(4F)	田原本町教育委員会

次数	調査地	調査期間	調査面積	主要遺構	主要遺物	地区	調査機関
第59次	唐古127西隣 接水路他	1995. 11. 7 ~ 1996. 3. 15	弥生 300㎡	大溝、井戸、北方 砂層、柱穴	子持勾玉、玉類、古 式須恵器、馬骨、骨 針	北地区 (7B・7C・7D・8D)	田原本町教育委員会
			中・近世 1200㎡	中世土墳墓、井戸、 小溝	銅鈴		
第60次	唐古127-2他	1996. 11. 6 ~ 12. 26	509㎡	環濠	木製鞘	北地区 (7B・8B・9B)	田原本町教育委員会
第61次	鍵166	1996. 11. 20 ~ 1997. 3. 6	333㎡	区画溝、井戸、土 坑、柱穴	青銅器鑄造関連遺 物、翡翠製勾玉、 大管玉未成品、絵 画土器、榼、銅鏃	南地区 (6F・6G)	田原本町教育委員会
第62次	鍵379	1997. 2. 19 ~ 3. 27	80㎡	環濠1条、土坑 中世大溝、柱穴	多量の完形土器群、 水晶玉、多量のモモ 核、絵画土器、中世 土器	西地区 (3E)	田原本町教育委員会
第63次	鍵264-1	1997. 2. 25 ~ 3. 31	120㎡	区画溝、井戸、土 坑	完形土器群、 鏃、鋤未成品	南地区 (5F・6F)	田原本町教育委員会
第64次	唐古528-2他	1997. 7. 8 ~ 7. 25	92㎡	弥生前期河跡 近世大溝		北集落外 (5Z)	田原本町教育委員会
第65次	鍵171-1、 172	1997. 7. 29 ~ 1998. 3. 31	545㎡	大溝、竪穴住居跡、 井戸、炉跡状遺構	青銅器鑄造関連遺 物、銅鏃、卜骨、 完形土器群	南地区 (6F・7F)	田原本町教育委員会
第66次	唐古528-1他	1997. 9. 16 ~ 10. 11	152㎡	弥生前期河跡 近世大溝、井戸	凸帯文土器	北集落外 (5A)	田原本町教育委員会
第67次	鍵333-1	1997. 9. 24 ~ 10. 3	34㎡	弥生中期河跡	完形土器群	北集落外 (5Z)	田原本町教育委員会
第68次	鍵356-34	1998. 6. 4 ~ 6. 8	18㎡	環濠1条		西地区 (3E)	田原本町教育委員会
第69次	鍵170	1998. 7. 21 ~ 1999. 3. 31	440㎡	環濠1条、区画溝、 集水施設	完形土器群、人形 土製品、銅鐸形土 製品、銅釧、銅鏃	南地区 (6F・6G)	田原本町教育委員会
	482㎡						
第70次	唐古531-1	1998. 9. 8 ~ 9. 18	100㎡	弥生前期河跡 弥生中期河跡 近世大溝	蛸壺	北集落外 (5A)	田原本町教育委員会
第71次	鍵283-5	1998. 11. 12 ~ 11. 13	16㎡	小溝2条		西地区 (4F)	田原本町教育委員会
第72次	鍵181-1他	1999. 1. 7 ~ 3. 7	285㎡	弥生中・後期大溝 2条、前方後円墳	銅鏃、円筒・形象 埴輪、笠形木製品	中央区 (7E・7F)	田原本町教育委員会
第73次	鍵283-6	1999. 4. 12 ~ 4. 28	120㎡	大溝4条、井戸、 土坑	弥生後期完形土 器、卜骨	西地区 (4F)	田原本町教育委員会
第74次	鍵297、298- 1、298-2、 299	1999. 7. 14 ~ 12. 25	368㎡	大型建物跡、小溝、 井戸	翡翠製小玉、鹿角 製間接具付膝柄横 斧、猪牙	西地区 (4E)	田原本町教育委員会
第75次	鍵214	2000. 1. 6 ~ 3. 27	320㎡	環濠1条、河跡	弥生後期初頭完形 土器群	東環濠 (9D・9E)	田原本町教育委員会
第76次	鍵181-1他	2000. 1. 13 ~ 3. 21	236㎡	弥生中・後期大溝 7条、溝、土坑 前方後円墳	弥生後期初頭完形土 器、鳥形木製品、柱	中央区 (7E・7F)	田原本町教育委員会
第77次	鍵171-1南側 里道他	2000. 1. 21 ~ 3. 21	230㎡	中期大溝2条、土 坑、方形周溝墓	銅鐸片、楼閣絵画 土器同一個体片	南地区 (5F・6F・7F)	田原本町教育委員会
第78次	鍵202-1	2000. 2. 3 ~ 3. 31	225㎡	環濠3条、溝、土 坑	弥生後期初頭完形 土器	東環濠 (8F・9F)	田原本町教育委員会
第79次	唐古106、 107-1	2000. 8. 16 ~ 12. 21	276㎡	環濠2条、土坑、溝、 集水施設	弥生後期前葉完形土器、 東海系壺、銅鏃	西地区 (5C・6C)	田原本町教育委員会

第I章 調査に至る経緯

次数	調査地	調査期間	調査面積	主要遺構	主要遺物	地区	調査機関
第80次	唐古116-1、 117-1、118	2000.10.16～ 2001.1.24	72㎡	弥生中・後期区画 溝	翡翠製勾玉入り鳴 石容器、ガラス製 大玉、翡翠製勾玉、 銅鐸形土製品	西地区 (6C・6D)	田原本町教育委員会
第81次	鍵271-1 北側道路	2000.10.30～ 11.6	3㎡	溝 中世溝		南地区 (5F)	田原本町教育委員会
第82次	鍵309-1	2000.11.13～ 2001.1.31	237㎡	木器貯蔵穴、井戸、 土坑、小溝、柱穴、 方墳	卜骨、円筒埴輪、 黒色土器	西地区 (4D・4E)	田原本町教育委員会
第83次	鍵184-2他 東側道路、 192-1南側道路	2001.1.18～ 3.7	180㎡	環濠3条、溝、土器 棺墓、竪穴住居跡	人物絵画土器	東環濠 (7F・8F)	田原本町教育委員会
第84次	唐古121-1	2001.5.18～ 11.10	424㎡	土坑、小溝、大型 柱穴、柱穴、方墳 3基、中世大溝	銅鐸形土製品、鳥形 土製品、褐鉄鉢片、 須恵器、陶質土器	西地区 (5D)	田原本町教育委員会
第85次	唐古64-1	2001.7.11～ 9.19	226㎡	環濠2条、弥生中期 溝1条 近世井戸・土坑	瓦質井戸枠	北地区 (4B・4C・5B・5C)	田原本町教育委員会
第86次	鍵171-1他南 側道路	2002.1.22～ 2.8	62㎡	大溝、柱穴	石棒、伊勢湾沿岸土器	南地区 (5F・6F・7F)	田原本町教育委員会
第87次	唐古96	2002.4.22～ 4.24	8㎡	河跡2条		北地区 (6B)	田原本町教育委員会
第88次	鍵305 北側道路	2002.7.1～ 7.24	51.23㎡	土坑、小溝、方墳 中世大溝	搬入土器、高麗青磁	西地区 (4E)	田原本町教育委員会
第89次	唐古121-1	2002.7.30～ 12.11	500㎡	区画溝、井戸、土 坑、大型柱穴	銅鏃2	西地区 (5D)	田原本町教育委員会
第90次	唐古62-1	2002.9.11～ 10.29	70㎡	環濠4条	銅釧、木製品	西地区 (4C・5C)	田原本町教育委員会
第91次	鍵155	2002.12.2～ 2003.3.31	I.1253㎡ II.180㎡	環濠2条、溝、河跡、 土器棺墓、方形周 溝墓	翡翠製勾玉	東環濠 (7F・8F・8G)	田原本町教育委員会
第92次	鍵255-2	2003.5.13～ 5.16	12㎡	大溝2条、溝、土 坑、柱穴		中央区? (5F)	田原本町教育委員会
第93次	唐古117-1、 118、121-1	2003.5.19～ 12.11	480㎡	大型建物跡、区画 溝、小溝、土坑	木製柄付打製石戈、 銅鐸形土製品、銅 鏃、絵画土器	西地区 (5D)	田原本町教育委員会
第94次	鍵384-1	2003.7.2～ 7.14	18㎡	環濠1条、	槽	西地区 (3E)	田原本町教育委員会
第95次	鍵349他 東側道路	2003.8.4～ 8.11	12㎡	溝、土坑		西地区 (4F・4G)	田原本町教育委員会
第96次	鍵278	2003.8.19～ 9.9	45㎡	溝、土坑、中世 大溝		西地区 (4F)	田原本町教育委員会
第97次	鍵283-4他 南側道路	2003.11.21～ 12.2	17㎡	大溝、中世大溝		西地区 (4E・4F)	田原本町教育委員会
第98次	鍵238-1	2004.7.6～ 10.23	253㎡	大溝、土坑、柱穴、 竪穴住居跡	玉砥石、銅鏃、鹿 絵画土器、伊勢湾 沿岸産麩	中央区 (6D・6E)	田原本町教育委員会
第99次	鍵279-1他	2004.7.17～ 9.18	26㎡	環濠1条、溝、土坑	弧帯文土器	北地区 (3E・3F・3G 4F・4G)	田原本町教育委員会
第100次	鍵131-1、 133	2004.11.24～ 11.26	105㎡	河跡3条、土坑、溝		南集落外 (5G・5H)	田原本町教育委員会
第101次	鍵312 西側道路	2005.7.27～ 8.3	27㎡	環濠1条、土坑 中世溝、土坑 近世大溝		西地区 (4D・4E)	田原本町教育委員会
第102次	鍵271-5	2006.1.16～ 2.6	45㎡	土坑、溝、落ち込み 近世大溝	木製品未成品	西地区 (4F)	田原本町教育委員会



第6図 唐古・鍵遺跡の調査区位置図 (S=1/5,000)

註

- (1) 高橋健自「大和考古雑録」『考古界』第一篇第七号、1901年。
- (2) 飯田恒男『大和唐古石器時代遺物図集』1929年。
- (3) 上田三平「唐古遺跡の研究」『歴史と地理』第二十一卷第六号、1928年。
- (4) 森 浩一「唐古・鍵遺跡と考古学—研究の歩みと展望—」『唐古・鍵遺跡の考古学』学生社、2001年。
- (5) 濱田耕作・梅原末治・島田貞彦・鈴木文太郎『河内国府石器時代遺跡発掘報告河内国南高安及び喜志石器時代遺跡調査河内国府肥後轟等にて発掘せる人骨』『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第二冊、1918年。
- (6) 鳥居龍藏「畿内の石器時代に就て」『人類学雑誌』第三十二卷第九号、1917年。
- (7) 藤森栄一『二粒の粳』河出書房、1967年。
- (8) 梅原末治「大和磯城郡唐古の石器時代遺跡に就いて」『人類学雑誌』第三十三卷第八号、1918年。
- (9) 梅原末治「再び大和唐古の遺跡に就いて」『人類学雑誌』第三十八卷第三号、1923年。
- (10) a. 森本六爾「大和に於ける史前の遺跡（一）」『考古学雑誌』第十四卷第十号、1924年。  
b. 森本六爾「大和に於ける史前の遺跡（二）」『考古学雑誌』第十四卷第十一号、1924年。  
c. 森本六爾「大和に於ける史前の遺跡（三）」『考古学雑誌』第十四卷第十二号、1924年。
- (11) 森本六爾「原始的絵画を有する弥生式土器について」『考古学雑誌』第十四卷第四号、1924年。
- (12) 梅原末治「弥生式土器に鹿の図」『考古学雑誌』第十三卷第九号、1923年。
- (13) 橋本裕行「弥生土器絵画研究のあゆみ」『弥生人の鳥獣戯画』香芝市二上山博物館編、1996年。
- (14) 註（3）に同じ。
- (15) 註（2）に同じ。
- (16) 森本六爾「弥生式土器面絵画の新資料」『歴史と地理』第二十四卷第四号、1929年。
- (17) 森本六爾編『日本青銅器時代地名表』1929年。
- (18) 東京考古学会編『日本原始農業』1933年。
- (19) 末永雅雄『考古学の窓—日本古代文化を探る—』サンケイ新聞出版局、1964年。
- (20) 註（7）に同じ。
- (21) 末永雅雄『末永雅雄が語る大和発掘ものがたり』『社団法人橿原考古学協会調査研究成果第七冊』2004年。
- (22) 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第十六冊、1943年。
- (23) 末永雅雄「大和唐古弥生式遺跡発掘日誌」『考古学』第八卷第二号、1937年。
- (24) 末永雅雄「大和唐古池の調査」『考古学雑誌』第二十七卷第四号、1937年。
- (25) 末永雅雄「唐古遺跡調査概要」『史林』第二十三卷第一号、1937年。
- (26) 島本 一「唐古石器時代遺跡と遺物について」『大和志』第四卷第二号、1937年。
- (27) 末永雅雄「唐古遺跡発掘日誌（三）」『考古学』第八卷第四号、1937年。
- (28) 七田忠昭「唐古池に集った人々—もう一つの群像—父忠志が遺した書簡と写真から—」『みずほ』第29号、1999年。
- (29) 戸田秀典「唐古のことども」『青陵』第65号、1988年。
- (30) 奈良県立考古博物館『大和考古資料目録』第3集、1975年。
- (31) 小林行雅・杉原莊介編『弥生式土器集成』本編2、1968年。
- (32) 奈良県教育委員会『唐古弥生遺跡調査概要』1968年。
- (33) 菅谷文則「唐古・鍵遺跡第2次調査のこと、今日また明日」『みずほ』第29号、1999年。

- (34) 奈良県立橿原考古学研究所『奈良県遺跡地図』第2分冊、1971年。
- (35) 森岡秀人「私の弥生彷徨ノートから(2)一唐古遺跡から唐古・鍵遺跡へ」『みずほ』第27号、1998年。
- (36) 石野博信「大和の弥生時代」『橿原考古学研究所紀要 考古学論攷』第2冊、1973年。
- (37) 久野邦雄・寺澤薫『昭和52年度 唐古・鍵遺跡発掘調査概報』田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所編、1978年。
- (38) 寺澤薫『昭和53年度 唐古・鍵遺跡第4・5次発掘調査概報』田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所編、1979年。
- (39) 寺澤薫『昭和54年度 唐古・鍵遺跡第6・7・8・9次発掘調査概報』田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所編、1980年。
- (40) 註(39)に同じ。
- (41) 寺澤薫『昭和55年度 唐古・鍵遺跡第10・11次発掘調査概報』田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所編、1981年。
- (42) 註(38)に同じ。
- (43) 註(39)に同じ。
- (44) 田原本町教育委員会「(3) 唐古・鍵遺跡第42次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』2、1991年。
- (45) 註(39)に同じ。
- (46) 松本洋明『昭和56年度 唐古・鍵遺跡第12次発掘調査概報』田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所編、1982年。
- (47) 註(41)に同じ。
- (48) 田原本町教育委員会『昭和57年度 唐古・鍵遺跡 第13・14・15次発掘調査概報』『田原本町埋蔵文化財調査概要』1、1983年。
- (49) 註(48)に同じ。
- (50) 田原本町教育委員会『昭和58年度 唐古・鍵遺跡 第16・18・19次発掘調査概報 黒田大塚古墳第1次発掘調査概報』『田原本町埋蔵文化財調査概要』2、1984年。
- (51) 田原本町教育委員会『昭和59年度 唐古・鍵遺跡 第20次発掘調査概報 黒田大塚古墳 第2次発掘調査概報』『田原本町埋蔵文化財調査概要』3、1986年。
- (52) 田原本町教育委員会『昭和60年度 唐古・鍵遺跡 第22・24・25次発掘調査概報』『田原本町埋蔵文化財調査概要』4、1986年。
- (53) 田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡 第21・23次発掘調査概報』『田原本町埋蔵文化財調査概要』6、1988年。
- (54) 田原本町教育委員会『昭和61年度 唐古・鍵遺跡 第26次発掘調査概報』『田原本町埋蔵文化財調査概要』7、1987年。
- (55) 田原本町教育委員会「(3) 唐古・鍵遺跡第37次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』1、1990年。
- (56) 田原本町教育委員会「(2) 唐古・鍵遺跡第51次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』4、1994年。
- (57) 註(41)に同じ。
- (58) 註(52)に同じ。
- (59) 田原本町教育委員会『昭和61年度 唐古・鍵遺跡 第27・28次発掘調査概報 黒田大塚古墳 第3次発掘調査概報』『田原本町埋蔵文化財調査概要』8、1987年。
- (60) 註(59)に同じ。
- (61) 田原本町教育委員会『弥生の巨大遺跡と生活文化一弥生時代の大都市か? 30万㎡の唐古・鍵遺跡一』1989年。

- (62) 田原本町教育委員会『昭和62・63年度 唐古・鍵遺跡 第32・33次発掘調査概報』『田原本町埋蔵文化財調査概要』11、1989年。
- (63) 註(44)に同じ。
- (64) 田原本町教育委員会「(1). 唐古・鍵遺跡 第40次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』2、1991年。
- (65) 田原本町教育委員会「(3). 唐古・鍵遺跡第47次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』3、1992年。
- (66) 田原本町教育委員会「(1) 唐古・鍵遺跡第50次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』4、1994年。
- (67) 田原本町教育委員会「(8) 唐古・鍵遺跡第53次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』4、1994年。
- (68) 田原本町教育委員会「(9) 唐古・鍵遺跡第54次発掘調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』4、1994年。
- (69) 田原本町教育委員会「(1) 唐古・鍵遺跡第56次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』5、1996年。
- (70) 田原本町教育委員会「(2) 唐古・鍵遺跡第57次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』5、1996年。
- (71) 田原本町教育委員会「(8) 唐古・鍵遺跡第59次発掘調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』5、1996年。
- (72) 奈良県立橿原考古学研究所附属博物館・田原本町教育委員会『弥生の風景—唐古・鍵遺跡の発掘調査60年—』1996年。
- (73) 田原本町教育委員会「(3) 唐古・鍵遺跡 第81次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』10、2001年。
- (74) 田原本町教育委員会「(3) 唐古・鍵遺跡 第86次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』11、2002年。
- (75) 田原本町教育委員会「(2) 唐古・鍵遺跡 第88次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』12、2003年。
- (76) 田原本町教育委員会「(4) 唐古・鍵遺跡 第95次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』13、2004年。
- (77) 田原本町教育委員会「(6) 唐古・鍵遺跡 第97次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』13、2004年。
- (78) 田原本町教育委員会「唐古・鍵遺跡 第99次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』14、2006年。
- (79) 田原本町教育委員会「1. 唐古・鍵遺跡 第101次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』15、2006年。
- (80) 田原本町教育委員会「平成8年度 唐古・鍵遺跡 第60次調査概報」『田原本町埋蔵文化財調査概要』15、1997年。
- (81) 田原本町教育委員会「(5) 唐古・鍵遺跡 第77次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』9、2000年。
- (82) 田原本町教育委員会「(5) 唐古・鍵遺跡 第83次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』10、2001年。
- (83) 田原本町教育委員会「(5) 唐古・鍵遺跡 第72次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』8、1999年。
- (84) 田原本町教育委員会「(4) 唐古・鍵遺跡 第76次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』9、2000年。
- (85) 田原本町教育委員会「(5) 唐古・鍵遺跡 第91次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報』12、2003年。
- (86) 田原本町教育委員会『唐古・鍵遺跡の考古学』学生社、2001年。

## 第3節 調査に至る経緯

### 1. 内容確認調査の経緯

唐古・鍵遺跡の内容は、唐古池内の調査成果のみでほとんど明らかになっていなかったが、昭和52年、北幼稚園建替え工事に伴う発掘調査によって弥生集落の環濠や銅鐸鑄型を検出するなど多大な成果があった。田原本町では、これを受けて53年度から遺跡の範囲を確認する調査を昭和63年度まで計9次に及ぶ国庫補助事業として実施した。この範囲確認調査によって、唐古・鍵遺跡の範囲は東西600m、南北600mのほぼ円形を呈し、面積約30万㎡に及ぶことが明らかになった。このような成果を受けて、史跡指定に向けた取り組みも着手したところであった。

その後、平成5年には文化庁との史跡指定に関する打合せにより、遺跡中央部の内容、すなわち、集落構造が不明であることから、遺跡の内容を明らかにする調査を進めていくように指導を受けた。このような経緯を経て、町教育委員会は平成8年度から平成17年度までの10年計画で、内容確認調査をおこなうことになった。

調査にあたっては、考古学者・県文化財保存課・奈良県立橿原考古学研究所の職歴の方で構成される唐古・鍵遺跡調査検討委員会を設置した。委員会は、毎年開催し調査計画案から成果までの指導を受けた。第1回目となる平成8年度の委員会では、3～5年を1期として、唐古・鍵遺跡の特徴的な遺構・遺物を検出する調査の方向性が示された。この方針に沿い、平成8年度から平成10年度の3ヶ年は、青銅器鑄造関連施設を含む南地区を第61・65・69次調査として実施した。その結果、第65次調査では炉跡状遺構と多量の青銅器鑄造関連遺物が出土した。第2期にあたる平成11年度の委員会では、環濠の圍繞状況が不明確な遺跡南東側について、環濠の有無を確認する調査をおこなうよう指導を受け、遺跡南東端で第75・78次調査を実施し、東環濠帯を確認した。

平成11年1月27日には、唐古・鍵遺跡が国の史跡となり、第1歩となる遺跡保護がなされた。この史跡指定を受けた平成12年度の委員会では、今後の整備を含めた長期的な見通しとなる調査方針が審議された。すなわち、面的な調査をおこなうことによって、集落内部の構造を把握するとともにその成果を史跡整備に反映させていこうというものである。この面的な調査は、唐古池と国道に挟まれた西地区を中心とするもので、平成13年度の第84次調査、平成14年度の第89次調査、平成15年度の第93次調査に及ぶ一連の調査によって、大型建物跡の全容が明らかになった。この大型建物跡の調査にあたっては、文化庁の禰宜田佳男調査官、及び各委員による現地指導、また、専門的な立場から東北芸術工科大学（当時）宮本長二郎先生、奈良国立文化財研究所（当時）西山和宏研究員から指導を受けた。

平成16年度の委員会では、現地調査の最終年度にあたることから、これまで未着手部分で



第3表 唐古・鍵遺跡調査検討委員会 開催経過一覧表

年度	開催日	会議出席者		案件
		委員	事務局	
平成8年度	平成8年9月10日	樋口隆康・金関 恕・森 浩一・石野博信・河上邦彦・伊藤勇輔・増田亨利 岡村道雄主任文化財調査官	池田照美・仲弘司・鎌田貢・藤田三郎・清水琢哉・豆谷和之	・これまでの調査成果 ・今後の調査課題 ・平成8年度調査地の選定
平成9年度	平成9年5月26日	樋口隆康・金関 恕・佐原 真・石野博信・河上邦彦・大塚和章	吉田貢・吉田啓義・鎌田・藤田・清水・豆谷	・第61次調査の成果報告 ・平成9年度調査地の選定
平成10年度	平成10年6月12日	樋口隆康・金関 恕・森 浩一・石野博信・河上邦彦・関川尚功・大塚和章	吉田（貢）・吉田（啓）・鎌田・藤田・清水・豆谷	・第65次調査の成果報告 ・平成10年度調査地の選定
平成11年度	平成11年7月5日	樋口隆康・金関 恕・森 浩一・石野博信・河上邦彦・関川尚功・大塚和章 坂井秀弥文化財調査官	吉川幸宏・吉田（啓）・鎌田・藤田・清水・豆谷	・史跡指定と公有化事業、公園計画について ・第69次調査の成果報告 ・平成11年度調査地の選定
平成12年度	平成12年6月12日	樋口隆康・金関 恕・森 浩一・石野博信・河上邦彦・関川尚功	吉川・吉田（啓）・鎌田・藤田・清水・豆谷	・史跡地の現状報告 ・第75・78次調査の成果報告 ・第74次調査の大型建物跡について ・平成12年度調査地の選定
	平成13年3月26日 （平成13年度分）	樋口隆康・金関 恕・森 浩一・石野博信・河上邦彦・関川尚功	吉川・吉田（啓）・鎌田・藤田・清水・豆谷	・史跡地の公有化について ・第79・80次の調査成果 ・平成13年度調査地の選定
平成14年度	平成14年5月9日	樋口隆康・石野博信・松田真一・寺澤 薫・野口明英	吉川・吉田（啓）・藤田・吉田悦治・清水・豆谷	・史跡地の公有化について ・第84次調査の成果報告 ・平成14年度調査地の選定
	平成14年11月21日	樋口隆康・金関 恕・森 浩一・石野博信・松田真一・寺澤 薫・野口明英	吉川・吉田（啓）・藤田・吉田（悦）・豆谷・清水	・史跡地の公有化と追加指定について ・第89次調査の現地指導 ・平成15年度調査地の選定
平成15年度	平成15年10月6日	樋口隆康・金関 恕・工楽普通・寺澤 薫・松田真一	鎌田・藤田・豆谷・清水	・第93次調査の成果報告 ・現地指導と調査方針
	平成16年3月15日 （平成16年度分）	樋口隆康・森 浩一・石野博信・工楽普通・松田真一・寺澤 薫・塚本善章	鎌田・藤田・豆谷・清水	・史跡地の公有化について ・整備基本設計について ・第93次調査の成果報告 ・平成16年度調査地の選定 ・報告書作成について
平成16年度	平成17年3月7日	樋口隆康・金関 恕・森 浩一・石野博信・工楽普通・寺澤 薫・塚本善章	鎌田・藤田・豆谷	・第98次調査の成果報告 ・重要遺物（大型建物の柱等）の報告 ・報告書作成について ・公有化と整備計画
平成17年度	平成18年3月23日	樋口隆康・金関 恕・森 浩一・寺澤 薫・西藤清秀・塚本善章	鎌田・藤田・吉田（悦）・清水・豆谷・奥谷・石川	・報告書作成について ・平成17年度の調査概要 ・史跡地の公有化

あった遺跡の中央部について調査するよう指導を受け、唐古池の南側において第98次調査を実施した。

なお、発掘調査の現地説明会は、第69次調査を平成11年1月29日に、第79次調査を平成12年11月25日に、第93次調査で平成15年10月19日に開催した。また、各年度の調査成果については、田原本町郷土資料展示室において、「発掘速報展」として開催した。

## 2. 調査体制

平成8年度

(唐古・鍵遺跡調査検討委員会)

天理大学教授	金関 恕
同志社大学教授	森 浩一
国立歴史民俗博物館副館長	佐原 真
香芝市二上山博物館長	石野博信
奈良県教育委員会文化財保存課課長補佐	伊藤勇輔
奈良県教育委員会文化財保存課埋蔵文化財係長	増田享利
奈良県立橿原考古学研究所長	樋口隆康
奈良県立橿原考古学研究所調査研究部長 (指 導)	河上邦彦
文化庁記念物課主任文化財調査官 (事務局)	岡村道雄
田原本町教育委員会 教育長	岩井光男
教育次長	池田照美
文化財保存課 課 長	仲 弘司
課長補佐	鎌田 貢
調査係長	藤田三郎
技 師	清水琢哉
〃	豆谷和之

平成10年度

(唐古・鍵遺跡調査検討委員会)

大阪府立弥生文化博物館長	金関 恕
同志社大学教授	森 浩一
国立歴史民俗博物館長	佐原 真
香芝市二上山博物館長	石野博信
奈良県教育委員会文化財保存課課長補佐	関川尚功
奈良県教育委員会文化財保存課埋蔵文化財係長	大塚和章
奈良県立橿原考古学研究所長	樋口隆康
奈良県立橿原考古学研究所調査研究部長 (指 導)	河上邦彦
文化庁記念物課主任文化財調査官 (事務局)	岡村道雄
田原本町教育委員会 教育長	森口 淳
教育次長	吉田 貢
文化財保存課 課 長	吉田啓義
課長補佐	鎌田 貢
調査係長	藤田三郎
技 師	清水琢哉
〃	豆谷和之

平成9年度

(唐古・鍵遺跡調査検討委員会)

大阪府立弥生文化博物館長	金関 恕
同志社大学教授	森 浩一
国立歴史民俗博物館教授	佐原 真
香芝市二上山博物館長	石野博信
奈良県教育委員会文化財保存課課長補佐	伊藤勇輔
奈良県教育委員会文化財保存課埋蔵文化財係長	大塚和章
奈良県立橿原考古学研究所長	樋口隆康
奈良県立橿原考古学研究所調査研究部長 (指 導)	河上邦彦
文化庁記念物課主任文化財調査官 (事務局)	岡村道雄
田原本町教育委員会 教育長	森口 淳
教育次長	吉田 貢
文化財保存課 課 長	吉田啓義
課長補佐	鎌田 貢
調査係長	藤田三郎
技 師	清水琢哉
〃	豆谷和之

平成11年度

(唐古・鍵遺跡調査検討委員会)

大阪府立弥生文化博物館長	金関 恕
同志社大学教授	森 浩一
国立歴史民俗博物館長	佐原 真
香芝市二上山博物館長	石野博信
奈良県教育委員会文化財保存課課長補佐	関川尚功
奈良県教育委員会文化財保存課埋蔵文化財係長	大塚和章
奈良県立橿原考古学研究所長	樋口隆康
奈良県立橿原考古学研究所調査研究部長 (指 導)	河上邦彦
文化庁記念物課文化財調査官 (事務局)	坂井秀弥
田原本町教育委員会 教育長	森口 淳
教育次長	吉川幸宏
文化財保存課 課 長	吉田啓義
課長補佐	鎌田 貢
調査係長	藤田三郎
技 師	清水琢哉
〃	豆谷和之

第I章 調査に至る経緯

平成12年度

(唐古・鍵遺跡調査検討委員会)

大阪府立弥生文化博物館長	金関 恕
同志社大学名誉教授	森 浩一
国立歴史民俗博物館長	佐原 真
香芝市二上山博物館長	石野博信
奈良県教育委員会文化財保存課課長補佐	関川尚功
奈良県教育委員会文化財保存課埋蔵文化財係長	大塚和章
奈良県立橿原考古学研究所長	樋口隆康
奈良県立橿原考古学研究所調査研究部長	河上邦彦
(指 導)	
文化庁記念物課文化財調査官 (事務局)	榎宜田佳男
田原本町教育委員会 教育長	森口 淳
教育次長	吉川幸宏
文化財保存課 課 長	吉田啓義
課長補佐	鎌田 貢
調査係長	藤田三郎
技 師	清水琢哉
〃	豆谷和之
臨時職員	藤田慎一

平成14年度

(唐古・鍵遺跡調査検討委員会)

大阪府立弥生文化博物館長	金関 恕
同志社大学名誉教授	森 浩一
国立歴史民俗博物館長	佐原 真
香芝市二上山博物館長	石野博信
奈良県教育委員会文化財保存課主幹	寺澤 薫
奈良県教育委員会文化財保存課副主幹	野口明英
奈良県立橿原考古学研究所長	樋口隆康
奈良県立橿原考古学研究所調査研究部長	松田真一
(指 導)	
文化庁記念物課文化財主任調査官 (事務局)	坂井秀弥
田原本町教育委員会 教育長	森口 淳
教育次長	吉川幸宏
文化財保存課 課 長	吉田啓義
課長補佐	藤田三郎
調査係長	吉田悦治
主 査	清水琢哉
〃	豆谷和之
臨時職員	奥谷知日朗

平成13年度

(唐古・鍵遺跡調査検討委員会)

大阪府立弥生文化博物館長	金関 恕
同志社大学名誉教授	森 浩一
国立歴史民俗博物館長	佐原 真
香芝市二上山博物館長	石野博信
奈良県教育委員会文化財保存課課長補佐	関川尚功
奈良県教育委員会文化財保存課埋蔵文化財係長	大塚和章
奈良県立橿原考古学研究所長	樋口隆康
奈良県立橿原考古学研究所調査研究部長	河上邦彦
(指 導)	
文化庁記念物課主任文化財調査官 (事務局)	岡村道雄
田原本町教育委員会 教育長	森口 淳
教育次長	吉川幸宏
文化財保存課 課 長	吉田啓義
課長補佐	鎌田 貢
調査係長	藤田三郎
技 師	清水琢哉
〃	豆谷和之
臨時職員	藤田慎一

平成15年度

(唐古・鍵遺跡調査検討委員会)

大阪府立弥生文化博物館長	金関 恕
同志社大学名誉教授	森 浩一
香芝市二上山博物館長	石野博信
大阪府立狭山池博物館長	工楽善通
奈良県教育委員会文化財保存課主幹	寺澤 薫
奈良県教育委員会文化財保存課埋蔵文化財係長	塚本善章
奈良県立橿原考古学研究所長	樋口隆康
奈良県立橿原考古学研究所調査研究部長	松田真一
(事務局)	
田原本町教育委員会 教育長	森口 淳
教育次長	総村 貢
文化財保存課 課 長	鎌田 貢
課長補佐	藤田三郎
〃 (兼事務取扱)	吉田悦治
主 査	清水琢哉
〃	豆谷和之
臨時職員	奥谷知日朗

## 平成16年度

(唐古・鍵遺跡調査検討委員会)

大阪府立弥生文化博物館長	金関 恕
同志社大学名誉教授	森 浩一
香芝市二上山博物館長	石野博信
大阪府立狭山池博物館長	工楽善通
奈良県教育委員会文化財保存課主幹	寺澤 薫
奈良県教育委員会文化財保存課埋蔵文化財係長	塚本善章
奈良県立橿原考古学研究所長	樋口隆康
奈良県立橿原考古学研究所調査研究部長 (事務局)	松田真一

田原本町教育委員会	教育長	森口 淳
	教育次長	忍村 貢
文化財保存課	課 長	鎌田 貢
	課長補佐	藤田三郎
	〃 (兼事務取扱)	吉田悦治
	主 査	清水琢哉
	〃	豆谷和之
	臨時職員	奥谷知日朗
	〃	櫻井拓馬

## 平成18年度

(唐古・鍵遺跡調査検討委員会)

大阪府立弥生文化博物館長	金関 恕
同志社大学名誉教授	森 浩一
香芝市二上山博物館長	石野博信
大阪府立狭山池博物館長	工楽善通
奈良県教育委員会文化財保存課主幹	西藤清秀
奈良県教育委員会文化財保存課埋蔵文化財係長	塚本善章
奈良県立橿原考古学研究所長	樋口隆康
奈良県立橿原考古学研究所調査研究部長 (事務局)	寺澤 薫

田原本町教育委員会	教育長	森口 淳
	教育次長	森本至完
文化財保存課	課 長	鎌田 貢
	課長補佐	藤田三郎
	〃 (兼事務取扱)	吉田悦治
	主 査	清水琢哉
	〃	豆谷和之
	臨時職員	奥谷知日朗
	〃	石川ゆずは

## 平成17年度

(唐古・鍵遺跡調査検討委員会)

大阪府立弥生文化博物館長	金関 恕
同志社大学名誉教授	森 浩一
香芝市二上山博物館長	石野博信
大阪府立狭山池博物館長	工楽善通
奈良県教育委員会文化財保存課主幹	西藤清秀
奈良県教育委員会文化財保存課埋蔵文化財係長	塚本善章
奈良県立橿原考古学研究所長	樋口隆康
奈良県立橿原考古学研究所調査研究部長 (事務局)	寺澤 薫

田原本町教育委員会	教育長	森口 淳
	教育次長	森本至完
文化財保存課	課 長	鎌田 貢
	課長補佐	藤田三郎
	〃 (兼事務取扱)	吉田悦治
	主 査	清水琢哉
	〃	豆谷和之
	臨時職員	奥谷知日朗
	〃	石川ゆずは

## 平成19年度

(事務局)

田原本町教育委員会	教育長	濱川利郎
	教育次長	森本至完
文化財保存課	課 長	鎌田 貢
		(平成19年9月まで)
		青木行延
		(平成19年10月から)
	課長補佐	藤田三郎
	〃 (兼事務取扱)	殿村欣也
	主 査	清水琢哉
	〃	豆谷和之
	臨時職員	奥谷知日朗
	〃	石川ゆずは
		(平成19年12月まで)

第 I 章 調査に至る経緯

平成20年度

(事務局)

田原本町教育委員会	教育長	濱川利郎
	教育次長	松原伸兆
文化財保存課	課長	青木行延
	課長補佐	藤田三郎
	◇ (兼事務取扱)	殿村欣也
	主査	清水琢哉
	◇	豆谷和之
	臨時職員	奥谷知日朗
	◇	西岡成晃

## 第Ⅱ章 南地区の調査

### 第1節 既往の調査と成果

唐古・鍵遺跡における南地区とは、第3次調査を契機としてそれまで唐古池を中心とする大字唐古で想定されていた遺跡範囲が南側の大字鍵地内にまで拡がることとなり、地形的にも唐古池の土坑群とは微高地を越えることから区別し、以後の周辺における調査成果を加え把握した遺跡範囲南側の遺構集中区である。

第3次は、北幼稚園の新築に伴い昭和52年度におこなわれ、唐古池の第1次調査から経ること40年にして大規模で本格的な発掘調査となった。この調査で、多量の弥生土器・石器・木製品とともに集落南端を囲んだと考えられる大溝3条を検出したことにより、「唐古遺跡」が唐古池周辺のみならず大字鍵まで拡がっていることが判明し、「唐古・鍵遺跡」へと遺跡名称が変更されることになった。また、石製銅鐸鑄型片や土製鑄型外枠、銅滴等の青銅器鑄造関連遺物が出土したことにより、付近に弥生時代の青銅器鑄造工房のあることが想定された。このように南地区は青銅器生産に関わる地区として重要視されたにもかかわらず、付近では第3次調査の翌年度（昭和53年度）におこなわれた北小学校校舎増築に伴う第4次調査（本書では東環濠に分類）以降に調査はなく、実態は永らく不明となっていた。

田原本町教育委員会では昭和62年度に、集落南端を明らかにすべく第3次調査区から西へ約60m離れた水田で範囲確認調査を第33次として実施した。その結果、集落南端を画する環濠を始めとする弥生時代中期初頭から弥生時代後期後葉までの濃密な遺構分布及び遺物包含層を確認するとともに、弥生時代中期前葉の細形銅矛片を転用した鑿や弥生時代中期中葉の木製戈等といった特殊遺物が出土するに至り、青銅器鑄造工房として以外にも南地区の重要性が認識されるようになった。

さらに、田原本北小学校の施設（体育館・プール）老朽化に伴いおこなわれた第40・47次調査では、居住域の南東端を画した環濠4条と、橋脚基礎と考えられる柱材を検出している。環濠4条は弥生時代中期前葉には掘削され、居住域側の1条は弥生時代中期中葉の粗砂層で埋没するが、他3条は古墳時代初頭まで再掘削を続けている。橋脚基礎と考えられる柱材については、検出環濠はそれぞれ異なるが弥生時代中期前葉と弥生時代後期初頭のものを確認している。この地が、継続的な集落への出入り口であったと考えられる。また、第47次調査では2階建て建物（楼閣）を描いた絵画土器が出土し、弥生時代の高度な建築技術を示すものとして、考古学界のみならず建築史学界からも注目を集め、一般にも大きく報道された。第40・47次調査は、第3次調査区の隣接地でもあり、青銅器鑄造関連遺物及び工房遺構の検出が期待され

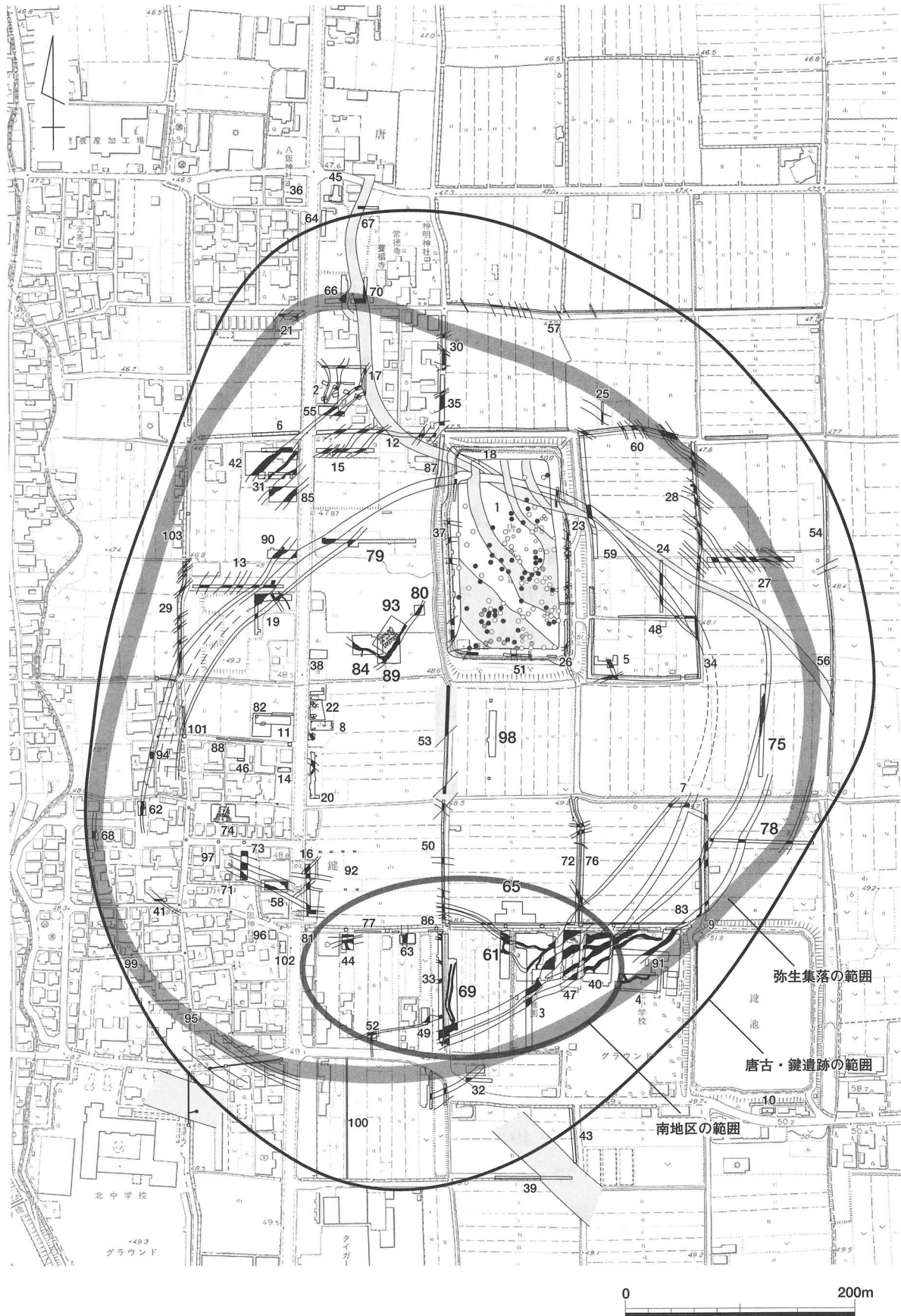
第4表 南地区の調査一覧表

次数	調査地	原因	調査期間	調査面積	調査担当者	文献
第3次	鍵161他	幼稚園建設	1977.8.1～11.15	1000㎡	久野 邦雄 寺澤 薫	『昭和52年度 唐古・鍵遺跡発掘調査概報』1978年
第32次	鍵142-4	農家住宅	1987.9.10～9.15	31.5㎡	藤田 三郎	『田原本町埋蔵文化財調査概要』11 1989年
第33次	鍵262-1	範囲確認	1987.11.5～1988.5.1	300㎡	藤田	『田原本町埋蔵文化財調査概要』11 1989年
第40次	鍵158-1他	小学校体育館改築	1990.5.11～8.15	760㎡	藤田・北野 隆亮	『田原本町埋蔵文化財調査年報』2 1991年
第44次	鍵268-1	農業用倉庫	1991.2.12～4.6	130㎡	藤田	『田原本町埋蔵文化財調査年報』2 1991年
第47次	鍵155	プール改築	1991.10.2～12.1	625㎡	藤田	『田原本町埋蔵文化財調査年報』3 1992年
第49次	鍵263-3	農業用倉庫	1991.12.2～1992.1.21	91㎡	藤田	『田原本町埋蔵文化財調査年報』3 1992年
第52次	鍵266-4	農家住宅	1993.2.8～2.26	60㎡	藤田	『田原本町埋蔵文化財調査年報』4 1994年
第61次	鍵166	範囲(内容)確認	1996.11.20～1997.3.6	333㎡	藤田・豆谷 和之	本報告
第63次	鍵264-1	農業用倉庫	1997.2.25～3.31	120㎡	豆谷	『田原本町埋蔵文化財調査年報』6 1997年
第65次	鍵171-1、172	範囲(内容)確認	1997.7.29～1998.3.31	545㎡	藤田・豆谷	本報告
第69次	鍵170	範囲(内容)確認	1998.7.21～1999.3.31	440㎡	藤田・豆谷	本報告
	鍵170西側里道及び水路	道路改良		482㎡		
第77次	鍵171-1南側里道他	通学路整備	2000.1.21～3.21	230㎡	藤田	『田原本町埋蔵文化財調査年報』9 2000年
第86次	鍵171-1他南側道路	下水道	2002.1.22～2.8	62㎡	豆谷	『田原本町埋蔵文化財調査年報』11 2002年

たが、予想に反しそれらの遺物は少なかった。この調査により、青銅器鑄造工房の位置が第3次調査区の北か西のどちらかに限定されることになった。

上記の成果をもとに、平成8年度からの範囲(内容)確認調査(第61・65次)及び通学路・農道等の整備事業に伴う発掘調査(第77次)では、北幼稚園周辺に想定されていた青銅器鑄造工房の実態が解明された。第65次調査区を中心として青銅器鑄造関連遺物が散らばり、そこから30mも離れれば激減する状況は、工房を限定させるものである。その分布の中心において、著しい被熱面を検出したことは、それを炉跡状遺構とすることへの大きな拠り所となった。第77次調査区からは、銅鐸片が出土していることも特筆されよう。なお、第61・65次調査では、副産物として弥生時代中期前葉の大溝群を検出した。弥生時代中期前葉においては、この大溝群が南地区の北端を画していた可能性が高い。大溝群の上面幅は約40.0mにも及び、弥生時代中期中葉の洪水に伴うと考えられる粗砂で埋没していた。この粗砂層は、第40・47次調査区の環濠でも確認されており、遺跡南東部からの流入が予想された。第65次調査区では、粗砂層の上面が青銅器工房を含む弥生時代中期中葉後半以降の遺構検出面となる。また、第65次調査区から第61次調査区の北半において、弥生時代後期後葉の土器が多量に廃棄された方形にめぐる溝を3ヶ所で検出しているが、これらは方形周溝墓であり墓域を形成している可能性が高い。

続く範囲(内容)確認調査の第69次は、第33次調査から想定された南地区中心部の実態解



第7図 南地区の位置 (S = 1/5,000)



明を目的とした。この調査で検出した弥生時代中期後葉～後期初頭の並行する溝2条は、取り付いた南側環濠と期を一にして掘削されており計画性がうかがえる。この溝2条が画した東側には、第61次調査区から続く微高地があり、そこに南地区の中心部が想定されるようになった。

これら調査の蓄積により、南地区は弥生時代前期の遺構・遺物が少なく、その成立が北地区や西地区に対して遅れることが判明した。しかし、青銅器生産が確実となる弥生時代中期後葉から弥生時代後期初頭にかけては、溝の付け替えや環濠の掘削がおこなわれており、地区内での著しい改変がうかがえる。特に第69次調査で検出した2条の区画溝は、その中心部を囲んでいることが予想される。この段階には、南地区が唐古・鍵遺跡全体の中核機能を担っていた可能性が想定されるのである。

以上のように南地区は、調査者によって地形、遺構分布状況等から任意で設定されている。当初は青銅器生産に関わる地区と認識され現北幼稚園・小学校付近が重視されていたが、以後の発掘調査による遺構の集中、特殊遺物の出土からその中心を現北幼稚園・小学校の西側へと求め、また微高地の拡がりが見らくなるにつれおおよその範囲を想定するようになった。その具体的な範囲としては、南北は第33・69次調査区の北端から南端までの約100m、東西は東の第3次調査区から、西については調査が少なく不明な点もあるが国道24号線付近までを想定するならば約200mの居住域が想定される。その周囲を、第33・40・47・69次調査の南環濠帯や、第61・65次調査の北側区画溝群といった大溝群がめぐっていたと考えられる。このうち、北側区画溝群については弥生時代中期初頭～中期前葉に掘削され、弥生時代中期中葉には洪水砂で埋没する。その埋没後には、居住域となりやがて一部が青銅器工房となっている。北側区画溝群上に形成された遺構については、南地区に含めて考えた。なお、この地は弥生時代後期後葉には、方形周溝墓と土器棺墓で構成される墓域となっている。このように、南地区の範囲とは固定的なものではなく、時期によって縮小・拡大するものと考えられる。

南地区は、その範囲や内容が時期によって異なり、一様なものではない。その南地区を一時期の遺構の特徴的な性格によってさらに小区分することは、誤解を生じさせる要因ともなりかねないことを危惧する。しかし、既往の調査の報告にあたっては、調査次数の順番に並べるよりも、近接する調査区をまとめて遺構のつながりが把握できるように考慮した。これは、報告のための便宜的なものであって、かならずしもその小区分が遺跡内容を示しているというわけではないことを断っておきたい。

1. 南東環濠帯 : 第3・40・47次
2. 南環濠帯及び居住域 : 第32・33・49・52・63次
3. 区画溝域及びその他 : 第44・77・86次

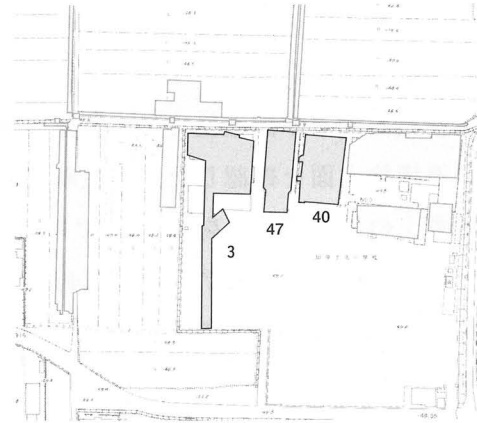
なお、南地区の範囲（内容）確認調査分としては、第61・65・69次調査がある。第61・65次は青銅器工房に関する調査であり、第69次は居住域の調査である。第2節以下に詳細を報告している。その他、第83次調査区の一部は、南地区の「1. 南東環濠帯」に含まれているが、第Ⅲ章の東環濠において報告する。

## 1. 南東環濠帯

## 第3・40・47次調査

## a. 第3次調査

**調査区** 第3次調査区は、遺跡範囲の南側にあたり、西側に第61次調査区、北側に第65次調査区、東側に第47次調査区が隣接する。北幼稚園の新築に伴い、田原本町教育委員会・奈良県立橿原考古学研究所が発掘調査をおこなった。当初、新築予定地が南北に長いので、遺構の有無確認のために長さ100m、幅5mのトレンチを2本並行して設定した。その後、北側に遺構・遺物が集中したため、その部分についてトレンチを繋ぎ、さらに西側へ拡張している。



第8図 南東環濠帯調査区の位置 (S=1/4,000)

**遺構検出面** 本調査区では、古墳時代初頭（第Ⅲ層：暗褐色土の上面）、弥生時代中期・後期（第Ⅳ層：灰褐色土の上面）の2面の遺構検出面を確認した。このうち、弥生時代中期遺構は第Ⅳ層：灰褐色土を2～3cm被っている。なお、第Ⅴ層：黒灰色粘質土は前期弥生土器を含んでおり、弥生時代前期遺構群の拡がりも予想されたが、未調査である。

**検出遺構** 本調査区では、西南西－東北東に走行する弥生時代中期前葉の大溝（SD-02・06）を検出した。また、内側の大溝（SD-06）からは、西北西－東南東に走行する大溝（SD-07）が分流する。この大溝の上面を、弥生時代後期初頭に溝2条（SD-04・05）が再掘削される。これら溝群よりも内側となる調査区北端部では、土坑群が検出されている。

弥生時代中期前葉：大溝3条

弥生時代中期後葉：土坑1基

弥生時代後期：土坑3基、溝5条（うち再掘削溝3条）

古墳時代初頭：土坑4基

**備考** 本調査区では、集落南端を画すると考えられる大溝3条（SD-02・06・07）を検出した。このうち、南側のSD-02は弥生時代後期以前に掘削され、後期前葉と後期後葉に再掘削を受ける。多量の弥生時代後期前葉の土器とともに木製農耕具（鋤・泥除未成品・広鋤）、その他木製品が多数出土した。第69次調査区のSD-109に繋がると考えられる。SD-06・07の掘削は弥生時代中期前葉に遡ると考えられ、第61次調査区のSD-151に繋がる。

本調査において特筆すべきは、石製銅鐸鑄型及び土製鑄型外枠等の青銅器鑄造関連遺物が出土したことである。青銅器鑄造関連遺物は、弥生時代後期初頭のSD-04・05に集中する。両溝は、先行大溝であるSD-07の堆積土上面に並行して掘削されており、西側に隣接する第61次調査区のSD-102B・101Bに繋がる。なお、両溝の北側では、弥生時代中期後葉、後期、古墳時代初頭の土坑が検出されており、居住域であったと考えられる。

b.第40次調査

**調査区** 第40次調査区は、遺跡範囲の南側でも東寄りにあたり、西側に第47次調査区、東側に第91次調査区が隣接する。北小学校体育館の改築に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は体育館の平面形に合わせた南北に長い長方形で、南北36m、東西21mに設定した。

**遺構検出面** 本調査区では、弥生時代後期～古墳時代初頭、弥生時代前期～中期前葉の2面の遺構検出面を確認した。弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構検出面は、第Ⅳ層：暗黄灰色粘質土の上面で、標高47.70mである。弥生時代前期～中期前葉の遺構検出面は、第Ⅵ層：暗灰黄色粘質土の上面で、標高47.40mである。

**検出遺構** 本調査区では、弥生時代中期前葉に北東－南西に走行する大溝が3条（SD-104・102B・103B）掘削され、うち外側の2条（SD-102・103）は再掘削を受けて弥生時代後期まで継続する。これら大溝は、集落南端部を画した環濠と考えられる。

弥生時代前期　　：土坑1基

弥生時代中期前葉：大溝3条

弥生時代後期　　：大溝3条（再掘削）

古墳時代初頭　　：土坑1基、大溝2条（再掘削）

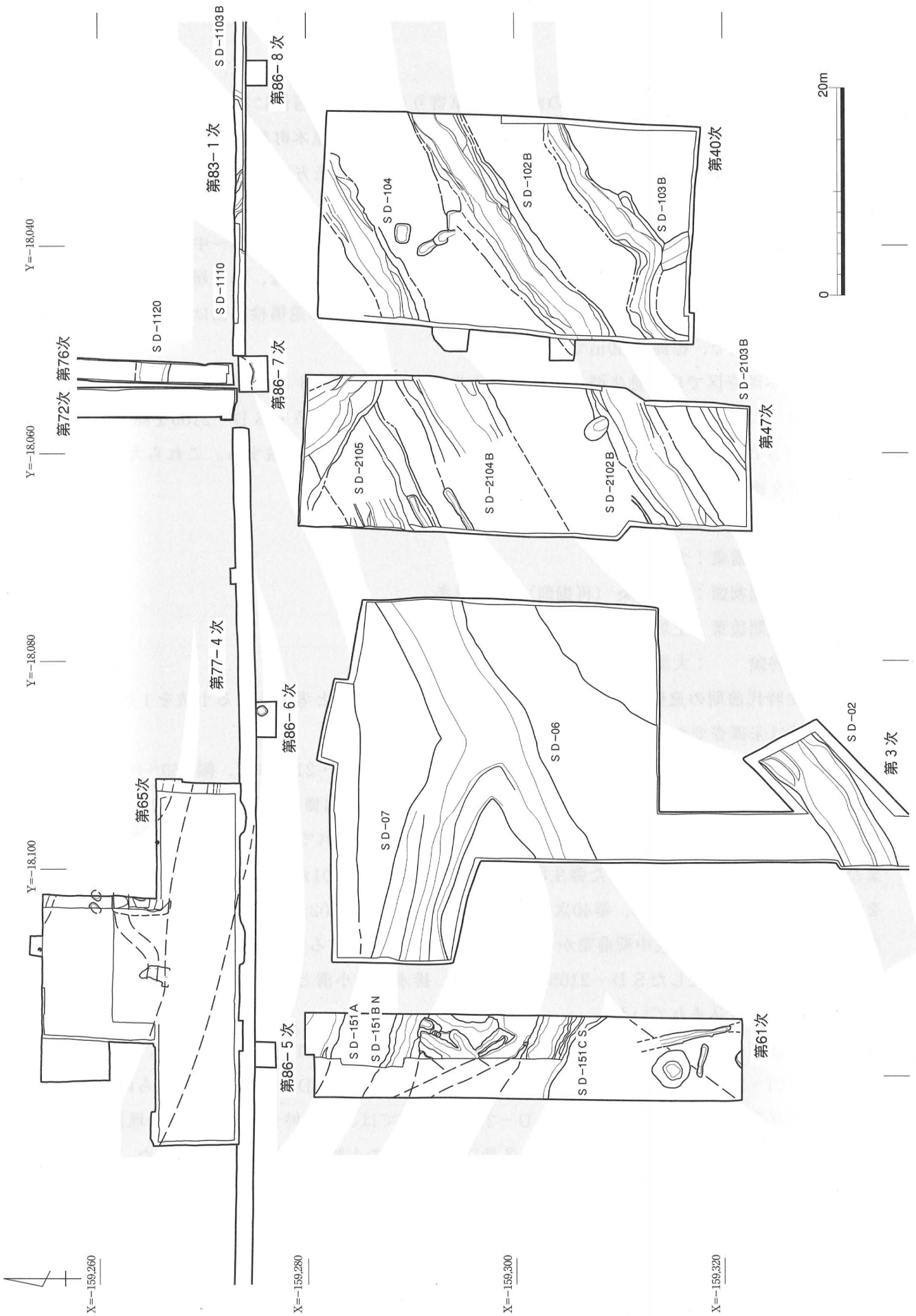
**備考** 本調査区では、弥生時代前期の遺構は少なく、北端で検出した木器貯蔵穴のみである。

弥生時代中期前葉には、北東－南西に走行する大溝3条（SD-104・102B・103B）が掘削される。北側のSD-104は幅約6.0m、深さ2.30mを測り、砂層で埋没する。中央のSD-102Bは、幅約5.5mを測り、砂層で埋没するが、弥生時代後期初頭の再掘削によって取り除かれる。南側のSD-103Bは、幅3～4mと先の2条と比べて細く、砂層は認められない。

弥生時代後期初頭には、SD-102B・103Bが再掘削を受ける。このうち、SD-102BはSD-101とSD-102に分流される。SD-101は、ほぼ東－西に走行し、SD-104の西延長である第47次SD-2104Bの上面を再掘削する。本溝からは、調査区西端でミニチュア土器や勾玉形土製品4点が集中し、東端では板状鉄斧が出土している。本溝は弥生時代後期後葉末に再掘削を受け、古墳時代初頭まで継続する。SD-102は、先行溝であるSD-102Bに沿って北東－南西に走行する。本溝では、調査区西端の溝中央において、橋脚の基礎部分と考えられる柱を検出している。第47次調査の成果も合わせ、集落の出入りが想定される。また、本溝からは送風管も3点出土している。本溝は、弥生時代後期後葉末に埋没する。SD-103は、弥生時代後期後葉末の再掘削を受け、古墳時代初頭まで継続する。

古墳時代初頭の遺構として再掘削環濠2条以外に、土坑を検出している。SK-101は、径2.50m、深さ1.80mの円筒状の井戸と考えられる。本坑の下層からは完形の壺や甕9点、中層から木錘12点出土した。

本調査区はこのように南地区環濠帯部分にあたり、居住関連遺構の検出は少ない。青銅器鑄造関連遺物の出土は、第3次調査の成果も合わせ、付近に青銅器鑄造工房を予想させる。



第9図 南東環濠帯 弥生時代中期遺構配置図 (S = 1/500)

c.第47次調査

**調査区** 第47次調査区は、遺跡範囲の南側でも東寄りにあたり、西側に第3次調査区、東側に第40次調査区が隣接する。北小学校プールの改築に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区はプールの平面形に合わせた南北に長い長方形で、南北43m、東西15mに設定した。

**遺構検出面** 本調査区では、弥生時代後期～古墳時代初頭、弥生時代前期～中期前葉の2面の遺構検出面を確認した。弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構検出面は、第Ⅳ層：暗灰褐色土（砂質）の上面で、標高47.70mである。弥生時代前期～中期前葉の遺構検出面は、第Ⅴ層：茶灰色粘質土の上面で、標高47.50mである。

**検出遺構** 本調査区では、弥生時代中期前葉に北東－南西に走行する大溝が4条（北から南へ順にSD-2105・2104B・2102B・2103B）掘削されており、うちSD-2105を除く3条は再掘削（SD-2101・2102・2103）を受けて古墳時代初頭まで継続する。これら大溝は、集落南端部を画した環濠と考えられる。

弥生時代前期　　：土坑1基

弥生時代中期前葉：大溝4条

弥生時代後期初頭：大溝3条（再掘削）、小溝3条

弥生時代後期後葉：土坑1基、溝1条

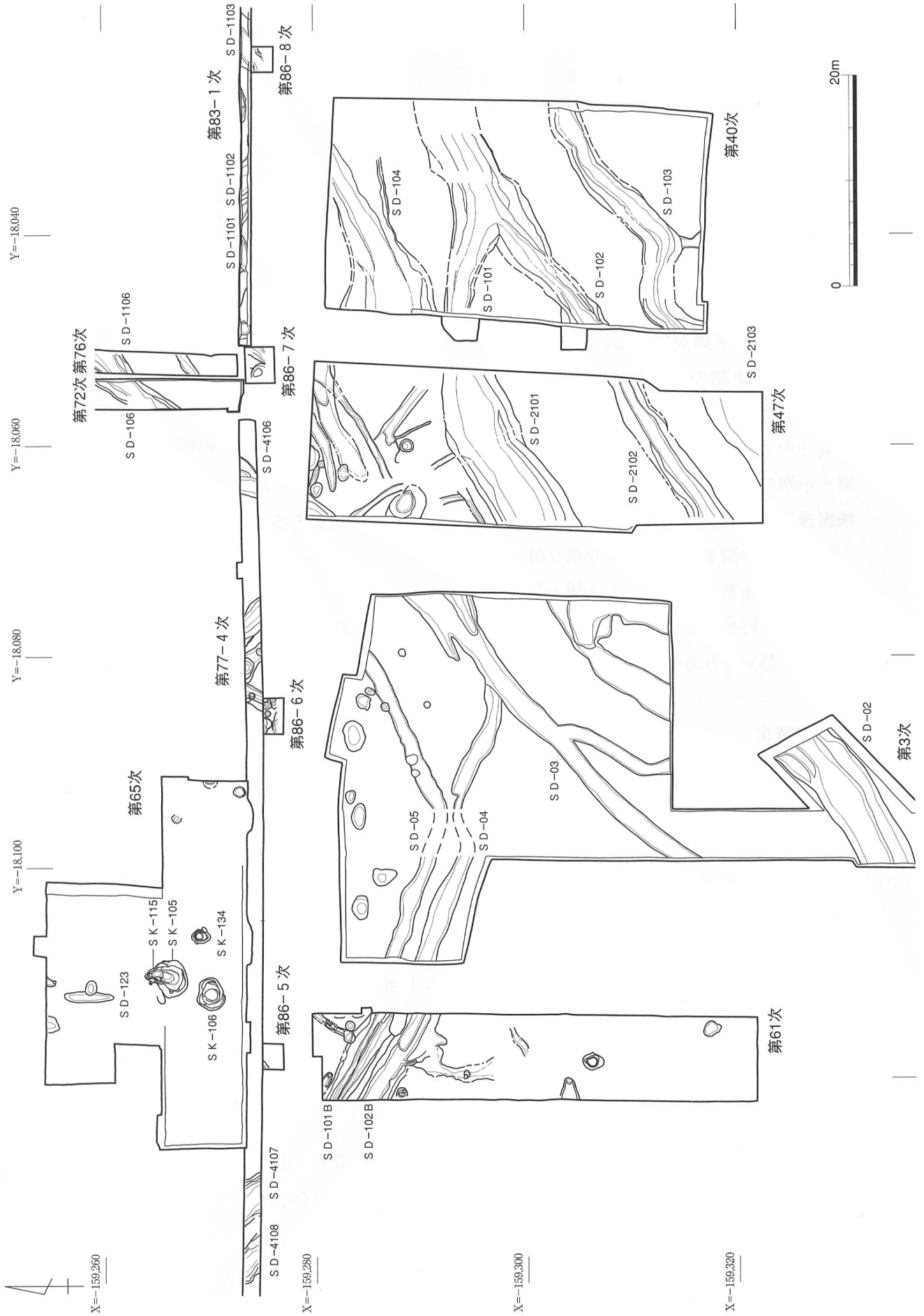
古墳時代初頭　　：大溝3条（再掘削）

**備考** 弥生時代前期の遺構は、SD-2104B南肩で木器貯蔵穴と考えられる土坑を1基検出したが、他は未調査である。

弥生時代中期前葉の大溝4条のうち、北側の2条SD-2105・2104Bは、幅7.50～8.50m、深さ1.80～2.00mを測る大規模なもので、より居住域にちかい内側の環濠である。このうち、SD-2105には、南肩に長さ約230cmもある杭が斜めに打ち込まれており、橋脚と考えられる。また、SD-2104Bを再掘削した弥生時代後期初頭のSD-2101からも、調査区中央で橋脚を検出した。本調査区周辺は、第40次調査区においてもSD-102から橋脚と考えられる柱根を検出しており、弥生時代中期前葉から弥生時代後期まで継続する集落南東部の出入り口と考えられる。また、埋没したSD-2105の上面には、排水用の小溝と考えられるSD-2108・2109・2112が掘り込まれていた。

弥生時代後期初頭には、先述の大溝4条のうちSD-2104B・2102B・2103Bが、それぞれSD-2101・2102・2103の再掘削を受ける。これらのうち、SD-2101・2102からは、青銅器製造関連遺物が出土した。また、SD-2101については、弥生時代後期後葉末の埋没後、再掘削を受けて古墳時代初頭まで機能し、多量にその時期の土器が出土している。また、調査区北西端を切って、弥生時代後期後葉のSD-2110が掘削される。

なお、本調査区では特筆すべき遺物として、「楼閣」を描いた絵画土器が出土している。



第10図 南東環濠帯 弥生時代中期後葉～後期初頭遺構配置図 (S = 1/500)

## 2. 南環濠帯及び居住域

### 第32次調査

**調査区** 第32次調査区は、遺跡範囲の南端部にあたり、第33・69次調査区から南へ約25mに位置する。農家住宅の新築に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は、東西に細長く長さ21m、幅1.5mの小規模なものである。

**遺構検出面** 本調査区では、弥生時代後期、弥生時代前期～中期の2面の遺構検出面を確認した。弥生時代後期の遺構検出面は、第Ⅵ層：暗黄褐色砂質土の上面で、標高45.40mである。弥生時代前期～中期の遺構検出面は、第Ⅷ層：暗灰白色粗砂～細砂の上面で、標高45.00mである。

**検出遺構** 本調査区では、わずかに3条の溝を検出したのに止まる。

弥生時代中期初頭～前葉：小溝2条

弥生時代後期：大溝1条

**備考** 弥生時代後期のSD-103は、幅4.00m以上（推定6.0m）、深さ0.90mを測る。環濠になることが想定されるが遺物も少なく、位置的にも外側のものとなろう。



第11図 南環濠帯及び居住域調査区の位置 (S=1/4,000)

### 第33次調査

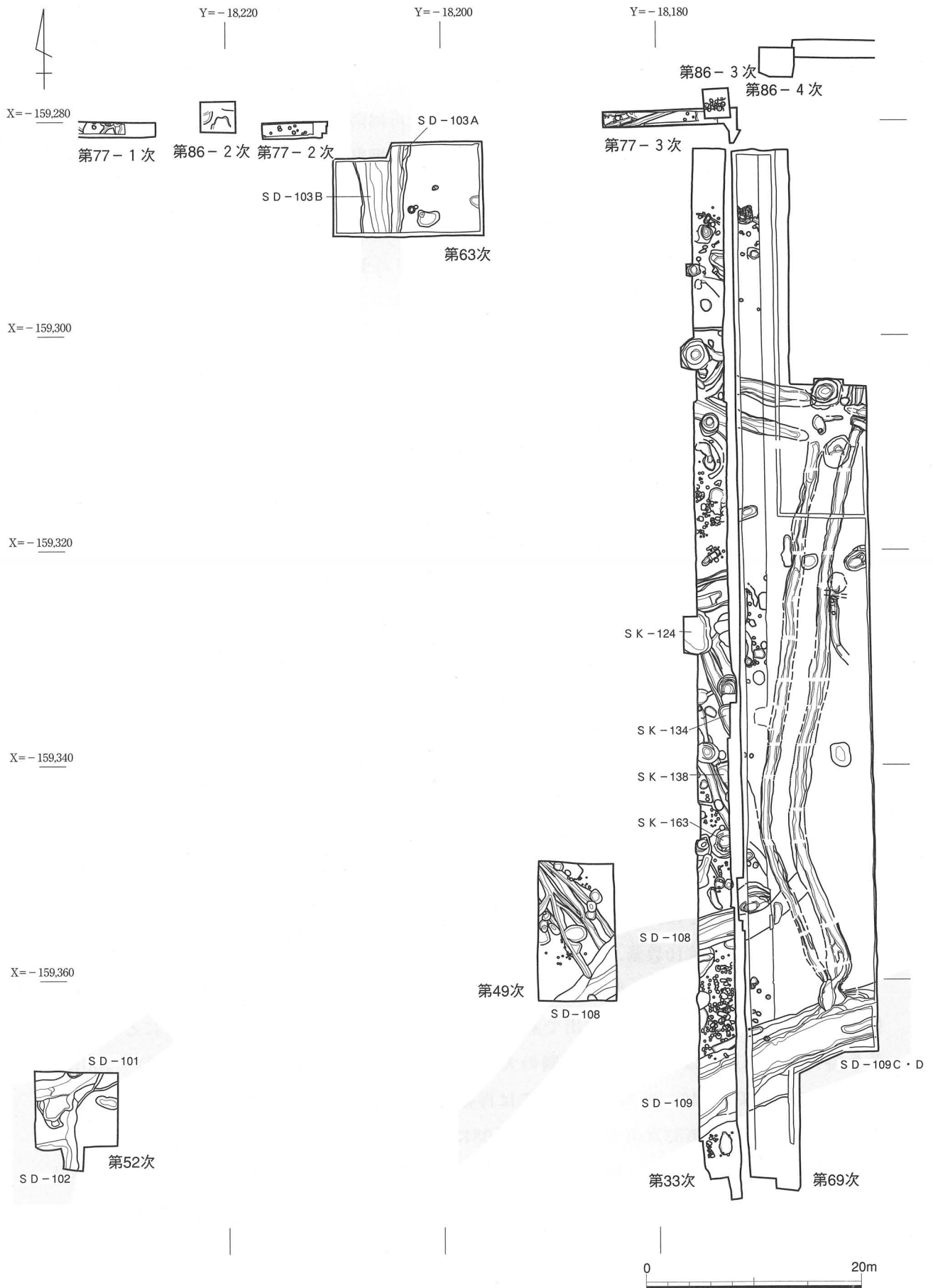
**調査区** 第33次調査区は、遺跡範囲の南側にあたり、東側に第69次調査区が隣接する。遺跡南端の把握を目的として、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は南北に長く、長さ98m、幅3mである。

**遺構検出面** 本調査区では、中世、弥生時代後期～古墳時代初頭、弥生時代中期後葉、弥生時代中期前葉、弥生時代前期～中期初頭の5面の遺構検出面を確認した。中世の遺構検出面は、第Ⅲ層：茶灰色粘質土・第Ⅳ層：茶褐色土の上面で、標高46.90mである。弥生時代後期～古墳時代初頭の遺構検出面は、第Ⅴ層：暗褐色土の上面で、標高46.70mである。弥生時代中期後葉の遺構検出面は、第Ⅵ層：黒褐色土・第Ⅶ層：黒褐色粘質土の上面で、標高46.60mである。弥生時代中期前葉の遺構検出面は、第Ⅷ層：暗灰褐色粘質土・第Ⅸ層：灰色粘土の上面で、標高46.50mである。弥生時代前期～中期初頭の遺構検出面は、第Ⅻ層：青灰色微砂の上面で、標高46.20mである。

**検出遺構** 本調査区では、弥生時代前期から古墳時代初頭まで多数の遺構を検出している。特に、弥生時代中期初頭から弥生時代後期後葉まで濃密な分布を示す。

弥生時代前期～中期初頭：土坑2基、大溝3条、溝3条

弥生時代中期前葉：土坑1基



第12図 南環濠帯及び居住域 弥生時代中期中葉～中期後葉遺構配置図 (S = 1/500)



弥生時代中期中葉：土坑10基、大溝1条、溝4条、土墳墓1基

弥生時代中期後葉：土坑2基、大溝（環濠）1条

弥生時代後期：土坑5基、大溝（環濠）1条（再掘削）、溝1条

古墳時代初頭：土坑1基、大溝（環濠）1条（再掘削）

**備考** 本調査区は、微高地にあたるがその幅は狭く、調査区の南端と北半は落ち込んでいる。その南端で検出したS D-109・110は、集落南端を画する環濠と考えられる。S D-110は推定幅6.0m、深さ1.80mで、弥生時代中期初頭に掘削され弥生時代中期前葉には埋没する。S D-109は幅7.00m、深さ1.20mで、弥生時代中期後葉に掘削され、幾度かの再掘削を経て古墳時代初頭まで継続する。

調査区北半の落ち込みについては、弥生時代中期以降には埋没し居住域となる。弥生時代中期の遺構として、大型土坑（S K-124・134・138・163）があり、木製品の未成品が出土することから、木器貯蔵穴と考えられる。なお、環濠であるS D-109・110の間からは、弥生時代中期の土墳墓を1基検出した。弥生時代後期には、完形土器が多量に出土する土坑（S K-114・125・133）があり、注目される。

特筆すべき遺物として、弥生時代中期前葉のS K-120からは細型銅矛片を転用した鏝が、弥生時代中期中葉のS K-111からは中層の粘層直上より木製戈が出土した。

#### 第49次調査

**調査区** 第49次調査区は、遺跡範囲の南側にあたり、東に第33次調査区が隣接する。農業用倉庫の新築に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は、南北13.2m、東西7.2mの長方形に設定した。

**遺構検出面** 本調査区では、弥生時代後期、弥生時代中期の2面の遺構検出面を確認した。弥生時代後期の遺構検出面は、第Ⅶ層：黒褐色土の上面で、標高47.60mである。弥生時代中期の遺構検出面は、第Ⅷ層：暗灰黄色粘土の上面で、標高47.40mである。

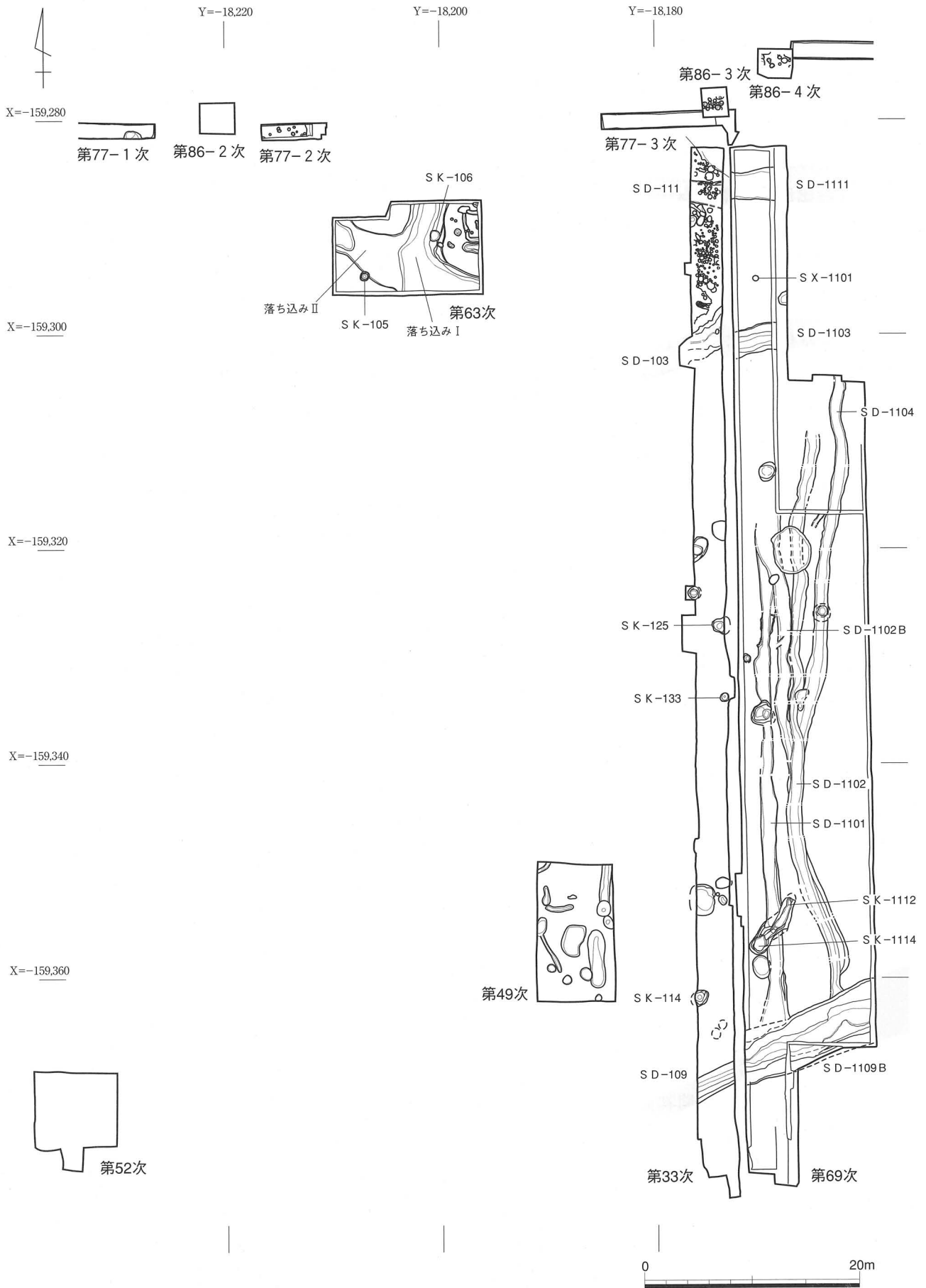
**検出遺構** 本調査区では、弥生時代中期～後期の遺構を検出した。

弥生時代中期：土坑10数基、大溝1条、小溝8条、柱穴

弥生時代後期：土坑2基、小溝2条

**備考** 弥生時代前期の遺構は未検出である。わずかな前期弥生土器片が出土するにとどまる。弥生時代中期の遺構は、調査区南東隅の大溝と取り付く小溝群である。大溝のS D-108は、推定幅4.6m、深さ1.40mを測り、北肩には再掘削時に丸太杭や板杭が打ち込まれていた。本溝は、東に隣接する第33次調査区のS D-108に繋がると考えられる。小溝群は、北西方向に想定される居住域からS D-108への排水施設と考えられる。弥生時代後期は多量の土器が出土した。このうち、遺構の輪郭を検出することは出来なかったが、土器がまとまって出土した地点が4ヶ所あり、弥生時代後期の竪穴住居跡となる可能性も考えられる。なお、銅鏃が1点出土している。

第1節 既往の調査と成果



第13図 南環濠帯及び居住域 弥生時代後期遺構配置図 (S = 1/500)

### 第52次調査

**調査区** 第52次調査区は、遺跡範囲の南側にあたり、第44次調査区から南へ80m、第49次調査区から西へ40mに位置する。農家住宅の新築に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は南北7m、東西8mで、南側へ2×2mの拡張をおこなっている。

**遺構検出面** 本調査区では、弥生時代と近世の遺構を第Ⅲ層上面の1面で検出している。第Ⅲ層：暗茶灰色微砂の上面は、標高47.50mである。

**検出遺構** 本調査区では、弥生時代前期の河跡の堆積土をベースとして弥生時代中期の遺構を検出した。弥生時代後期の遺構は確認できなかった。

弥生時代中期：土坑1基、大溝2条

**備考** 弥生時代中期の環濠と考えられるSD-101を検出した。北東-南西に走行し、幅約3.0m、深さ約1.0mを測る。この溝から、南に向かってSD-102が分流している。南-北に走行し、幅約5.0m、深さ約1.2mを測る。本溝からは、中層を中心に拳大から人頭大の円礫・角礫が40個余り出土した。この角礫のなかには流紋岩の原石や剥片が10数点含まれている。SD-102は、出土土器がSD-101のものと接合することから同時開口と考えられ、環濠への給排水の役目を担っていたと考えられる。

### 第63次調査

**調査区** 第63次調査区は、遺跡範囲の南側にあたり、第33次調査区から西へ20m、第49次調査区から北へ50mに位置する。農業用倉庫の新築に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は東西14m、南北7.5mの長方形を基本として、その東半部分の北側に東西8.5m、南北1.4mの張り出し部を設定した。

**遺構検出面** 本調査区では、時間と予算の制約により、弥生時代中期後葉～後期後葉の遺構を第Ⅴ層上面で検出するにとどまった。下層遺構については、未調査である。第Ⅴ層：黄褐色粘質土（堅い）あるいは灰褐色粘質土（黄斑）の上面は、標高47.80mである。

**検出遺構** 検出した遺構は、第Ⅴ層上面の弥生時代中期後葉～後期後葉のものにとどまる。

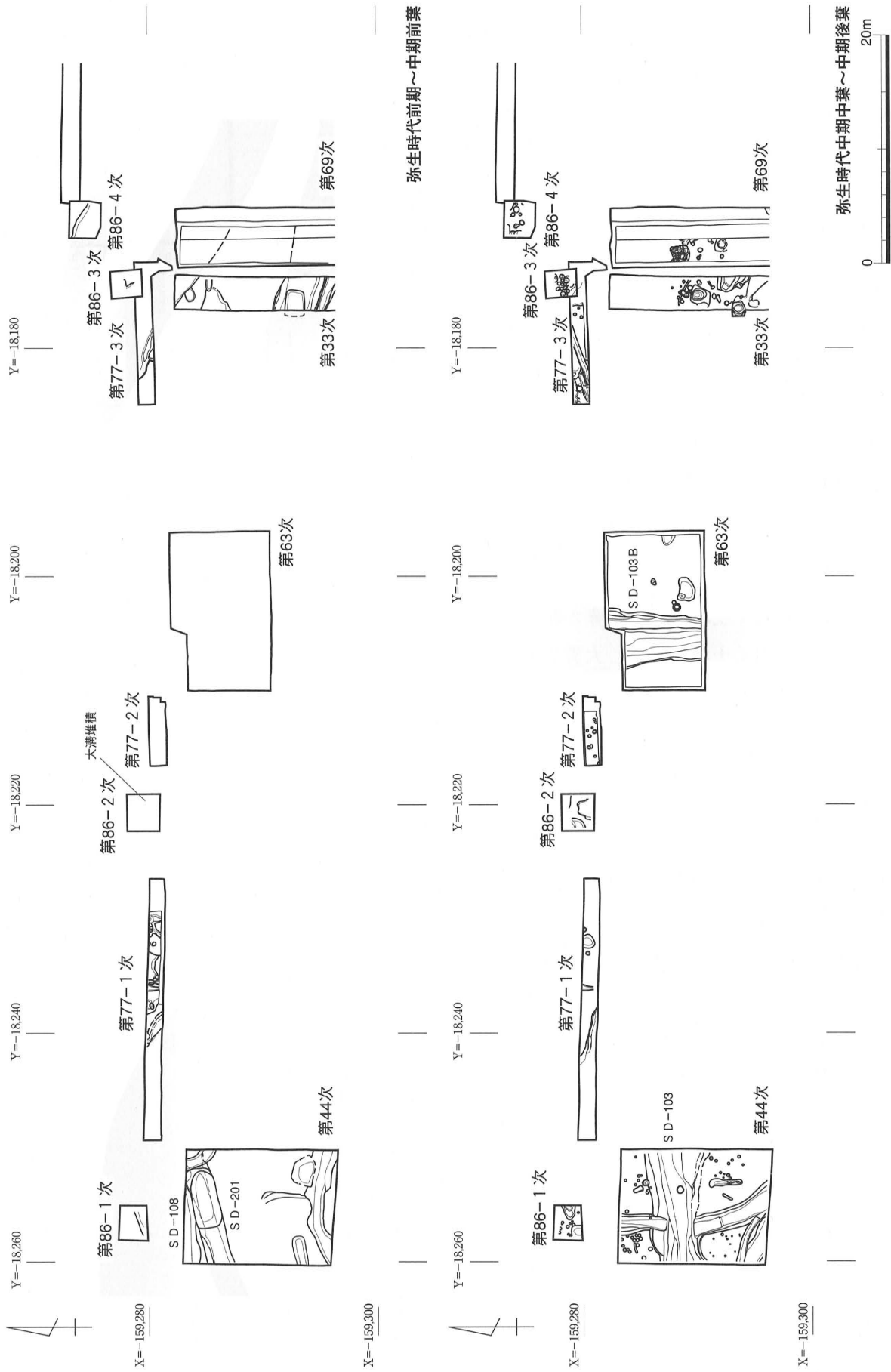
弥生時代中期後葉：土坑1基、溝1条、柱穴数基

弥生時代後期：土坑2基、溝1条、小溝1条、柱穴

弥生時代後期後葉：落ち込み2条

**備考** 弥生時代中期後葉に掘削されたSD-103Bは、幅約3.0m、深さ約1.2mで南-北に走行する。弥生時代後期初頭に再掘削（SD-103A）を受ける。SD-103Aの下層からは、広鋤3点、組み合わせ鋤1点等の木製農具未成品が出土した。

弥生時代後期の土坑2基のうちSK-105は、長軸0.90m、短軸0.80mの不整円形を呈し、断面は円筒状で、深さは1.30mを測る。上層で多量の半完形土器、中層上面から完形の長頸壺1点が出土した。SK-106は、長軸1.00m、短軸0.90mの不整円形を呈し、断面は円筒状で、深さは1.00mを測る。中層上面から広口壺を主体とする13点の完形土器が出土した。



第14図 区画溝域及びその他① 遺構配置図 (S=1/500)

### 3. 区画溝域及びその他

#### 第44次調査

**調査区** 第44次調査区は、遺跡範囲の南側にあたり、第63次調査区から西へ50m、第16次調査区から東南東へ30mに位置する。農業用倉庫の新築に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は、南北13m、東西10mの方形に設定した。

**遺構検出面** 本調査区では、中世、弥生時代中期後葉、弥生時代中期前葉の3面の遺構検出面を確認した。中世の遺構検出面は、第Ⅳ層：灰褐色粘質土の上面で、標高47.50mである。弥生時代中期後葉の遺



第15図 区画溝域及びその他調査区の位置 (S=1/4,000)

構検出面は、第Ⅴ層：黒褐色土の上面で、標高47.30mである。弥生時代中期前葉の遺構検出面は、第Ⅶ層：暗黄灰色粘質土の上面で、標高47.10mである。

**検出遺構** 本調査区では、弥生時代前期～後期の遺構を検出した。

弥生時代前期：土坑1基、大溝2条、落ち込み1条

弥生時代中期：土坑10数基、大溝3条、小溝3条、柱穴

弥生時代後期：土坑2基、大溝1条

**備考** 本調査区では、各時期の大溝を検出した。調査区北端で検出した弥生時代前期のSD-201は、東北東-西南西に走行し幅約2.2m、深さ約0.8mを測る。これを挟むようにほぼ軸を同じくして弥生時代中期のSD-103・108が掘削される。SD-103からは、弥生時代中期後葉～中期末の土器が多量に出土し、近江甕4点も含まれていた。本調査区は、第3・61・65次調査区から延びる弥生時代中期前葉の大溝群の南端にあたると思われる。

#### 第77次調査

**調査区** 第77次調査区は、遺跡範囲の南側を東西に横断する道路の総延長150m分にあたる。通学路整備工事に伴い、田原本町教育委員会が発掘調査をおこなった。調査区は、150mと長大なため4つに分け、西から東の順で第1～4トレンチとなる。

**検出遺構** 本調査区では、弥生時代前期～後期の遺構を検出した。

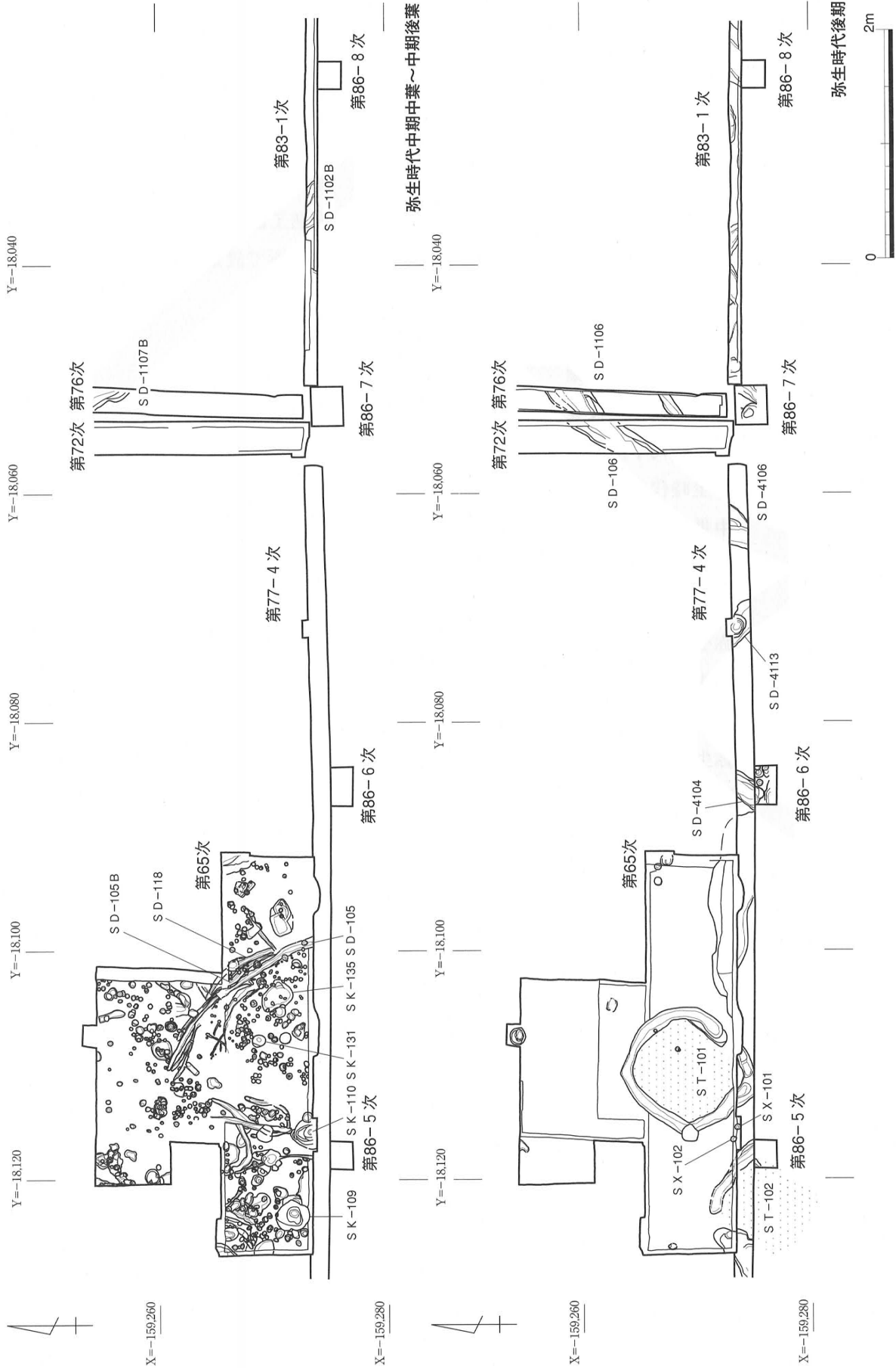
弥生時代中期前葉：土坑1基、大溝1条

弥生時代中期中葉：土坑2基、大溝1条

弥生時代中期後葉：土坑4基

弥生時代後期：土坑6基、方形周溝墓2基

**備考** 本調査区では、これまでの調査で検出した弥生時代中期前葉の大溝群の延長を確認することができた。いずれのトレンチにおいても土坑が少なく、南地区の北端を区画する大溝群



第16図 区画溝域及びその他② 遺構配置図 (S = 1/500)

地帯にあたることが判明した。また、弥生時代後期後葉の遺構として、第65次調査で確認した方形周溝墓の周溝延長部分を検出した。

### 第86次調査

**調査区** 第86次調査は遺跡範囲の南側を東西に横断して、国道24号線下にある下水道本管から北小学校までの東西道路下の延長約230mでおこなわれた推進工法による下水道管敷設工事に伴うものである。調査区は、開削がおこなわれる人孔部分8ヶ所で設定している。西から東の順で第1～8トレンチとなる。

**検出遺構** 本調査区については、トレンチ毎に検出遺構を報告する。

- |        |             |                |
|--------|-------------|----------------|
| 第1トレンチ | 弥生時代中期前葉    | ：大溝1条          |
|        | 弥生時代中期後葉～後期 | ：土坑3基、柱穴10基    |
| 第2トレンチ | 弥生時代中期前葉    | ：大溝1条          |
|        | 弥生時代中期後葉～後期 | ：土坑2基          |
|        | 中世          | ：素掘小溝          |
| 第3トレンチ | 弥生時代中期前葉    | ：大溝1条          |
|        | 弥生時代中期後葉～後期 | ：柱穴17基         |
| 第4トレンチ | 弥生時代中期前葉    | ：大溝1条          |
|        | 弥生時代中期後葉～後期 | ：土坑5基、柱穴7基     |
| 第5トレンチ | 弥生時代中期前葉    | ：大溝1条          |
|        | 弥生時代中期後葉～後期 | ：土坑1基          |
| 第6トレンチ | 弥生時代中期前葉    | ：土坑1基、大溝1条     |
|        | 弥生時代中期後葉～後期 | ：溝1条、土坑5基      |
| 第7トレンチ | 弥生時代中期前葉    | ：大溝1条          |
|        | 弥生時代中期後葉～後期 | ：土坑1基、溝1条、柱穴1基 |
| 第8トレンチ | 弥生時代中期前葉    | ：大溝1条          |
|        | 弥生時代中期後葉～後期 | ：溝1条           |

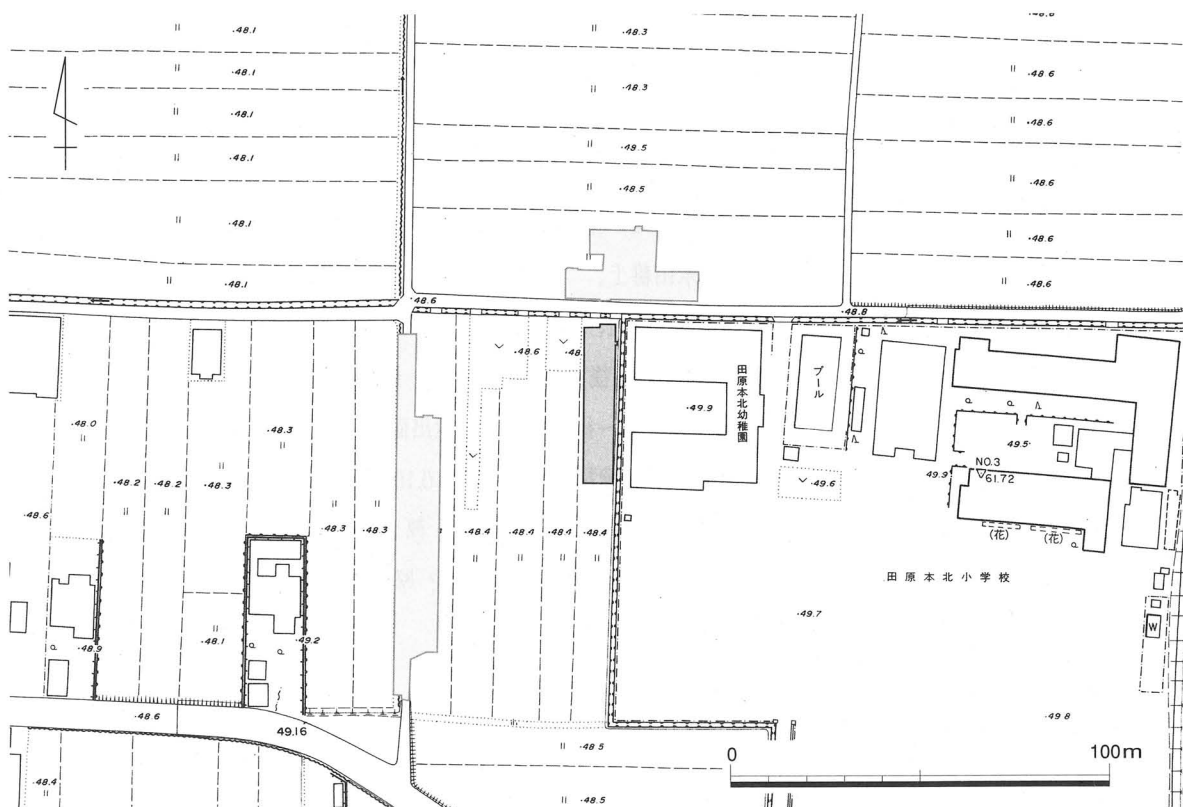
**備考** 各トレンチにおいて、弥生時代中期前葉の大溝を検出した。これは第77次調査区と同様に、北小学校北側の東西道路が遺跡内の谷地形にあたり、排水機能をもたせた大溝群が掘り込まれているのであろう。これらの大溝は、大和第Ⅲ-1様式には埋没を開始している。第5トレンチから第8トレンチまでの東側の調査区では、大和第Ⅲ-2～3様式の砂層に覆われており、洪水層と考えられる。この砂層をベースに弥生時代中期後葉の遺構が掘削されている。

## 第2節 第61次調査報告

### 1. 調査の経緯

平成8年度におこなった第61次は、唐古・鍵遺跡において10ヶ年計画で予定した範囲（内容）確認調査の初年度にあたる。当時の田原本町は、日本を代表する大規模な弥生環濠集落である唐古・鍵遺跡について、国の史跡指定（平成11年度指定）という大きな課題を抱えており、平成7年度に唐古・鍵遺跡整備基本構想を策定し、さらに平成8年度には基本計画を策定する予定をもって保存活用施策を進めていた。このような状況に相応するように、県・国に対しては本遺跡の構造及び性格を把握する目的で発掘調査の実施を要望しており、それが平成8年度に国庫補助事業として採択されたのである。

これを承けて田原本町教育委員会では、調査に関する様々な問題を検討・指導して頂く「唐古・鍵遺跡調査検討委員会」を組織した。平成8年9月に第1回検討委員会を開催し、事務局側ではこれまでの唐古・鍵遺跡における調査成果と課題を整理し、委員には当年度の調査場所の選定についてご検討を頂いた。その結果、唐古・鍵遺跡の特徴を明確にするために、青銅器鑄造工房跡の調査が必要であるとの意見がまとめられた。これまでの調査からは、遺跡東南部で昭和52年度におこなわれた第3次調査で、土製銅鐸鑄型外枠などの青銅器鑄造関連遺物が出



第17図 第61次調査区の位置（S = 1/2,000）



土しており、付近に工房跡のあることが予想されていた。

このことから、調査場所については第3次調査区周辺ということになったが、農地という制約もありその西側の休耕田、田原本町大字鍵166番を選択した。調査は、弥生時代の遺構が錯綜し、かつ、遺物は多量であったため難行した。しかしながら、当初の予定どおり青銅器の製造に関する各種遺物が出土し、土製鋳型外枠についてはほぼ全容を把握するに至った。ただし、遺構的には工房跡と積極的に評価しうるものを確認することはできなかった。

## 2. 調査の方法

調査地である鍵166番は休耕田で、その北半分を対象とした。調査区は南北約42m、東西8mの南北に長いトレンチを設定した(第17図)。調査面積は約333㎡である。

調査は水田耕土層と床土層の約0.3mを重機2台で掘削除去し、その後、人力によって遺構等の調査をおこなった。黒褐色土の上面で近世頃の素掘小溝を確認した他は、すべて弥生時代の遺構であった。柱穴を検出した調査区中央及び、南端と北端の一部は保存のため、弥生時代中期以前の下層遺構を確認していない。

調査期間は、平成8(1996)年11月20日から平成9(1997)年3月6日までで、実働日数は74日間である。遺物箱の総数は、コンテナ約500箱である。

## 3. 層序

調査区の土層の堆積状況は、弥生時代以降は単純な層序を形成している。しかし、弥生時代の堆積は、調査区北半では弥生時代中期初頭～中期前葉の大溝が走行し、調査区南半でも営々と諸遺構が掘削されているため、基本土層が存在するのは調査区中央の一部である。

本調査区の基本層序は、以下の通りである(第18図)。

第Ⅰ層：灰青色粘質土	〔水田耕土、	厚さ約0.1m：上面標高48.10m〕
第Ⅱ層：茶灰色粘質土	〔水田床土、	厚さ約0.2m：上面標高48.00m〕
第Ⅲ層：黒褐色土	〔弥生時代後期後葉遺構検出面、	厚さ0.10～0.15m：上面標高47.80m〕
第Ⅳ層：暗褐色粘質土	〔弥生時代中期後葉～後期初頭遺構検出面、	厚さ約0.1m：上面標高47.60m〕
第Ⅴ層：黄灰色粘質土	〔弥生時代中期中葉遺構検出面、	厚さ0.10～0.25m：上面標高47.40～47.50m〕
第Ⅵ層：暗灰色粘土(炭灰混)	〔弥生時代中期初頭遺構検出面、	厚さ約0.2m：上面標高47.00～47.20m〕
第Ⅶ層：黒灰色粘土(黄斑)	〔弥生時代前期遺物包含層? 厚さ0.15m：	上面標高47.00～47.20m〕
第Ⅷ層：明灰黄色粘土(ハード)	〔弥生時代前期遺構検出面、	厚さ約0.1m：上面標高46.90m〕
第Ⅸ層：緑灰色粘土	〔ベース、	厚さ約0.3m：上面標高46.80m〕
第Ⅹ層：黒灰色粘土	〔ベース、	厚さ約0.1m：上面標高46.50m〕
第Ⅺ層：青灰色シルト	〔ベース	：上面標高46.40m〕



本調査区における現地表面の標高は48.10mである。第Ⅰ・Ⅱ層は水田の耕作土層であり、近世以降の堆積と考えられる。その厚さは約0.3mを測る。この直下、第Ⅲ層：黒褐色土から第Ⅶ層：黒灰色粘土（黄斑）までが、弥生時代の遺物包含層である。また、第Ⅷ層以下の土層は弥生時代以前に形成された堆積層と考えられ、遺物を全く包含しない。本調査区において確認した遺構検出面は4面である。

第Ⅲ層：黒褐色土の上面、標高47.80mは弥生時代後期後葉の遺構検出面である。このうち、調査区北半では、第Ⅲ層の上面に弥生時代後期後葉～古墳時代前期初頭？の遺物包含層である黒色砂質土が堆積する。これは調査区北半が、下層遺構であるSD-151の影響を受け砂層埋没後も低く、後世の削平を黒色砂質土が免れているためであろう。また、調査区南半では、弥生時代後期後葉の落ち込みが形成されているため、部分的に第Ⅲ・Ⅳ層が途切れている。

第Ⅳ層：暗褐色粘質土の上面、標高47.60mは弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構検出面である。この第Ⅳ層は、調査区南半で認められる。調査区北半では、SD-151を埋没させた粗砂層の上面に堆積する第Ⅳ-b層：暗褐色砂質土がこの第Ⅳ層と対応するものと考えられるが、非常に薄い堆積のため場所によっては、弥生時代中期中葉の遺構検出面である粗砂層の上面まで下げて弥生時代中期中葉から弥生時代後期初頭までの遺構を、同一面上で検出した。

第Ⅴ層：黄灰色粘質土の上面、標高47.40～47.50mが弥生時代中期中葉の遺構検出面となる。第Ⅴ層について面的な調査をおこなったのは、調査区南端のみである。調査区南端においては第Ⅴ層から切り込んだ遺構の最上面に明灰褐色砂質土が堆積しているが、これは調査区北半のSD-151を埋没させた砂層堆積に対応するものと考えられる。これより下の層については面的な調査をおこなっておらず、観察トレンチや排水溝による確認である。今後の調査による修正も予想される。

第Ⅵ層：暗灰色粘土（炭灰混）の上面、標高47.00～47.20mが弥生時代中期初頭の遺構検出面と考えられるが、面的な確認はしていない。これは、弥生時代中期初頭～中期前葉の遺構として唯一面的に調査したSD-151下部溝群においても、その南肩部は弥生時代中期中葉の洪水及びSD-105Bの掘削によって攪乱を受けており、掘り込み面は確認できなかった。

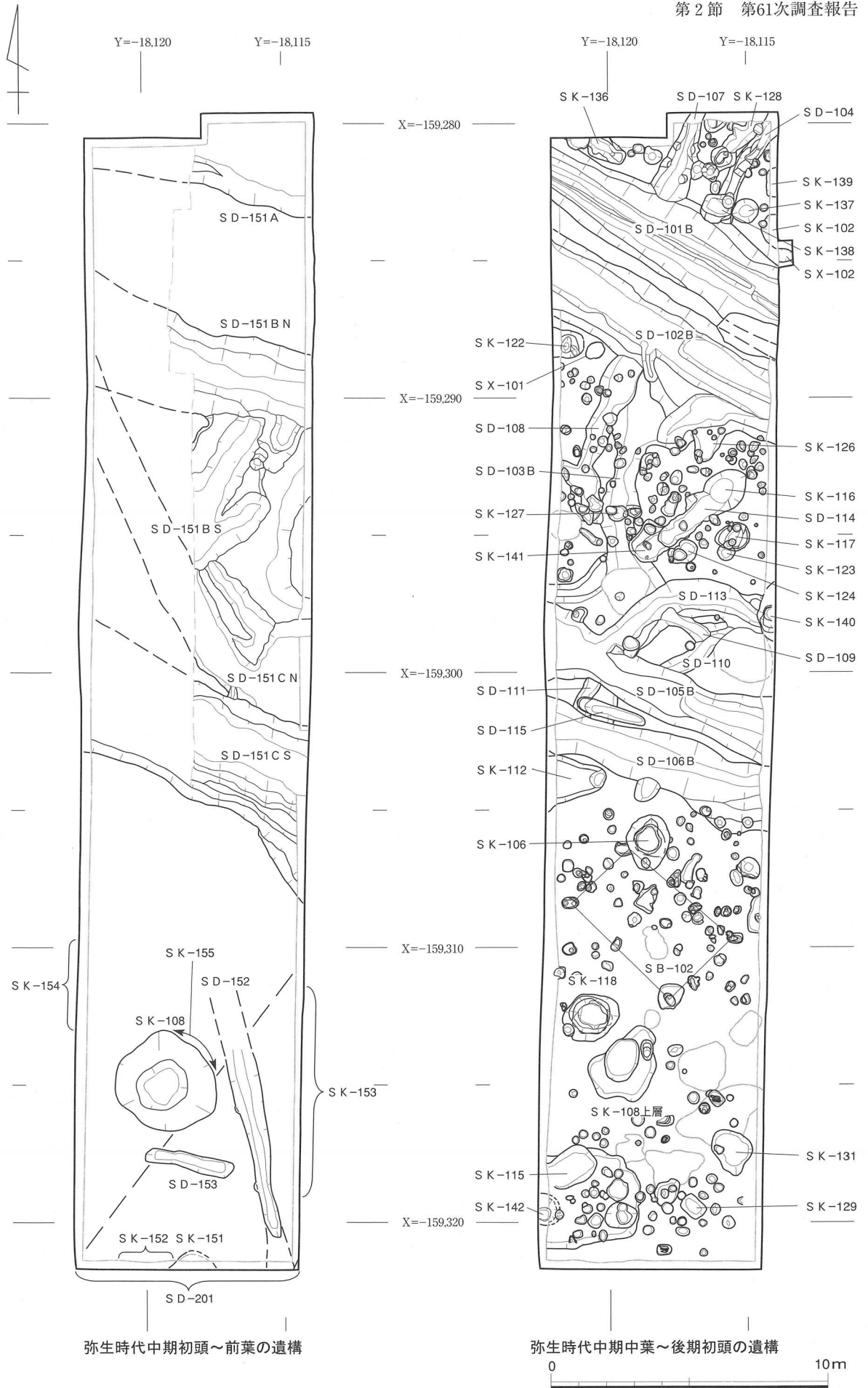
第Ⅶ層：黒灰色粘土（黄斑）、第Ⅷ層：明灰黄色粘土（ハード）については、調査区南半においてのみ検出しており、調査区北半では確認していない。第Ⅷ層はベースでその上面が弥生時代前期の遺構検出面、その上層の第Ⅶ層を弥生時代前期の遺物包含層と考えているが、排水溝での確認であり遺物も少なく、断定材料を欠く。本調査区において、弥生時代中期初頭を遡る弥生時代前期の確実な遺構検出面があるかは、今後の検討課題である。なお、調査区北半において、これら第Ⅶ・Ⅷ層が検出されないことについて、低地のため当初からなかったのか、SD-151の削平によるものかは不明である。ただし、第Ⅸ層：緑灰色粘土は遺構の削平を受けるものの調査区全域に分布し、その下層にある第Ⅹ層：黒灰色粘土の上面標高は46.50m前後でほぼ一定している。このことから、地形の起伏を想定するならば、第Ⅸ層の堆積時に起伏が生じたと考えらるべきであろう。

第5表 土坑一覽表

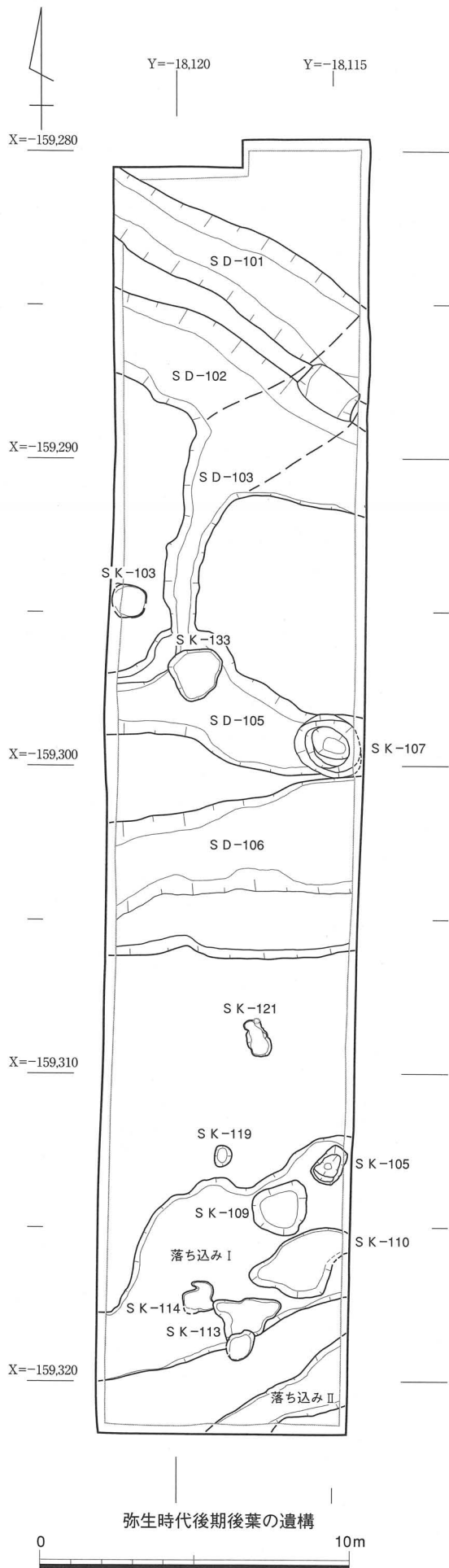
土坑番号	平面形態	断面形態	坑底土層	規模 (m)			坑底 標高 (m)	時期 (大和様式)	主要遺物	備考・重複関係
				長軸	短軸	深さ				
SK-101										SD-104に変更 欠番
SK-102	円形?	逆台形	灰褐色粗砂と シルトの互層	1.14	-	0.34	47.38	Ⅳ-2		
SK-103	楕円形?	逆台形二段	灰黄色細砂	(1.10)	1.08	0.54	47.20	Ⅴ-4		
SK-104										欠番
SK-105	隅丸方形	逆円錐状	暗灰色粘土	1.30	0.85	0.57	46.98	Ⅵ-4		
SK-106	楕円形	円筒状	灰色砂	2.00	1.57	1.94	45.70	Ⅳ-2 Ⅴ-1	絵画土器、柱材	井戸
SK-107	楕円形	逆台形	砂と暗灰色粘 土の互層	(2.30)	(2.05)	(1.10)	46.41	Ⅵ-3		SD-105に上面を 切られる・井戸
SK-108	不整円形	逆台形	灰褐色砂	3.60	3.30	1.60	45.87	Ⅲ-1		SK-155を切る 井戸
SK-109	不整形	皿状	-	1.96	1.76	0.12	47.36	Ⅵ-3		
SK-110	不整形	皿状	-	(3.50)	2.06	0.18	47.32	Ⅵ-4	ガラス製丸玉	
SK-111	円形?	皿状	暗褐色砂質土	(2.14)	-	0.12	47.29	Ⅳ-1?		SD-106Bの上面 堆積・土坑でない 可能性
SK-112	不整形	皿状	灰色粘土	(2.00)	(2.16)	0.28	47.32	Ⅳ-2?		
SK-113	不整形	皿状	-	2.16	1.52	0.08	47.40	Ⅵ-4	細頸壺	
SK-114	不整形	皿状	-	1.12	1.00	0.12	47.36	Ⅵ-4?	磨製石剣	
SK-115	隅丸方形	逆台形	-	1.80	1.30	0.41	46.94	Ⅲ-4	青銅器鑄造関連	
SK-116	楕円形	逆台形	灰白色砂礫	1.76	1.38	0.40	47.10	Ⅲ-4		SB-101付属施設
SK-117	楕円形	半円形	灰白色粗砂	1.28	1.03	0.27	47.25	Ⅲ-4	流紋岩石庵丁1 結晶片岩石庵丁1	SK-123を切る SB-101付属施設
SK-118	不整円形	円筒状	灰色砂	2.05	1.75	1.92	45.63	Ⅲ-3	木製品多数	井戸
SK-119	楕円形	逆台形	-	0.70	0.56	0.33	47.22	Ⅵ-4		
SK-120										欠番
SK-121	不整楕円形	皿状	-	1.28	0.70	0.10	47.54	Ⅵ-3・4?		
SK-122	不整形	逆台形	灰黄色砂礫	(1.12)	1.00	0.66	47.06	Ⅳ-1		柱穴の複合の可能 性高い
SK-123	不整形	逆台形	-	0.78	0.64	0.36	47.16	Ⅲ-4		SK-117に切られ る SB-101付属施設
SK-124	不整形	逆台形	灰色粗砂	1.10	0.82	0.15	47.28	Ⅲ-3		Pit-1153を切る? SB-101付属施設
SK-125										欠番
SK-126	不整形	逆台形	-	(1.22)	1.25	0.27	47.25	Ⅳ?		北側をSD-102Bに 切られる
SK-127	楕円形	皿状	灰白色粗砂	0.70	0.54	0.13	47.19	Ⅳ?		SD-103B底面 検出
SK-128	不整長楕円形	逆台形	-	(1.44)	0.64	0.31	47.35	Ⅴ-1	青銅器鑄造関連	溝の可能性
SK-129	隅丸方形	逆台形	黒色粘質土	0.94	0.64	0.19	47.18	Ⅲ-3		灰穴炉?
SK-130										Pit-158に変更 欠番
SK-131	不整形	逆台形	-	※1.76	※1.32	0.24	47.20	Ⅳ-1	絵画土器	
SK-132										SD-114に変更 欠番
SK-133	不整形	皿状	-	1.74	1.68	0.11	47.29	Ⅵ-4		土坑でない可能性 高い
SK-134	円形?	-	-	-	-	-	-	-		図面作成前に消滅
SK-135										欠番
SK-136	楕円形	逆台形二段	-	(1.44)	(0.92)	0.30	47.21	Ⅳ?		
SK-137	楕円形	逆台形	-	1.00	0.90	0.44	47.16	Ⅳ?		
SK-138	不整形	逆台形	-	1.10	1.10	0.36	47.20	Ⅳ?		溝の掘り残しか
SK-139	楕円形?	半円形	灰白色砂	1.08	-	0.40	47.20	Ⅳ?		
SK-140	不整円形?	上部ロート状 下部円筒状	青灰色シルト	※2.10	(1.10)	1.24	46.42	Ⅲ-3		井戸
SK-141	不整形	皿状	灰褐色粗砂	1.56	1.46	0.12	47.24	Ⅲ?		SB-101付属施設
SK-142	不整円形?	逆円錐状	青灰色シルト	※1.00	-	※1.30	46.24	Ⅲ-1	水差形土器1	井戸
SK-151	不整円形	逆台形	青灰色粘土と 暗灰褐色粘土 のブロック	(1.84)	(0.60)	0.57	46.61	Ⅱ-3-b	管玉未成品	
SK-152	-	逆台形	灰青色細砂	※2.60	-	1.10	47.10	Ⅱ-3	平鍬(狭)、高杯	
SK-153	-	-	-	-	-	-	-	Ⅱ-2	蓋付合子 一木鋤	木器貯蔵穴?
SK-154	-	皿状	青灰粘	-	-	-	-	-		
SK-155	-	-	-	-	-	-	-	-		SK-108東肩前期 遺構

※は復原値、( )は残存値





第19図 調査区遺構配置図(1) (S=1/200)



第20図 調査区遺構配置図(2) (S=1/200)

#### 4. 遺構

今回の調査において検出した遺構は、中世素掘小溝を除き、すべて弥生時代のもので濃密な遺構分布を呈していた。

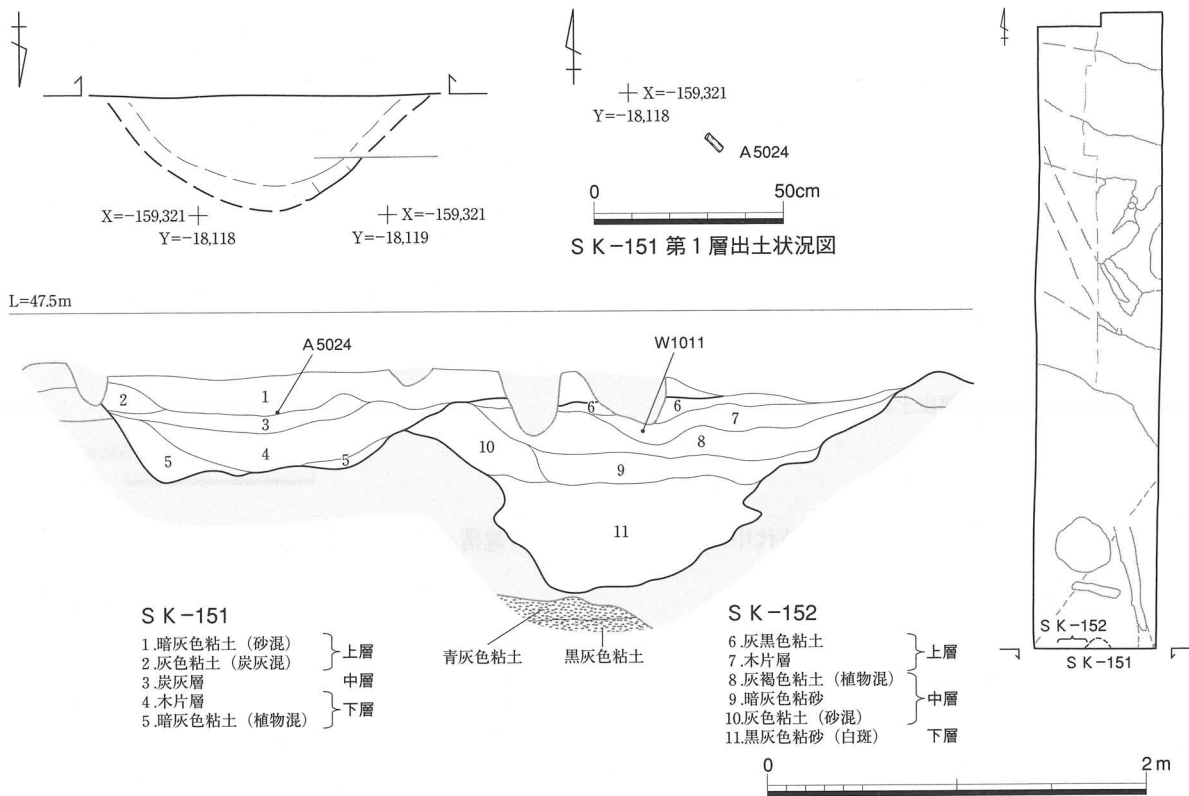
特に、微高地と考えられる調査区中央では、第Ⅳ層上面において弥生時代中期後葉～後期初頭と考えられる多数の柱穴を検出した。このため、この部分に関してはそれより下層の遺構については未調査である。

柱穴密度の低い調査区南半については、弥生時代後期後葉の落ち込みによって第Ⅲ・Ⅳ層の大半を失っていたこともあり、弥生時代中期中葉の遺構検出面である第Ⅴ層上面までの調査を進めた。さらに、調査区南端では幅約1.5mの土層観察用トレンチを設定し、弥生時代中期初頭の遺構を検出するとともに、ベースである第Ⅸ層まで掘り下げた。

これに対し、調査区北半は弥生時代中期初頭～中期前葉に大溝群(SD-151A・B・N・BS・CN・CS)が掘り込まれ、埋没後も大きなくぼ地(SD-151)となって弥生時代中期中葉の砂層堆積で埋没する。砂層上面は、弥生時代中期中葉以降の遺構検出面となる。この北半に関しては、完全に砂層を除去し、下層のSD-151について東半分を掘り下げ、西半分を保存した。

よって、本調査区では、弥生時代後期後葉と弥生時代中期後葉～後期初頭の2面の遺構検出面は完掘し、弥生時代中期中葉と弥生時代中期初頭～中期前葉の2面の遺構検出面は部分的な調査にとどまった。

なお、弥生時代前期の遺構検出面と考えられるものを排水溝等で断面確認しているが、遺構・遺物は未確認である。



第21図 弥生時代中期初頭～中期前葉の遺構 (1) (平・断面図：S = 1/40、出土状況図：S = 1/20)

(1) 弥生時代中期初頭～中期前葉の遺構 (第19図、写真図版2)

先述したように、調査区北半では弥生時代中期初頭～中期前葉に掘削された溝群SD-151の東半を完掘したが、調査区南半の弥生時代前期～中期前葉の遺構は大半が未調査である。調査区南半では周囲に設けた排水溝や南端部の土層観察用トレンチによって、その時期と考えられる遺構 (SK-151・152・153、SD-201) を壁断面で確認したにすぎない。

土坑

SK-151 (第21図、写真図版3)

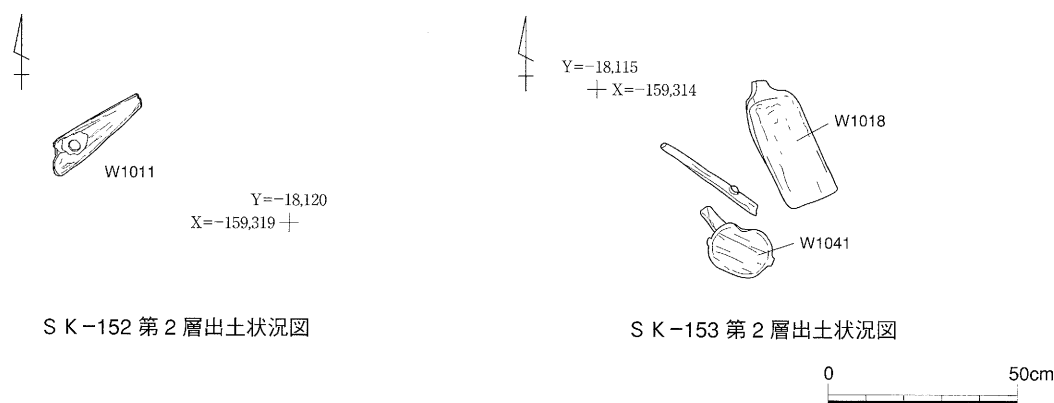
本坑は調査区南端の中央で検出した。その南半は調査区外へと延び、平面は不明であるが不整円形を呈すると考えられ南壁断面での上面幅は1.84mであるが、SK-152上面の落ち込みまでを含めるならば3.30mとなる。断面は逆台形で、深さは0.57mを測る。

堆積土は、中層の炭灰層を挟んで上層の暗灰色粘土 (砂混) と下層の木片層に、大きく3層に分かれる。中層の炭灰層直上となる上層から、碧玉製の大型管玉未成品 (A5024) が1点出土している。本坑の上面には、調査区南半全体を覆う弥生時代中期中葉の明灰褐色砂質土が堆積している。時期は、大和第II-3-b様式である。

SK-152 (第21・22図、写真図版4)

本坑は調査区南端の中央で検出した。その東肩はSK-151に切られる。本坑については、南壁断面での観察しかおこなっておらず、平面形態・規模は不明である。断面は逆台形で、深さは1.10mを測る。





第22図 弥生時代中期初頭～中期前葉の遺構（2）（S = 1/20）

堆積土は、大きく上・中・下の3層に分かれる。上層は木片層、中層は灰色系粘土（砂混）、下層は黒灰色粘砂（白斑）である。上層からは、平鋤（狭）（W1011）が1点出土した。時期は、大和第Ⅱ-3様式である。

**SK-153**（第22・23図、写真図版4・5）

本坑は調査区南側の東排水溝を深掘りする際に木製品の合子が出土したことによってそれと認識し、東壁において断面でのみ確認した。壁断面による確認のため、平面及び規模は不明であるが、東壁断面における上面幅は7.90mにも及ぶ。断面は二段の逆台形と考えられるが、下層においてもまだ多くの木製品が包含されており、これらの保存のために坑底の確認はおこなっていない。現状では、深さ0.68mまで確認している。

堆積土は、腐食土層である褐灰色粘土を中層に挟んで上・下の大きく3層に分かれる。上層は炭灰を含んだ灰色粘土であるが、その南半は砂が入り込んでかき混ぜられたような状態となっている。下層は暗灰褐色粘土（植物層）である。中層には、蓋付きの合子（W1041・1042）や一木鋤（W1018）等の木製品を含んでいた。時期は、大和第Ⅱ-2様式である。

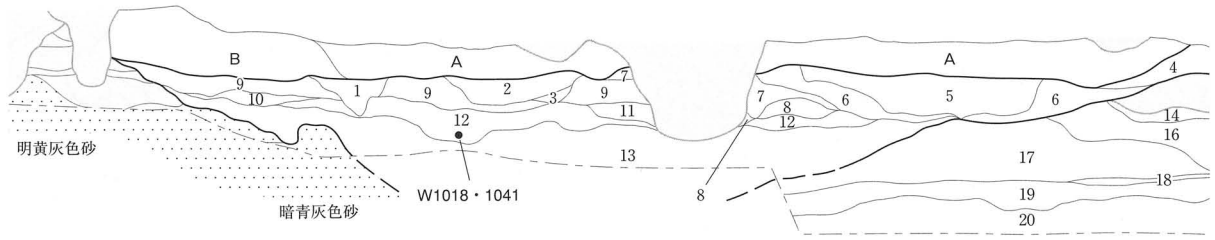
**溝**

**SD-201**（第23図、写真図版5）

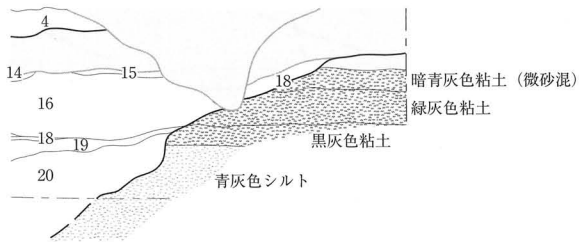
本溝は調査区の南端部分において、土層観察用トレンチと東西両排水溝により確認した大溝である。調査区の南端部を斜めに北東-南西へ横切っている。溝幅は、両肩を確認した東排水溝の土層断面では約11.0mを測るが、溝の主軸に対して直交した数値ではないため、実際の溝幅は10mを超えるものではないだろう。ただし、調査区南壁では中央付近の溝底が隆起することや、東側（201A）と西側（201B）では堆積が異なることから、SD-151下部溝群と同様に数条の溝が切り合う状況も考えられる。深さは約1.2mである。堆積土中には大和第Ⅱ-1様式の土器を包含しており、本調査区においては最も古い遺構の一つである。今回、調査区南端で検出された溝・土坑は、本溝の堆積土上面から掘削されたものである。

調査区西壁

L=47.5m



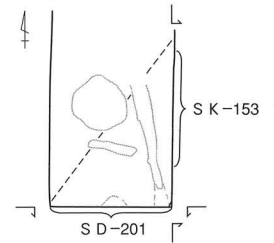
X=-159.320



A. 暗灰褐色砂質土  
B. 黄褐色砂質土

S K-153

1. 灰黒色砂質土 (粘性)
2. 灰黒色砂質土 (粘性)
3. 灰色砂質土
4. 灰黄色粘質土 (黄斑強)
5. 灰色砂質土 (灰色粘土混)
6. 暗灰色粘土 (炭灰混)
7. 灰黄色砂
8. 暗灰色粘土 (黄斑)
9. 灰色粘土 (炭混)
10. 明黄灰色砂
11. 黒灰色粘土
12. 褐灰色粘土 (腐食土層)
13. 暗灰褐色粘土 (植物層)

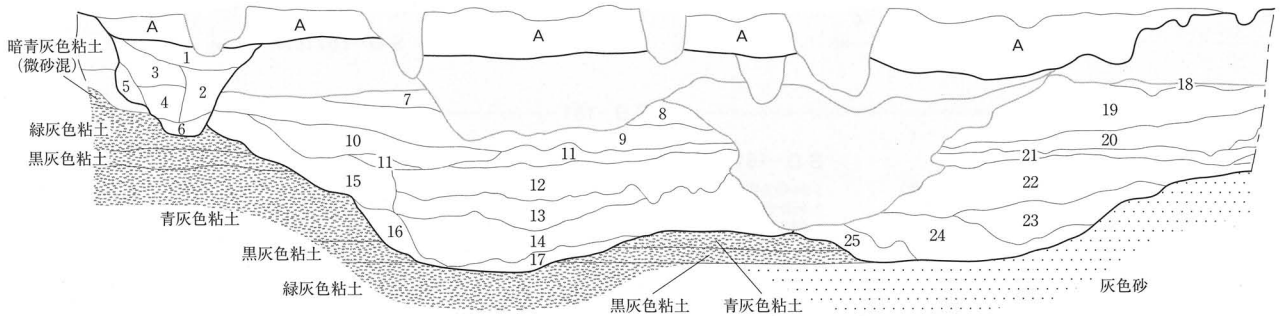


S D-201

14. 黄灰色シルト (暗灰色粘土混)
15. 暗灰黄色粘土 (ハード)
16. 暗青灰色粘土 (白斑)
17. 暗灰色粘土 (微砂混・やや青味)
18. 植物層
19. 灰色砂
20. 暗灰色粘土 (白斑・植物混)

調査区南壁

L=47.5m



A. 明灰褐色砂質土

S D-152

1. 暗灰褐色粘質土
2. 灰黒色粘土
3. 明灰黄色砂と灰色粘土のブロック
4. 灰色粘砂 (黄斑)
5. 灰色粘土 (炭ブロック)
6. 灰褐色粘土 (植物混)

S D-201 A

7. 暗灰色粘土
8. 黒灰色粘土 (炭灰混)
9. 青灰色粘土と暗灰褐色粘土のブロック
10. 暗青灰色粘土 (植物混)
11. 灰色細砂
12. 暗灰褐色粘土と砂の互層
13. 暗灰色粘土 (植物混)
14. 灰黒色粘土 (白斑)
15. 暗灰色粘土 (白斑)
16. 灰緑色粘土 (黒灰色粘土混)
17. 暗灰色粘土 (青灰色粘土と黒灰色粘土のブロック)

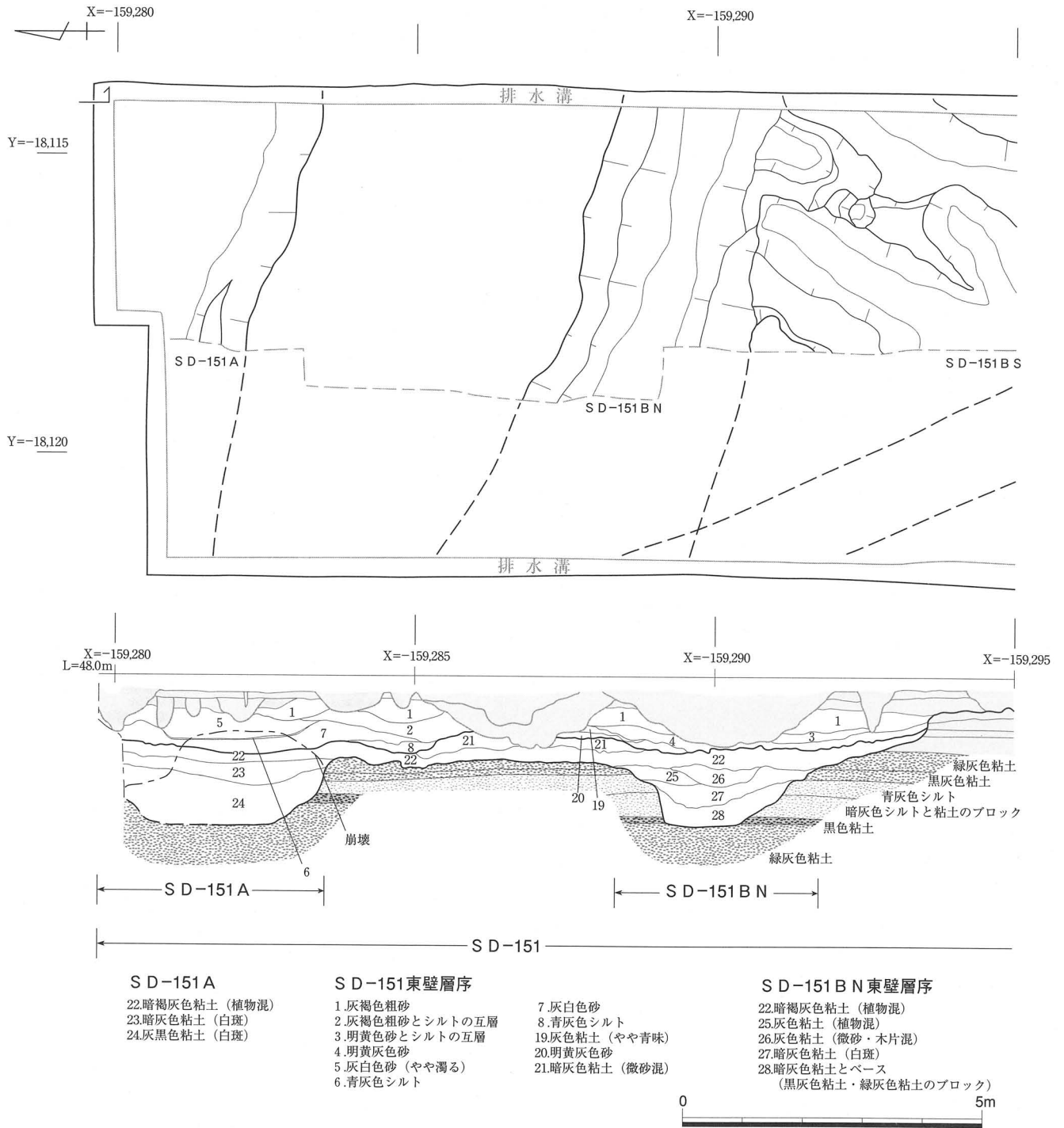
S D-201 B

18. 明黄灰色微砂
19. 灰青色粘砂
20. 植物腐食土層
21. 灰色細砂
22. 暗灰褐色粘土 (砂・植物混)
23. 暗灰色粘土と砂のブロック
24. 暗灰色粘土
25. 灰青色細砂



第23図 弥生時代中期初頭～中期前葉の遺構 (3) (S = 1/50)

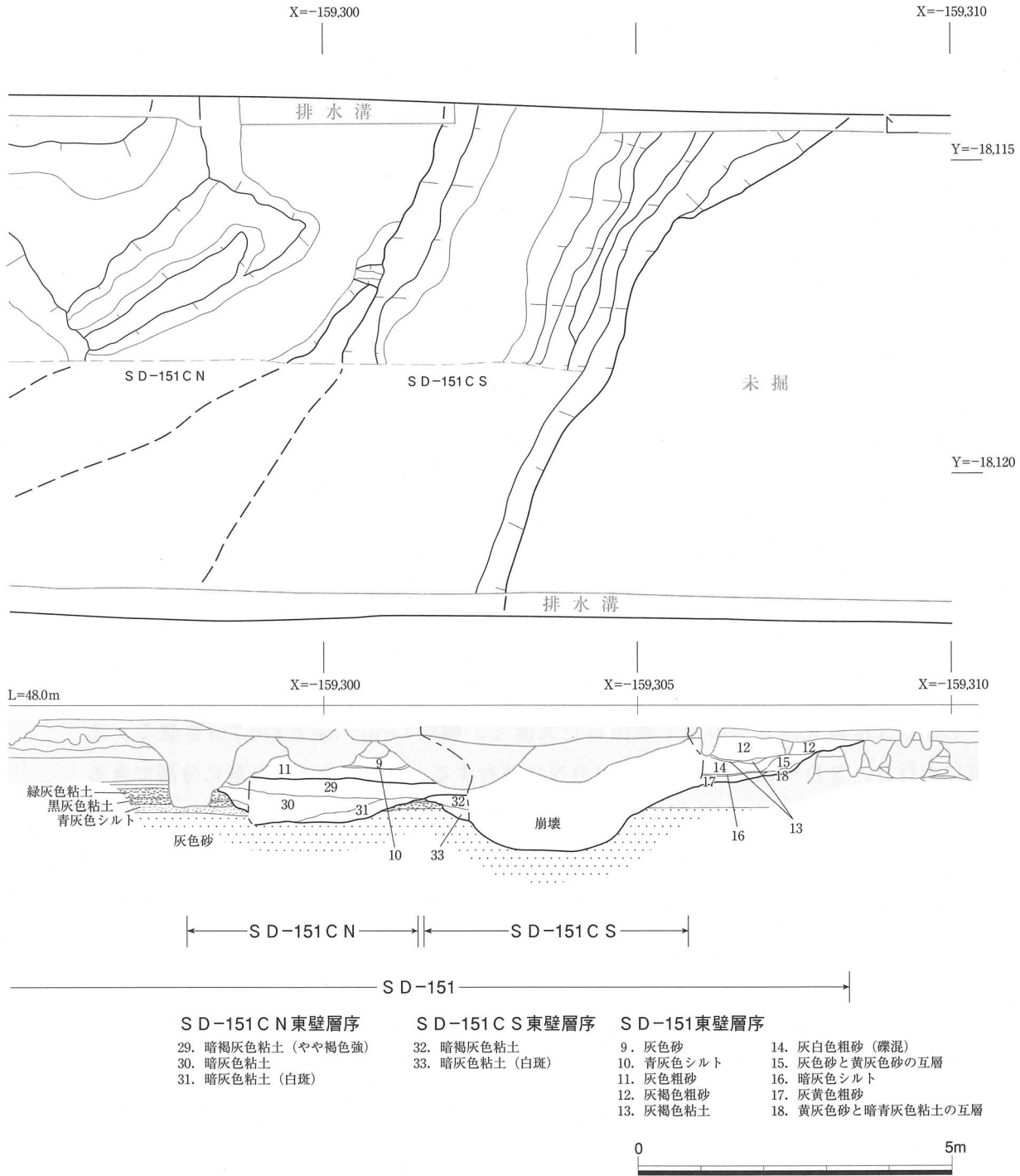
第II章 南地区の調査



第24図 弥生時代中期初頭～中期前葉の遺構 (4) (S=1/100)

SD-151A・151BN・151BS・151CN・151CS (第24・25図、写真図版6～8)

調査区北半では弥生時代中期初頭～中期前葉に掘削されたSD-151A・151BN・151CSの大溝3条、SD-151BN・151CSを連結したSD-151BS・151CNの溝2条からなる溝群を検出した。溝番号は、調査区の北から南へA・BN・BS・CN・CSとしている。これらを溝群とするのは、互いに近接することから下部では独立しているが上部は合流し、大規模な1つの溝の様相を呈するためである。下部溝群は上面を暗褐色灰色粘土 (植物混) に覆われて



第25図 弥生時代中期初頭～中期前葉の遺構(5) (S=1/100)

おり、大和第三-1様式の土器が出土する。溝群の上部については、弥生時代中期中葉の粗砂層で埋没し、下部とは時期や堆積状況が異なるため、SD-151として下部溝群とは区別した。なお、発掘調査においては下層遺構の保存のため、下部溝群を覆った暗褐灰色粘土(植物混)は調査区西半を未掘とし、調査区東半のみを掘り下げている。

SD-151Aは調査区北端で検出した大溝である。北肩は調査区外であるが、溝底で北肩への立ち上がりを確認している。このことから、溝幅は調査区内で確認した3.50mから1mを超

えないと思われる。深さは約1.1mを測る。北西－南東に走行する。溝の埋土は3層に分層されるが明瞭な差はなく、いずれも植物を含む白斑のある暗灰色粘土である。最下層から敲石に転用された太型蛤刃石斧（S1160）が出土した。時期は、大和第Ⅱ－2様式である。

S D－151 B Nは調査区北半の中央で検出した大溝で、溝幅約3.0m、深さ約1.0mを測る。北西－南東に走行し、S D－151 Aに並行する。埋土は大きく3層に分層されるが、上層と中層の間に、薄い黄灰色の砂層を挟む。遺物は木製品が多く、上層から柄付きの平鋏（狭）（W1010）が、中層から盾（W1033）と共に用途不明品（W1052）が、下層からは束になった有頭棒状木製品（W1053～1056）が出土した。時期は、大和第Ⅱ－2様式である。

S D－151 B Sは、S D－151 B NとS D－151 C Sの間で検出した溝で、幅約1.4m、深さ約0.4mを測る。S D－151 B Nから分岐し、北北東－南南西に走行する。その方向からS D－151 C Sに連結していた可能性がある。遺物には、胴部上半に櫛描き波状文を施した甕があり、摂津地方からの搬入品と考えられる。時期は大和第Ⅱ－3様式である。

S D－151 C Nは、S D－151 B NとS D－151 C Sの間で検出した小溝で、幅約1.5m、深さ約0.3mを測る。北北西－南南東に走行する。平面的には確認できなかったが、土層断面の観察から、S D－151 B N・B S・C S埋没後に掘削したものと考えられる。排水を目的として掘削された可能性がある。時期は、大和第Ⅱ－3様式である。

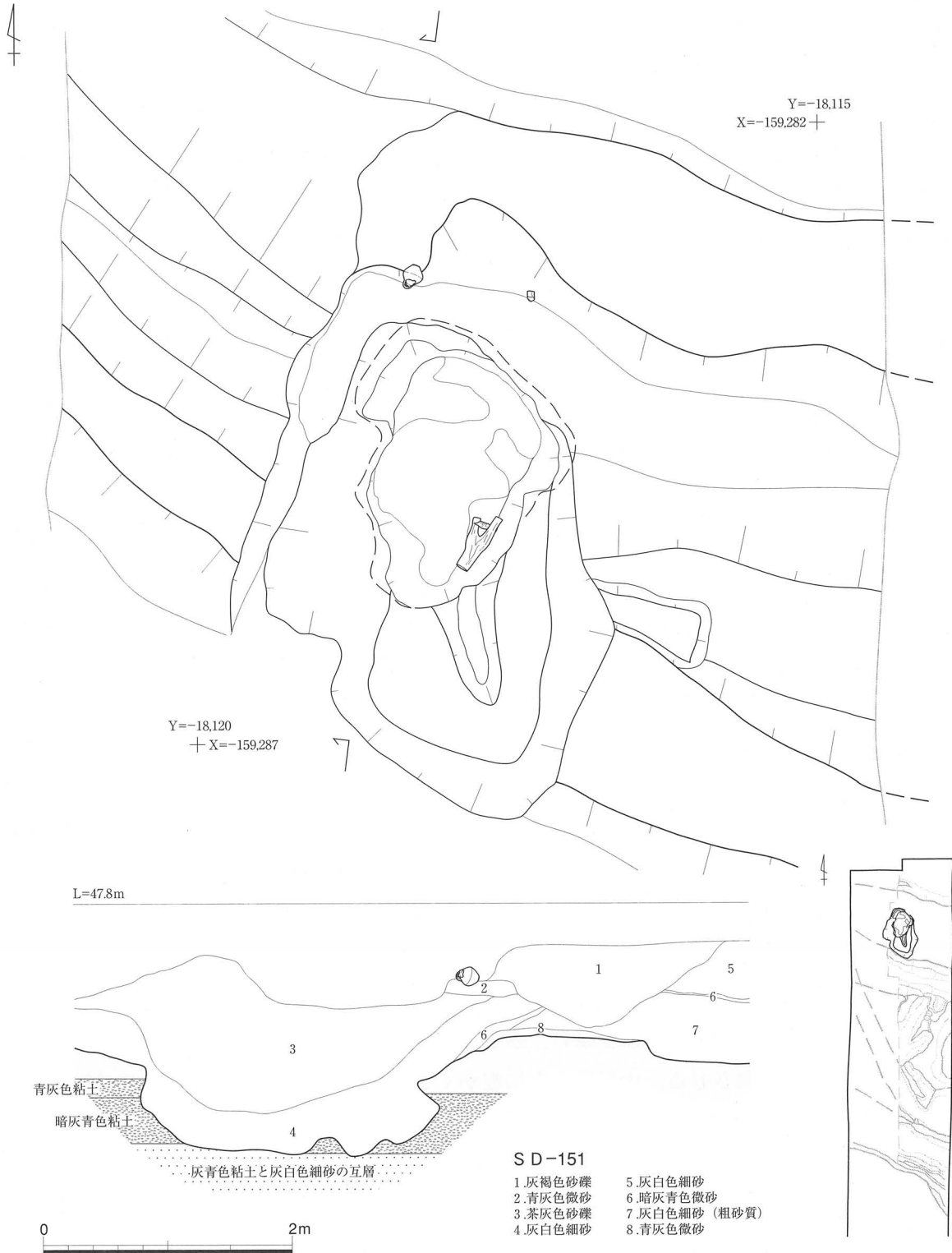
S D－151 C Sは調査区北半の南で検出した大溝で、幅約4.0m、深さ約0.7mを測る。北西－南東に走行し、S D－151 A、S D－151 B Nに並行する。埋土は大きく3層に分層できるが、最下層では南北両肩にベースの粘土をブロック状に含んだ暗灰色粘土が堆積している。最下層に含まれる土器は、大和第Ⅱ－1様式のものであり、並行する3本の大溝の出土土器としては最も古い。また、平面では確認できなかったが、中層埋没後に幅約0.8mの小溝が南肩に並行して掘り込まれていることが土層断面より確認できた。

#### S D－151（第24～26図、写真図版9）

本溝は、先述の下部溝群が埋没後も上部は排水路としての機能をもっていたと考えられ、弥生時代中期中葉前半の洪水が原因と考えられる砂層によって埋没する。本来ならば、S D－151については弥生時代中期中葉の遺構とすべきではあるが、下部溝群とは切り離して考えることができないため一連のものとしてここに報告した。

本溝は、S D－151 C Sの南肩がそのまま南肩となるが、北肩は本調査区内では検出できず、後に第65次調査区において北肩を検出した。その規模は、幅約40.0m、深さ約1.0mを測る。砂層の形成時期は、下層溝が埋没した大和第Ⅲ－1様式以降から、上層遺構群が形成される大和第Ⅲ－3様式以前に位置づけられる。

なお、概報では、本溝の砂層形成は大和第Ⅲ－4様式まで降る可能性を示唆していた。これは、上層遺構であるS D－101 BとS D－102 Bの肩になった粘土層はS D－151の内部にある中洲的（土手）なものであるが、ここで検出した砂層で埋没する長軸4.60m、短軸2.60m、深さ1.60mの楕円形の穴を、洪水における流水の激しさが形成したものと考え、この穴より出土



第26図 弥生時代中期初頭～中期前葉の遺構 (6) (S=1/50)

した水差形土器が大和第Ⅲ-4様式であることを根拠としていた。しかし、第65次調査でも、同一砂層上面において、弥生時代中期中葉の遺構が検出されることから、砂層形成は大和第Ⅲ-2様式の短期間と考えられるようになった。砂層で埋没する楕円形の穴については、大和第Ⅲ-4様式の土坑(井戸)の可能性も想定される。

(2) 弥生時代中期中葉の遺構（第19図、写真図版2）

本調査区における弥生時代中期中葉の遺構は、北半と南半ではその検出面となるベースが大きく異なる。北半はSD-151を埋没させた砂層上を検出面とするのに対し、南半では第V層：黄灰色粘質土の上面を検出面としている。さらに、調査区南端部においては、SD-151の堆積砂層と同一形成と考えられる明灰褐色砂質土が検出されるが、これに覆われて埋没する弥生時代中期中葉の遺構は前半（大和第Ⅲ-1・2様式）であり、これを切った弥生時代中期中葉の遺構は後半（大和第Ⅲ-3・4様式）である。このことは、SD-151下部の弥生時代中期中葉初頭～中期前葉大溝群が最終堆積土である暗灰色粘土に大和第Ⅲ-1様式の土器を含み、SD-151の砂堆積には大和第Ⅲ-2様式の土器を含むことも矛盾していない。本調査区北半で、SD-151が埋没し、居住域となるのは弥生時代中期中葉でもその後半といえよう。

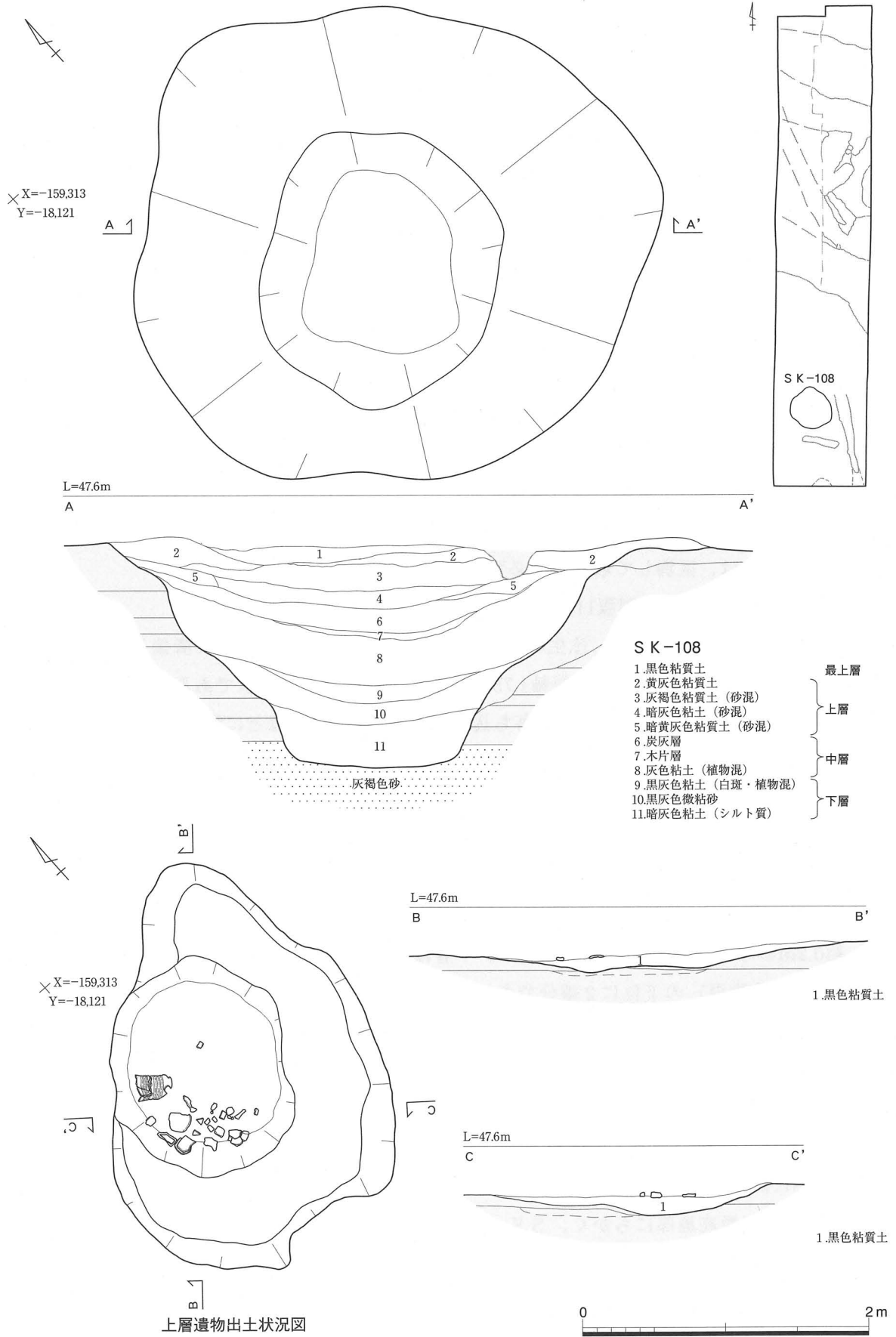
土坑

SK-108（第27図、写真図版10）

本坑は調査区の南側、弥生時代中期中葉のSK-118の南東に隣接して検出した。その東肩は下層遺構である弥生時代前期のSK-155を切るが、調査時にはこれを判別できず、やや掘り過ぎてしまっている。平面は不整形円形を呈し、長軸3.60m、短軸3.30mである。断面は逆台形であるが、さらに底面中央は円筒状に一段くぼみ、深さは1.60mを測る。底面は標高45.87mにあって灰褐色砂に達し、湧水がある。

堆積土は、大きく最上・上・中・下の4層に分かれる。このうち、最上層の黒色粘質土からは、大和第Ⅳ様式と大和第Ⅴ様式の土器とともに炭灰や多数の焼土塊が出土している。明らかに、中・下層の出土土器との間には時期差があり、これらを一連の遺構として把握することには、問題もあろう。異なる二つの遺構が、偶然に切り合った可能性も考えられる。しかし、最上層の黒色粘質土の拡がり、単独遺構の堆積土というよりは、下部遺構掘形とも対応した不整形な落ち込み状を呈している。おそらくは、本坑が上層まで埋没してもなお、残ったくぼみを廃棄坑に利用していたことを示すものといえよう。上層は灰色系粘質土であるが砂を含んでおり、これが調査区南半の低地部を覆い、弥生時代中期後葉遺構面を形成した明灰褐色砂質土に対応するものと推測される。中層はさらに細かく2分でき、上位は炭灰層、下位は灰色粘土（植物混）である。また、上位と下位の間には木片層を挟んでいる。このうち、中層下位及び間層の木片層までは、本坑が機能停止した後の自然埋没状況を示し、中層上位の炭灰層はその後の廃棄坑として人為的に形成されたものであろう。下層もまたさらに細かく2分することが可能で、上位が黒灰色系粘土、下位がシルト質の暗灰色粘土である。

本坑の当初の掘削時期は、上層堆積土の灰褐色粘質土（砂混）が明灰褐色砂質土に対応することから弥生時代中期前葉に遡り、その下層から出土した土器により大和第Ⅲ-1様式と考えられる。そして、埋没後の上面のくぼみは大和第Ⅳ様式末から大和第Ⅴ様式にかけて廃棄坑として再利用されていたのであろう。その機能は、断面形態及び底面が湧水点に達することから井戸と考えられる。



第27図 弥生時代中期中葉の遺構 (1) (S = 1/40)



**SK-115** (第28図、写真図版11)

本坑は調査区南側の西寄り、弥生時代後期後葉のSK-114の西側で検出した。上面は浅い落ち込み状となっており、これを一段下げることによって、掘形の輪郭を検出することができた。その西端を調査区西排水溝によって欠損するが、南西隅は排水溝の手前で検出している。なお、調査区西壁には、本坑と対応する位置に遺構の落ち込みが認められるが、南西隅は検出していることから延びていくとは考えられず、おそらくは切り合う他遺構の断面であろう。平面は隅丸方形を呈すると考えられ、長軸1.80m、短軸1.30mである。断面は逆台形で、深さは0.41mを測る。

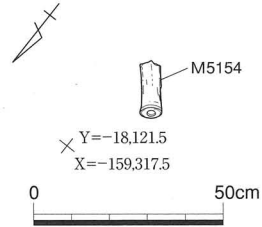
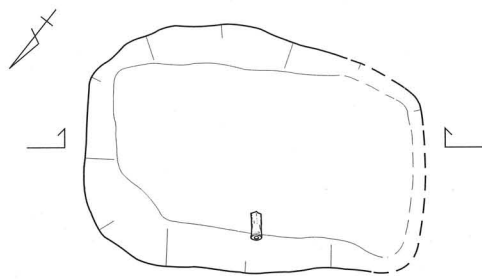
堆積土は3層からなり、第1層：黒灰色粘質土（炭混）、第2層：炭層、第3層：暗灰色粘土で、底面肩部には第3-b層：灰褐色粘質土（砂混）が流れ込む。時期は、本坑と上面を覆った落ち込みの出土土器から、大和第Ⅲ-4様式に限定できる。本坑の性格は不明であるが、特筆すべき遺物として第1層から青銅器鑄造に関連する送風管片が出土している。唐古・鍵遺跡において、遺構に伴った青銅器鑄造関連遺物としては、最も古いものである。同じ調査区内ではあるが、SD-101B・102Bを中心として出土する弥生時代中期後葉～後期初頭の青銅器鑄造関連遺物とは、区別して取り扱う必要がある。

**SK-118** (第28図、写真図版11)

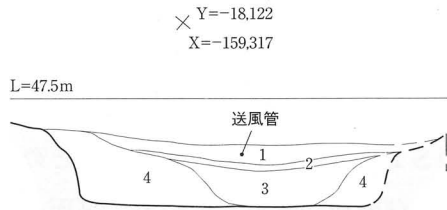
本坑は調査区南側の西寄り、弥生時代中期中葉のSK-108の北西側に隣接している。平面は不整形を呈し、長軸2.05m、短軸1.75mである。断面は、円筒状であるがその上面はロート状に開き、底面は一回り小さく一段落ち込んでいる。断面の中ほどに膨らみが認められるが、これは崩落によるものであろう。深さは1.92mを測る。底面は標高45.63mにあって、灰色砂に達し、湧水がある。

堆積土は、大きく上・中・下の3層に分かれる。上層は、黒色系粘質土の上位と灰黒色粘質土の下位、さらにベース層ブロック土の肩部流れ込みに3細分することができる。上位と下位の境には炭灰層を挟んでいる。中層は、灰黒色粘砂の上位と粘層の下位に2細分できる。粘層は、約0.2mの厚さをもって堆積していた。下層は、灰色粘土（植物混）の上位と黒灰色粘土（シルト質・植物混）の下位に2細分できる。上位の灰色粘土（植物混）からは、焼木などとともに木製農具が出土した。農具は、柄の付いた横鍬2点（W1013・1014）である。いずれも破損あるいは焼けていた。下位の黒灰色粘土（シルト質・植物混）は、ほとんど遺物を含まなかった。

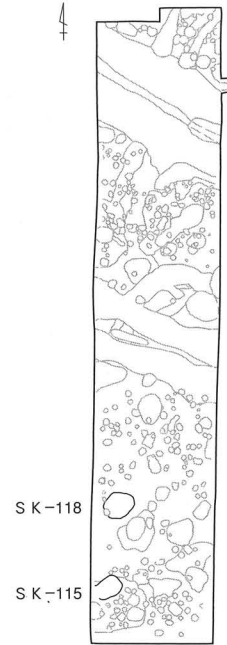
本坑の性格は、その平面・断面形態から井戸と考えられる。また、同じ井戸と考えられるSK-108に隣接することから、その埋没後に掘削したものと考えられる。本坑は、調査区中央寄りにあって微高地部にちかく、SK-108を埋没させた明灰褐色砂質土との関係は明らかではない。しかし、本坑の堆積層中には、明灰褐色砂質土と対応する流入土は確認できなかった。本坑は明灰褐色砂質土の形成以後、弥生時代中期中葉後半に掘削されたと考えられる。これは、下層の出土土器が大和第Ⅲ-3様式であることから、裏付けることができる。



SK-115 送風管出土状況図

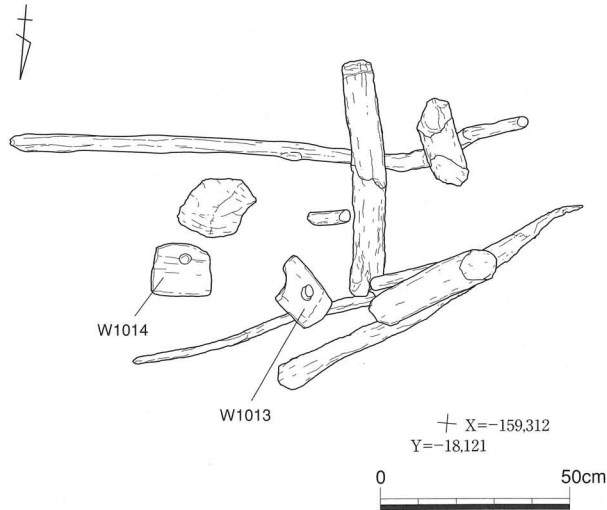
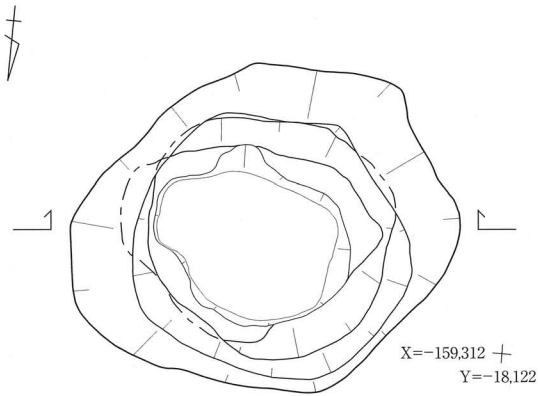


- SK-115
- 1 黒灰色粘質土 (炭混)
  - 2 炭層
  - 3 暗灰色粘土
  - 4 灰褐色粘質土 (砂混)

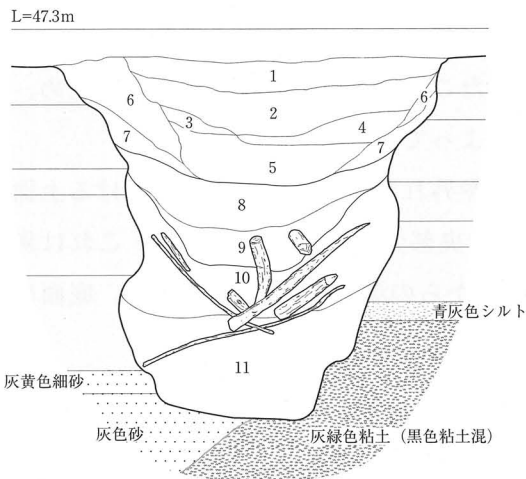


SK-118

SK-115



SK-118 第6層出土状況図



- SK-118
- 1 黒褐色粘質土
  - 2 黒灰色粘質土
  - 3 灰褐色砂質土
  - 4 炭灰層
  - 5 灰黒色粘質土 (砂混)
  - 6 灰褐色粘質土 (黄斑)
  - 7 暗灰色粘質土
  - 8 灰黒色粘砂
  - 9 粘層
  - 10 灰色粘土 (植物混)
  - 11 黒灰色粘土 (シルト質・植物混)
- 上層  
中層  
下層



第28図 弥生時代中期中葉の遺構(2) (平・断面図: S=1/40、出土状況図: S=1/20)

**SK-129** (第29図、写真図版12)

本坑は調査区南側の東寄り、弥生時代後期後葉のSK-113の南東側に隣接して検出した。平面は隅丸方形を呈し、長軸0.94m、短軸0.64mである。断面は逆台形で、深さは0.19mを測る。堆積土は2層からなり、第1層：黒色粘質土、第2層：黒色粘質土（炭灰混）である。時期は、大和第Ⅲ-3様式である。周囲に散在する柱穴よりは規模が大きく、形態も隅丸方形と整うことから土坑としたが、その性格は不明である。

**SK-140** (第29図、写真図版12)

本坑は調査区中央の東端で、弥生時代中期中葉のSD-113を切った状態で検出した。また、南肩の一部を弥生時代後期後葉のSD-105に切られる。本坑は弥生時代中期前葉の大溝SD-151CNの北肩となった暗灰色粘土層と、その上部のSD-151を埋没させた砂層との境に掘削されているが、砂層を肩とする南側は崩壊し、平面及び断面が変形している。平面は不整形円形を呈すると考えられるが、その大部分は調査区外の東側へと広がっている。現状での最大径は約2.1mである。断面は、上部の開いた円筒状であるが、南側は崩れて膨らんでいる。深さは1.24mで、底面は標高46.42mにあって青灰色シルトに達する。

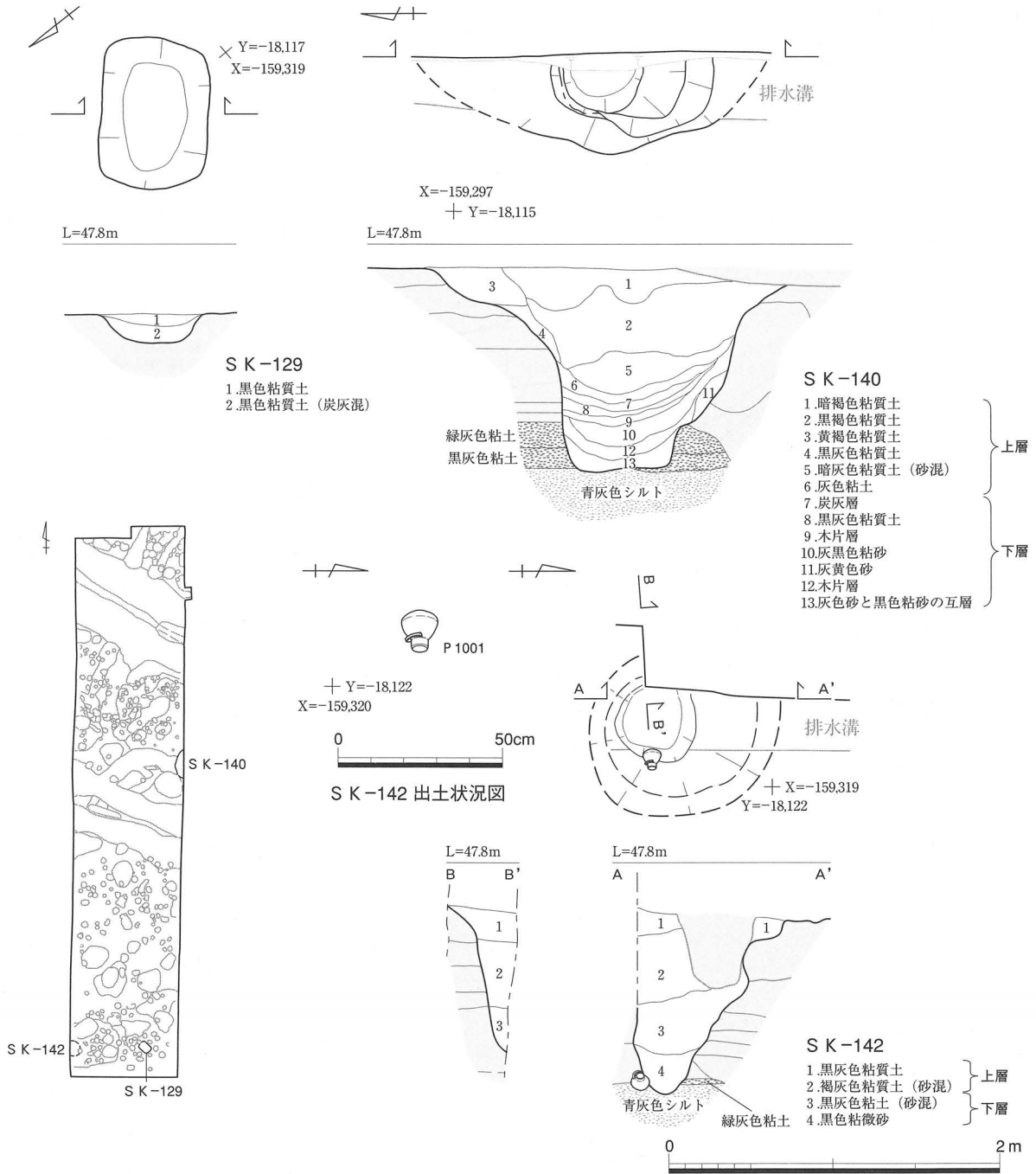
堆積土は大きく上・下2層に分かれる。上層は、上位の褐色系粘質土と下位の暗灰色粘質土（砂混）に2細分できる。これに対し、下層では黒色系粘砂と炭灰や木片が薄く互層堆積する。本坑の性格はその平面・断面形態から井戸と考えられる。時期は、下層から出土した甕の特徴により、大和第Ⅲ-3様式と考えられる。ただし、本坑は大和第Ⅲ-3様式の土器を出土するSD-113を切っており、これよりは新しい。西側には、同時期と考えられる弥生時代中期中葉の竪穴住居跡SB-101が隣接しており、それとの関連が想定される。

**SK-142** (第29図、写真図版12)

本坑は調査区南側の西端、弥生時代中期中葉のSK-115の南側で検出した。上面は、弥生時代後期後葉の落ち込みIによって削平を受ける。その他、弥生時代後期後葉以前の柱穴が上面から切り込んでいる。本坑の大半は西側の調査区外へと広がっており、また調査区内では西排水溝と重なっていたため、平面検出はできなかった。現場最終段階での土層確認のための深掘りにおいて、水差形土器1点及び底面堆積を検出したことによって認識した。このため、本坑の規模等については、調査区西壁断面からの情報によっている。

本坑の平面は不明であるが、坑の中心より西側にやや外れた調査区西壁断面における上面の最大幅は約1.0mである。断面は逆円錐状で、北側の中央部分が膨らんでいるが、これは崩壊によるものであろう。検出面である落ち込みIの底面からの深さは約1.3mを測る。底面は標高46.24mにあって青灰色シルトに達し、湧水がある。

堆積土は4層からなり、第1層：黒灰色粘質土、第2層：褐色粘質土（砂混）、第3層：黒灰色粘土（砂混）、第4層：黒色粘微砂である。第4層からは、坑底面よりやや浮いた状態で流水文を施文した水差形土器（P1001）が完形で出土した。本坑の性格は、断面形態や水差形土器の完形出土、底面の湧水から井戸と考えられる。時期は、大和第Ⅲ-1様式である。

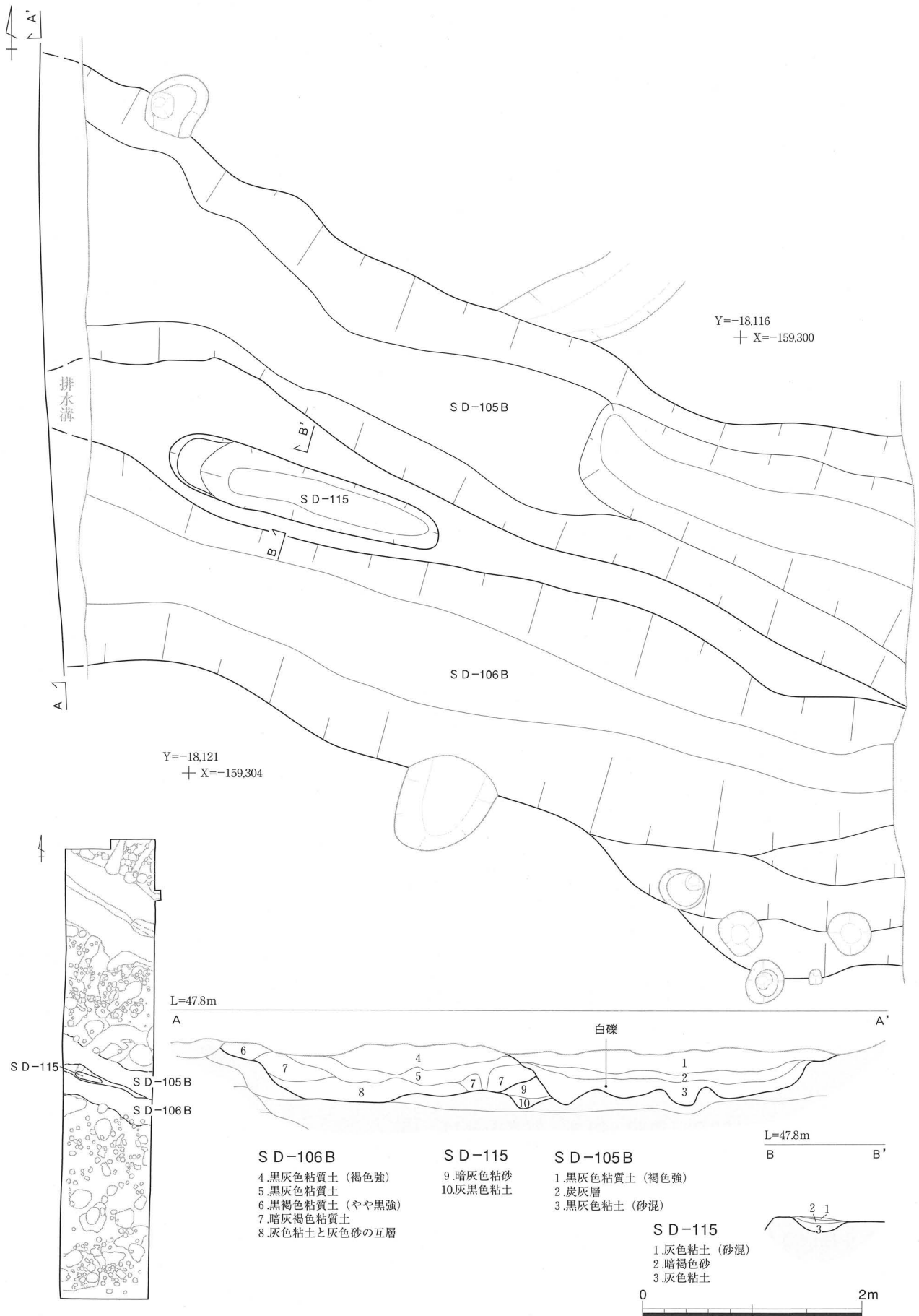


第29図 弥生時代中期中葉の遺構 (3) (平・断面図: S=1/40、出土状況図: S=1/20)

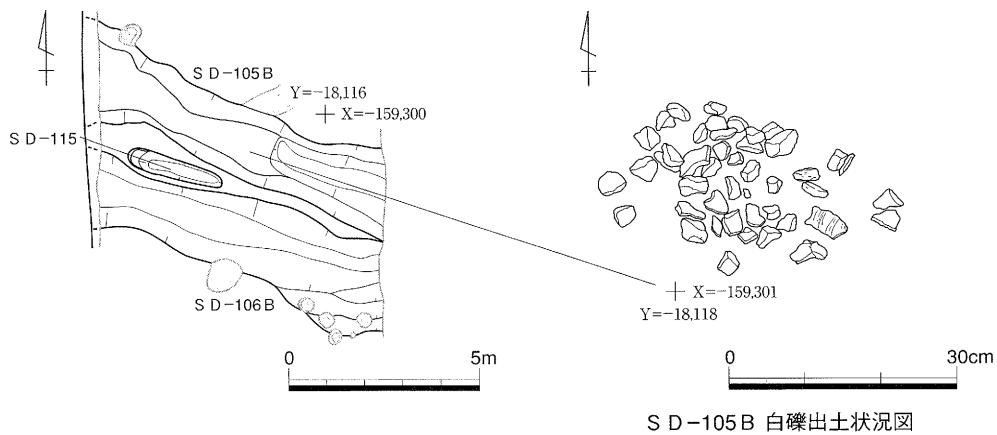
溝

SD-105B・106B (第30・31図、写真図版14・15)

両溝は調査区中央で延長約8.0mにわたって検出した西北西-東南東に並走する大溝である。両溝は下層遺構面の大溝SD-151が弥生時代中期中葉の粗砂層で埋没した後、その粗砂層上より掘削されている。北側の溝をSD-105B、南側の溝をSD-106Bとする。両溝は著しく近接しており、幅広い一連の溝状を呈する。しかし、両者には切り合いの前後関係があり、SD-106Bの北肩が埋没した後にSD-105Bが掘削されている。



第30図 弥生時代中期中葉の遺構 (4) (S = 1/50)



第31図 弥生時代中期中葉の遺構（5）（平面図：S=1/200、出土状況図：S=1/10）

SD-105Bは、幅1.50～2.20mである。断面は逆台形で、深さは0.39～0.76mを測る。溝底の標高は調査区西端で約47.0mであるが、溝東半では一段低くなっており東端で約46.7mを測る。このことより、SD-105Bは西北西から東南東に向かって走行していたと考えられる。堆積土は、本溝が粗砂層に掘り込まれたという性格上、肩からの流れ込みなど細かく分層できるが、大きく上・中・下の3層に分かれ、上層は黒灰色粘質土（褐色強）、中層は炭灰層、下層は黒灰色粘土（砂混）である。中・下層は多くの炭灰を含んでいた。遺物のうち、下層の中央において直径3cm前後の白礫が集積された状態で出土している。下層から大和第三-3様式の土器が、上層からは大和第四-1様式の土器が出土する。

SD-106Bは、幅1.40～2.60mである。断面は逆台形で、深さは0.47～0.68mを測る。溝底の標高は調査区西端で46.96m、東端で46.87mである。さほど高低差はないが強いて言うならば、SD-105Bと同様に西北西から東南東に向かって走行していたのであろう。堆積土は大きく上・中・下の3層に分かれ、上層は黒灰色粘質土（褐色強）、中層は黒灰色粘質土、下層は灰色粘土と灰色砂の互層である。遺物は、下層から大和第三-2様式の土器が出土し、上層からは大和第四-1様式の土器が出土する。

両溝においては、切り合い関係をもつが、土器様式的にはさほどの時間差はない。その切り合いとして、当初の掘削はSD-106BがSD-105Bに先行するが、上層の埋没については同時期であった可能性も考えられる。

#### SD-115（第30図、写真図版16）

本溝は調査区中央、SD-105Bと106Bの間で検出した。平面的には、長さ2.56m、幅0.50mの長楕円形の輪郭を検出している。しかし、調査区西壁断面には対応する落ち込みがあり、これに繋がり溝になると考えられる。断面は逆台形で、深さは約0.2mを測る。堆積土は3層からなり、第1層：灰色粘土（砂混）、第2層：暗褐色砂、第3層：灰色粘土である。

本溝は、SD-105B・106Bと並行し、調査区西壁断面においてはこれらに切られることから、先行溝だった可能性がある。

**SD-107** (第32図、写真図版13・29)

本溝は調査区北端で検出し、南南西-北北東に走行している。その北側は北調査区外へと延び、南側は弥生時代中期後葉～後期初頭のSD-101Bに切られる。溝幅は、南から北へ向かって狭まるが、南側の最大幅で1.40m、北側の最小幅で0.64mである。断面は逆台形で、深さは約0.3mを測る。堆積土は黒褐色土の単層である。遺物は少ないが、大和第Ⅲ-3様式の土器が出土している。

本溝については、SD-102Bの南側で検出した後述のSD-108と本溝の走行方向が同一であり、一連のものとなる可能性がある。さらに、第65次調査区で検出したSD-106・107も、位置的に本溝の北延長上にあり、弥生時代中期後葉に位置づけられるが同一溝の可能性はある。

**SD-108** (第32図、写真図版13)

本溝は調査区北側で検出し、南南西-北北東に走行している。その北側はSD-102Bに切られ、南側は東に向かって屈曲しSD-103Bの西肩に切られる。ただし、屈曲部から東側では、柱穴状の凹凸が激しく、不明瞭である。溝幅は部分によって異なり、0.80~1.40mである。断面は逆台形で、深さは0.23~0.35mを測る。時期は、大和第Ⅲ-3様式から大和第Ⅴ様式の土器が含まれていたが、弥生時代中期中葉と考えられる。

本溝については先述したが、SD-101Bの北側で検出したSD-107、さらには第65次調査区のSD-106・107と一連の溝になる可能性がある。本溝は、その南端がSD-103Bに切られ不明瞭であるが、おそらくは弥生時代中期中葉のSD-105B・106Bのいずれかに取り付き、第65次調査区の居住域及び本溝の東側に想定される竪穴住居跡SB-101からの排水の役割を担っていたものと考えられる。

**SD-109** (第32図、写真図版16)

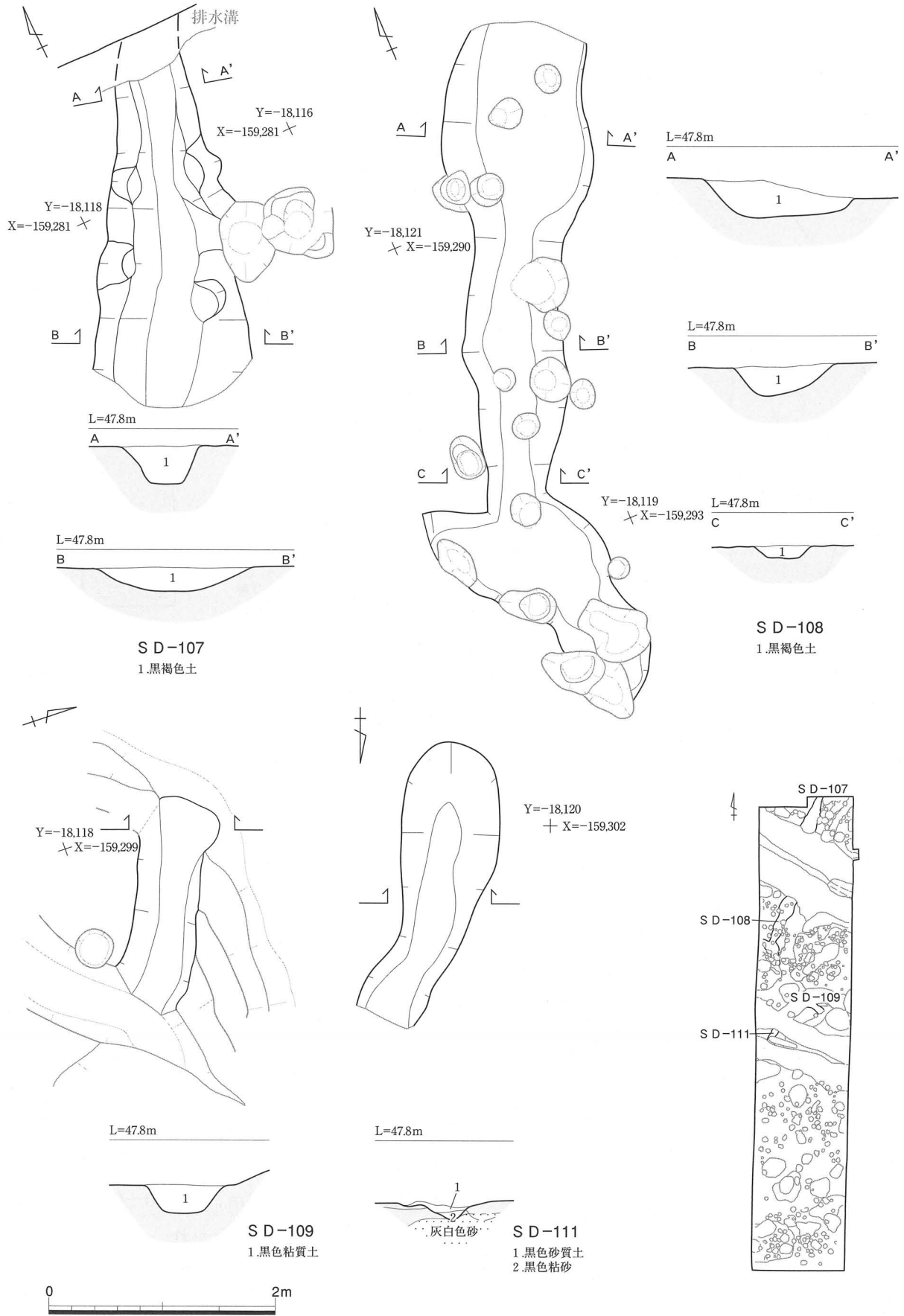
本溝はSD-113の南側で検出し、西北西-東南東に走行している。その西端は大和第Ⅲ-3様式のSD-113に取り付き、南側では大和第Ⅳ様式のSD-110の西肩に切られる。溝幅は約0.7mである。断面は逆台形で、深さは0.25mを測る。堆積土は黒色粘質土の単層である。時期は、大和第Ⅲ-3様式である。

本溝は、埋没過程にあったSD-113の再掘削溝的な性格をもち、排水の役割を担っていたと考えられる。

**SD-111** (第32図)

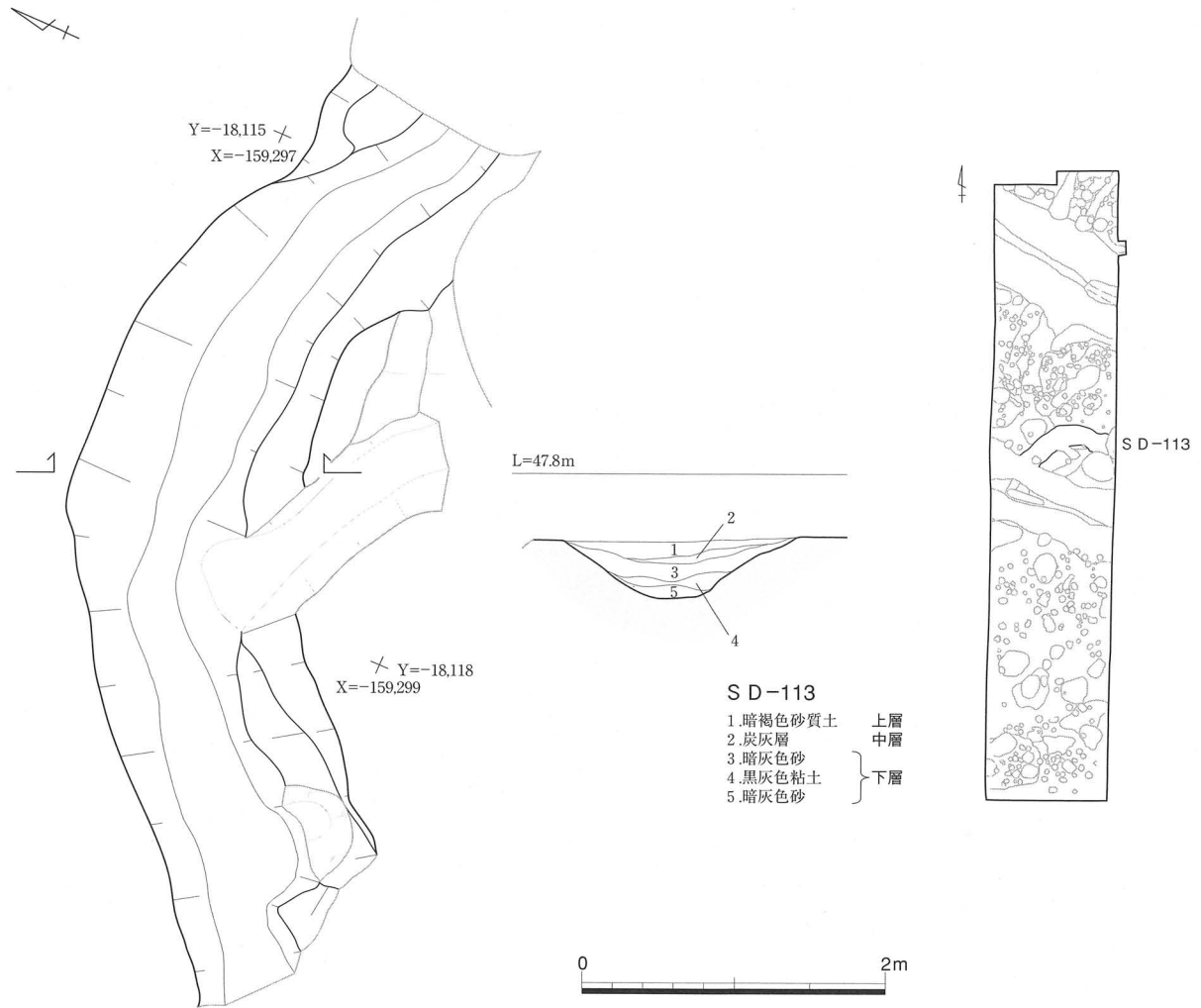
本溝はSD-106Bの堆積土上面において検出した。上面を大和第Ⅳ様式のSK-111に切られるが、一方においてSD-115の西端を切っている。本溝は南-北に走行し、北端はSD-105Bの南肩に取り付く。溝幅は0.80mである。断面は皿状で、深さは0.07~0.18mを測る。堆積土は2層からなり、第1層：黒色砂質土、第2層：黒色粘砂である。時期は、大和第Ⅲ-4様式である。

本溝の機能は、埋没過程にあるSD-106Bから、北側に付け替えられたSD-105Bに向けて排水する役目を持っていたと考えられる。



第32図 弥生時代中期中葉の遺構 (6) (S = 1/50)





第33図 弥生時代中期中葉の遺構（7）（S = 1/50）

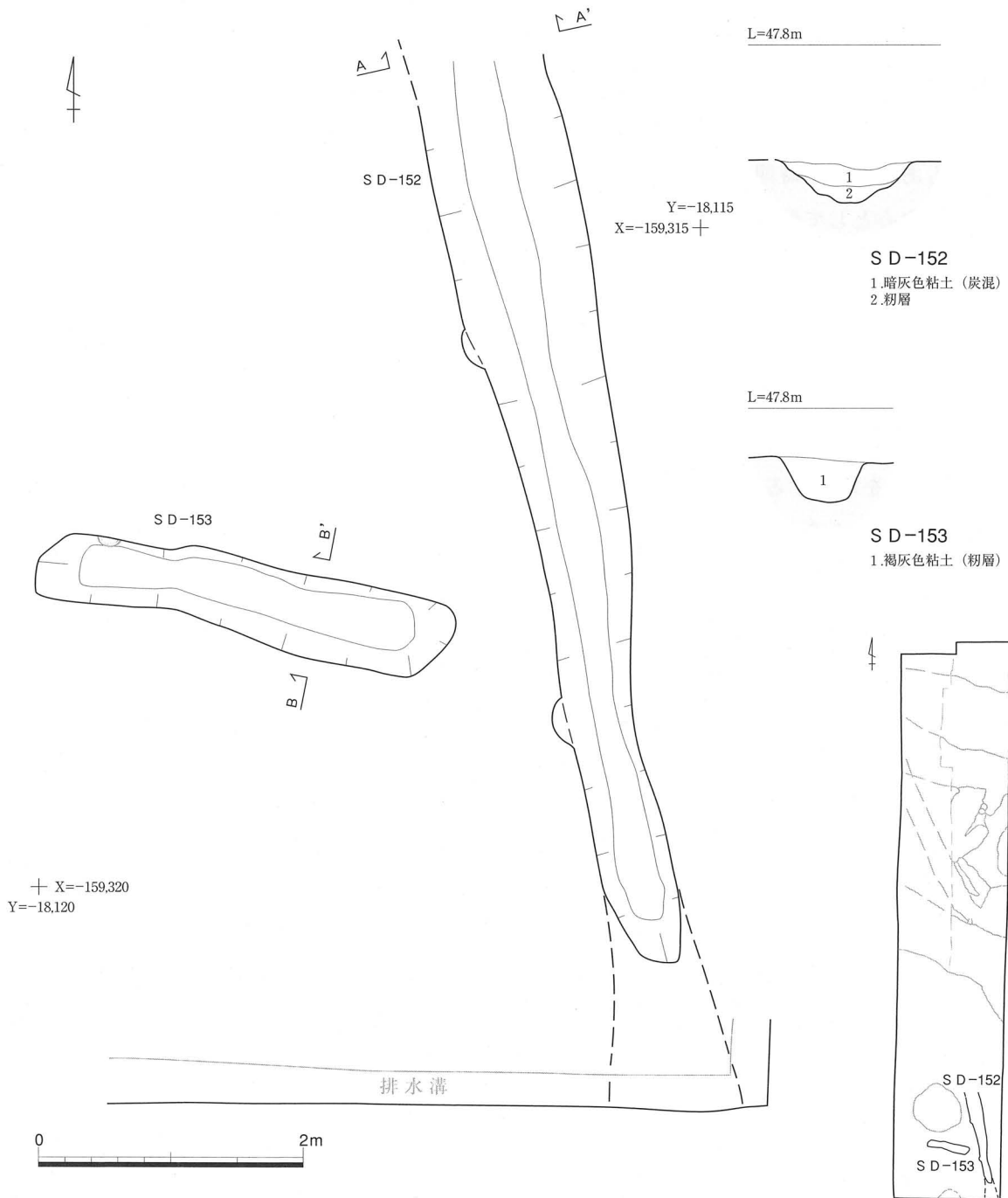
**SD-113**（第33図、写真図版16）

本溝は調査区中央でSD-105Bの北側に隣接しており、東-西に走行するが南に向かって内湾し、その西端部はSD-105Bの北肩に連結する。また、南肩にはSD-109が取り付く。調査区の東端においてSK-140に切られている。幅は約1.4mである。断面は逆台形で、深さは約0.5mを測る。堆積土は中層の炭灰層によって大きく2分され、上層は暗褐色砂質土、下層は暗灰色砂（間に黒灰色粘土を挟む）である。時期は、大和第Ⅲ-3様式である。

本溝は、北側に想定される居住域からSD-105Bへ、排水していたと考えられる。

**SD-152**（第23・34図、写真図版3）

本溝は調査区南側の東寄りで検出し、南南東-北北西に走行する。その北側は未調査のため不明、その南側は調査区外へと延びている。その規模は、検出長8.20m、幅0.50~0.97mである。断面は逆台形で、深さ0.30~0.80mを測る。堆積土は大きく3層に分かれ、上層は暗灰褐色粘質土、中層は暗灰色粘土（炭灰・砂混）、下層は灰褐色粘土（粘層）である。時期は、大和第Ⅲ-1様式である。



第34図 弥生時代中期中葉の遺構 (8) (S = 1/50)

SD-153 (第34図、写真図版3)

本溝は調査区南端、先述のSD-152の西側に隣接する。本溝は東-西に走行するが両端は収束し、全長3.20m、幅約0.6mの規模は溝とするより長楕円形の土坑に含めるべきかもしれない。断面は逆台形で、深さは約0.3mを測る。堆積土は、褐灰色粘土の粘層で単層である。時期は、大和第Ⅲ-1様式である。その堆積土は、隣接するSD-152の下層堆積土と同様の粘層であり、両者は関連する可能性が強い。

### 竪穴住居跡

#### S B - 101 (第35図、写真図版17)

調査区北半、S D - 101 B・102 BとS D - 105 B・106 Bに挟まれた幅約8.5mの範囲からは、5基の炭灰土坑と多数の柱穴を検出した。5基の炭灰土坑は密集しており、切り合い関係をもつものもある。その時期は、いずれも弥生時代中期中葉であった。また、柱穴は、これらの炭灰土坑を中心として同心円状に取り巻くように分布していた。これらのことより、炭灰土坑は灰穴炉であり、それを取り巻く柱穴とともに、弥生時代中期中葉の竪穴住居跡を構成するものと考えられた。しかし、竪穴住居跡については、炭灰土坑や柱穴が重複することから複数回の建て替えが考えられるうえに、想定される復原範囲の西側が弥生時代後期後葉のS D - 103によって削られており、一棟の単位を把握することは困難であった。このため、竪穴住居跡に関わると考えられる遺構群をS B - 101として総称した。

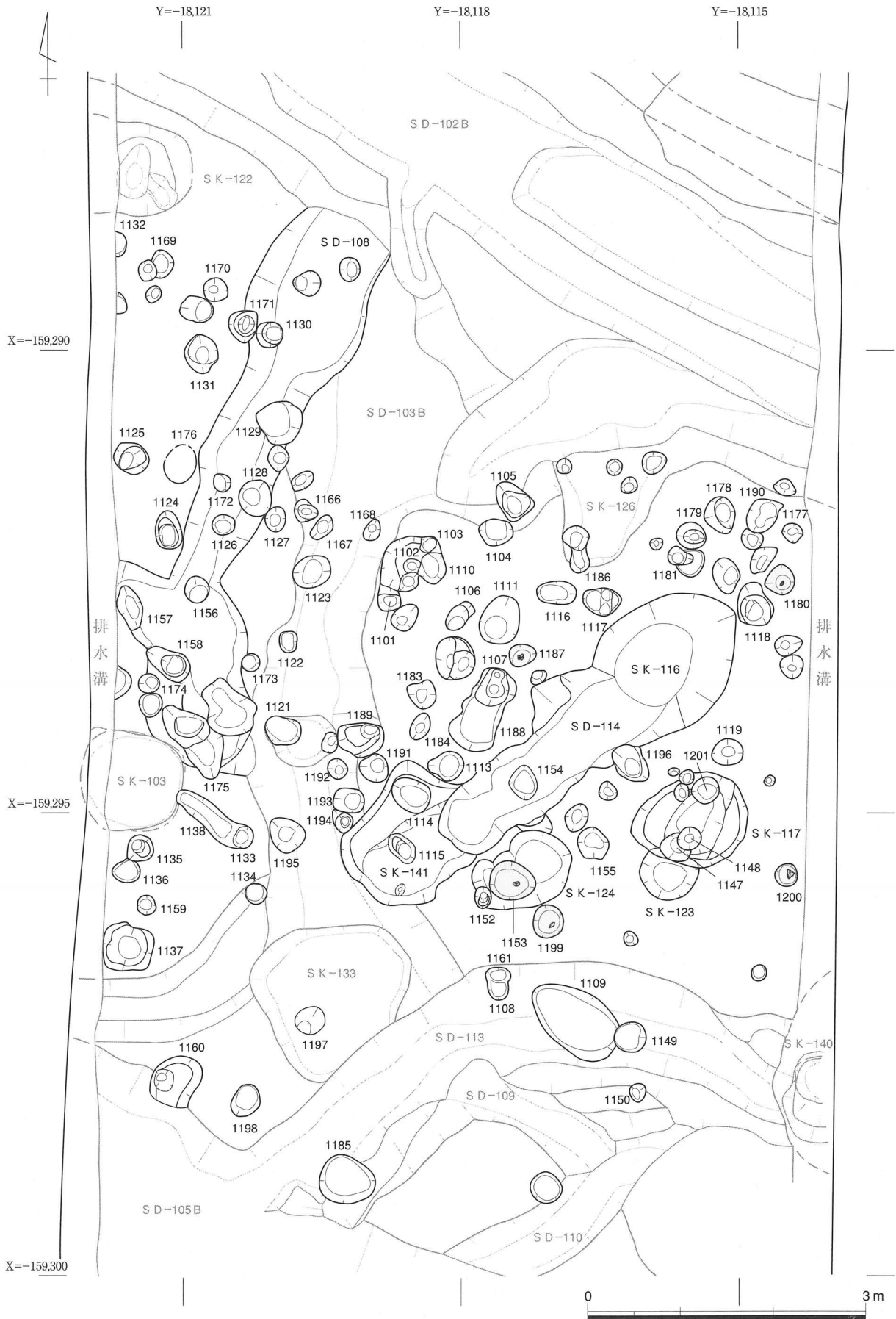
S B - 101を構成する遺構は、S K - 116・117・123・124・141の炭灰土坑5基、S D - 114の溝1条、これらを取り巻く柱穴群である。柱穴には、柱根を残しているPit - 1153・1199・1200・1180・1187がある。これら付属施設は、各々について後述する。ここでは、想定される竪穴住居跡S B - 101の復原案を提示する。

S B - 101の規模を復原するのに参考となるのが、弥生時代中期後葉の段階でS D - 105 Bから約8.5mの間隔を置いて北側のS D - 102 Bへと付け替わっていることである。これは、その付け替えにあたって、S B - 101を避けたことによる間隔であろう。すなわち、竪穴住居跡の規模は、壁及び周提まで含めて直径8.5m未満のものと想定される。また、その間隔のうち調査区東側に炭灰土坑は集中するが、西側には同時期のS D - 108があり、S B - 101の西側はそこまでは及んでいなかったと考えられるのである。また、S B - 101の南側にはS D - 105 Bとの間に同時期のS D - 113が走り、S D - 102 Bとの間隔はさらに狭いものとなる。ただし、弥生時代中期後葉には、S D - 113からより南側のS D - 110へと付け替えられており、S B - 101もやや南側にずれて建て替えられている可能性もある。

この限定された範囲で着目したいのが、柱根を残す柱穴である。これらが、同一建物に伴うものとする根拠はないが、周辺にある多数の柱穴には柱根が残っておらず、建て替えに伴い抜き取られたと考えられるならば、残った柱根は最終の建物に伴う柱とも考えられよう。ちょうどPit - 1153・1180・1187・1199・1200は、ややいびつではあるが一辺3mとなる四角形の角に位置し、これらが4本の主柱穴となる可能性は高い。ただし、この場合に灰穴炉となる炭灰土坑が中央に位置しないという問題点もある。これら柱穴から想定される竪穴住居跡の規模は、径6～7mである。

灰穴炉としての可能性が高いのはS K - 117であるが、S K - 116もその候補である。S K - 116は、南西隅がS D - 114との切り合い関係をもつが、これらは別個のものではなく、灰穴炉とそれより延びる排水溝という可能性も考えられる。

以下、付属施設について、詳述する。



第35図 弥生時代中期中葉の遺構 (9) (S = 1/60)

a. SK-116 (第36図、写真図版18)

本坑は調査区北半、東側で検出した。南西肩はSD-114の北東端を切っている。平面は楕円形を呈し、長軸1.76m、短軸1.38mである。断面は逆台形で、深さは0.40mを測る。堆積土は3層からなり、第1層：黒褐色砂質土、第2層：暗灰褐色粗砂（ベース流入土）、第3層：黒褐色砂質土である。時期は、大和第Ⅲ-4様式である。

b. SK-117 (第36図、写真図版19)

本坑は調査区北半、東側においてSK-116の南側で検出した。南肩は、SK-123の北肩を切っている。平面は楕円形を呈し、長軸1.28m、短軸1.03mである。断面は半円形で、深さは0.27mを測る。堆積土は2層からなり、第1層：黒褐色粘質土（砂礫・炭混）、第2層：黒色粘質土（炭灰混）である。遺物は、第1層から多数の土器片とともに、流紋岩製（S1055）と結晶片岩製（S1046）の石庖丁が1点ずつ出土した。時期は、大和第Ⅲ-4様式である。

本坑の底面からは、Pit-1147・1148の2基の柱穴を検出しているが、切り合い関係にあるのではなく、本坑に伴うものであった可能性が強い。その堆積状況や炭灰を混じえることから、灰穴炉であると考えられる。

c. SK-123 (第36図、写真図版19)

本坑は調査区北半、東側においてSK-117の南側で検出した。北肩は、SK-117の南肩によって切られる。平面は不整形を呈し、長軸0.78m、短軸0.64mである。断面は逆台形で、深さは0.36mを測る。堆積土は2層からなり、第1層：黒褐色粘質土（砂礫混）、第2層：黒色粘質土（炭灰混）である。時期は、大和第Ⅲ-4様式である。

d. SK-124 (第37図、写真図版18)

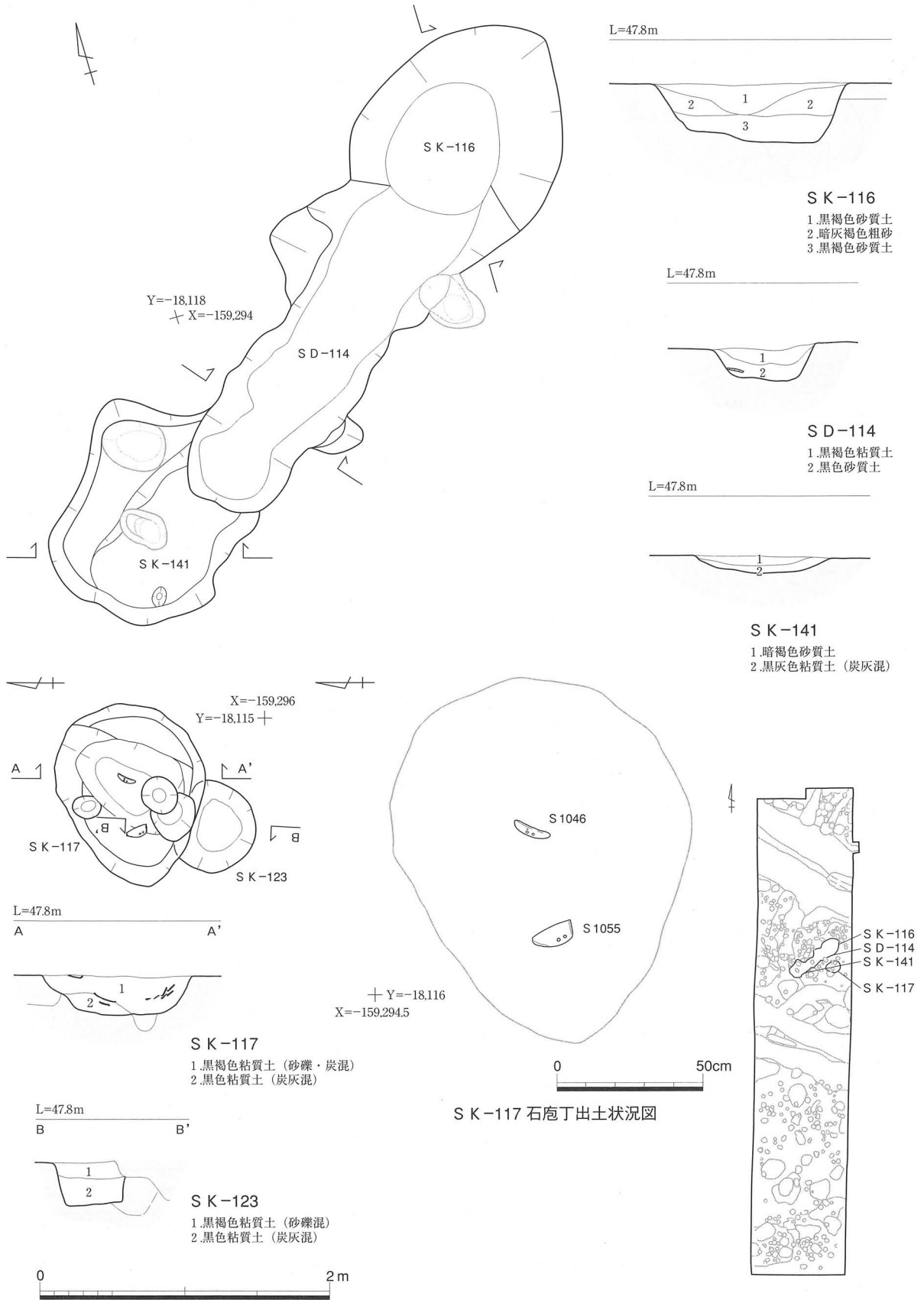
本坑は調査区北半、東側においてSD-114の南側に隣接して検出した。柱根を残すPit-1153の上面を切っているものと考えているが、柱穴の切り合いによって土坑状を呈した可能性もある。平面は不整形を呈し、長軸1.10m、短軸0.82mである。断面は逆台形で、深さは0.15mを測る。堆積土は暗灰褐色砂質土の単層である。時期は、大和第Ⅲ-3様式である。

e. SK-141 (第36図、写真図版17・18)

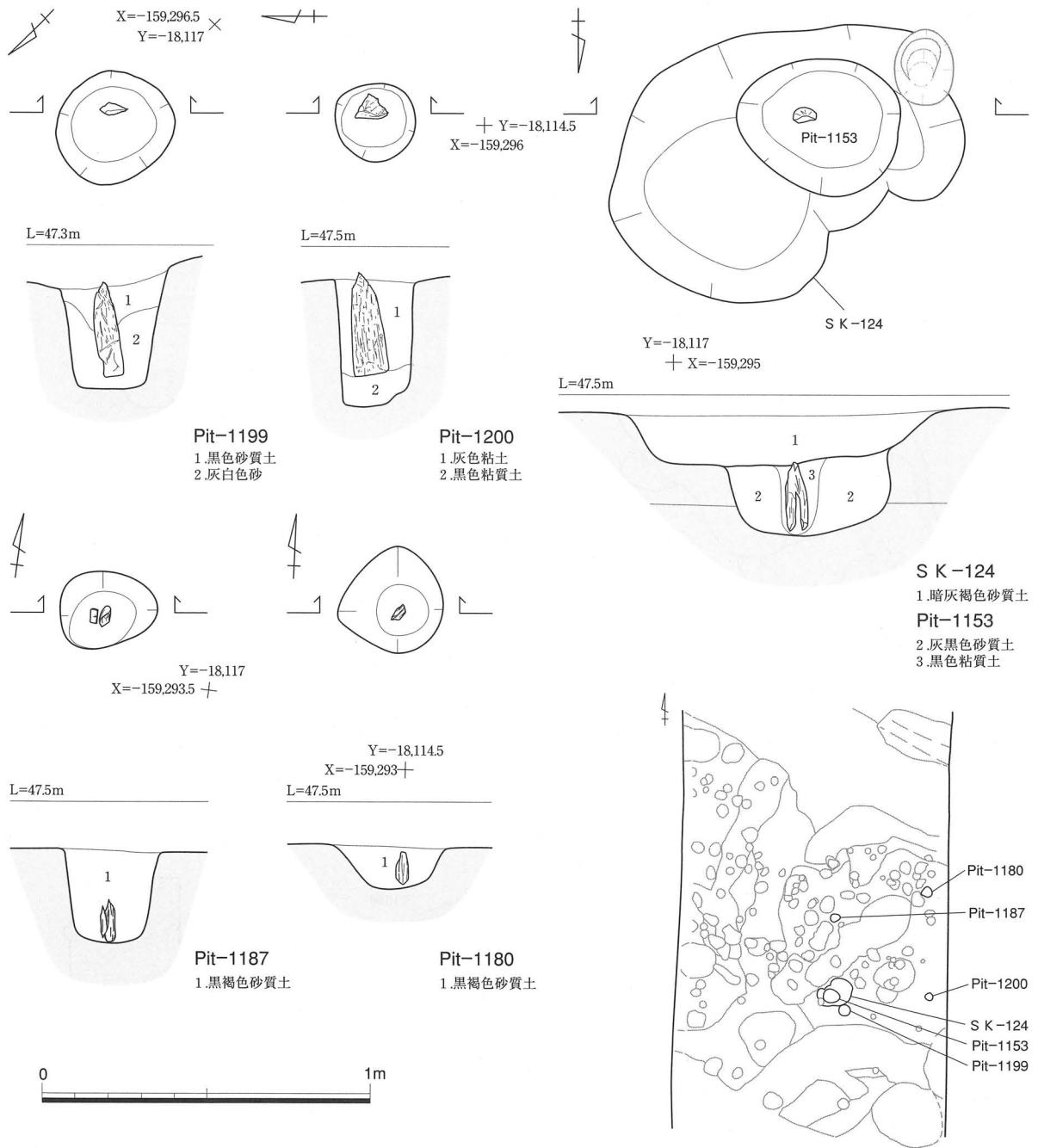
本坑は調査区北半、東側において検出した。北東肩はSD-114によって切られる。平面は不整形を呈し、長軸1.56m、短軸1.46mである。断面は皿状で、深さは0.12mを測る。堆積土は2層からなり、第1層：暗褐色砂質土、第2層：黒灰色粘質土（炭灰混）である。時期は、出土土器が少なく判断材料を欠くが、弥生時代中期中葉であろう。

f. SD-114 (第36図、写真図版17・18)

本溝は調査区北半、東側において検出した。その両端については、北東端が弥生時代中期中葉のSK-116の南西肩に、南西端はSK-141の北東肩に接する。その長さは約2.5mである。溝幅は0.70~1.20mである。時期は、大和第Ⅲ-3様式である。SK-141の底面が本溝底面より約0.2m高いことから、別物としてとらえたが、これらは一連となり、SK-116からSD-108まで繋がっていた可能性も考えられる。



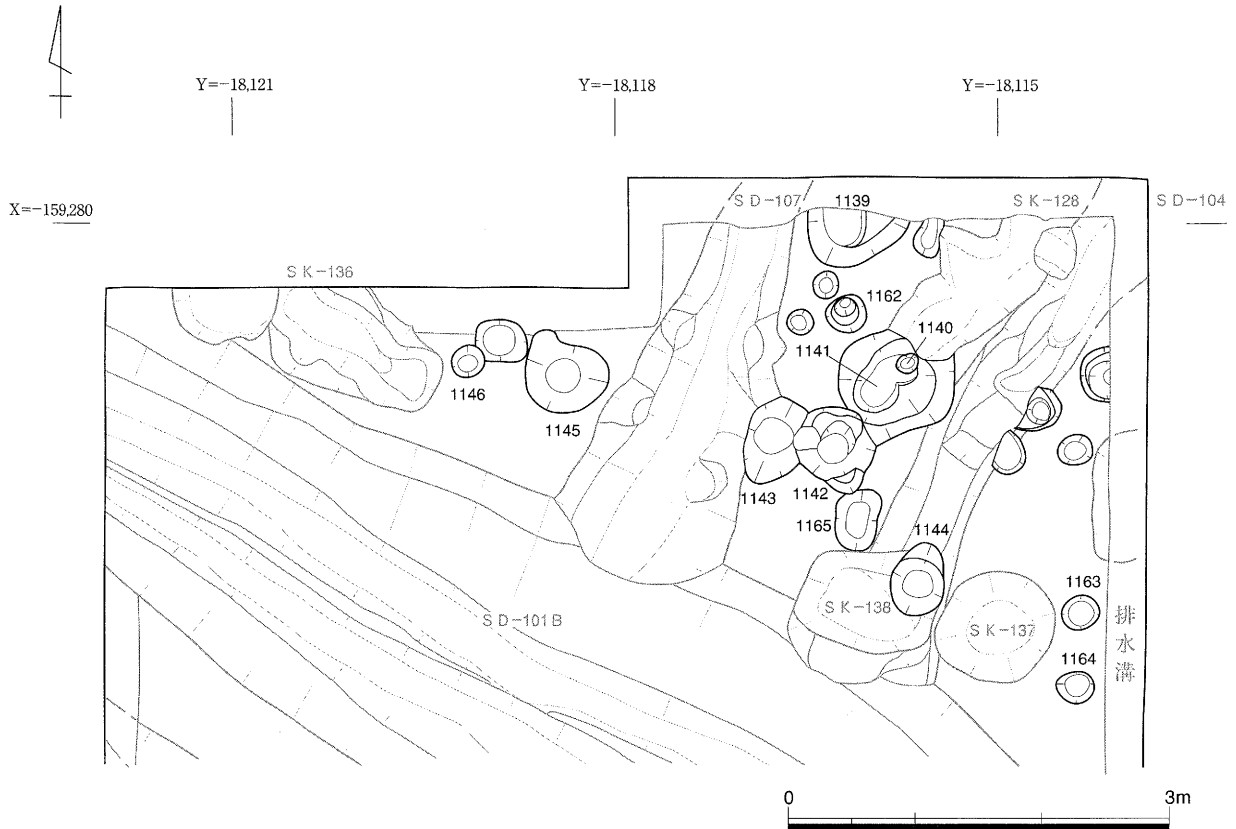
第36図 弥生時代中期中葉の遺構 (10) (平・断面図：S=1/40、出土状況図：S=1/20)



第36図 弥生時代中期中葉の遺構 (11) (S = 1/20)

第11表 SB-101柱穴一覽表

柱穴番号	平面形態	断面形態	上面土層	規模 (m)			坑底標高 (m)	時期 (大和様式)	主要遺物	備考・重複関係
				長軸	短軸	深さ				
Pit-1153	楕円形	円筒状	灰黒色砂質土	0.24	0.21	0.37	47.05	IV	柱根	SK-124に上面を切られる
Pit-1180	円形	逆台形	黒褐色砂質土	0.34	0.32	0.13	47.22	-	柱根	
Pit-1187	楕円形	円筒状	黒褐色砂質土	0.30	0.26	0.28	47.07	-	柱根	
Pit-1199	円形	円筒状	黒色砂質土	0.36	0.35	0.40	46.85	中期	柱根	
Pit-1200	円形	円筒状	灰色粘土	0.24	0.24	0.40	47.00	-	柱根	



第38図 調査区北半の柱穴 (S = 1/60)

**g. 柱穴 (Pit-1153・1180・1187・1199・1200) (第37図、写真図版17、第11表)**

S B - 101の推定範囲において柱根の残存していたものは、Pit - 1153・1180・1187・1199・1200の5基である。粗砂がベースであるため、柱根の残存状態は極めて悪い。柱根の残存する柱穴周辺には、多数の柱穴があり径4.0mほどの環状をなしている。おそらくは、幾度かの建て替えを示すものであろう。

**柱穴**

**調査区北半の柱穴 (第38図、第12表)**

S B - 101 Bと同様な粗砂ベースという遺構検出面の状況にある調査区北半の柱穴については、本頁において報告しておく。本調査区からは多数の柱穴が検出されているが、その分布は調査区中央にあるS D - 105 B・106 Bを境として、南半と北半に区分される。それは柱穴の検出面が、南半では基本堆積層の第IV層：暗褐色粘質土の上面を、北半ではS D - 151埋土の粗砂上に形成された暗褐色砂質土の上面とする違いでもある。さらに、南半と北半は、柱穴検出ベースだけの違いに止まらず、柱穴の密集度、埋土における炭灰の含有においても異なる。

調査区北半では、S D - 101 B・102 Bに切られて消滅している部分があるものの、柱穴の重複が著しく密に分布し、炭灰を含むものがあることから竪穴住居跡に伴うものと想定される。なお、これら北半柱穴を本頁において報告してはいるが、弥生時代中期中葉に限定されるものではなく、弥生時代後期後葉までのものを含んでいる。



第12表 調査区北半柱穴一覧表

柱穴番号	平面形態	断面形態	上面土層	規模(m)			坑底 標高(m)	時期 (大和様式)	主要遺物	備考・重複関係
				長軸	短軸	深さ				
Pit-1101	不整形	逆台形	黒色砂質土	0.28	0.24	0.23	47.24	-		
Pit-1102	円形	逆台形	黒色砂質土	0.20	-	0.14	47.20	Ⅵ		
Pit-1103	不整形	逆円錐状	黒色砂質土	0.28	0.21	0.30	47.19	-		
Pit-1104	不整形	-	黒色砂質土	0.36	0.30	-	-	-		
Pit-1105	不整形	円筒状	黒色砂質土	0.44	0.34	0.39	47.02	中期		
Pit-1106	円形	逆台形	黒色砂質土	0.46	0.42	0.28	47.22	-		
Pit-1107	不整形	逆台形	黒色砂質土	0.50	0.42	0.23	47.16	Ⅵ		
Pit-1108	不整形	皿状	暗褐色粘質土	0.20	(0.19)	0.09	47.47	Ⅵ		Pit-1161と切り合う
Pit-1109	楕円形	皿状	暗褐色粘質土	1.06	0.64	0.09	47.45	Ⅳ		Pit-1149と切り合う
Pit-1110	楕円形	逆台形	暗灰褐色砂質土	(0.34)	0.31	0.21	47.29	Ⅵ		
Pit-1111	楕円形	逆台形	暗灰褐色砂質土	0.54	0.42	0.26	47.24	-		
Pit-1112	楕円形	逆台形	暗灰褐色砂質土	0.50	0.38	0.18	47.18	-		Pit-1189と同一
Pit-1113	不整形	円筒状	暗灰褐色砂質土	0.40	0.32	0.42	47.08	Ⅵ	被熱土器	
Pit-1114	楕円形	逆台形	黒褐色砂質土	0.44	0.36	0.18	47.32	Ⅳ		SK-141内柱穴
Pit-1115	楕円形	円筒状 (北西肩テラス)	暗灰褐色砂質土	0.38	0.23	0.44	47.06	-		SK-141内柱穴
Pit-1116	楕円形	逆台形	暗灰褐色砂質土	0.43	0.26	0.29	47.21	-		
Pit-1117	楕円形	逆台形 (東肩テラス)	暗灰褐色砂質土	0.41	0.31	0.26	47.23	-		溝の可能性
Pit-1118	不整形	逆円錐状	暗灰褐色砂質土	0.49	0.39	0.35	47.14	-		
Pit-1119	楕円形	逆台形	黒褐色砂質土	0.34	0.28	0.28	47.25	-		
Pit-1120	-	-	灰黒色砂質土	-	-	-	-	-		図面なし
Pit-1121	楕円形	円筒状	暗灰褐色砂質土	0.40	0.32	0.30	47.06	-		SK-127と切り合う
Pit-1122	楕円形	逆台形	暗灰褐色砂質土	0.24	0.19	0.17	47.20	-		
Pit-1123	楕円形	円錐状	暗灰褐色砂質土	0.44	0.34	0.30	47.08	Ⅳ		
Pit-1124	楕円形	円筒状 (北肩テラス)	灰黒色砂質土	0.42	0.28	0.32	47.18	Ⅵ	被熱土器	
Pit-1125	楕円形	逆円錐状	灰黒色砂質土	0.38	0.33	0.37	47.14	Ⅳ		
Pit-1126	楕円形	逆台形	灰黒色砂質土	0.25	0.23	0.28	47.07	-		
Pit-1127	楕円形	逆円錐状	灰黒色砂質土	0.28	0.22	0.33	47.21	Ⅵ		
Pit-1128	円形	逆円錐状	灰黒色砂質土	0.40	0.36	0.50	47.04	-		
Pit-1129	不整形	逆台形	灰黒色砂質土	0.50	0.50	0.31	47.17	中期		
Pit-1130	円形	逆円錐状	灰黒色砂質土	0.30	0.28	0.42	46.92	-		
Pit-1131	不整形	逆円錐状	灰褐色砂質土	0.43	0.38	0.41	47.10	中期		
Pit-1132	円形?	皿状	灰褐色砂質土	0.28	-	0.09	47.43	中期		
Pit-1133	楕円形	円錐状	暗灰褐色砂質土	0.24	0.21	0.35	47.22	-		
Pit-1134	円形	皿状	暗灰褐色砂質土	0.22	-	0.19	47.36	中期		
Pit-1135	円形	逆円錐状	黒褐色砂質土	0.30	-	0.31	47.23	-		
Pit-1136	楕円形	皿状	黒褐色砂質土	0.30	0.24	0.10	47.46	-		
Pit-1137	不整形	逆円錐状	暗灰褐色砂質土	0.60	0.60	0.44	47.13	Ⅵ		
Pit-1138	溝状	逆台形	暗灰褐色砂質土	0.76	0.24	0.15	47.39	-		小溝か
Pit-1139	不整形	逆台形 (東肩テラス)	暗灰褐色砂質土	0.80	(0.46)	0.29	47.37	Ⅵ		
Pit-1140	不整形	逆台形	暗灰褐色砂質土	-	-	0.43	47.24	Ⅳ		Pit-1141と切り合う
Pit-1141	不整形	逆台形	暗灰褐色砂質土	-	-	0.35	47.32	中期		Pit-1140と切り合う
Pit-1142	不整形	逆台形 (北肩テラス)	暗灰褐色砂質土	0.72	(0.56)	0.50	47.17	中期		Pit-1141・1143と切り合う
Pit-1143	楕円形	逆台形	暗灰褐色砂質土	0.72	(0.36)	0.25	47.38	中期		SD-107・Pit-1142と切り合う
Pit-1144	楕円形	逆円錐状	暗灰褐色砂質土	0.59	0.43	0.44	47.20	-		SK-138内柱穴
Pit-1145	楕円形	逆台形	暗灰褐色砂質土	0.66	0.54	0.24	47.40	Ⅳ	被熱土器	
Pit-1146	円形	逆円錐状	暗灰褐色砂質土	0.28	0.24	0.27	47.36	Ⅳ		
Pit-1147	楕円形	皿状	黒色粘質土	0.68	(0.60)	0.05	47.14	Ⅲ-3	被熱土器	SK-117内柱穴
Pit-1148	円形	皿状	黒色粘質土	0.52	0.48	0.12	47.05	-		SK-117内柱穴

( )は残存値

柱穴番号	平面形態	断面形態	上面土層	規模(m)			坑底 標高(m)	時期 (大和様式)	主要遺物	備考・重複関係
				長軸	短軸	深さ				
Pit-1149	円形	皿状	暗褐色砂質土	0.33	-	0.05	47.47	-		Pit-1109と切り合う
Pit-1150	楕円形	逆台形	暗褐色砂質土	0.20	0.18	0.16	47.35	-		
Pit-1151	円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.28	-	0.17	47.27	Ⅲ-3		
Pit-1152	楕円形	-	黒褐色粘質土	0.24	0.18	-	-	Ⅵ		
Pit-1154	楕円形	円筒状	黒色粘質土	0.38	0.30	0.26	47.07	-		SD-114内柱穴
Pit-1155	不整形	-	黒色粘質土	0.34	0.32	-	-	-		
Pit-1156	不整形	-	黒褐色砂質土	0.30	0.28	-	-	中期?		
Pit-1157	楕円形	-	黒褐色砂質土	0.49	0.27	-	-	中期		
Pit-1158	楕円形	逆台形 (北西肩テラス)	黒褐色砂質土	0.50	0.32	0.32	47.04	中期		
Pit-1159	円形	皿状	暗褐色砂質土	0.20	-	0.11	47.45	-		
Pit-1160	不整形	逆台形二段	黒色粘質土	(0.62)	0.50	0.26	47.15	-		
Pit-1161	楕円形	逆台形	暗褐色粘質土	0.28	0.16	0.19	47.35	-		
Pit-1162	円形	逆台形 (南肩テラス)	暗灰褐色砂質土	0.32	0.30	0.27	47.39	-		
Pit-1163	円形	逆台形	黒褐色砂質土	0.30	0.28	0.19	47.36	中期?		
Pit-1164	楕円形	逆台形	黒褐色砂質土	0.30	0.27	0.23	47.30	中期		
Pit-1165	楕円形	逆台形	黒褐色砂質土	0.50	0.35	0.16	47.42	中期		
Pit-1166	不整形	逆台形	黒褐色粘質土	0.26	0.26	0.22	47.23	中期	柱根	
Pit-1167	楕円形	皿状	黒褐色粘質土	0.18	0.16	0.13	47.17	-		
Pit-1168	楕円形	皿状	黒褐色粘質土	0.22	0.18	0.08	47.25	-		
Pit-1169	楕円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.31	0.24	0.29	47.07	-		
Pit-1170	円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.26	-	0.21	47.17	中期		
Pit-1171	不整形	逆円錐状	黒褐色粘質土	(0.36)	(0.32)	0.30	47.11	-		
Pit-1172	円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.20	-	0.17	47.13	-		
Pit-1173	円形	逆台形	黒褐色粘質土	0.20	-	0.16	47.27	Ⅳ		
Pit-1174	円形	円筒状	黒褐色粘質土	0.22	-	0.30	47.14	-		
Pit-1175	不整形	逆台形	黒褐色粘質土	(0.42)	0.42	0.24	47.22	中期		
Pit-1176	楕円形	-	黒褐色粘質土	0.42	0.34	-	-	Ⅳ	大型甕(被熱)	出土状況図のみ
Pit-1177	楕円形	逆台形	黒褐色砂質土	0.24	0.20	0.18	47.19	-		
Pit-1178	楕円形	逆円錐状	黒褐色砂質土	0.42	0.33	0.34	47.06	中期		
Pit-1179	楕円形	逆台形	黒褐色砂質土	0.32	0.28	0.25	47.08	-		
Pit-1181	不整形	逆台形	黒褐色砂質土	0.27	0.21	0.25	47.10	-		
Pit-1182	-	-	黒褐色砂質土	-	-	-	-	-		図面なし
Pit-1183	不整形	皿状	黒褐色砂質土	0.34	0.32	0.11	47.26	-		
Pit-1184	楕円形	皿状	黒褐色砂質土	0.32	0.20	0.10	47.28	-		
Pit-1185	楕円形	逆台形	黒色粘質土 (炭灰混)	0.60	0.52	0.21	47.03	Ⅲ-3		
Pit-1186	楕円形	逆台形	黒褐色砂質土	(0.24)	0.22	0.17	47.14	中期		
Pit-1188	不整形	皿状	黒褐色砂質土	(0.52)	0.52	0.11	47.29	中期		
Pit-1189										Pit-1112と同一 欠番
Pit-1190	不整形	逆台形 (南肩テラス)	黒褐色砂質土	0.42	0.30	0.29	47.08	-		
Pit-1191	不整形	逆円錐状	黒褐色砂質土	0.33	0.30	0.32	47.04	-		
Pit-1192	円形	逆台形	黒褐色砂質土	0.23	0.21	0.16	47.18	-		
Pit-1193	楕円形	逆台形	黒褐色砂質土	0.34	0.28	0.15	47.21	-		
Pit-1194	楕円形	逆台形	黒褐色砂質土	0.22	0.18	0.27	47.22	-		
Pit-1195	楕円形	-	黒褐色砂質土	0.42	0.36	-	-	-		
Pit-1196	不整形	逆円錐状	黒褐色砂質土	0.48	0.36	0.37	46.99	中期?		
Pit-1197	楕円形	逆円錐状	黒褐色砂質土	0.34	0.30	0.34	46.90	-		
Pit-1198	楕円形	逆台形	黒褐色砂質土	0.38	0.30	0.19	47.10	-		
Pit-1201	円形	皿状	黒色砂質土	0.30	-	0.12	47.14	中期		SK-117内柱穴
Pit-1202	-	-	黒色砂質土	-	-	-	-	-		図面なし・SK-107 SD-105B間

( )は残存値

(3) 弥生時代中期後葉～後期初頭 (第19図、写真図版2)

本調査区における弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構は、第Ⅳ層：暗褐色粘質土の上面において検出した。しかし、調査区北半SD-151の上面では、第Ⅳ層に対応する第Ⅳ-b層：暗褐色砂質土の堆積は薄く、最終的にはSD-151の堆積土である粗砂上面で弥生時代中期中葉の遺構とともに検出することとなった。一方、調査区南端は弥生時代後期後葉の落ち込みによって浸食されており、明褐色砂質土を切った弥生時代中期中葉後半と、弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構検出面は同一のものとなった。

土坑

SK-102 (第39図)

本坑は調査区北半、東端において検出した。わずかに西端部と調査区東壁において断面を確認したにとどまり、その大半は調査区の東外側へと拡がる。土坑の中央部は、調査区東排水溝によって分断される。このため平面は円形の可能性もあるが不明であり、東壁断面における上面幅は1.14mである。断面は逆台形で、深さは0.34mを測る。堆積土は黒褐色砂質土の単層である。時期は、大和第Ⅳ-2様式である。

SK-106 (第39図、写真図版20)

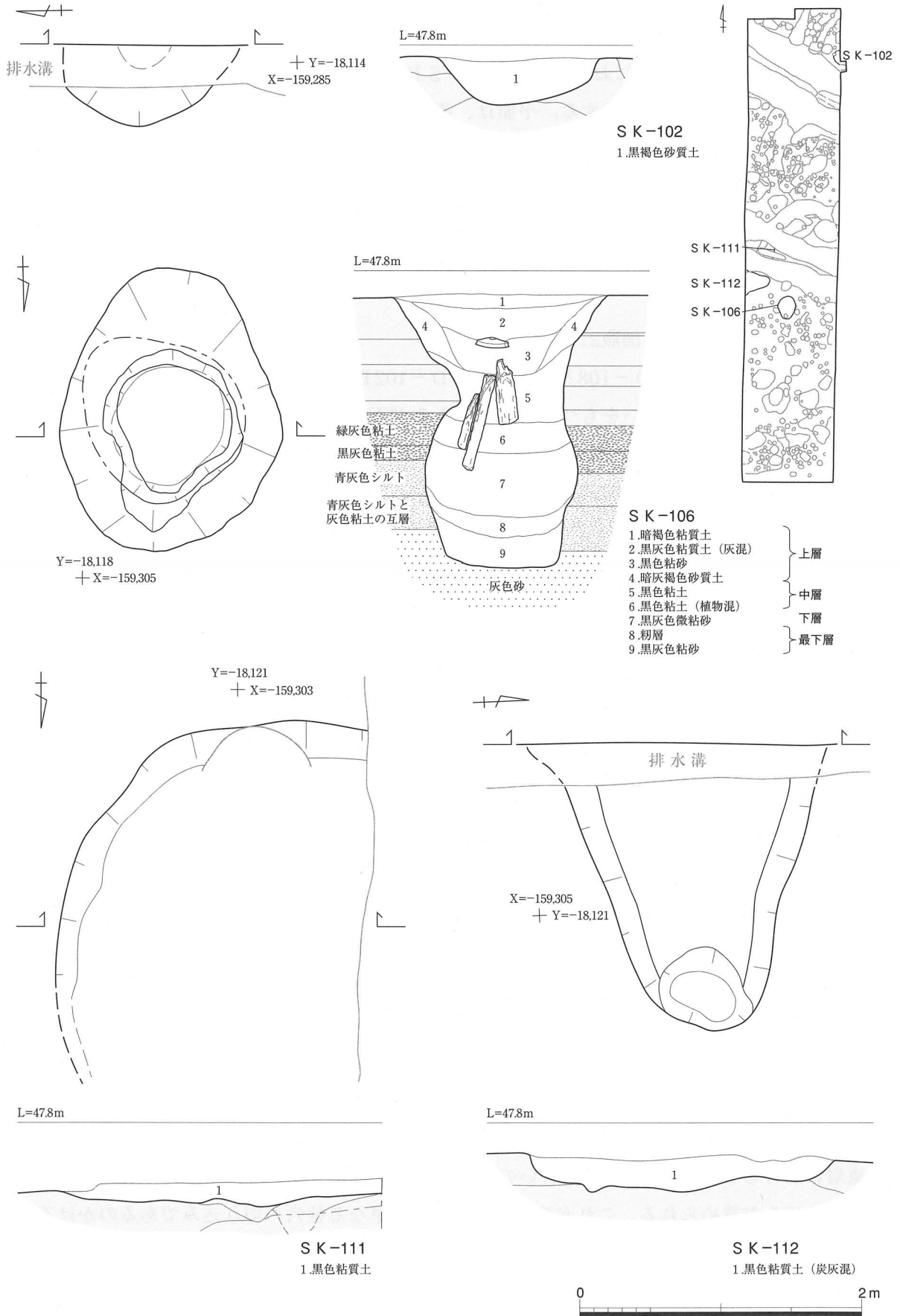
本坑は調査区中央で検出した。平面は楕円形を呈し、長軸2.00m、短軸1.57mである。ただし、遺構の分布密度が高い地区に掘削されたため、柱穴などとの切り合いによって、平面形はやや変形している。断面は円筒状であるが、その坑底は脆弱な青灰色シルト及び灰色砂に達しており、壁面が下半から崩れ、大きく抉れている。深さは1.94mを測る。上層下位からは、大和第Ⅴ様式の高坏の坏部と完形の小型甕が出土した。また、中層からは、柱と考えられる丸太状や半截状の木材が出土した。これらの上部は腐食していた。この木材が廃棄された段階には、既に腐食していたと考えられる。周辺部での整地作業をおこなった際に、不要になった柱を本坑に投げ入れたのであろう。最下層の黒灰色粘砂の上位には、粉が厚さ0.15mに層をなして堆積していた。土坑の性格はその平面・断面形態から井戸と思われる。最下層から出土した土器は、大和第Ⅳ-2様式である。

SK-111 (第39図)

本坑は調査区中央、西側において埋没したSD-106Bの堆積土上面で検出した。平面は円形を呈し、長軸2.14m以上である。断面は皿状で、深さは0.12mを測る。堆積土は黒色粘質土の単層である。本坑の底面においてSD-111を検出しているが、これらはSD-106B上層の一連の溜まりであった可能性も考えられる。時期は、大和第Ⅳ-1様式と考えられる。

SK-112 (第39図)

本坑は調査区中央、西側においてSD-106の底面において検出した。SD-106の最下層の可能性もある。平面は不整形を呈し、長軸2.00m以上、短軸2.16m以上である。断面は皿状で、深さは0.28mを測る。堆積土は、炭灰を含んだ黒色粘質土である。時期は、大和第Ⅳ-2様式と考えられるが、弥生時代後期後葉の土器も混在している。



第39図 弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構 (1) (S = 1/40)

**SK-122** (第40図)

本坑は調査区北半、西側において検出した。SD-102Bの南肩にあって、弥生時代中期後葉の土器棺墓SX-101に西接する。平面は、調査区外西側へと拡がるためその全形は不明であるが不整形を呈すると考えられ、長軸1.12m以上、短軸1.00mである。断面は逆台形であるが、調査区西壁断面では柱穴があるのか中央部が円筒状にくぼみ、深さは0.66mを測る。堆積土は、黒褐色砂質土の単層である。本坑の性格は、底面にいくつもの凹凸があり、土坑というよりは複数の柱穴が切り合っている可能性が高い。時期は、土器棺墓SX-101と同じく大和第Ⅳ-1様式である。

**SK-126** (第40図、写真図版21)

本坑は調査区北半、SD-108と合流したSD-102Bの南肩で検出した。平面は、北半部がSD-102Bとの切り合いをもつため不明であるが不整形を呈すると考えられ、長軸1.22m以上、短軸1.25mである。断面は逆台形で、深さは0.27mを測る。堆積土は黒色粘質土の単層である。底面において4基の柱穴を確認しているが、これらと本坑の切り合いについては明らかにすることができなかった。本坑の性格は、土坑というよりはSD-108とSD-102Bの合流部における染み込みの可能性もある。時期は、弥生時代中期後葉の土器が出土するが、確定することはできない。

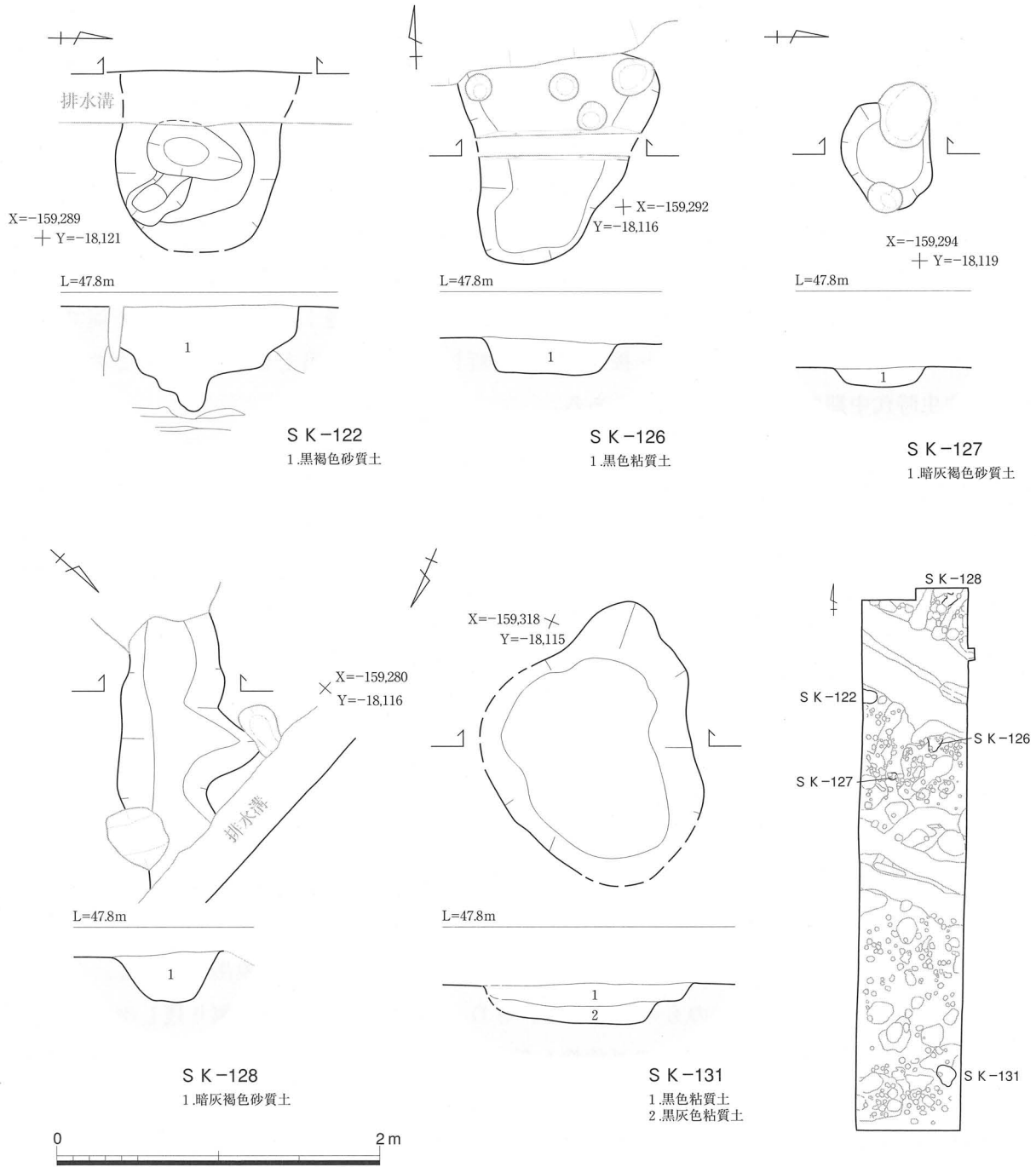
**SK-127** (第40図、写真図版21)

本坑は調査区北半、SD-103Bの底面で検出した。上面はSD-103Bの削平を受け、西肩をPit-1121に切られる。平面は楕円形を呈し、長軸0.70m、短軸0.54mである。断面は皿状で、深さは0.13mを測る。堆積土は暗灰褐色砂質土の単層である。本坑の性格は、SD-108とSD-103Bの切り合い付近にあって下層への染み込みが強く、周囲には不定形な柱穴状の落ち込みも形成されており、土坑でない可能性もある。時期は、弥生時代中期後葉の土器が出土するが、確定することはできない。

**SK-128** (第40図)

本坑は調査区北端、SD-101Bの北肩で検出した。本坑は、南南西-北北東に走行する弥生時代中期中葉のSD-107と弥生時代後期初頭のSD-104に挟まれ、同一方向に長軸をもつことから溝の可能性もあるが、北端の浅いことから土坑と判断した。平面は、南端をPit-1140・1141に北端を北排水溝に切られ、東肩はSD-104に接し変形しているが不整長楕円形を呈すると考えられ、長軸1.44m以上、短軸0.64mである。断面は逆台形で、深さは0.31mを測る。堆積土は暗灰褐色砂質土の単層である。

東肩におけるSD-104との切り合いの前後関係は明らかでないが、そこには両遺構を繋ぐようなくぼみが認められる。これが意図的なものか、単なる柱穴の切り込みであるのかは不明である。ただし、青銅器鑄造関連遺物の土製武器鑄型外枠が出土しており、送風管を出土したSD-104との関連が考えられる。時期は、大和第Ⅴ-1様式の土器が出土するが、SD-104と同じく弥生時代中期後葉～後期初頭の時期幅をもつのであろう。



第40図 弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構(2)(S=1/40)

**SK-131** (第40図、写真図版21)

本坑は調査区の南半、弥生時代後期後葉のSK-110に北肩を切られて検出した。平面は不整形を呈し、復原長軸1.76m、復原短軸1.32mである。断面は逆台形で、深さは0.24mを測る。堆積土は2層からなり、第1層：黒色粘質土、第2層：黒灰色粘質土である。第2層からは比較的大きな土器片がまとまって出土している。時期は、大和第IV-1様式である。

**S K -136** (第41図、写真図版22)

本坑は調査区北端、S D -101 Bの北肩に接して検出した。本坑の西肩に接して径0.80mの不整形の落ち込みを検出しているが、これは近世野井戸であり関係はない。平面は、西肩を野井戸に切られ北端は調査区外北側へと延びているが、楕円形を呈すると考えられ長軸1.44m以上、短軸0.92m以上である。断面は逆台形の二段掘りで東側にテラスをもち、深さは0.30mを測る。堆積土は灰褐色砂質土の単層である。

本坑の機能は不明であるが、長軸がS D -101 Bに沿っており、これと関連する施設の可能性がある。時期は、調査区北半において薄く堆積する第Ⅳ - b層：暗褐色砂質土の上面で検出したことにより弥生時代中期後葉～後期初頭と判断しているが、出土した広口壺などの特徴からは弥生時代中期中葉に遡る可能性もある。

**S K -137** (第41図、写真図版22)

本坑は調査区北半、S D -101 Bの北肩においてS K -138の東側に接して検出した。平面は楕円形を呈し、長軸1.00m、短軸0.90mである。断面は逆台形で、深さは0.44mを測る。堆積土は黒褐色砂質土の単層である。

本坑は土坑というよりは、やや大きい柱穴の可能性が考えられる。時期は、わずかな土器小片から弥生時代中期後葉と判断したが、第Ⅳ - b層：暗褐色砂質土を除去後に検出しており弥生時代中期中葉に遡る可能性もある。

**S K -138** (第41図、写真図版22)

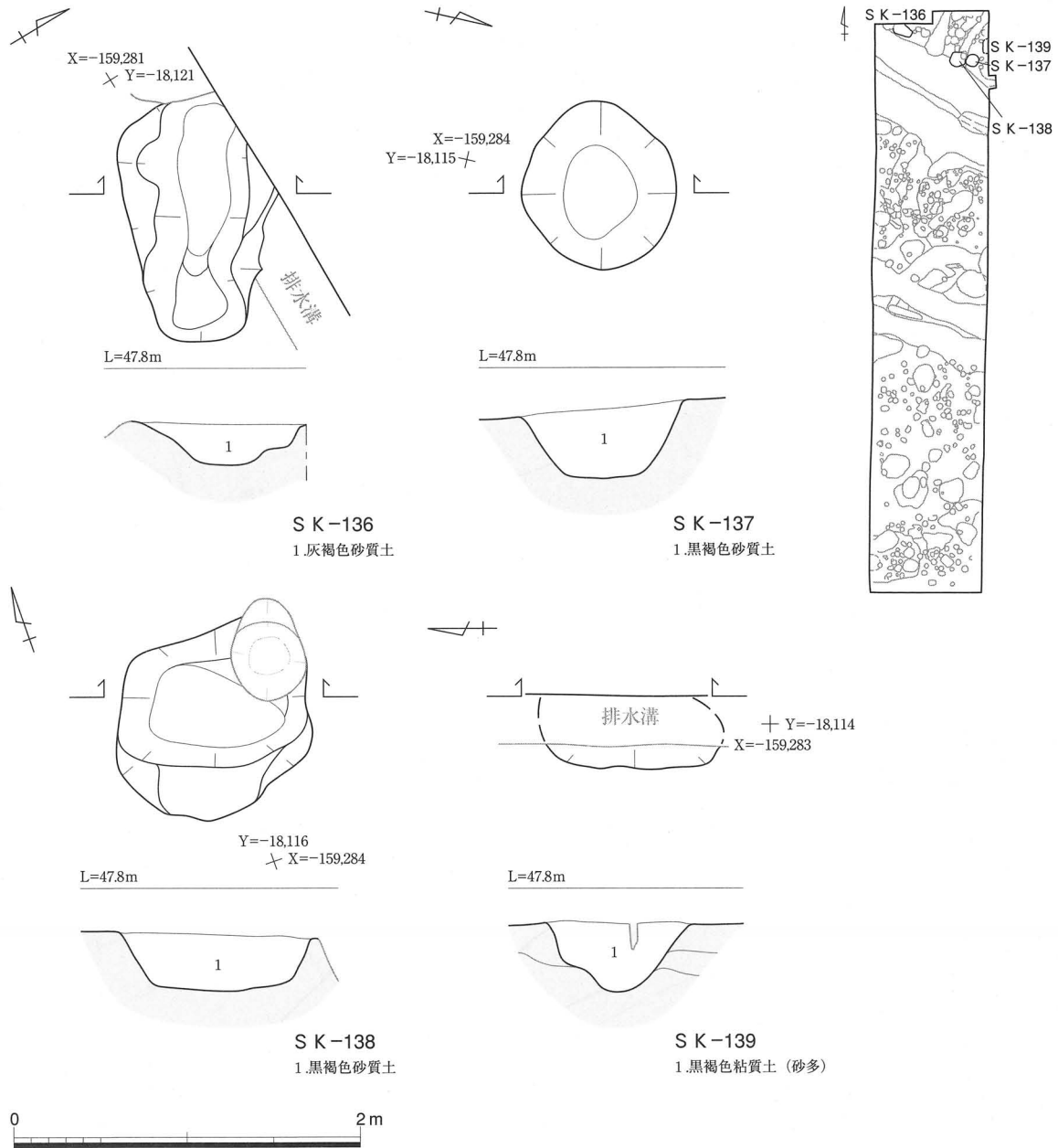
本坑は調査区北半、S D -101 Bの北肩で先述のS K -137に西接して検出した。S D -101 Bに南肩を、Pit -1144に北東肩を、S D -104には上面を切られている。平面は不整形を呈し、一辺1.10mである。断面は逆台形で、深さは0.36mを測る。堆積土は黒褐色砂質土の単層である。

本坑はS D -104の底面において、S D -101 Bとの合流点の手前で検出している。このことから、S D -104とは一連のものであって、S D -101 Bとの合流部の掘り残しや、合流部における水流攪乱や染み込みなどの可能性も想定された。しかし、S D -101 Bの手前で南肩の立ち上がりがあったため、現状では土坑と判断している。時期は、わずかな土器小片から弥生時代中期後葉と判断したが、同時期のS D -104の底面で検出しており、それとは無関係の土坑であるならば弥生時代中期中葉に遡る可能性もある。

**S K -139** (第41図)

本坑は調査区の北半、東排水溝に切られて残ったわずかな西肩のみを検出した。平面は楕円形を呈すると考えられ、長軸1.08mである。調査区東壁における断面は半円形で、深さは0.40mを測る。堆積土は黒褐色粘質土(砂多)の単層である。

本坑は土坑というよりは、やや大きい柱穴の可能性が考えられる。時期は、わずかな土器小片から弥生時代中期後葉と判断したが、東壁断面では第Ⅳ - b層：暗褐色砂質土の上面において掘形のラインを確認することができず、弥生時代中期中葉に遡る可能性もある。



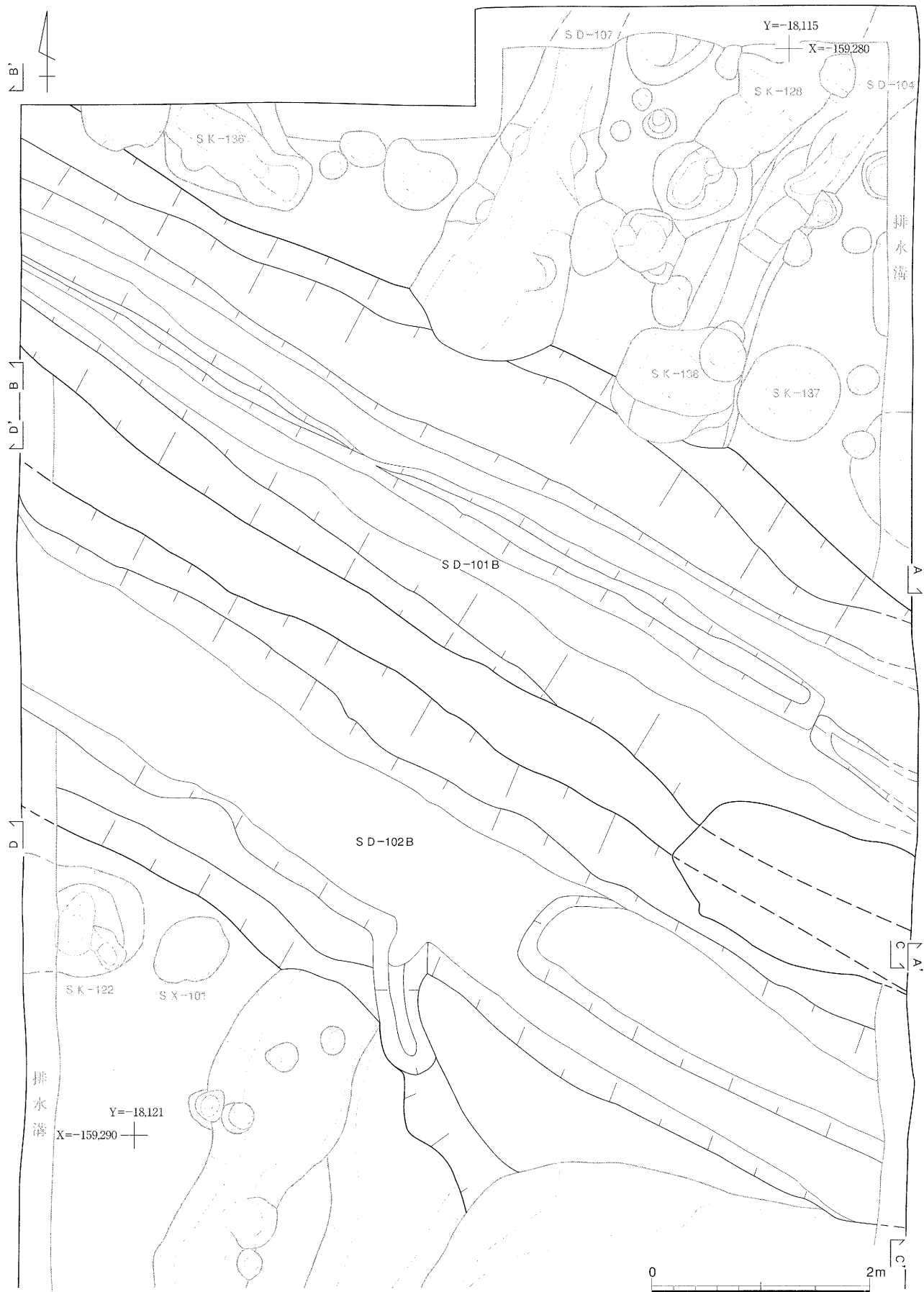
第41図 弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構 (3) (S=1/40)

溝

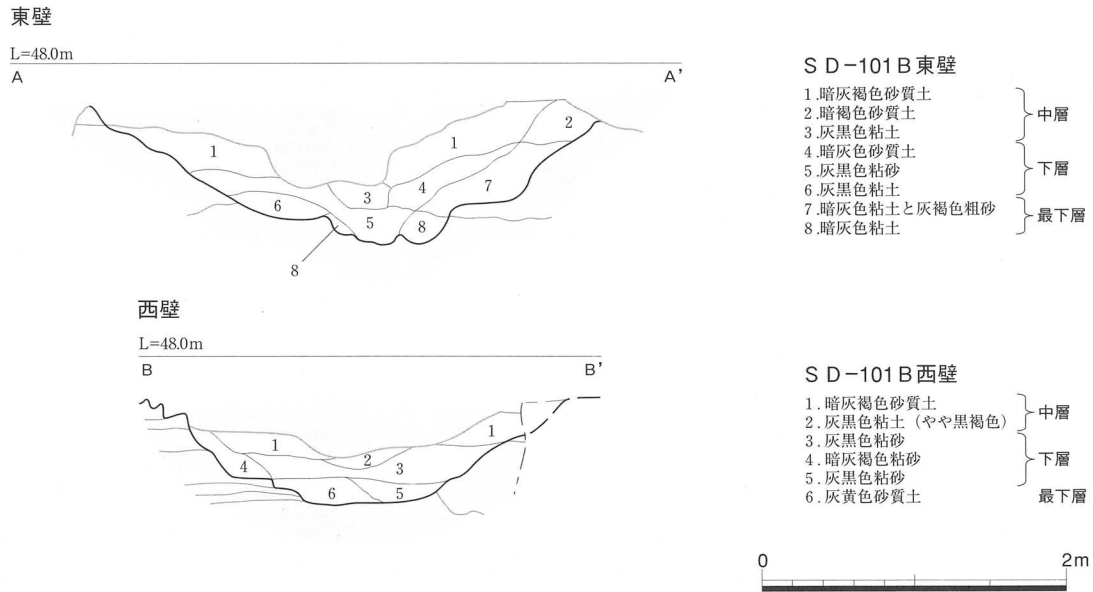
SD-101B・102B (第42～45図、写真図版23～28)

両溝は、調査区北半で延長10mにわたって検出した北西-南東に並走する大溝である。両溝は下層遺構面の弥生時代中期前葉の大溝SD-151が粗砂層で埋没した後、その粗砂層上より掘削されている。北側の溝をSD-101B、南側の溝をSD-102Bとする。SD-101Bの南肩とSD-102Bの北肩が近接することによって、高さ0.70～0.80mで下端幅1.80～2.00m、上端幅0.50～0.60mの台形を呈した土手状となる。この土手のベース部分は、東側が粗砂層であるのに対し、西側は粘土層である。東側に関しても粗砂層下の粘土層は盛り上がり、下層遺構であるSD-151AとSD-151BNが掘り残した部分であろう。SD-101B、SD-102Bの掘削には、こうした下層遺構による地形の影響を受けているものと考えられる。





第42図 弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構（4）（S=1/50）



第43図 弥生時代中期後葉～後期初頭の遺構 (5) (S = 1/50)

SD-101Bは、北肩にSD-104が取り付け、南肩及び東端の堆積土をSD-103に切られる。また、堆積土の上面はSD-103による掘削以外に、SD-101によって再掘削を受けている。溝幅は2.20～3.00mで西側がやや狭くなっている。断面は逆台形であるが中央部はさらに一段落ち込み、深さは0.70～0.90mを測る。断面において中央部の落ち込みは2つのくぼみを呈しているが、これは平面においても底面が2つの小溝状に分かれており対応する。この点に関しては、調査では確認しえなかったが、最初の掘削と再掘削を示している可能性がある。底面標高は、調査区西壁断面においては47.02m、調査区東壁断面においては46.80mであり、北西から南東方向に流水していたと考えられる。

溝の堆積土は大きく4層に分かれ、上層は黒褐色土（鉄分凝縮）、中層は暗灰褐色砂質土、下層は灰黒色粘砂、最下層は黒色・灰黒色粘土である。上層は再掘削のSD-101の堆積であり、中層以下がSD-101Bの堆積となる。また、調査区東西両壁面では、南肩に暗灰色粘土と灰褐色粗砂の堆積が確認でき、これが最初に掘削された溝に伴う堆積土の可能性が高い。

出土遺物は、最下層から中層まで大和第Ⅳ様式の土器を混在しながらも大和第Ⅴ様式の土器が大量に出土している。土器型式の混在する状況については、本溝が大和第Ⅳ様式に掘削され、大和第Ⅴ様式まで溝を浚渫しながら機能した後に、埋没したためと考えている。しかし、大和第Ⅳ様式の土器のみを出土する単純層は、確認し得ていない。この点に関していえば、大和第Ⅴ様式の掘削の可能性も残しているが、これは調査時の遺物取り上げによる技術的なものであって、両壁断面が示すように南肩の堆積層を区別していたならば、大和第Ⅳ様式の単純層を確認し得た可能性がある。この他の遺物として、石器や木製品、獣骨、種子類が各層から出土しているが、土器量と比較して少ない。特に注目される遺物としては、土製鋳型外枠や送风管などの青銅器鋳造関連遺物と高熱を受け変形した多数の土器片がある。これらも各層から出土しているが、特に下層と中層に多く、大きな破片として出土している。